
異世界の手乗り勇者さま

のんびり屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の手乗り勇者さま

【Nコード】

N8670I

【作者名】

のんびり屋

【あらすじ】

高校二年になったばかりの坂崎竜矢は、ある日異世界へと召喚（拉致）されてしまう。そこはあらゆる物の大きさが、根本的に地球とは違う世界だった。妖精サイズの竜矢が相棒の神獣と共に活躍する、『ファンタジー版一寸法師』です。○ルト○マン要素も入ってますW引力とか重力とか、難しい事はあえて無視しておりますW

1話：召喚という名の拉致（前書き）

初の投稿です、その為少々びびっておりますW
ちょっと変わった主人公の異世界召還モノです。

1話：召喚という名の拉致

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……！ あ、後六分か……！」

さかざき りゅうや
坂崎竜矢は走っていた。

理由は簡単、学校に遅刻しそうだったからである。

高校二年生になったばかりの竜矢は、特に特筆すべき事のない、平凡な高校生だ。

学校の成績は中の上、得意な科目は歴史、苦手な科目は数学。女友達はあるものの、彼女いない歴はイコール年齢。

二枚目という訳でもなく、女子から引かれるほどダサクもない、本当に平凡な高校生だ。

ともあれ、彼は今月四度目の遅刻になるかどうかの瀬戸際で、ひたすら全力疾走を続けていた。

と、前方からほぼ同じ速度で走ってくる人影が見えた。

「はっ、はあっ、はっ、はあっ、おう、坂崎！ お前も遅刻か！？」

クラスメイトの工藤だった。確かこいつも今月四回目の遅刻だったなーと、竜矢は思い出す。

「工藤もか！ 何、まだ遅刻と決まった訳じゃねえ！ あと五分ある！」

「はっ、ギリギリだな。坂崎はゲームでもやってたのか！？」

「オンラインゲームのボス戦で苦戦してな！ お前は！？」

「『呪われたグレイプフルーツ』他、レンタルのB級ホラー映画五本と睡眠時間を引き替えにした！ 徹夜だ！」

「タ、タフな奴……！」

映画に所属する彼はB級映画をこよなく愛し、将来は映画監督を目指している。尊敬する人物はクエンティン・タランティーノだ。

「確かお前も今日遅刻したら四回目だろ！？ 何としても間に合わなきゃならん！」

「おうよ！ あの罰ゲームだけは二度とゴメンだからな！！」

工藤の悲鳴に近い言葉に竜矢も叫ぶように返事をする。

罰ゲームというのは、一ヶ月間の遅刻が四回に達すると、その生徒のもっとも苦手な教科で抜き打ちテストをやらされるのだ。

それも、日曜日に。

サボろうものなら、成績がそれはもう恐ろしい事になってしまう。更にそのテストの分量は通常の三倍はある上、九十点以上を取らないとまた追試をやらされる。

それは、次の日曜日にやる事になる。

つまり、九十点以上取るまで延々と日曜日にテストをやる羽目になるのだ。

生徒達はこれを『ネバーエンディング・テスト』と呼び恐怖の的となっている。

竜矢も工藤も過去に一度経験しており、その恐怖は骨身に染みている。

染みているのだが、それでも遅刻をしてしまうような事をやってしまうのは、どうしてもやめられない。

『喉元過ぎれば熱さを忘れる』とはよく言ったものである。

そうこうしている内に、学校の校門が見えてきた。

生徒指導の教師が口に笛をくわえ、鳴らす準備をしている。笛が鳴る前に校門を通らなければ遅刻確定だ。

残り時間、一分。

「くおおおおおおおおおっ!!」

「んがあああああああっ!!」

猛ダッシュをかける二人。

だが、徹夜による消耗は本人の予想以上に体を疲弊させていた。工藤がコケたのだ。

「ぐはあああっ! さ、坂崎ーっ! 俺を見捨てるのかーっ!」

「さらば友よ! お前の事は決して忘れない! ぬおおおおおおうっ!？」

その時、竜矢の眼前で空間が“割れた”。

割れた先には、魂さえ吸い込んでしまいそうな無明の闇が広がっている。

竜矢は思わず急ブレーキをかける。

「んなあっ!？」

瞬間、闇の中からふしくれだった皺だらけの巨大な手が飛び出した。

竜矢の身長よりやや小さい程度のその手は、彼を鷲掴みにするとすぐに闇の中へと戻っていく。

「ぐ、は、放っ……！　ぐ、うう……っ！」

竜矢が闇の中へと連れ去られて行く。

助けを呼ぼうにも締め付けられて声が出ない上に、工藤は起き上がろうして、教師は時計に目をやっていて気付いていない。

その姿が見えなくなると、割れた空間がフィルムの逆回転のように戻っていく。何事も無かったかのように空間は元通りになった。

五秒にも満たない間の事だった。

「イッテェ、くっそ……あれ、坂崎？」

工藤が目を向けた頃には、坂崎竜矢という人間は地球上から姿を消してしまっていた。

彼が持っていた鞆だけが、道路の上にポツンと落ちていた。

闇の中から引きずり出された竜矢は、大きな空間に出た。学校の体育館よりも遥かに広い空間だ。壁や柱に蛍光灯のような光を放つ、水晶の様な物が台座に乘せられていて、部屋全体を明るく照らしている。

一方の壁には棚が作られて、薄汚れた壺や巻物、不気味な動物の

ミイラのような物が所狭しと並んでいた。反対側の壁際には色とりどりの液体が入ったプラスチックやビーカー、試験管などが無数に並び、何処かの研究所を思わせる。

別の壁には出入り口であろうドアがあり、反対側には床と天井に恐ろしく緻密に描かれた魔法円があった。

その中心に、薄汚れたローブを纏った老人が立っていた。

その顔には伸び放題の白い髭と無数の皺が刻まれ、年齢は三百歳を越えていると言っても信じてしまいそうな程だ。

顔と同様に皺だらけの手に、竜矢が握られていた。

竜矢にとっては、まさに巨人である。

常識では考えられぬ異常事態に竜矢はパニックに陥っていたが、きつく締め付けられて身動きが出来ない。

と、竜矢を握った老人の手が持ち上がり、自分の顔の前でしげしげと眺め始めた。

「G+;@^ー¥○★..R」

老人が何かを喋ったが、それは竜矢には聞いた事がない言語だった。

「な……んだって……っ？」

言葉が通じない事が分かったのか、老人はそれ以上喋らなかった。その代わりのように、残った手を竜矢に伸ばしていく。巨大な手が迫るという恐怖に、竜矢の体は震え、金縛りにあったように身動きが出来なくなる。

老人の手は竜矢の着ている制服に指をかけると、一気に引き千切ってしまった。

丈夫な生地で作られた制服を無理に裂いた為に、竜矢の体にあちこち食い込んで痣や擦り傷を刻み込んだ。

「イッ……テェ……ッ！」

竜矢のか細い悲鳴を無視して老人は作業を続け、竜矢は全裸にされてしまった。

老人は次に、机の上にあった黄色いトロリとした液体の入った、円筒形のガラス容器に竜矢を放り込むと、それに蓋をして完全に密閉してしまったのだ。

ようやく手から解放されたのも束の間、今度は溺死の危険に晒され、竜矢は懸命に容器の壁を叩く。

（出せ！！ 出せよ！！ 死んじまう！！ 出してくれえっ！！）

厚いガラスの壁は竜矢の拳を阻み、音はろくに外に届いていない。そうこうしている内に、限界が来た。耐えきれずに吐き出した空気の代わりに、肺の中に容器内の液体が流れ込む感触に竜矢は恐怖した。

（ち、ちくしょうっ……！ 死ぬ、のかよ……？ こんなムチャクチャな事ありかよ……っ！ こんな、訳の分からない……あれ？）

いつの間にか、苦しさが消えていた。

呼吸が出来ている。

どうやら、この液体が空気の代わりになっているようだ。

（どうなってんだ……？ そーいや、こんなのを映画で見た事があるな。酸素を大量に含んだ特殊な液体で酸素ボンベの代わりにするとかいう……）

竜矢が容器の中で平静を取り戻すのを見て、老人は満足げに頷くと傍らの机で紙に何か色々書き始める。液体の粘性が高く声を出す事が出来ない為、竜矢が何度容器の壁を叩いても一瞥すらせずに、老人はひたすら紙に向かっていた。

そのうち竜矢も睡眠不足から眠くなってしまう、いつしか液体の中で身を丸めて眠ってしまったのだった。

次に竜矢が目覚めた時、どれだけの時間が経ったのか分からなかった。この巨大な部屋には窓が無く、昼と夜の区別が付かないのだ。もしかしたら地下室なのかも知れない。

老人は相変わらず机に向かって何かを書き続けていて、使った紙の分量が凄い事になっていた。竜矢はようやく落ち着いた事もあり、今の状況を把握するべく考えを巡らせた。

（どー考えても、俺の今までいた世界じゃねーよなあ……。あれか？ ゲームや漫画で出てくる『異世界』……って奴か？）

しかし、体のサイズがこうまで違う異世界だという事に、竜矢は途方もない絶望感を感じた。

（『ジャックと豆の木』のジャックになった気分だぜ……。何とかして逃げたいけど……）

逃げたとしてどうするのか？ 言葉は通じない。何とか言葉を覚えてたとして、それからどうするのか？

こんな妖精サイズの体では、働いて稼ぐという事も出来ないだろう。捕まってみせ物にされるか、あるいはペットのような扱いを受けるか。

飼い主となった人物が優しい者ならそれもいいかも知れないが、そうでなかったら？

考えれば考えるほどマイナス要素満載の現状に、竜矢の思考はどんどん沈み込んでいった。

（大体、俺をどうしようってんだ、このじーさん。見るからに魔法使い……錬金術師って方が近いか）

改めて実験器具らしき物で埋め尽くされた部屋を見渡し、竜矢は一つの可能性に行き着いて背筋に悪寒が走った。

（人体、実験……？）

そしてこの予感は的中し、竜矢は地獄の日々を送る事になる。

竜矢が再度眠った後。体感的にこの世界に拉致されてから二日後。

竜矢の入った容器に繋がるチューブの先に、老人が注射器のような物で赤い液体を容器内に注入した。

不安気にそれを見つめていた竜矢の身に、異変が起こった。

全身に激痛が走ったのだ。神経を直接いじられているような、壮絶な痛みだ。

声にならぬ悲鳴を上げ続け、ようやくその痛みが消える頃には竜矢は疲れ果て、そのまま眠りについてしまった。

翌日、竜矢は目に痛みを感じて目を覚ました。

眼窩に直接焼け火箸を差し込まれ、乱暴に抉り回されるかのよう
な痛み。

外を見れば、老人がまた注射器で昨日とは違う液体を注入してい
た。

その痛みが消える頃、竜矢はまた疲れ果てて眠ってしまった。

それから何日もこの繰り返しだった。ある日は耳の奥が、ある日
には手足が、またある日には腹の奥が……。

いつ終るとも知れない痛みと眠りのみの毎日に、竜矢の精神はボ
ロボロになっていった。

だが、一ヶ月近く続いたであろうその日々は、唐突に終わりを告
げる事になる。

珍しく痛みの無いまま目を覚ました竜矢は、老人の手に握られて
いる自分に気が付いた。いつの間にか、容器から出されていたのだ。

老人は竜矢を床に描かれた魔法円の中心に寝かせると、円の外に
出ると高々と両手をあげ、低く唸れた声で何かの呪文を唱え始めた。
竜矢の体を拘束する物はない。脱出するには絶好の機会だが、も
はや自我が消えかけている竜矢には体を動かす気力などある筈もな
かった。

老人の呪文に合わせ、魔法円が青い光を放ち始める。

その時、竜矢の体に異変が起こった。

脳髓に大量の情報が強制的に流れ込んできたのだ。

「あっ、が、があああああああああああっーーーーー！！！」

本来、脳に痛みを感じる神経は無い。

だが、竜矢の脳は許容量を超えた情報量を強制的に流し込まれ、悲鳴を上げる。

竜矢が感じているものは正しく脳の激痛だった。

流し込まれている情報は、この世界に関しての事だ。

言語、風習、歴史、武術、魔術……。

様々な知識を無理矢理に押し込まれ、竜矢は目の前の空間がスパークするように感じた。

だが、この脳への刺激が、竜矢の消えかかっていた自我を呼び覚ました。

「やっ……やめろおおおおっ!!」

「っ!?!」

竜矢の叫びに老人は驚愕する。

実は、竜矢が自我を失いかけていたのは激痛によるものだけではなく、老人が容器に注入した薬にそういう効果をもたらす物が含まれていたのだ。

自我を取り戻す筈はない、そう思っていた老人は予想外の竜矢の目覚めに呪文の詠唱を中断してしまう。

魔法円の光が消え、痛みの消えた竜矢がゆっくりと身を起こす。

その全身から、揺らめく炎のような赤いオーラが噴出していた。

「クッ……頭がクラクラする……!! このクソジジイ!! 散々好き勝手やってくれやがったなあ!!」

約一ヶ月に渡る拷問に等しい激痛の日々を思い出し、竜矢の怒りが爆発した。

その身を包む赤いオーラが吹き上がり、竜矢の体が宙に浮き始める。そのオーラは次第に人の形を取り始めた。

老人の前に、竜矢の小さい体を胸の中に取り込んだように見える、赤い光の人型が出現した。だが、それを見て逆に落ち着きを取り戻したのか、老人は口元を歪めて言った。

「……これは驚いたのう……、自我を取り戻すとはな。異世界人は薬物への耐性が高いのかの？」

「ああ！？ ジジイ、グチャグチャ言っでねーで俺を元の世界に返しやがれ！！ でないとこの部屋をメチャメチャにすんぞ！！」

何故か言葉が通じる事には気付かず、竜矢は叫ぶ。

竜矢は怒りに震えてはいたが、我を忘れてはいなかった。元の世界に帰る手段が分からない以上、今この老人だけがその鍵を握るのだ。

今の竜矢は、怒髪天を衝くといった表現がぴったりの怒りの形相だ。

体の大きさから迫力は薄れるものの、無意識に放たれる強大な魔力の奔流は部屋全体を揺るがす程だ。

だが、その魔力を浴びながら老人は怯えも動揺もしていなかった。むしろ、嬉しそうに唇の橋を上げて笑っていた。

「ほほう、予想以上の力じゃ！ 苦勞して異世界から召喚した甲斐があったわい。『次のわし』に打って付けじゃて」

「何を訳の分かんねー事を・・・！？」

老人が無造作に右手を上げ、手のひらを竜矢に向けた。何かを掴

むようにその指が動くと、童矢の体が光の人型もろとも締め付けられた。

噴出する竜矢の魔力を強引にねじ伏せる、更に強力な魔力による拘束だ。

「グツ！？」

「『今のわし』には勝てぬよ。既にお前には、今までわしが蓄積してきたこの世界の知識を流し込んだ。後は体を貰うだけじゃったが……。やむをえん、魂を破壊させて貰うぞい」

老人の右手が黄色く光った瞬間、雷に打たれたような強烈な衝撃が竜矢の体を襲った。

「ギッ!？」
ガアアアアアアアアア
アアアアアアアアア
ツ!!」

肉体ではなく、精神の根源とも言える魂への直接攻撃。

自分という存在が徐々に削られていくような感覚に、竜矢が悲鳴を上げた。

「抵抗するでないわ、しなければ楽になるぞい」

（こんな・・・っ！　こんな訳のわかんねー死に方すんのかよっ！
冗談じゃねえ、冗談じゃねえぞっ！！）

全身に力を込める。

老人によつて強制的に植え付けられた魔力が体内で荒れ狂い、渦を巻く。

今まで受けた理不尽な苦しみに対する怒りが、その魔力を倍加させ、爆発の起爆剤となった。

「ふ・ざ・け・ん・なあああ!!」
「何っ・・・じゃと!？」

老人の拘束する魔力が、更に膨れあがった竜矢の魔力によって引き千切られた。押さえ込まれていた魔力が一気に解放され、強烈な閃光と轟音が轟いた。

一瞬の後、煙の晴れた後に立っていたのは竜矢と老人だけだった。

竜矢の魔力の爆発によって、研究室は跡形もなく消滅してしまったのだ。周囲は彼らの回りを残して大きく抉れ、回りには荒涼とした岩山が広がっている。

だが、その場にいたのは二人だけではなかった。

「何という……! こやつが居なければ、わしとて危うかったわ……!」

老人の背後に、一人の少女が倒れていた。

一二、三歳ほどの少女は一糸纏わぬ全裸の上、全身汚れており、髪も伸び放題で酷く痩せていた。

「はあっ、はあっ……! ジ、ジジイ……その子は何だ! 俺と同じように異世界からさらったのか!」

「違うわい、この世界の者よ。じゃが、こやつは人の姿をしておるが、人ではない」

そこまで言うと、老人は視線を竜矢から外さずに左手を少女に向けて開き、右手を竜矢に向けて開いた。

（また拘束か? けど、さっきみたいに魔力を爆発させたらあの子まで巻き込んでしまう……!）

「ほれ、魔力を寄越さんか、バケモノめが」
「ーーーーッ!!」

少女が声にならぬ悲鳴を上げた。苦しそうにのたうちまわっている。

「て、てめえ! その子に何してやがんだ!」
「何、魔力を提供して貰っておるだけよ」

よく見ると、少女の首には首輪のような物が嵌められていて、それが青白く光って明滅している。それに併せるように老人の左手も青白く明滅する。

と、その光が不意に消え失せた。

「ン? さっき張った防御結界で力を使い果たしたか……。もう用済みじゃの」

少女はもはや虫の息で、体を小刻みに痙攣させている。大きく見開かれた瞳は光を写しておらず、命の灯火が消える寸前である事を教えていた。

「この……っ! クソジジイッ!!」
「おっと」

赤い光の人型のまま、竜矢は老人に殴りかかる。だが、その姿が唐突に消え失せた。

「なっ……!?!」
「やれやれ、大失敗じゃ。今は引いておこうかの、流石に分が悪い

わい。じゃが、お前の体は必ず手に入れるぞい、必ずじゃ……！」

虚空から響く老人の声に、竜矢は辺りを見回すが、姿はない。次第に気配も消え去り、残されたのは竜矢と瀕死の少女だけだった。

竜矢は赤い光を消して地に降り立つと、少女の側に行った。

「おい……しっかりしろ」

「ヒュー………ヒュー………」

少女はか細く息をしているが、身動きも出来ないほど衰弱しきっていた。

竜矢は脳に押し込められた知識の中から、使えそうな物を調べてみた。

「魔力を提供して貰った……とか言ってたな。って事は、あのジジイに魔力を吸い取られたのか？ そうなると、使えそうな魔術……ええと、落ち着け、落ち着け……、」

少女を助ける為、竜矢は脳内の知識に検索をかけた。

今の竜矢はこの世界のありとあらゆる知識を持つ、言わば賢者のような存在となっている。その中には魔術もあり、当然治癒系の魔術も含まれている。

手順、魔力の流し方や魔術式の構築、呪文、全て知っているし、分かっている。

だが、それはあくまで知識だけの事であり、実践経験など勿論無

い。

知識だけで、重病の人間をド素人が手術するようなものだ。
竜矢はぶっつけ本番で、それをやろうとしているのだ。

「体力を回復すると同時に、魔力も回復する必要がある……、なら『万象の癒し手』……これだな」

『万象の癒し手』は治癒魔術の中でもかなり上位の魔術だ。厳しい修行と豊富な経験を積んだ術師でも、使える者は数少ない。だが、この弱り切った少女を救うには、それだけ強力な魔術でなければダメだと竜矢は判断したのだ。

これが地球で、簡単な治療ならテレビや漫画などの知識からやってやれない事はないかも知れない。しかし、ここは異世界だ。当然ながら竜矢には魔術を行使した経験など無い。

知識はあるが、使った事はおろか見た事も無い魔術で瀕死の人間を治す。

非常にアンバランスで、ちぐはぐな状況だ。

それでも、やらなければ目の前の少女は確実に死ぬ。

竜矢は覚悟を決めた。

「一か八かだ……！ 風よ、この者の内に清浄な風を、乗けて流れて水の癒し、赤き血の流れを取り戻さん、大地の豊穡を肉に与え、命の炎を燃え上がらせよ……！」

呪文と共に体内で魔力を導き、魔術式を構築する。竜矢を中心とした地面に赤い魔法円が現れた。これが魔術式だ。

例えるなら、電子部品がびっしりと組み込まれた電子回路の魔術版だ。複雑な模様や文字が描かれている魔術式はゆっくりと回転している。

竜矢が少女にかざした両手から、柔らかな白い光が放たれる。すると、ゆっくりとだが少女の肌に赤みが差していく。止まり掛かっていた呼吸が安定し、その瞳に光が戻ってきた。

「肉体の力をもって、魂よ今再びの輝きを取り戻さん……………『万象の癒し手』!」

白い光が一瞬強くなり、それはすぐに消滅した。

「ふう……。ど、どうだ? 大丈夫か?」

「……………」

骨と筋だけと言っている良いほど痩せ細った体は、まるで餓鬼のようだ。筋力が落ちているであろう体で、ゆっくりと少女が身を起こした。

「えっと、気分はどうだ? 初めて魔術なんて使ったもんで……………痛い所とかないか?」

「…………お……た……………」

「え?」

かすれた声で少女が何かを言った。

聞き直そうとして竜矢が近付くと、少女は竜矢を両手でそっと掴み、顔の前まで持ち上げた。そのまま竜矢をジーツと見つめている。

「えーっと……………」

「お……すい……」

「な、何だい？」

「お腹……すいた……」

「へ？」

よく見ると、少女の口の端から一筋のヨダレが垂れている。
竜矢の全身に言いようなない感覚の汗がドツと溢れた。

「あの……ちょっと？ まさか……」

パクッ

「だああああああっ！！ 待てっ！ 待てっば！！ 俺は食
いもんじゃないから！！ 落ち着いてください、お願い！！ たっ
……食ーべーなーいーでええええっ！！」

上下の歯を必死に押さえる竜矢の絶叫が、荒れ果てた大地に響い
ていった。

1話：召喚という名の拉致（後書き）

誤字脱字等ありましたら、指摘して下さい。

2話：傭兵 シェリカ・ウォーレン（前書き）

少し時間が飛びます。

2話：傭兵 シェリカ・ウォーレン

その日の夜、森の中で怪しげな儀式を行う邪教の調査依頼を受け、傭兵シェリカはある古代遺跡へと潜入していた。

世の情勢が不安定になると、人の心につけ込む怪しげな輩が出てくるのは何処でも変わらない。戦乱の兆しを見せるこの大陸では傭兵の需要が急速に高まり、一攫千金や出世を夢見て傭兵になる者が多くなり始めていた。

シェリカもその一人だ。

14歳で傭兵となり、現在16歳。まだまだ駆け出しではあるが、それなりに修羅場もくぐってちよつとは名も知られるようになった。特に潜入調査に関してはシェリカを名指しで指名する者が出るほどだ。

その為に多少慢心していたのかも知れない。

一人で出来る仕事というのは実はあまり無い。通常は仲間を募ってから取りかかる。

だが、シェリカはまず、そんな邪教徒が本当にいるのかどうか確かめようと一人で潜入した。

そこで珍しくミスをして見つかり、邪教徒に追われる羽目になったのだ。

真夜中の森の中をわずかな月明かりを頼りに疾風のように駆けながら、彼女は心の中でひたすら愚痴っていた。

（ついてない、ついてない、ついてない！ 何であんなところにグー

ルワームが群生してんのよー！ あああ、しばらく夢に出てきそう……）

グールワームとは、地球のミミズに似た地中に住む虫だ。

大きさはミミズと変わらないが、体色がそれは鮮やかな紫とピンクのマダラ模様をしている。その上、油分を皮膚から分泌してヌラヌラと照り光る。

はつきり言って、気持ち悪い事この上ない。

動物の腐肉を食べて土に返したりする森の掃除屋だが、この外見のせいで女性には特に嫌われている悲しい虫である。

職業柄、大抵の虫は平気なシェリカも、このグールワームだけは
大の苦手だった。

（触っちゃったよおおー！ ああ……一刻も早く洗いたいのにー！）

朽ちた古代遺跡の地下神殿跡で、怪しげな儀式を行っている邪教徒の存在を確認したまでは良かった。

祭壇の上に寝かされた全裸の少女を見て動揺した彼女は、身を乗り出してバランスを崩し、壁に左手をついた。

石の冷たく堅いものではない、グニュツとした柔らかい物がウニョウニョと動く感触。

動きを止めた彼女が恐る恐る壁を見ると、そこだけぽっかりと穴が開いて中には大量のグールワームが蠢いていた。

思わず悲鳴を上げてしまっていた。
その結果がこれである。

慌てて逃げ出したが、追っ手が諦める気配はない。

それどころか徐々に間隔を詰められている。追いつかれるのは時間の問題だった。

（まずいなあ……。よりにもよってブラックビーストが三匹、魔術が使えない私じゃ相手が悪すぎる……！）

追っ手が操っている魔獣は、剣や弓矢だけで仕留められるような奴ではなかった。

黒い長毛を持った犬に似た獣、それがブラックビーストだ。

優れた嗅覚と聴覚を持つだけでなく、その鋭い爪と牙は騎士の甲冑を容易く切り裂き、噛み砕く。おまけにその咆哮は強烈な超音波だ。またにも食らうと三半規管を狂わされ、体の動きを止められてしまう。ただし、この能力は近距離でなければ効果が激減するのがシェリカにとっては幸いだった。

仮に魔術が使えたとしても、駆け出しにちよつと毛が生えた程度のシェリカでは瞬殺されてもおかしくない。ベテランの傭兵でも一対一で戦う事などは絶対に避ける、かなり危険度が高い魔獣なのだ。

（とにかく逃げるしかない……。っ？ 光？）

不意に、木々の間から小さな光が見えた。

近づくにつれ、それが焚き火だと分かるとシェリカは考えを巡らせた。

（こんな森の中で野営？ となると、相応の腕を持った傭兵か武者かしら。……っええい！ 手練れである事を祈るしかないわ！）

要するに、手助けを頼もうというのだ。

無関係な人間を巻き込むのは気が引けたが、そんな事を言っていられない状況だ。腕の立つ者と力を合わせれば、戦う事も可能になる。

シェリカは焚き火に照らされた、小さく開けた空き地に飛び込むと同時に叫んだ。

「すいません！！ 助けてくだっ・・・さ？」

一瞬、目の前の光景を疑った。

焚き火の側には人の姿が無い。代わりの様にそこにいたのは、一匹の大きな獣だった。

牛ほどもありそうな体はシェリカよりも二回りは大きい。その身体は神々しいまでの黄金の体毛に覆われ、四本の脚はシェリカの腕よりも太い。柔らかな毛で太く見える尻尾は三本あった。

シェリカを見つめるその瞳は、右目が金色、左が銀色というオッドアイである。

神懸かったその姿に不釣り合いな物が首に掛けられている。革製の使い古された小型バッグだ。童話に出てくる、雪山で遭難者を助ける山岳救助犬が首に付けている樽を、革のバッグに変えたような物だ。

シェリカは全身の力が抜け、その場にへたり込んでしまった。

様々な魔獣について知る事は、傭兵という職業上、必須条件と言える。見た目は小さく弱そうな魔獣でも驚異的な速さや毒を持っていたり、動きは鈍重だが強靱な外殻と、城壁さえも崩してしまう怪力を持つ魔獣もいる。

だが、シェリカの前にいる獣はあらゆる魔獣を上回る存在だった。外見だけは傭兵ギルドの教育で学んだ、伝説の『神獣』。

『大地の獣王』『月光の牙王』『陽と月の落し子』『獣神の使い』……呼び名は数あれど、一般的にはこう呼ばれている。

『マナウルフィ』。太古の言葉で、『真なる獣』という意味だ。

シェリカは死を覚悟した、それも無意識に。

三匹のブラックビーストに追われながらもしなかった覚悟をだ。

魔獣を超えた神獣には、人間の本能をひれ伏せさせる言いようない迫力を持っていた。

「……やれやれ、今夜は妙に騒々しいと思うたら……。珍客到来じやの」

マナウルフィが喋った。

魔獣の中にも知性の高いものは人語を解し、人間と友好関係を築くものもある。神獣ともなれば何ら不思議ではない。これはシェリカにはありがたい事だった。意志の疎通が出来そうだと分かるとへたり込んだ体に力を入れ、震える唇を動かして言葉を絞り出す。

「あ……あの……」

「何じゃ？ 珍客よ。ずいぶん慌てておったようじゃが」

「そ、その、お、追われているんです！」

「ふむ、追われておる、と？」

「はっ、はい！ この森の奥で邪教徒がお、おぞましい儀式をしておりまして、わ、私はそれを調べていたのですが、見つかってしまいました……！」

「なるほどのう……こやつらはその手先か」

「っー！」

気がつけば、周りは三匹のビーストに囲まれてしまっていた。
赤く血走った目をシェリカたちに降り注ぎ、低くうなり声を上げている。

その口からは唾液を溢れさせ、今にも襲いかかってきそうだ。

「……哀れな、自我を奪われ悪党の走狗にされおったか」

「マ、マナウルフィよ、獣神の使いよ、どうかお力をお貸し下さい
！」

「ふむ、助けてやっても良いのじゃが……」

「本当ですか！」

「わしの主の許可が無くては、勝手に動く訳にはいかぬ」

「あ……主っ!？」

シェリカは飛び上がりそうになるほど驚いた。

通常、魔獣を手足のように使う魔獣使いは、まず魔獣の子をさらう。

そして特殊な薬を混ぜた餌を与え、命令に逆らうと激痛が走る魔術の施された首輪などを使って調教し、主と無理矢理に認めさせるのだ。

今、自分を狙っているビーストたちもそうやって調教されたのは間違いないだろう。だが、伝説の神獣をそんな方法で調教できるとは到底思えない。

一体誰が、どうやったというのか。

その主は、予想も付かない所から姿を現した。

「何だよ、うるさいなあ……。寝らんねーじゃねーか」

「すまんの、リュウヤ。どうやら厄介事じゃ」

「よっ……。妖精!？」

マナウルフィの首の辺りの毛が盛り上がったと思うと、そこから小さな人間が姿を現した。

それは神話に出てくる妖精に見えた。

この世界における妖精は、神々の子孫とされている。

昔話にも多数登場し、目撃談もあるが、存在を証明する確固たる証拠は無い。

妖精とは、神獣よりもレアな、居るかどうかわからない存在なのである。

シェリカは伝説上の妖精が出てきた事に驚いて声を上げたが、件の妖精が更に驚く事を言った。

「妖精じゃないよ、俺は人間だ」

「は、はいい!？」

抗議の声を上げる妖精に、更に混乱するシェリカ。

何処をどうすれば、こんな手のひらサイズの人間が生まれるというのか。

身長は二十センチ程度。性別は男のようで、年齢的にはシェリカとあまり変わらないように思える。着ている服も、一般的な平民が着ているようなシャツとズボンという平凡な格好だった。

サイズを除けば、普通の人間と何ら変わりはない。

ただ、その髪と瞳はこの地方では珍しい黒色であった。

2話：傭兵 シェリカ・ウォーレン（後書き）

竜矢の相棒、神獣の登場です。え？ あの痩せた女の子はどうしたのかって？ ……多分、皆さんが想像している通りだと思いますw

3話：異世界から来た小さな勇者（前書き）

主人公の力の一端が見られます。既にチートW

3話：異世界から来た小さな勇者

「あゝ、まあいいや、無理もねーし。んで、何がどうなってるんだ？」

「この娘が邪教徒に追われておるそうじゃ」

マナウルフィがシェリカに向かって、顎をしゃくるような仕草をした。

妙に人間くさい神獣である。

「はあん。で、こいつらはその手先と。……助けられそうか？」

「残念じゃが……。脳の髄まで薬でやられておるよ」

「そっか……。恨みはないが、せめて痛みを感じる間もなく逝かせてやる」

「リュウヤ、わしが……」

マナウルフィが立ち上がろうとしたが、リュウヤはそれを言葉で止めた。

「いいって、お前が獣を殺したくないのは分かってるさ」

「……すまぬ」

「気にすんな。ほんじゃ、行くぜえっ！」

言うやいなや、リュウヤと呼ばれた妖精サイズの男はマナウルフィの体から地面に飛び降りる。

そして、姿が消えた。

「えっ!？」

「うおりゃあ！」

声は頭の上から聞こえてきた。

見れば、遙か樹上から男がブラックビーストの一匹に向けて落下している所だった。

あの体で信じられないジャンプ力だ。

その足が、最後までリュウヤに気付かなかったビーストの脳天に炸裂する。

「ギャイツ……！」

ドゴン！ と腹の底に響く音がした。

ビーストの頭は蹴りの衝撃で完全に地に埋まり、足を痙攣させている。

が、その痙攣もすぐに治まり、息の根が止まった事が分かった。

凄まじいパワーである。

シエリカがあっけに取られたのも束の間、再びリュウヤがジャンプする。

木々を蹴り、地を跳ね、雷光の様に森の中をリュウヤの体が縦横無尽に飛び回る。

強力なボウガンから放たれた矢よりも速いだろう。目にも止まらぬ速さとは正にこの事だ。単に跳躍しているのではなく、空中でも急激な方向転換をしている事から、確かに空を飛んでいる。

この世界には空を飛ぶ魔術が有るが、こんな高速・高機動のものではない。

大人一人を二階の屋根の上まで上昇させ、蝶ぐらいのゆっくりとした速度で進むのがやっという代物だ。

飛行と言うより、浮遊に近いだろう。
初めて見る常識を覆した“超”飛行魔術に、シェリカは声も出ない。

二匹目のビーストの首筋に、弾丸と化した彼の拳が突き刺さる！
パギン！ と、乾いた音がした。ビーストの首の骨が折れた音だ。
三匹目には身構える暇すら与えず、その首筋に高速の跳び蹴りを見舞うとまた骨が折れる音が森に響いた。

わずか数秒の間に、残る二匹のビーストも呻き声一つ上げる事もできずに絶命したのだった。

「フウ……ごめんな、迷わず成仏してくれ」

リュウヤが両手を顔の前で合わせ、目をつぶった。
冥福を祈るかのように。

これもシェリカには驚きだった。

一部の例外を除き、魔獣とは人間の天敵だ。殺さなければ、こちらが殺される。

魔獣が人間に情けをかけたりにしないように、人間もかけたりはしない。

この世界において、人間は生態系の頂点に立ってはいないのだ。
まして冥福を祈るなど、見たことも聞いたことも無かった。

「片づいたかな？」

「いや、こ奴らを操っておった魔獣使いが……ふん、逃げよったわ」
マナウルフィがリュウヤの呟きに答える。

ビースト達を操っていた魔獣使いは逃走したようだ、遠くから戦いを眺めていたのだろう。

もっとも、マナウルフイを相手にしようなど考える者はそうはいないだろう。伝説でも、愚かな王が生け捕りにしようとして怒りを買い、天変地異を起こされて国を滅ぼされた、などという話がいくらでもある。

「やれやれ、か。……で、君はどちらさん？」
「はひっ!？」

呆けていたシェリカは急に聞かれて頭が真っ白になる。

この短時間で並の傭兵がする何倍も濃い体験をしたのだから無理もない。しかし、助けてもらったお礼だけは言おうと、うまく動かない舌を懸命に動かそうとする。

「わ、わらしはシェリカ・ウォーレンと言いまひて、しがな傭兵でございまふ! こ、この度は命をたふけていたらき、ま、真にありがたうございまふ!」

「気持ちと言いたいことは分かったから、とりあえずちよいと落ち着いてみようか」

苦笑しつつ、リュウヤはシェリカの前にトコトコとやって来る。

と、ピョンツとシェリカに向かってジャンプした

慌てて出したシェリカの手のひらに飛び乗って、妖精のような少年は笑いながら言った。

「俺の名前は竜矢。りゅうや坂崎さかざき竜矢。体のサイズは違ってるが、れっきとした人間だ」

「あ、えと、私はシェリカ・ウォーレン……傭兵やってます……」。

あの、本当に人間なんですか？」

「ああ。……まあ、ぶっちゃけちまうと、俺はこの世界の人間じゃないけどな」

「……はい？」

「待てリュウヤ、それは……」

マナウルフィが少々慌てたように口を挟んできた。わずかに心配が混じった声に、笑いながらリュウヤは答える。

「大丈夫だろ。知ったからって何か出来る訳でもないし」

「奴と関わりを持つ者だったら？」

「それなら逆に好都合さ。奴を誘い出して、叩きのめして、元の世界に戻る方法を吐かせてやる」

「……『慎重』とか『細心』とかの言葉の意味、知っておるか？」

「失礼な。ま、俺がこうやってのほほんとしてられるのも、お前が側に居てくれるからだけだな。頼りにしてるぜスーニア」

「っ……。そんな風に言われたら何も言い返せんではないか。まったく、我が主はお調子者じゃ」

一瞬言葉に詰まったマナウルフィは、ぷいっとそっぽを向いてブツブツ言っている。

まるで人間の娘が拗ねるような仕草に、シェリカは呆然と目を奪われていた。

「はっはっは、誉め言葉として受け取っておこう。あ、スーニアってのはこいつの名前、見たまんまのマナウルフィだ。ちなみに女の子ね」

「よろしくな、シェリカよ」

「は、はいっ、こ、こちらこそ……」

「あー……まあ、話せば長くなるんだが、俺は異世界から来た人間なんだよ、うん」

「異世界……」

シェリカは神殿の神官から聞いた、この世界の創世神話を思い出した。

神話では、人間の文明が発展するにつれ、神々に匹敵する力を手に入れるのではないかと危惧した創造神・バルアハガンが文明ごとに世界を分断し、行き来を出来なくした。

それぞれの世界は独自に発展を続け、この世界とは違う異世界となり、自分たちとは違う人間が生活しているのだと神話には記されている。

シェリカは、彼はそのいずれかの世界からやって来たと解釈した。

「お、驚きです……。はっ、もしかしたら……！　あなたは異世界から来た小さな勇者様では！？」

「は！？　勇者あ！？」

竜矢が素っ頓狂な声を上げた。お茶でも飲んでいたら、間違いく盛大に吹き出していた事だろう。

「きっとそうです！　今、この大陸ではあちこちで戦が起こり、大国同士が覇権をかけて争っています！　あなたはきっと、この戦乱を鎮めるべく神が遣わした勇者様に違いありません！」

「ちょっとお待ち下さいなお嬢さん！　何でそうなる！　確かに腕っ節には少々自信あるけど、俺はそんな大層なもんじゃない！」

「何を言ってるんですか！ 伝説の神獣であるマナウルフイに従えてるんですよ！？ もの凄い大層な者じゃないですか！」

冷や汗を流しながら竜矢は賢明に否定するが、目を輝かせて自分を見つめるシェリカに少々気圧され気味だ。

「ふむ、それは言えておるの。リュウヤはわしが認めた唯一の人間、唯一の主じゃ」

更にスーニアが口を挟む。その口調は真剣ではあるが、何処となく笑いを堪えてるような気配も含まれている。

「ほらやっぱり！」

「スーニア！ ちったあフォローしろ！」

「我が主が戦乱を鎮める救世主か、悪くない話じゃ。いや、むしろそれ位でなくてはわしも尽くし甲斐が無いというものよ」

「お前、絶対面白がってるだろ。……あーもう、とにかく場所変えるぞ！ さっき逃げた魔獣使いが仲間を連れて戻ってくるかも知れないから！」

ピョン、と竜矢はシェリカの手のひらから、スーニアの頭の上へと飛び移った。

「そうじゃの。ほれ、シェリカよ、何をしておる。お前もわしの背に乗れ」

「えっ！？ い、良いんですか！？」

「いいから乗りなつて。人間の足じゃマナウルフイに追いつけないよ。あ、その前に焚き火に土をかけて消しておいてくれるかな？」

火事になったら大変だから」

「はっ、はい！」

竜矢に言われ、シェリカは焚き火に土をたっぷりかけて消火する。そして、おっかなびつくりといった風にスーニアの背に乗った。

「良いか？ では行くぞ、しっかり掴まっておれ」

「はい！ えっ……ひにゃああああーっ！？」

スーニアが軽く地を蹴ると、一瞬にして生い茂る木々の上へと飛び出した。

頭上に輝く地球よりも大きな月は、鮮やかな銀色をしている。その月光を反射して、スーニアの体が淡く光る。

そのまま木々の先端を跳躍し、金色の軌跡を残しながら軽やかに森の上を走り出すのだった。夢の中のような幻想的な光景を、シェリカは呆然と眺める。

「……す、凄い……！ 空を飛んでるみたい……！」

「だなあ、俺も最初は面食らったよ」

シェリカの声に、竜矢が毛の中から顔だけ出して言った。

「ひとまず、森の外れまで行こうかの？」

「そうだな。そこでシェリカさんを降ろすか……それでいいかな？」

「あ、はい！ で、でも……」

「ん？」

「た、助けてもらったのに、何もお礼をしない訳にはいきません！ よ、よろしければ、私の泊まってる宿屋に来ませんか？」

何といっても命の恩人である。お礼をしなければ、と思ったのは本当だ。

だが、シェリカには別の思いもあった。

この出会いをすぐに終わらせたくない。

何か、大きな変化が自分にやって来ているのではないかと、そう思えたのだ。

これほど強烈な体験は、自称ベテラン傭兵の嘘が半分混じった自慢話でも聞いた事は無い。シェリカがそんな風に思ったのも、無理もない事だった。

「……いいのかい？」

「勿論ですよ！ 少し離れてますが、ネクロイアの街にありますから、ぜひ！！」

「……そこ、風呂ある？」

「お風呂ですか？ ありますよ！」

「よし世話になる！ いや、ここ最近風呂入ってなくて、そろそろ恋しくなってたんだ。やっぱり日本人には風呂だよなあ」

「ニホンジン？」

聞いた事のない単語について、シェリカが聞いた。

「ん、ああ。俺の故郷は『ニホン』って名前の国でね。ニホンジンは風呂好きなんだ。いや、楽しみだな」

「へえ……」

ニカッと笑いながら竜矢は答える。

嬉しそうに笑うのを見て、本当にお風呂が好きなんだなあ、とシ

エリカは思う。

「その気になれば、どんな器でも風呂になるだろうに」

スーニアが少々呆れたように言った。

確かに竜矢のサイズなら、小さな器でもお湯さえそそげばインスタント風呂になるだろう。実際に竜矢はそうやって入った事もあるが、いつも不満だった。

「小さい器にお湯入れても、すぐに冷めちゃうんだよ。俺は長湯派なんだ、ぬるめの温度でじっくりゆっくり入りたいんだよ」

「ああ、なるほど。長い時間は無理ですよね、すぐ冷めちゃうだろうし」

「そうなんだよ。ちょっと前まで結構寒かっただろ？ 野宿すると冷えるのも早くてさ」

「何じゃ、そんな事か。言ってくればわしが魔力で湯を温め直してやるものを」

「こんな事でお前の手を煩わせるのも悪いだろ？ いくらマナウルフイの魔力が桁外れに強いっていつてもさ」

「……鈍い男じゃ」

「ん？ 何だって？」

「何でもないわ」

スーニアの少し怒ったような声に、竜矢は小首を傾げた。

考えても分からなかったので、今度はシェリカに思っていた疑問をぶつけてきた。

「それはそうと、シェリカさん一人でその邪教の調査に行ったの？」

もしかしてかなりの凄腕とか？」

「い、いいえ！ 私はまだまだ未熟です……。少しは名前を知られるようになったんですけど……」

シェリカはこれまでの経緯を詳しく話すことにした。

慢心して単独行動を取ったこと。

些細なミスで追われる羽目になったこと。

逃げる途中、焚き火の光を見て助力を頼もうとした事など。

「そりゃ、かなり危ない所だったって訳か」

「はい！ 本当にありがとうございます！ リュウヤさんのような強い方に出会えたのは幸運でした！」

「はは、照れるね。んで、そのミスってのは何をやっちゃった訳？」

「それは………あ」

ここでようやくシェリカは思い出した。

自分がミスをした、そもそもの原因を。

「あー！ーっ！！ あの子！！」

「うわっ！？」

「何じゃ、急に大声を出すでない！」

「すっすいません！ ああ、でも、どうしようどうしよう、もう間に合わないかも、でもでも……」

竜矢は泣きそうな顔で急にオロオロし始めたシェリカに、心配そうな顔を向ける。

「……何かあったの？」

「女の子が、生け贄にされそうになっていたんです！」

「えーーーーっ!？」

「戯け者が!! 何故その事を早く言わんのじゃ!!」

竜矢の驚く声と、スーニアの叱責が森の空に響いた。

「す、すみませえん! 安心してつい……!」

「スーニア!」

竜矢がスーニアに急いで声を掛けた。すべて分かっている、といった感じでスーニアが返事をする。

スーニアは方向転換して、元来た方向へと駆けだした。

「うむ、それでこそわしが認めた男よ。シェリカよ、案内せい!」

「え? まさか……」

「その邪教徒どもの巢窟にじゃ!」

「助けるんだよ! その子を!」

「で、でも、連中は少なくとも百人はいましたよ!? 一度町に戻って、領主様に報告して兵隊を……」

「間に合わねーって! 大丈夫だ、俺とスーニアに任せとけ!!」
「うむ」

「……はい」

とてつもない力を秘めた、小さな勇者と金色の神獣。
その力強い言葉に、シェリカは思わず頷いていた。

3話：異世界から来た小さな勇者（後書き）

少し書きためているので、あと二回位、この程度の文章量でのアップになりそうです。

4話：邪教徒（前書き）

悪党には美女が似合うと思う。

4話：邪教徒

「マナウルファイだと？ 何を馬鹿な事を……」

古の邪神・ルディヴァールを崇拝する邪教の教主ゼウルは、戻ってきた魔獣使いの報告を聞いて鼻で笑った。

三十五歳になるゼウルは教主というには引き締まった身体をしており、渋い表情が似合い、上品な雰囲気相手に与える紳士だ。

社交界に出れば、浮き名をさぞかし多く流す事だろう。ただし、その心は邪教の教主などするだけあって欲と野望に満ちていた。

「本当なんですよ教主様！ マナウルファイだけじゃありません、妖精までいました！ そいつが私のビーストたちをあつという間に……！」

そのゼウルに、簡易的に造られた教主用の部屋で魔獣使いの男は懸命に説明している。

だが、ゼウルは耳を傾けようとしなない。

伝説の神獣に妖精。そんなものが急に現れたと言われても、信じる方がどうかしているだろう。

潜り込んだ曲者を追い詰めたものの、振り返ちにあつて魔獣を失ったという方がよほど信憑性がある。

「ギルヴァー、君はもっと有能だと思っていたのだがな。失敗したなら素直にそう言いたまえ」

「教主様信じて下さい！ 私も魔獣使いの端くれです、見間違えるものですか！ あの牛ほどもありそうな体に三本の尻尾！ あの金色の獣は間違いなくマナウルフィです！ 妖精もとんでもない速さで宙を飛び回り、ビーストたちを一撃で殺したんですよ！」
「ふむ……」

いい加減ギルヴァーの言葉にうんざりしていた事もあるが、ゼウルは少しだけ考えてみた。

仮にギルヴァーの言う事が本当だとしたら？
結論はすぐに出た。

「分かった、信じよう」

「あ、ありがとうございます！ そ、それでいかがいたしましたしょう？」

「何もせぬ」

「は？」

「考えてもみたまえ、神獣と妖精を同時に相手にするなど、人間に出来ると思うかね？」

「そ、それは……」

「だから何もせぬ。今は邪魔された儀式を完遂させる事が先決だ。速やかに儀式を再開し、ルディヴァール様に生け贄を捧げるのだ。その後ここを放棄し、新たな儀式場へと移動する。元よりそういう計画だったであろう？」

「は……はい、そうでした。しかし大丈夫でしょうか？ 連中がここを襲って来たり、あるいは領主に知らせて兵士が来るかも……」
「他に仲間は見当たらなかったのだろう？ いくら何でも、そんな少人数で奇襲を仕掛けて来るとは思えん。それに、ここから街まで

どれだけ離れているかと思っただけだ。来る頃にはここはもぬけの空だ」

ギルヴァーはなるほど、と頷いて尊敬の眼差しを教主に向けた。それに気分を良くしたゼウルは口元に笑みを浮かべる。もつとも、領主が絶対に動かない事を知っているからこそその判断だ。

この計画の全貌を知っているのは自分を含め数名しかいない。そして、失敗する事はまずあり得ない。ゼウルは何も心配していなかった。しかし、用心するに越した事はない。

「だが、急いだ方がいいのは確かだ……ヴィーラ！」
「はい、ここに」

部屋の隅の暗がりから声がした。

ぎょっとしたギルヴァーがそちらを見ると、一人の尼僧が闇から滲み出るように現れる。

その黒い僧衣は、まるで闇そのものの様に衣擦れの音一つしない。

闇に包まれているかのようなその尼僧は、服とは対照的に雪のような白い肌をしていた。

彼女の透き通ったスカイブルーの瞳が、教主たちに向けられる。

ただ、その顔には一切の感情が見られない。

無機質にして無表情、それでいて見る者を陶醉させるような美女であった。

「全員祭壇前に集合しろと信徒達に伝えろ！ その後お前の魔術で入り口を崩して塞ぐのだ、誰も入れないようにな！ そして、すぐ

に儀式を再開する！」

「分かりました」

滑るように部屋を出て行く尼僧を見送り、ゼウルは自分も部屋を出て行くとする。

と、何かを思い出したように足を止めて振り返った。

「そういえばギルヴァー、君の手持ちの魔獣はまだいたかね？」

「えっ？ い、いえ……あの三匹だけです……。で、ですが、魔獣の子さえ調達すれば三ヶ月もあれば調教出来ます！」

「ふむ、三ヶ月か……」

腕組みをしながらゼウルはギルヴァーに近づいていく。

魔獣は普通の獣と違い、幼体から成体への成長が早いものが多い。弱肉強食の世界で生き残るには、子供だからこそ早く強くなる必要があるからだ。

地球以上に過酷なこの世界の生態系は、魔獣にとっても厳しいものなのである。

ギルヴァーが使っていたブラックビーストは比較的成長が早く、三ヶ月もあればほぼ成体となって十分使いものになる魔獣だ。

「それ位はかかるか……分かった」

「で、では、儀式が終わったらすぐに準備に取り……」

そこまで言った時、ギルヴァーの声が消えた。

不思議に思ったギルヴァーが首に手をやると、冷たく、固い感触がある。

ゼウルの手に握られたナイフが、彼の喉に深く突き入れられていた。

「か……は、ひゅ……！」

「三ヶ月も待てると思うか。もういい、お前のような能無しはお役ご免だ」

ゼウルがナイフから手を放すと、首に刺さったナイフを押さえたままギルヴァーの体が倒れていく。

ギルヴァーは暫くもがいていたが、徐々に動きが鈍くなり、その動きを永遠に止めた。

「ゼウル様く？ 準備が出来ましたよおくく？」

開いたままの入り口から、ひょっこりと顔を出した尼僧がのんびりとした声を掛けてきた。垂れ目のおっとりとした感じの女性だ。

先ほどのヴィーラとは違い、健康的な肌に艶やかな紅い唇が目立つ。

妖艶な高級娼婦のような雰囲気さえ漂わせる、豊満かつ整ったボデイラインと色気を持つ尼僧だった。

「ネデイスか」

「あらあ？ ギルヴァーさん、どうしちゃったんですかあ？」

「魔獣を失った魔獣使いなど、居ても仕方がないからな」

「あらく、教主様もひどいですねえく、散々こき使っておきながらく」

「ふん、言っておれ」

教祖という立場のゼウルに、ネデイスは平気で無礼な言葉を吐く。慣れているのか、それとも立場的に近い身分なのか、ゼウルは特に咎めるような事はしなかった。

「まあ、私の可愛い子たちが居ますから、何かあったら大丈夫ですよ」

「……だいたいかな」

ゼウルはギルヴァーの言葉を思い出す。

伝説の神獣を従える、神話にしか登場しない妖精。

本当にいるのだろうか？

軽く頭を振って考えを掻き消すと、祭壇に向かって歩き出すのだった。

「偉大なる闇の創造主、永遠の暗黒を司るルディヴァールよ……。今宵、あなたに高貴な血を引く処女を捧げます。願わくば、我らに闇の加護を与えたまえ……！」

地下神殿の広い空間に、無数の人影があった。

皆、一様に黒いローブを目深に被り、その表情は分からない。

壁に据え付けられた松明の光が、空間を妖しく照らし出していた。

大きく造られたステージの様な場所に、不気味かつ大きな神像があった。邪神ルディヴァールの像である。

邪神像に向かい、ゼウルは重々しい声で祈りの言葉を捧げていく。彼の両脇にはヴィーラとネデイスが祭具を持って佇んでいた。

神像の前には石造りの祭壇があり、その上に全裸の少女が寝かされている。

年齢は十四歳前後だろうか。両手足を鎖で繋がれ、それは祭壇に

繋がって固定されている。ショートカットの美しい金髪を乱れさせ、少女は眠っているように動かない。

その肌は白磁の陶器のような艶を放ち、一種神秘的な美しさを放っていた。

と、その目がゆっくりと開いていく。

「ん……え……？」

「目を覚ましてしまったか」

ボーツとした顔で辺りを見回した少女は、邪神像を見て目を見開いた。

これで頭がはっきりしたのか、自分を凝視する邪教徒たちに小さく悲鳴を上げ、更に裸である事が分かって大きな悲鳴を上げた。

「こ、これは、一体……！　だ、誰か！　誰かいないのですか！　シーナ……！　ボアズ……！」

自分を守ってくれている筈の人物を呼ぶが、その必死な声に応える者はない。

恐怖によって蒼白になった彼女に、ゼウルがゆっくりと歩み寄る。

「無駄ですよ、此処にはあなたの知り合いはいません」

「だ、誰ですかあなたは……っ！　わ、私にこんな事をして……！」

「光栄に思いなさい。あなたは我らが神、ルディヴァール様への捧げ物として選ばれたのです。あなたの魂はルディヴァール様の元で、永遠の快樂と幸福を手に入れるのです……。何、痛みを感じるのは少しの間ですよ、心臓を取り出すだけですから」

「いっ……いや、いやです、いやあ……！　だ、誰か！　誰か助けてえっ……！」

少女の悲鳴と、鎖の金属音が神殿に響く。

それを心地よく感じながら、ゼウルはネデイスの持っていた祭具――黒い刃の、奇妙に波打ったナイフ――を取り、泣き叫ぶ少女に向き直る。

「ひっ……、や……やめ……！ いや……！」

その表情を楽しむように、ナイフがゆっくりと少女の上で持ち上げられた。

「シェリカさん、こっちの方で間違いない？」

「はい！ ……あつ、あそこです！ あの遺跡です！」

「……ふん、腐れた靈気が臭ってくるわ」

森の上を飛ぶように疾駆するスーニアの鼻が、汚れた靈氣を嗅ぎ取り鼻を鳴らす。

竜矢たちはシェリカの案内で、件の地下神殿跡にやって来たのだ
が……。

「……そんな……！」

「……塞がっちまってるな」

神殿は小高い山の地下をくり抜くようにして造られている。その入り口は山の崖になった側面にあった。

小型のバスが通れそうな大きさのそれは、落石でもあったように

崩れた岩で塞がってしまっていた。

「私が入った時には何ともなかったのに……！」

「……魔力の残滓を感じるのう、強力な魔術を使って崩したんじゃない」

それは、敵の中に魔術師がいるという事だ。破壊の規模から判断して、かなり上位の実力を持つ者が。

戦闘において、魔術師の存在は大きな意味を持つ。不利な状況でも魔術師の一撃で形勢逆転！ などは何ら珍しい事ではない。

魔術師に気を付けなければならぬのは当然だが、それ以前にどうやって入るかが問題となってしまうた。

「ど、どうでしょう……」

シェリカは困り切った顔でリュウヤたちを見る。

竜矢はスーニアの頭から飛び降りると、崩れた岩に近寄って深く息を吐く。

「あの、リュウヤさん？ 何を……」

「ぶち破る」

森に、轟音が響いた。

「な、何だ!？」

「じつ地震か!？」

神殿の中に大きな破壊音が轟き、振動で天井から小さな石の破片やホコリが落下してくる。教徒たちの悲鳴が上がる中、ゼウルは大声で落ち着くように促した。

「落ち着け！　落ち着くのだ！　我らにはルディヴァール様の加護がある！！」

時間にすればものの数秒で振動も治まり、神殿内は再び静寂を取り戻した。

まだざわめいている者たちに向け、ゼウルは再び声を張り上げる。

「これこそ正にルディヴァール様のご加護なり！　さあ生け贄を捧げよう！」

ゼウルは取り落としたナイフを拾い上げると、再び少女の胸の上に翳す。

祭壇上の少女はナイフを凝視し、もはや声も出せずに震える事しか出来なかった。

4話：邪教徒（後書き）

そして正義の味方^{ヒーロー}には、美少女が似合うと思う。
いやまあ、私の個人的趣味ですけどねw

5話：赤き光の巨人（前書き）

ちなみに、お台場に作られた1／1スケールのガンダムで18メートルだそうです。

5話：赤き光の巨人

「そこを右！ 突き当たりを左！ 三つ目の角を右じゃ！」

竜矢の一撃で崩れた岩を完全に吹き飛ばした後、一行は神殿内の通路を突き進んでいた。

竜矢は拳の一撃で、只それだけで岩をすべて粉碎してしまったのだ。

もはや冗談の様なその光景にシェリカが呆然としているのを無視して、中へと飛び込んだのである。

竜矢は空中を高速で飛び、すぐ後ろをスーニアが走って靈氣を嗅ぎながら道案内をしている。

「うひいーっ！」

シェリカはというと、スーニアの背に乗ってひたすらしがみついていた。

とにかく速い。

馬の全力疾走などとは比べ物にならない、驚異的な速度だ。

飛んでいる竜矢は、例えるなら放たれた『矢』だ。

スーニアもシェリカを乗せているというのに、彼に劣らぬ速度で突っ走る。

そして、行き止まりにあった朽ちかけた扉をその勢いのままに突破し、粉々に打ち砕いた。

「うわあああっ!？」

「な、何だー！ーっ！？」

扉付近にいた教徒たちが数人、衝撃で数メートルも吹き飛ばされる。

入り口で発生した叫び声と扉の碎かれる音に、ゼウルの動きが止まった。

「どうしっ……！？」

「おおらああ！！」

小さな疾風が飛来し、持っていたナイフを弾かれた。

否、ナイフは刃の部分が完全に粉碎され、衝撃に耐えきれずゼウルの手首があり得ない方向に曲がっている。

いや、手首だけではない。指や手の甲もひしゃげて手の形になっていない。

手首から先の骨が、すべて碎かれてしまっていたのだ。

驚く前に、その激痛がゼウルの口から悲鳴を迸らせた。

「ぐおああっ！！ あ、あがああ……！ 手、手があ……」

「ゲス野郎が、ざまーみろ」

「なっ……！？」

ゼウルの目の前に、ナイフと手を碎いた妖精が浮かんでいた。

祭壇の近くには、三本の尻尾を持つ黄金の獣の姿。

もう一人、傭兵らしき女が生け贄の少女の鎖を外そうと悪戦苦闘している。

後ろ姿しか見なかったが、あれは逃げた曲者ではなかったか。

「よ、妖精と……マナウルファイ……！？」

ギルヴァーの言葉が脳裏をよぎる。

（ほ、本当だったのか……！）

後悔したが、後の祭りである。

「生け贄を捧げるなんて、くだらねえ真似しやがって！ 全員領主に突き出してやるから覚悟しな！ おっと、動くとマナウルフィが黙ってねーぞ？ 伝説の一つや二つ、聞いた事ぐらいあるだろ」

「グルルル……」

竜矢が外見に見合わぬ大きな声を上げた。スーニアが教徒たちを睨んで低く唸っているのが、脅しの効果を倍増させる。

逃げようとしていた教徒たちの動きが止まった。

「それでいい。……鎖、外せそう？」

竜矢は背後のシェリカに訪ねる。

返事は芳しくないものだった。

「ダメです、凄く頑丈で……。鍵さえあれば……」

「聞こえたら？ 鍵を出しな」

竜矢はゼウルを睨み付けて鍵を要求する。

手を押さえてしゃがみ込んでいたゼウルは、懐を探って枷の鍵を取り出した。

「こ、これだ……」

「素直でよろしい」

その手から鍵を取った竜矢は、祭壇へと近づいて鍵をシェリカに渡す。

シェリカが枷の鍵を開ける間、生け贄にされかけた少女に微笑んで話しかけた。

「もう大丈夫だ。怪我してない？ 痛いところある？」

「い、いえ、大丈夫です。ありがとうございます、妖精様……」

「いや、俺、妖精じゃないから」

「え？」

青ざめているが、気丈に答える少女の言葉に手をパタパタさせながら否定する。

ここで、竜矢はようやく気付いた。

彼女が糸纏わぬ裸体だという事を。

発展途上だが高貴ささえ漂う美しい裸身に、思わず目を釘付けにされてしまう。

「……リュウヤさん？」

「リュウヤよ、何処を見ておるのじゃ？」

「はっ、はい！？ な、何を誤解しちゃってるのかな！？ け、決してイヤらしい意味で見てた訳じゃないぞ！ こ、これは、み、見とれてたんだ！ 綺麗だったから！」

言ってから、冷や汗をかく。

馬鹿正直に白状してどうするのだ、と。

「リュウヤさんって……、スケベだったんですね」

「我が主ながら情けない……」

「あの、あまり見ないで下さい……」

冷たい視線に、俺が悪者！？ と叫びたくなるのを堪え、竜矢はゼウルの方に向き直った。これ以上、墓穴を掘らないようにする為でもある。

「さ、さあーってと、あんたたちはお縄についてもらおうかな！
その二人、こいつの服を脱がせて、それをロープ代わりにして手足を縛ってくれる？ 拒否権は無いので悪しからず」

神像の両脇に立っていたネデイスとヴィーラに、竜矢はそう要求した。

「いいですよ、縛るの好きですから♪」

「ネデイス、貴様っ……！」

ネデイスは明るく答え、スキップでもしそうな感じでゼウルへと近付く。

ヴィーラも無表情に歩み寄り、ゼウルの体に手を掛けた。

「では失礼しますね、リュウヤさん♪」

「……え？」

ネデイスの放った言葉の違和感に気付いた瞬間、ネデイスの背中から黒い羽が僧衣を破って飛び出した。

蝙蝠の羽のようなそれは、軽く羽ばただけでゼウルとヴィーラを連れて一気に天井近くへと上昇する。

「このっ逃がすかよっ！」

「させない」

竜矢が追うのに合わせ、ヴィーラが右手を翳す。

その手のひらに、横に一筋の亀裂が入る。

亀裂が上下に広がると、そこに大きな目玉が現れた。それは凶悪に血走り、竜矢を睨みつける。

「うわキモッ！」

手の中の瞳が、青い閃光を放った。

「のわっ!？」

とっさに避けた竜矢の横を光が走り、それは何人かの教徒に当たってその体を焼き切った。まるで強力なレーザーだ。

そして、壁際にあった小さな神像を破壊する。

その瞬間、神殿に大きな揺れが発生した。先ほど竜矢が起こした振動を上回る、大規模な物だ。

「じゃ〜ね〜♪ 縁があったらまた会いましょう〜ね〜♪」

「生きていられれば、ね」

次の瞬間、ネデイスたちの姿は消えていた。

転移の魔術か、その力を持った魔道具でも使ったのだろう。

「いかん！ 戻るのじゃリュウヤ!!」

その瞬間、天井が一気に崩壊した。

大量の岩が神殿内に降り注ぎ、断末魔と共に教徒たちを押し潰していく。

スーニアたちの頭上には、一際巨大な岩盤が落下して来ていた。

「きゃあああああっ!!」

「いやあああああっ!!」

シェリカと少女の悲鳴を聞き、竜矢は全力で空中を駆け下りる。岩盤よりも速くスーニアたちの元に辿り着いた竜矢は、その力を解放した。

「う、おおおーおーおーっ!!」

竜矢の全身が赤い光に包まれる。

その光は竜矢の形のまま大きくなり、巨大な人の姿を取った。身長二十メートルはあろうかという、赤く輝く光の巨人に。

巨人は落下してくる岩盤を両腕で受け止め、それを盾にしてスーニア達の上に覆い被さり、彼女たちをガードする。

スーニアも周りに金色の結界を展開し、破片や粉塵を防いでいる。揺れが鎮まってくると共に崩壊も止まっていき、神殿は静寂に包まれていった。

「三人とも大丈夫か？」

「うむ」

「だ、大丈夫で……っ!？」

「私もだいっ!？ ……あ、あ……!」

シェリカと少女は呆然と竜矢を見上げていた。

正確には竜矢の形をした、赤い光の巨人を。

よく見れば、巨人の胸の中で竜矢がまったく同じポーズを取っているのが分かる。それを見て、シェリカが生唾を飲み込んでから聞

いた。

「リュ、リュウヤさん……何ですか？」

「そうだよー。ちょっと待ってて……よっ、と」

巨人は両腕で支えていた岩盤を右腕と背中を支えると、左手をスーニア達に伸ばしてきた。

「うむ。二人とも手に乗れ、脱出するぞ」

竜矢の意図を察し、スーニアが手の上に乗るように二人を促した。

「はっはい！ 立てる？」

「はい……何とか」

「いいか？ んじゃあ行くぜ。スーニア、二人のガード頼むぞ」

「任せておけ」

全員が手の上に乗り、スーニアの結界を確認すると、巨人は右手を頭上へと伸ばしていく。すると、右手に触れた岩が砂となって崩れていくではないか。

そうして出来た上の空間に向け、巨人の体がゆっくりと上昇していく。

五分ほど上昇が続けると、手の先が地上に突き出した。脱出成功である。

月光が赤い光の巨人を照らし出すその様は、伝説かお伽話のような光景であった。

「あいつらは……やっぱ居ないか。チクショウめ」

周囲を見回したが、ゼウル達の姿は見えない。とうに逃亡したのだろう。

一方、手に乗ったシェリカと少女は抱き合って震えていた。スーニアが不思議そうに小首を傾げて聞く。

「どうした？ 二人とも、寒くはないはずじゃが」

季節的にまだ寒い時期だが、結界を張っているので寒くはないはずだ。

が、二人が震えているのは別のせいであった。

「た、高いですう、怖いですう〜」

「は、早く降ろして欲しいですう〜」

「……なるほど。リュウヤ、二人は高い所が苦手のようにじゃ」

「えっ？ おっと、ゴメンゴメン」

竜矢は左手をそっと下ろし、全員地上へと降ろす。シェリカと少女はようやく安堵のため息をつくのだった。

「何だ……あれは……」

ネデイスにぶら下げられたまま逃“飛”行中のゼウルは、突然聞こえてきた音に何気なく振り返って目を疑った。

赤く輝く光の巨人が、地下神殿のあった辺りから地上に出てきたのだから無理もない。

ネデイスとヴィーラもそれを見て、さすがに言葉を失っている。

「……ホントに妖精だったのかしら……」

「『神々の子孫』か……。本物なら、私たちもよく逃げられたものだわ」

普段は無口なヴィーラも珍しく声を出している。

と、ゼウルが声を上げた。

「いかん、我々の姿を探してるぞ！」

「みーちゃん、降下！」

「ギアッ」

ネデイスの背中に生えている翼が返事をして、急速に高度を落とす。

実際にはネデイスが翼を持っている訳ではなく、彼女の背中に翼を持った魔獣がへばり付いていたのだ。

ジャロックというこの魔獣は、胴体は人間の赤ん坊サイズと小柄だが、大きく強靱な翼を持ち、その飛行能力は大の大人を五人は楽に運ぶ事が出来る。

その姿は翼を大きく、体を小さくした蝙蝠のような魔獣だ。蝙蝠と違うのは、足の他に腕が四本もある事だ。

ブラックビーストと比べ、かなり調教が困難な魔獣だ。これに従える事は、魔獣使いとしてのランクが上位にある事を意味している。この魔獣を操るネデイスもまた、魔獣使いだったのだ。

ちなみに彼女がこの魔獣に付けた名前は『みーちゃん』。
およそこの魔獣には似合わない名前である。

「よし、このまま森の中を移動して予定地へ向かおう」
「はぁーい」

ネデイスは巨人の目を逃れる為、森の中を飛ぶようにジャロックに命令した。

それに従い、ジャロックは器用に木々をすり抜けて飛行する。

（伝説の神獣に、神話にのみ登場する妖精……！ 戦乱に揺れるこの大陸に、何かが起ころうとしているのか？ ……だが私は諦めんど、必ず我が野望を……！！）

砕かれた手の痛みを堪えながら、ゼウルは己が野望の達成を誓うのだった。

5話：赤き光の巨人（後書き）

次回からUPする文章量が少し減ると思います。
流石に毎回この量はキツイもんがありますので（＾＾；；

6話：キドニア王国の姫君（前書き）

色々と解説風味。

6話：キドニア王国の姫君

「あゝ……その格好じゃマズイよなあ……。ちよつと待ってて」

元の大きさに戻った竜矢が、スーニアの首に下がっているバッグに潜り込んで何やらゴソゴソしている。

と、出てきた彼の手にはマントらしき布の端が握られていた。

「シェリカさん、これを彼女に掛けてあげて」

「あ、はい！」

竜矢に代わってマントを握ったシェリカがそれを引っ張ると、旅人用のマントがずるずるとバッグから出てくる。だが、バッグの大きさをみると、とてもマントが収まるような大きさには見えなかった。

その事に気付いたシェリカが驚きの声を上げる。

「リュウヤさん、もしかしてこのバッグ……魔術が掛かってます？」

「ああ。その中は亜空間になってるらしくて、見た目の何十倍も物が入る上に、重さまでカットしちまう。更に新鮮なお野菜までそのまま長期保存できるんだ。見た目はボロっちいけど便利なバッグさ」

便利などというレベルの代物ではない。

例えばこれを戦争に利用したらどうなるか？

膨大な数の武器・防具は勿論の事、もっとも重要な兵糧の輸送・保存の問題が一挙に解決する事になる。量産に成功すれば、軍事バランスをひっくり返す事も有り得るだろう。

このバッグの価値を分かっているのかいないのか、竜矢はニコニコ笑って解説している。

「我が主はあまり深く考えないタチでな。気にしない方が良いぞ」
「……はい……」

シェリカはまた呆気に取りられた顔で頷いた。開いた口が塞がらない。今夜だけで何度呆気に取りられたのか、自分でももう分からなくなっている。

あまりにも強烈な体験の連発であった。

とにかく、上質なマントを生け贄の娘に掛けてやると、彼女もホッとした顔で言葉を発した。

「皆さん、危うい所を助けていただき、心より感謝いたします」

少女は深々と頭を下げる。

「まあ、間一髪ってとこだったな。にしても……」

スーニアの頭の上に移動した竜矢は、自分達が出てきた大穴を見て眉をひそめる。

この下には恐らく百人以上の邪教徒が埋もれているのだ。

生け贄を捧げようなどという外道な行為を行った者たちだが、竜矢は僅かながら悲しみを感じていた。

「ひでえ事しやがるぜ、あの教主みたいな奴と尼さん二人……！
今度会ったら、絶対逃がさねえ」

「予め神殿が崩壊する仕掛けをしておいたんじゃないだろう。ふん、臆病な悪党ほど用意周到なものよ」

竜矢は両手を合わせ、冥福を祈るように黙祷する。
それを見た少女は興味深そうに竜矢に声を掛けた。

「あの………」

「ん？ なに？」

「あの教徒達の、冥福を祈っておられるのですか？」

「……………ん、まあね。それ位の情けはいいかなって」

「……………お優しいですね」

少女の何か温かいものを見るような目に、何故かドギマギした竜矢は誤魔化すように自己紹介をした。

「あゝ、お、俺の名前は竜矢、坂崎竜矢。これでも人間だからね」

「本当に妖精ではないのですか？」

「うん、……シェリカさんには教えたけど、俺は異世界人なんだ。
色々あってね」

「い、異世界人！？」

「そ。まあ、機会があったらその時詳しく話すよ」

少女の驚いた声を軽く笑顔で流す竜矢であった。
続いて、スーニア達が名乗った。

「わしの名はスーニアじゃ。見れば分かるじやろうが、マナウルフ
イじゃ」

「私はシェリカ・ウォーレン、傭兵です」

それぞれの名乗りを受け、少女は背筋を伸ばして自分の名を名乗

った。

「申し遅れました、私の名はミルファルナ・ヴィルアンス・グレオル・ド・キドニアと申します」

「え!?!」

随分長い名前だなあとリュウヤが思った時、シェリカが声を上げた。

「あ、あの、もしかしてあなたは……このキドニア王国の……・?」

「はい、国王レグリオスの娘です。身分は第一王女になります」

「えー……っ!?!」

森の中にシェリカの驚きの声が響く。

森の住人である動物達にとって、今夜は安眠妨害の連続であった。

今、竜矢たちが居る国の名をキドニア王国という。この世界で最大の大陸、バルアーレン大陸の東寄りに位置する国だ。

面積や軍隊の規模などを見ると、小国というほど小さくもないが、大国というほど強大でもない。しかし戦乱の空気が濃くなるにつれ、軍事方面に力を注ぐようになってるのは他国と同様であった。

一行は取りあえず、この辺り一体を治める領主の元に行って保護を求める事にした。

今は全員スーニアの背に乗り、森の上を駆けている。

スーニアは二人が怖がらないように心持ちゆっくり走っているが、金色の神獣の背に乗って森の上を飛ぶように疾走するという幻想的な体験に、二人は夢心地でまるで怖がっていなかった。

「しかし、何だってお姫様がこんな目に？」

スーニアの頭の上で竜矢が疑問を口にした。

「それが、よく覚えていないのです……。私は先日……」

ミルファルナの話はこうである。

彼女はこのネクロイア地方を治める領主、ルーデン伯の元へ向かっていた。

ネクロイアはキドニア王国の東端に位置し、隣国との国境に面している。大きな街道もあるため、この地方は交通の要衝でもあった。

戦乱の気運が高まるにつれ、戦略上国境の警備は重要なものとなる。

ミルファルナは父であるレグリオス王の命で、その警備状況の視察に向かったのだ。

そこで、トラブルが発生した。

「ネクロイアの街近くで乗っていた馬車が急に止まり、何かと御者に聞くと折れた木が横たわっているとかで、それを取り除くまで少し待つて欲しいと言われました」

「それは時間的に何時頃？」

「夕方、十八時の三の頃でした。ルーデン伯の屋敷で夕食を取る予

定でしたから間違いありません」

この世界の一日の時間は、地球とほぼ同じ約二十四時間である。時間の数え方は二十四時間制で、十二時間制は無い。分は大雑把に一時間を六等分して、一〇六で表わす。

ミルファルナが襲撃を受けた時間を例にすると、『十八時の三の頃』は地球でいう『午後六時の二十分〇三十分の間』、という事になる。

一年が十二ヶ月に別れているのも地球と同じだが、それぞれの月はぴったり三十日で構成されていて、閏年などは無い。

「ふむふむ、それで？」

「待っていると外が急に騒がしくなり、誰かが馬車の扉を急に開けて……そう、水のような物を私の顔にかけたような気がします。すると急に眠くなって……」

「気が付いたら祭壇の上だった、と」

「はい……。皆、無事だと良いのですが……」

竜矢の言葉に力無く頷くミルファルナ。

共に行動していた護衛の兵達を心配しているのだろう。

そんな彼女に、竜矢は再び質問をした。

「……護衛の数はどれ位で来たの？」

「近衛騎士団、魔術兵団の精鋭をそれぞれ五人と、侍女を三人ほど。後は御者が一人です」

「単純に戦力としてみたら十人の精鋭兵士団って感じか。シェリカさん、これって戦力としてどう？ 強い？」

「ムチャクチャ強いですよ。近衛騎士団はこの国最強の精鋭部隊ですし、魔術兵団は騎士団と双璧を成す存在です。リュウヤさんが倒した魔獣、あれはブラックビーストっていうんですけど、あれを十匹ぐらいなら余裕で蹴散らすでしょうね」

「手練れの集団が見事に連携をとれば、その力は何倍も強いものとなるからのう。だが、一国の姫の警護にしては随分少ないように思うが？」

今度はスーニアが駆けながら疑問を口にした。

「そういった声もありましたが、隣国のパルフト王国を刺激しないようにとの配慮から、ネクロイアの民には私が行く事は明かさず、少数精鋭で行く事になったんです」

「お忍びってやつか」

「ええ、軍事関係の大臣からそうした方が良いという進言があります……。パルフトとは友好を結んでいます。最近傭兵や大量の武器や防具を用意しているとの情報があったのです」

「この国への侵攻準備の可能性があるって事？」

「……はい、私としては信じたくないのですが……。パルフトのクロフォード王は聡明で、卑怯な事を何より嫌い、かつては『騎士の中の騎士』とまで謳われた方です。我が父の親友でもあります。王女であるラディナ姫は本当にお優しい方で、年下の私を妹のように可愛がって下さって……」

顔を曇らせる彼女に、シェリカが慰めるように声をかけた。

「ミルフアルナ様、それはあくまで防衛の為では？ パルフストもキドニア同様、北のソルガルドと南のジュマルに挟まれていて、いつ争いに巻き込まれるか分からないのですし」

この大陸の二大大国、それが北の大国ソルガルド帝国と、南の大国ジュマル王国だ。

かつて、この大陸のすべてを支配した一つの巨大帝国があったという。

その名をソルガ帝国。

長らく権勢を誇ったが徐々に官僚が腐っていき、民は圧政を敷かれついにはその怒りが爆発し、大陸全土を巻き込んだ大戦が勃発した。

その結果、帝国はいくつかの国に分裂し、現在のような状態になったのだという。

これが約六百年ほど前の事だとされている。

北のソルガルド帝国はその正統な後継を標榜している、強大な軍事国家だ。

武力・兵力に重きを置いた軍編成をしており、“帝国の盾”と呼ばれる重装甲歩兵部隊や、“帝国の剣”と呼ばれる騎士団の強さは他の国々を圧倒している。

反面、魔術においてはあまり重要視されておらず、それらの軍団のサポートに徹した運用をされている。

南のジュマル王国はソルガ帝国に反旗を翻した反乱軍が母体となった国で、その規模はソルガルドと同等だが、軍事力では後れを取っている。

だが、ソルガとは対照的に魔術の運用に力を注いでおり、“ジュ

マル魔術軍団”という強力な魔術兵团を有している。

ジュマル王家の者は反乱軍を率いた英雄の血を引き、ソルガ帝国の支配から民衆を解放したという自負を持っている。

その為か民衆の支持も高く、国民の中には上位の魔術師がゴロゴロいるという。有事の際には彼らもその力を振るう事になるだろう。

トータルで見て、両国の力は質は違えど拮抗しており、この二百年ほどはいわゆる冷戦状態にあった。

そのパワーバランスが、近年急に乱れ始めているのだった。

「私もそう思いたいのですが……。民の命を預かる王家の者として、あらゆる可能性を想定しなければなりませんから……」

「ふう、ん……」

何かを考え込んだリュウヤは、前方に向けて目を凝らした。

領主の屋敷がある街がそろそろ見えてきている。

篝火が焚かれているのか、屋敷はぼんやりと夜の闇に浮かび上がっていた。

6話：キドニア王国の姫君（後書き）

めっきり冷え込んで、キーボードを打つ指がかじかみます。
綿入れハンテンが手放せませんw

7話：疑念（前書き）

今回、ちょっと短いです。

7話：疑念

「……スーニア、ちょっと止まって」
「む？　どうかしたか？」

竜矢が不意に、疾走するスーニアをストップさせた。
スーニアは細い木の上で、器用にバランスを取って立ち止まる。

「不可視結界を張っていこう」
「……何か気になるのか？」
「ちよつとな、取り越し苦労だと思うけど」
「ふむ……」

会話が途切れると、スーニアの体が白く輝き始めると、その光はボールのようになって一行を包み込んでしまった。表面がフニャフニャ揺れている様は、まるでシャボン玉である。

「よし、じゃあ悟られように行こう」
「分かった」
「あの、リュウヤ様……？」

「不可視結界って、外から見えなくなる結界ですよ？　何で……？」
「ま、念の為にさ。あと、できれば『様』なんて付けなくていいよ、背中とか尻とか痒くなっちゃう」

ミルファルナとシェリカの訝しげな声に、わざと軽く答える竜矢。頭の上にハテナマークを浮かばせて顔を見合わせる二人だった。

ネクロイアの町は街道沿いにある宿場町だ。王都には負けるものの、交通の要衝に相応しい大きな繁栄ぶりを見せている。

もつとも、今は完全に夜中である為、街中の明かりは殆ど落とされていった。

ポツリポツリと遅くまで営業している酒場の明かりもあったが、それもそろそろ終わりのようだ。

店じまいをする酒場や宿屋の屋根の上を、スーニアは音も立てずに走っていく。

ルーデン伯の屋敷は街の東端近くにあった。

さすがに領主の屋敷というだけあって、かなり大きい。並の宿屋の五倍はありそうだ。

「スーニア、何か感じるか？」

「……侵入者感知用の結界が張ってあるようじゃが、攻撃性は無いようじゃ」

「そうか。……にしても」

「随分と静かですね……」

少し離れた場所で声を潜めて話す一行の声は、疑問に彩られていた。

静か過ぎる。

王家の姫が行方不明になったというのに、何の騒ぎにもなっていない様なのだ。

行方不明の報がもたらされたのならば、捜索隊が組織されるのが普通だろう。

しかし、領主の屋敷は何事もなかったように静寂に包まれていた。動いているのは、所々に松明を焚いて見張りに付いている数人の兵士だけである。

「何の連絡も届いていないのでしょうか……？」

ミルフアルナの不安気な声に、竜矢が答える。

「今日、此処に姫様が来るのは当然連絡済みだったんでしょ？ それなら到着していない時点で騒ぎになってるはずだよ」

「そうですよね……。これは一体どういう事なのでしょう？」

「裏口に回ってみようかの」

スーニアがそつと場を離れた。

不可視の結界は姿は消せるが、音までは消せないため静かに歩いている。スーニアは近くの木の上に飛び乗ると、全員で屋敷の裏庭を観察する。

屋敷の裏手にも見張りはいいたが、あくびを噛み殺しているという実に平和な光景であった。ただ、裏庭の倉庫のような場所に気になる物が置いてあった。

「あの布をかけられてるデカイの、何だと思う？」

竜矢の言葉に、シェリカ達が僅かに開いている倉庫の扉から中を見る。松明の光で見えるそれは、布の下の方から車輪がはみ出して見えている事から、大型の馬車のようなようだった。

その車輪には、黒地に金色の複雑な模様が描かれている。
只の荷馬車などには思えない。

「あれは……私の乗ってきた馬車です！」

「シッ、声大きい」

「す、すみません……」

思わず声を上げたミルファルナを竜矢が注意する。幸い見張りに
は気付かれなかったようだ。

「乗ってきた馬車に間違いはない？」

「間違いありません、あの馬車は私専用で作られた物ですから」

「そっか……。こりゃあ、悪い予感が当たっちゃったかな？」

「わ、悪い予感って……、何なんですか、リュウヤさん」

二人の不安な顔を見て、竜矢は言うのを少し躊躇ったが決意した
ように口を開いた。

「今回の『姫様誘拐・生け贄未遂事件』、ここのルーデン伯が絡ん
でる可能性があるって事さ」

二人が息を飲み、同時に生唾を飲み込んだ。

「姫様の話を聞いて何か引っ掛かったんだよ、犯人達の襲撃時の手
際が良すぎるって。鍛え上げた護衛達があっさり無力化されている
し、お忍びで来たはずの姫様一行を迷い無く襲ってる。一行の行動
予定を把握していたとしか思えない。都合良く出くわして突発的に
襲ったなんて、まず有り得ないだろ？」

「た、確かに……」

竜矢の考えに二人とも納得して頷いた。

竜矢はミルファルナの話聞いた時、地球でプレイしたあるRPGの中で似たような展開があったのを思い出したのだ。

ちなみに、そのゲームでは主人公パーティを狙う敵勢力の罠だった。

（まさかゲーム上の経験が、異世界で役に立つことになるとはなあ）

何が何処で役立つのか分からんもんだ、と思う竜矢だった。

「つつても、まだ確実とは言えないから、俺がこれから忍び込んでちよいと調べてくるよ。もしかしたら護衛の兵士達も捕まってるかも知れないし」

「リュウヤ様……！」

ミルファルナが感動に潤んだ瞳を竜矢に向ける。

彼はミルファルナを助けはしたが、何も此処までする理由は無いのだ。その事は彼女自身よく分かっている。

善意で身の危険を顧みず自分の為に動こうとしてくれる竜矢を、ミルファルナは心から信頼しつつあった。

「ま、まあ乗りかかった船だ、姫様の安全が確保できるまでは付き合うよ。どれだけ時間が掛かるか分からんから、三人ともシェリカさんの泊まってる宿で待っててくれるかな」

ミルファルナのそんな瞳に見つめられ、気恥ずかしさから星空を見上げて竜矢は言う。

シェリカの泊まっている宿はここに来る時に確認済みである。幸いにも、まだ営業中であつた。

「で、でも、一人でなんて危険ですよ。いくらリュウヤさんが小さいからって……」

「二人とも案ずるな、リュウヤの強さは既に知っておろう」

「それは、そうですけど……。第一、結界をどうやって通過するんですか？」

「大丈夫だよ、俺の大きさなら小さな動物が迷い込んだ程度にしか思われないか、感知すらされないよ。それに便利な道具がある」

竜矢はそう言うと言つとフワツと浮かび上がり、スーニアが下げているバッグへと飛ぶと、中からハンカチの様な白い布を取り出した。

ハンカチとはいえ、竜矢にとっては特大のマントとっていい。それで体を包み込むと、何と竜矢の体が宙に溶け込むように消えていくではないか。

「不可視の魔術が掛かったハンカチだ。何の為にこんなもん作ったのかは知らんけどね」

確かにこれなら見つかる事はないだろう。

しかし、ハンカチとはいえ魔術が掛かっているこれは、かなりの高級品だ。

掛ける魔法にもよるが、どんな物でもちょっと魔術効果を付与するだけで値段は数十倍に跳ね上がる。

武器や防具に掛けるとなると、百倍以上になる事だってあるのだ。

亜空間バッグといい、このハンカチといい、何処でこんな高価な貴重品を手に入れたのだろうか、シェリカは竜矢のいた空間をじ

つと見つめるのだった。

「じゃ、行ってくる。大人しく宿屋で待っててくれよ」

竜矢の声が聞こえると、何かがスーニアの結界から出て行くのが感じられた。

直後に屋敷を覆った結界の一部に、ほんの一瞬、小さな穴が開いた。

コンマ数秒の事で、見張りにも、シェリカ、ミルファルナも気付かなかった。気付いたのはスーニアだけである。

「行ったか。では、わしらは宿に行くぞ」

「ほ、本当にリュウヤさんだけで大丈夫なんですか？ 此処で待っていた方が……」

「リュウヤがああ言ったのじゃ、心配はいらぬ。それに、いつまでも姫をこの格好でいさせる訳にもいくまい」

「はい……」

金色の神獣が軽やかに空に舞った。

二人は屋敷を振り返り、竜矢の無事を祈るのだった。

8話：領主の屋敷を探索せよ

（さあーで、まずはこの馬車を調べてみましょうかね）

敷地内に潜入した竜矢は、まずミルファルナ専用馬車を調べる事にした。

布の隙間から音を立てないように入り込むと、豪華な装飾が施された馬車が暗闇にぼんやりと見えてくる。外の篝火が無かったら見えなかっただろう。

豪華といっても、装飾は華美過ぎず、また足りないとも感じられない。バランスの取れた、芸術品といってもいい位の美しさを持つ馬車だった。

その装飾が所々傷付いて欠けており、何かが飛び散ってこびり付いていた。

（……血、か……）

間違いなく、血の跡だった。強い鉄の臭気がそれを裏付けている。竜矢は口元を押さえつつ、馬車の中を覗いてみた。中に誰かが倒れている。

竜矢はそっと扉を小さく開け、中に滑り込む。

どうやら倒れているのは御者の様だ。

残念ながら、既に息をしていなかった。

竜矢は手を合わせて黙祷を捧げると、思いついて御者の懐を探ってみる。

内ポケットの中に、折りたたまれた小さな紙と小瓶が入っていた。

小瓶には青い液体が半分ほど入っている。竜矢は紙を広げると、そこに書かれた文字を布越しの弱い光の中で何とか読み取った。

それにはこの街周辺の簡単な地図が描かれていて、道の途中に×印が付けられていた。

（もしかして、この印が姫様一行の襲撃ポイントか？　て事は、この人は内通者？　じゃあ何で殺されて……）

竜矢の頭に浮かんだのは二つの可能性。

一つは内通がばれて、護衛の騎士達に殺された可能性。

もう一つは内通がばれない様にする為、口封じとして殺された可能性だ。

（此处で考えててもしょうがねえけど、内通者だとしたら自業自得か）

竜矢は紙と小瓶を内ポケットに戻すと、外に出て静かに扉を閉める。

次に探す場所は地下と決めていた。

（生存者が捕まってると思えば、地下牢が定番だよな）

竜矢は一旦外に出て屋敷の周りを飛び回り、中に入れる場所を探した。

三階の小さな窓が開いているのを見つけて中に入ろうとした時、入り口の大扉が開く音がした。

見ていると、そこから一人の人物が屋敷を出て行く所だった。

黒いローブを頭からすっぽりと被っているので、顔も性別も分からない。ただ、体つきから竜矢には男のように思えた。その首に小さなコインのような、金色のペンダントが下がっている。

この屋敷の執事のような人物と話しているようだ。

そのうち兵士が連れてきた馬に飛び乗って、屋敷から走り去ってしまった。

気にはなったが、今は屋敷を調べるのが重要と、竜矢は入り口が閉まる寸前に屋敷の中へと潜入する。

目が点になった。

(……こりゃ驚いたね、中にはこんなに人がいたのか)

屋敷の中は人でごった返していた。竜矢は人の流れに乗ってとりあえず一階まで辿り着いたが、すべての階で大騒ぎしていた。大半が兵士のようにであり、丸めた地図やら、大量の書類やら、夜食用らしい簡単な食事やらを持った兵士達が通路を行き交っている。

明かりや喧噪が外に漏れなかったのは、屋敷自体に音と光を遮断する魔術が掛けられていたからのようだ。壁や天井にそれらしき小さな魔術式が描かれている。

竜矢はこの世界に召還された時の一件で、それを知識として知っていた。

(……大した念の入れ様だな。さて、地下への入り口は、と……あそこか?)

喧噪から離れた、狭い廊下の奥に地下へ向かう階段を発見した。とにかく、竜矢は降りてみる事にした。

(どうやら当たりを引いたか……)

暗く、湿気を帯びた空気で満ちた階段を下りていくと、二人の兵士が見張りに立っている扉が現れた。扉の小さな覗き窓から中に入ると、暗い地下に鉄格子がズラリと並んでいる。

その中にミルファルナの護衛と思われる者たちが、手足に枷をはめられて一人ずつ閉じ込められていた。一通り見て回ってみると、怪我をしている者もいれば、ほぼ無傷な者もいる。

一室だけ女性が三人入っている牢があったが、彼女たちがミルファルナ付きの侍女だろう。竜矢は一人の男に近付き、静かに声を掛けた。

「あゝ……もしもし？ 聞こえますか？」

「……？ 誰だ……？ 何処にいる……？」

「静かにしてください、俺は、ええと……ミルファルナ姫の使いみたいなんですよ」

「っ！？」

途端に顔を上げて声を上げようとした騎士の耳元で、先手を打って注意する。

「シッ、静かに。見張りにバレちまいます」

「っ、う……わ、分かった。姫様は御無事なのか？」

「大丈夫、ケガ一つしてません。今はこの町にある宿屋で休んでるはずです」

「そ、そうか……！ 良かった、本当に良かった……！」

騎士は溜め息と共に、心底安心した声を出す。

暗い為に顔は分からないが、声からすると中年の男のようだ。もしかすると隊長クラスの人物かも知れない。

そう思った竜矢はひとまず名乗る事にした。

「俺は竜矢つていいいます。たまたまミルファルナ姫を助ける事になった旅の者です。あなたは？」

「リュウヤ殿か。私は姫の護衛隊隊長、近衛騎士団のボアズ・クラツザ・ルアックスだ。ボアズと呼んでくれて結構。姫を助けてくれたそうだな、心から感謝する」

「ではボアズさん、一体何があったのか詳しく教えて下さい。ミルファルナ姫に大体の事は聞きましたが、すぐに眠らされてしまったせいで詳細が分からないんです。姫も皆さんの事を心配しています」

「……君を信じて良いのかな？」

「信じてもらえるとありがたいです」

「うむ……分かった」

ボアズの説明によると、この街の近くで倒木が道を塞いでいた為、撤去作業を行おうとした時に黒いローブを被った集団が現れ、襲いかかってきたという。

不意を突かれたとはいえ精鋭を集めた護衛隊である。即座に対応し、ミルファルナの乗った馬車の周りで応戦したが、全員急激な眠気に襲われた。

そして、眠気に耐えきれず意識を失ってしまったのだそうだ。

「そして気が付いたら此処に閉じ込められていた……。情けない話だ」

「眠気というと、やはり魔術で？」

「そうだと思うが、奇妙なのはローブの連中が魔術を使った様子になかった事だ。だが、あの眠気はどう考えても魔術によるものかしら思えん」

「その時、馬車の御者さんは何をしました？」

「御者？ いや、彼は非戦闘員だからな、御者台で震えていたと思っただが」

どうやら竜矢の推測が当たったようだ。

種類にもよるが、魔術の行使には呪文の詠唱や魔力による魔術式の構築を必要とする。

例外は魔術の込められた魔道具を使う事だが、強力な魔術効果を付与する為には、丈夫な素材で作られた物でなければならない。過剰な魔力に物体が耐えきれないからだ。

他にも付与する魔術の効果範囲や持続時間などで左右されるが、蒸留水などは使用範囲が広く薬としてよく使われる素材で、魔術を掛けた水は『魔術水』と呼ばれている。

その際、魔力の影響で水に様々な色が付く。

治癒の魔術の場合は白く。

毒消しなどは紫に。

そして、眠りの魔術の場合は青色に染まるのだ。

「……殺されて、馬車の中に転がされてましたよ」

「なに……？」

「失礼とは思いましたが、彼の懐を探らせてもらいました。すると、青い液体の入った小瓶と、この街周辺の簡単な地図が入っていまし

た。その地図に描かれた道には、街の手前で×印が入っていました」
此処までの説明で、ボアズは竜矢が言いたい事が分かったようだった。

目を見開き、信じられないといった顔で頭を振る。

「まさか……、彼が内通者だったと……？」

「決めつけるのは早計ですが、可能性は高いと思います。あなたたちが戦ってる隙に、背後から眠りの魔術が掛かった小瓶の液体を振り掛ければいいんですから。殺されたのは口封じではないかと」

「……そういえば、眠る直前に何か水のような物が顔や首にかかった様な気がする……。あの男、ミルファルナ姫専用馬車の、専属御者に選ばれる恩を受けておきながら……！」

齒軋りの音が暗闇に響いていく。

力を込めているのか、手枷からミシミシと軋む音が聞こえてくる。さすがに鍛え上げられた騎士だ。

「それで、この事件の黒幕はルーデン伯と思われませんか？」

「ああ。奴め、わざわざここに来て我々を散々愚弄していきおった。どうやらパルフストと密約を交わしたらしい、キドニアを落とす為の布石だと言っておったよ。だが私にはまだ信じられん、あのクロフォード王が……」

「正直、俺もそれには色々引っかかる所があります。ま、その辺の事は後にしましょう、何とか脱出しないと」

「それはそうだが、どうやって？」

「少し待って下さい、屋敷の中をもうちょっと調べてみます」

竜矢はそう言うと、ひとまず牢を出す事にした。

（んゝ、牢から出すのは簡単だけど、それだけじゃ片手落ちになりそうだなー）

飛びながら、どうすつかなゝと悩む。

とにかく情報が不足している。そう考えた竜矢は、情報が集中するであろう領主の部屋を探す事にした。

9話：陰謀（前書き）

オーパーツとか好きですか？
w 私は大好きですw

9 話：陰謀

（ここが領主の部屋みたいだな）

一際立派で無駄に大きい扉の前に浮かびながら、竜矢は心の中で呟いた。

魔術を使って中に入ろうかと考えていた所で、一人の兵士がやってきて扉をノックした。

「ルーデン様！ 作戦の進行具合について、ご報告に上がりました！」

「よし、入れ」

兵士はドアを開けて部屋の中へと入っていった。

ラッキーと思いながら、竜矢もすかさず部屋へと潜り込む。

「失礼いたします！」

「うむ、準備はどうだ？」

部屋の中は落ち着いた雰囲気だ。まとめられた、執務室のようだ。

その一番奥、大きな窓の前に置かれている重厚な机に向かって書類を読んでいた男が顔を上げて言った。

年齢は四十歳くらいの痩せた男で、神経質そうな目が射貫くように兵士を見つめている。

例えるなら鷹や鷲のような鋭い印象の顔つきだが、その態度は自分が上位にある事を押しつけるような、傲慢なものだった。

「はっ！ 現在、全体の進行率は八割といった所です。少々遅れている部署もありますが……」

「なに？ 馬鹿者！！ 遅れを出すということ自体たるんでおる証拠だ！ 私がいよいよ世に打って出るというこの時に！」

「も、申し訳ありません！ 該当部署の人員には、今夜は不休で進行に当たられます。朝までには遅れは取り戻せるかと」

「急がせろ。間に合わなければ、相応の罰を与えると伝えておけ」

「は、はっ！ それから、武器に関しての……」

（こいつがルーデン伯か……。絵に描いたようなエリート意識の塊って感じだね、やだやだ）

二人のやり取りでウンザリした竜矢は、部屋の中を見て回る。

飾り用の剣が壁に掛かっていたり、分厚い本が書棚に並んでいた、これと言って変わった物は置いていない。

「報告は以上であります！」

「うむ、下がれ」

「はっ！ 失礼いたしました！」

兵士が部屋を出てその足音が遠ざかると、ルーデンは不愉快そうに言った。

「まったく、無能な奴ばかりだ。まあ、私のように高貴な血筋に生まれなかったのだから致し方ない……。哀れなものだな」

（うーわー、どんだけ）

更にウンザリした竜矢だったが、ルーデンの行動に眉をひそめた。

彼は書棚の本を二冊取り出し、それを入れ替えると右手につけていた指輪をかざして何かの呪文を唱え始めた。

（これ……解錠の呪文じゃねーか）

指輪が緑の光を放つと、書棚がゆっくりと横にスライドしていく。そこに扉があった。

ルーデンはその扉を開けると中へと入っていく。竜矢も一緒に入り込んだ。

真っ暗な空間でルーデンがまた呪文を唱えると、あちこちに備え付けられたロウソクに火がついていく。

ここは四畳半程度の広さの隠し部屋らしい。ロウソクの弱々しい光に照らされた部屋には、不気味な神像と祭壇が置かれていた。

（これは……！ ルディヴァールの神像！？）

地下神殿で見た邪神、ルディヴァールの神像がそこにあった。大きさは幼児ほどの小さな物だが、禍々しさは引けをとらない。

「偉大なる闇の創造主、永遠の暗黒を司るルディヴァールよ。ついに私がこの国を手に入れる時が来ました。どうか、どうか、あなた様のご加護を……！」

（こいつも邪神崇拝者だったのか……！）

これでルーデンと、姫を生け贄にしようとした邪教徒との繋がりが見えてきた。

そして、竜矢の頭に一つのアイデアが閃いた。

上手くいけば、この事件の全貌を明かす事が出来るかも知れない。

竜矢は早速、それを実行する事にした。

（声を変える魔術を使って、と……）

竜矢は変声の魔術を自分に使うと、神像の頭の上に座りこんだ。

「私の欲望が成就した暁には、百人の処女を生け贄に捧げる事をお約束いたしましょう……！　ですから、どうか……」

『その言葉に、嘘偽りはないな？』

「ひえっ！？」

途轍もなく低い声が神像から聞こえ、ルーデンは驚いて後ろに倒れそうになった。

一瞬で蒼白となった彼は、全身を細かく振るわせる。

そんな彼に、もう一度同じ言葉が投げられた。

『その言葉に、嘘偽りはないな？』

「お、おおお……！　ル、ルディヴァール様！　ルディヴァール様なのです！　我が前に永遠の闇の中から現れて下さったのですね！！！」

『その通り。我が名はルディヴァール、永遠の暗黒を司る神なり』

「おお……！！　おおお……っ！！！」

ルーデンは歓喜のあまり、顔をグシャグシャにして泣き始めた。眺めていた竜矢はドン引きである。

（鼻水まで垂らしてるよ……。ここまで効果があるとはなあ）

勿論、邪神の声は竜矢の声である。

変声の魔術によって変化したドスの効いた低く重々しい声は、部屋
の雰囲気との相乗効果で予想以上の効果を出していた。

『我が忠実なる下僕、ルーデンよ。汝、何を望む？』

「ははあっ！ わ、私の望みはこの国の支配にございます！ しかし、それで終るつもりはありません！ 力を蓄え、いずれはこの大陸の覇者となるのが最終的な目標でございます！」

『ほう、大陸の覇者とは大きくでたな。だが、我が下僕として大きな欲望を持つ事は誉めてやろう』

「あ、ありがとうございますっ！」

『しかし、お前は我が加護が無くともその欲望を叶えようとした様子。どうやって叶えるつもりだったのだ？ この国の姫を我が生け贄に捧げる手助けをしたようだが、いくら高貴な血を引く者とはいえ、よもや一人で十分だなどと思っておったのか？』

「め、滅相もございません！ ミルファルナ姫は言わば手付け金のようなものでございます。お気にすることなく、存分に弄び下さい！」

（こ、このクズ野郎……！ 待て、落ち着け、俺）

思わずルーデンの顔面に蹴りを入れたくなった竜矢だったが、ひとまず堪えて話を進める。

『……では言うてみよ、お前の欲望を叶える方法を。それが真に優れたものであるなら、加護を与えても良い』

「はっはい！！ 私の計画はこうでございます……」

ルーデンの話によると……。

まず、隣国のパルフストとこのキドニアとの間に戦争を引き起す。

しかし、元々良好だった両国の関係に亀裂を入れるのは容易ではない。そこでミルファルナ姫を利用する事にした。

既に裏で手を結んでいた軍事関係の大臣に進言させ、姫に国境沿いのこの街を視察させる事と、護衛を少数にする事に成功した。

次に、ミルファルナ姫専用馬車の御者の家族をさらい、襲撃時に姫の一行を眠らせるように御者を脅迫。

そして、自分が帰依しているルディヴァールの教団に一行を襲わせ、姫は生け贄として教団に渡し、護衛達と馬車は密かにこの屋敷に運び込んだのだ。

あとは、王都にこの襲撃はパルフストの仕業だという虚偽の連絡をし、両国の関係を一気に悪化させるのだ。

『……ふむ。だが、それだけでは戦争に入る理由には乏しかろう』

「そこは抜きありません。キドニアの有力な貴族のうち、既に半数は私と手を組んでおります。そして、パルフストにも私と手を組んでいる者が居りまして……」

『ほう？』

パルフストの協力者とはダルゼット公という人物で、彼もルーデンと同じ教団に帰依している邪神崇拝者である。今日もその使者と情報のやり取りをしたとの事だ。

竜矢は屋敷への進入時に見た、ローブを着た人物の事を思い出した。

（多分あいつの事だな……。しかし、こりゃ予想以上に大事になってきたぞ）

ルーデンの話は続く。

ダルゼットは、パルフストのラディナ姫をミルファルナ同様にさう事に成功しており、ある場所に監禁しているらしい。ダルゼットの方では、ラディナがキドニアの手の者によってさらわれたと王都に報告する手はずになっている。

これによって両国の姫君がお互いの国の者に襲撃され、行方不明になった事になる。

そうして王都の軍が動けばしめたもの。両者の軍が対峙した時に、先走った一部の兵からの攻撃が『互いに』行われ、そのままなし崩しの戦闘に突入させる。

当然、先走った一部の兵とはルーデンとダルゼットの兵である。

あとは頃合いを見て、予めそれぞれの王都に向かわせていた伏兵に手薄になった王都を急襲させる。どんなに堅牢な城壁であろうと、手を組んだ貴族達の兵に内側から開けさせれば何の問題も無い。

王族を抹殺して王都を制圧した連絡が入り次第、ルーデンとダルゼットの兵は互いの王都の軍を側面から攻撃する。二人の兵達は本気で戦わせないように一芝居打たせる為、体力の温存も出来ていはずだ。

万一不利になるようなら、ルーデンとダルゼットは隠し持っている『切り札』を使うという。

『切り札だ？』

「はい、私が若い頃にある古代遺跡を探索した際に見つけた、ロス

トパーツです。長らく使い方が分からなかったのですが、最近、ようやく判明しまして……」

（ロストパーツだって！？）

ロストパーツ。

それは、失われた超古代文明の遺産である。

ロストパーツの研究者達は、作ったのは少なくとも一万年以上の昔に栄え、突如滅びた謎の文明だというのが定説になっている。

かつての超大国、ソルガルド帝国の建国以前にもその存在は認知されていたが、はっきりした事は今もって分かっていない。

その当時に発見されて使われたロストパーツは、どれも強大な力を持った物ばかりだったと古文書に記されている。

魔力を増幅し魔術の効果を数百倍に引き上げる物や、全身を金属で作られた巨大な人造の魔獣、一瞬で十万の軍を発狂させた笛などが知られている。

ソルガルド帝国の成立にもこれらロストパーツが使われたという。だからこそ大陸の統一という覇業を成し遂げる事が出来たのだと。

しかし、威力が大きい反面、使う側も多大なリスクを背負う。

増幅した魔力が暴走して敵味方合わせて百万もの大軍が一瞬で消滅したり、金属の魔獣は制御が効かなくなって突然大地に潜り始め、そこから灼熱の地下水が噴出して大勢の人間が火傷を負うか溺れて死んだ。

笛などはもっと酷く、使い手が狂ってしまったて軍を離脱。放浪しながら無差別に町や村の住人を狂わせ続けた。この使い手が死ぬまでに犠牲となった者の数は、二〜三国の人口に匹敵するという。

竜矢も知識として知ってはいるが、まだ見た事がない物だった。

（厄介なもんを見つけやがって……！）

竜矢は齒軋りをしながらルーデンを睨む。

そんな事は知らず、ルーデンの説明は続く。

どうやらダルゼットの方も、ルーデンとは違うロストパーツを手に入れているらしい。この事は自分たち二人しか知らない最重要機密だという。

危うくなくても、二人のロストパーツを使えば王都の軍を壊滅させるなど雑作もないこと。制圧した王都に凱旋し、自分たちが国の新たな支配者となった事を宣言する。

その後、ルーデンとダルゼットは改めて雌雄を決する戦いを始めるつもりだという。

これが二人の立てた計画である。

（要するに、二国同時のクーデターって訳かよ……。こりゃ、ミルフアルナ姫を助けただけじゃ収まらねえな）

口の端から泡を飛ばして計画を熱く語るルーデンを冷やかに見つめ、竜矢はこれからの行動を考えて言った。

『では、ルーデンよ、ダルゼットの居場所を教えるがよい』

9 話：陰謀（後書き）

謎の古代文明とかも好きです。最近の研究では色々と判明してロマ
ンが薄れちゃってますけど。

10話：パルファストの双剣姫（前書き）

オランウータンに失礼だったかも知れない・・・。

10話：パルフストの双剣姫

「ラディナ姫、ご機嫌はいかがですか？」

「……良いわけがなろう、ダルゼット」

パルフスト王国の有力貴族であり、邪神崇拝者でもあるダルゼット公がラディナを閉じ込めている部屋を訪れてベッドに腰掛けていた彼女に声をかけた。

ここはダルゼットの屋敷にある、最も高い尖塔の頂点部に作られた部屋だ。

ただし、窓には鉄格子がはめ込まれており、扉には通常の鍵の他、魔術による三重のロックがかけられている独房でもある。

その身を包んだ黄色を基調とした豪華なドレスや、煌びやかな装飾を施された室内とは裏腹に、ラディナの顔は暗く沈んでいた。

ラディナは今年十七歳になるパルフスト王国の第一王女で、男勝りの姫として有名だ。礼儀作法などの勉強よりも軍学や剣術を好み、剣は二刀流を得意としている。その腕前は国内でもトップクラスの腕前を誇る。

加えて王家に代々受け継がれた強い魔力を持ち、その力はパルフスト王家の歴史でも一、二を争うと言われるほどだ。

母親譲りの美貌は見る者を例外なく陶醉させ、その金髪は太陽の祝福を受けたとさえ言われるほど美しい。

もっとも、元は背中まで伸ばしていたその髪は、剣を振るうのに邪魔だとぼっさり切り落としてしまい、遠目には男と思われるよう

なボーイッシュなショートカットにしているが。

通称、『パルフストの双剣姫^{そうけんき}』。

そんな強者と呼べる彼女が、どうしてこんな所で囚われの身とな
っているのか？

五日ほど前の事である。

眠る前の湯浴みを済ませ、さあ寝ようとした所で部屋の扉をノッ
クされた。

『誰だ？』

『夜分遅くに申し訳ありません、侍女のリーラでございます……』

『リーラ？ どうした、何かあったのか？』

『その……姫様にお話ししたい事がございまして……』

誰かと問えば、お付きの侍女の声がした。

一国の王女の部屋を夜中に侍女が訪ねてくるというのは、あまり
考えられない事だ。あまり身分の上下を気にしない、さっぱりした
性格の彼女でも首をひねった。

とはいえ、普段から二人だけの時は碎けた会話をする仲であり、
ラディナは彼女を気兼ねのない友人とさえ思っている。

それ故に深く考えずに部屋に入る事を許可し、魔術によるロック
を外したのだが、その途端に覆面をした数人の男達が部屋になだれ
込んできたのだ。

だが、ラディナは剣術だけでなく格闘術も学んでおり、徒手での
戦いも得意としている。即座に二人ほど倒したが、一人の男の声が
響いた。

『動くな！ 動くところの娘を殺す！』

『っ！ リーラ……ッ！』

男の一人が侍女の首筋に短剣を当てていた。既に少し切っていて、細い血の筋が流れている。それを見て動きが一瞬止まった隙を突かれ、ラディナは鳩尾に強烈な一撃を受けてしまった。

『き、貴様……ら……！』

遠のく意識の中で、リーラが自分に手を伸ばして何かを叫んでいるのが見えたが、彼女はそのまま気を失ってしまった。

次に目を覚ました時には、この部屋で監禁状態になっていたのだった。

意識を失っていた間に辱めを受けていなかったようで、それについて安心したのも束の間、首に何かが嵌められているのが分かった。鏡台で自分を見ると、首に複雑な紋様が刻まれた古めかしい首輪が付けられている。

魔術に関しても並みの魔術師以上に詳しい彼女にも見た事のない物だったが、その効果はすぐに分かった。

魔術が使えなくなっていたのだ。

どんなに頑張っても、王家随一と呼ばれた魔術が使えず愕然としていた所でダルゼットが現れてこの事件の黒幕とその意図を知った。ダルゼットはパルフスト王家を滅ぼし、国の乗っ取り計画を企てているのだと。

魔術無しでもダルゼットを打ちのめそうとした彼女だったが、どういう訳か身体に触れる事が出来ない。

ならばと、開け放たれていた扉から脱出しようとする身体が金

縛りにあつたように硬直し、倒れてしまうのだ。

これは全て首に嵌められていた首輪の力によるものであり、ダルゼットが手に入れたロストパーツの一つだった。付けられた人物は自分の意に関わらず、命令された事に逆らえなくなる力を持つ。

ダルゼットはこれを『強制のリング』と呼び、自分の指に嵌めた指輪が首輪への命令装置になっていると説明した。

この為にラディナはダルゼットに逆らう事は一切できなくなったうえ、首輪の力で魔術も使えなくなったのだ。

ラディナは最後の手段として自害する事も考えていたが、それも命令で禁じられた。

更にリーラも囚われていると聞き、ラディナはやむなくこの部屋で怒りの炎を燃やしながらも暗澹たる気持ちで過ごしていたのだ。

そんなラディナの気持ちなど全く気にせずに、ダルゼットは笑みを浮かべながら言った。

「姫があまり食事をとっていないと聞きましたな。いけませんぞ、あなたは大事な身体なのですから、身体を壊すような事があってはなりません」

「貴様、よくもヌケヌケと……！」

ラディナは沈んだ顔を一变させ、怒りに満ちた目をダルゼットに向けて立ち上がった。

大股でダルゼットに詰め寄り、自分よりも頭一つ分長身の顔を見上げて吠えるように言う。

「一体、いつまで私をここに閉じ込めておくつもりだ！」

「おお、恐ろしい。いけませんなあ、その様に顔を怒りで歪ませては。せっかくの美貌が台無しですぞ」

ダルゼットは怯えたように肩を竦め、両の手のひらで女を止めるように胸の前にかざして笑う。

もつとも、本気で怯えてなどいない。

彼はこうやってラディナをからかって楽しんでいるのだ。彼女が自分に対して手を出せないのをいい事に。

ダルゼットはまだ三十代半ばの年齢だが、血筋の良さと先祖代々蓄えてきた財力だけでのし上がった人物だ。

ルーデンの顔を鷲や鷹のような鋭い印象の顔つきと例えるなら、彼は地球で言うオランウータンに似ている感じた。

顔だけでなく、金に物を言わせた贅沢三昧で肥満したその身体もよく似ていた。

そんなダルゼットの人を小馬鹿にしたような笑みは、ラディナの怒りに油を注ぐだけであった。

「黙れ謀反者！！　今まで王家から受けてきた恩を忘れ仇を成そうとする痴れ者が！！　お前の企みなど、すぐに白日の下にさらされる！　いずれ王都から討伐軍がやってくるだろう、そうなればお前も終わりだ！！」

「おお、それは恐ろしい……来られれば、ですがな」
「なに？」

眉をひそめた彼女に、ダルゼットは楽しそうに言う。

「既にパルファストの有力な貴族達のうち、半分は私の同胞ですね。貴女をさらった犯人の証拠など一欠片も出てきませぬよ」

「う、嘘だ！ 戯言を言うな！！」

「嘘なものですか。貴女をさらって早五日、私の仕業だと知られたならとうに討伐軍がここに押しかけて来ているはずでしょう？」

「う……嘘だ……」

動揺を隠しきれず、ラディナの言葉から力が抜けていく。

「それに、何故深夜とはいえ王女である貴女を、警戒厳重な王宮から誰にも気付かれずにさらえたと思いますかな？ 王宮内に私の味方が多数居るからこそ出来た事です」

ニヤニヤと笑いながら、ダルゼットはラディナに近付いていく。

ラディナは嫌悪感を感じ、思わず部屋の奥へ逃げようとした。

「やれやれ、『命ず、逃げるな』」

「っ！！ 動、か……」

だが、ダルゼットが指に嵌めた強制のリングに囁くように言うと、ラディナの身体が強張って動かなくなる。

ダルゼットは脂肪で太った身体でラディナを後ろから抱きしめると、その耳元を舐めるように近づけた。

「は……放せっ……！ やめろっ……！」

「冷たいお言葉ですなあ、私はずうっと貴女に恋い焦がれていたというのに」

ダルゼットの指が、いやらしくラディナの身体をまさぐり始める。そのおぞましい感覚に、ラディナは吐き気を催すほどだった。

「私が命令すれば、貴女をどうにでも出来るのですよ？　ですが、私はそれをしない……。何故かお分かりか？　私はね、貴女の身体だけでなく、心も欲しいのですよ。パルフストの双剣姫と呼ばれる、強く、誇り高いラディナ・ジュニアル・アイギル・パルフストの全てを屈服させ、私のモノにしたいのです」

「ふざけるな……！　私は、貴様に屈したりはせんぞ……っ！」

「ふふふ、その気位の高さもまた愛おしい。そうそう、一ついい事を教えてあげましょう」

「……いい事だと……？」

「私がキドニアのルーデン伯と手を組んでいるのはお話ししましたな？　先ほど、彼にやった使いの者が戻りまして……。キドニアのミルファルナ姫をさう事に成功したとの事です」

「何だっ！？　貴様らミルまでっ！！」

妹のように大切に思っている隣国の姫の名を聞いて、ラディナの顔色が一気に青ざめた。

動かぬ身体で声を張り上げ、怒りをあらわにしている。

「許さんっ！！　ミルの身体にかすり傷一つでも付けてみろ！　全員八つ裂きにしてくれる……！！」

「そう言われましても、ミルファルナ姫に関しては私のあずかり知らぬ事ですからなあ……。それに、今頃は……」

「な、何だ……」

勿体つけたように話をじらすダルゼットに不安を増大させられていく。

まさか、と最悪の想像を嫌でも脳裏に描いてしまい、その体が小刻みに震えていく。

その震えを楽しむかのように下卑た笑いを満面に広げ、ダルゼットは言った。

「ミルフアルナ姫はさらってからすぐに、我らが帰依している教団に引き渡されたとの事。今頃はもう、ルディヴァール様への生け贄に捧げられている事でしよう」

「そ……んな……」

ラディナの身体から力が抜けた。ダルゼットの腕をずり落ちて、縫いぐるみのように床に座り込んでしまった。

「……ミル、が……ミルが……そんな……」

ダルゼットは呆然と呟くラディナの横にしゃがみ込み、再び耳元で囁くように言う。

「私は貴女を生け贄などにはしませんよ？ 申したでしょう？ 私は貴女を私のモノにしたいのです。どうしてもそれを拒むというなら、貴女の心を私のモノにする為にあの侍女を生け贄に捧げ、ルディヴァール神に祈る事にしましょう」

リーラの事を持ち出され、ラディナはハツとしたように顔を上げる。

「やっ、やめろ!!」

「……ならば、どうすれば良いのか自分で考えてみては如何ですか

な？」

「卑怯な……っ！」

ニヤニヤと人を小馬鹿にしたような笑みは崩さず、その目は冷たくラディナを追いつめていく。

本来、王家の人間が親しいとはいえ一人の人間の為にその膝を折る事など、あってはならない事だ。

小の犠牲を取り、大を生かす。そういう政治をしなければならな
いからだ。それで恨まれても、憎まれても、国と民の平和と安寧を
守っていかなければならない。それが王家の人間に課せられた責務
だ。

しかし、信賴していた自国の貴族達の半数が王家を裏切っていた
事実や、妹同然に思っていたミルフアルナの死を聞かされて、気丈
な彼女も限界に近くなっていた。

きつく握りしめていたその拳から力が抜け、ラディナは床に向け
て力無くうなだれる。

「……頼む、リーラは助けてやってくれ……」

「ほう？　して、その代償は何で支払うおつもりか？」

「……わ、私、は……」

ダルゼットには彼女の答えなど既に分かっている。彼女には自分
を差し出すしか方法が無いのだから。

それを承知の上で、敢えて彼女自身に屈服の言葉を吐かせる事で、
自分のモノにしたという達成感を味わおうとしているのだ。

何処までも下衆な男である。

だから、ここまでの話を我慢して聞いていた人物が、とうとう我

慢しきれなくなったのも無理もない事だろう。

「必殺！ フルプレートアーマー装着で爆裂キック！！」
「ぶぎゃべあっ！？」

部屋の片隅に飾ってあった、年代物の白いフルプレートアーマーが突然ダルゼットに襲いかかり、見事な跳び蹴りをその顔面にめり込ませたのだった。

11話：双剣姫と白甲冑（前書き）

時間とか距離とか詳しく計算はしておりません、深く突っ込まないで下さいw

11話：双剣姫と白甲冑

「え……?」

視界から急に消えたダルゼットに代わり、ラディナの眼前に立っていたのは雪のように白い甲冑。

さっきまで部屋の片隅にあった、飾りだった筈のフルプレートアーマーだった。

それがダルゼットを蹴り飛ばし、驚いて茫然としているラディナを通り過ぎて追撃をかけていた。

「続いてデスバレーボオオム!!」

「げべへっ!」

「更にツームストーンパイルドライバー!!」

「ごばらっ!」

肩に担ぎ上げて頭から落したり、頭を足に挟んで落下させたりと派手にダルゼットを痛めつける白甲冑。

ダルゼットにとって不幸だったのは、侵入者などいる筈がないと高をくくり、この尖塔に上る時には誰も来ないように兵士達に言いつけていた事だ。

ラディナに対し色々とするつもりで邪魔が入らないようにしていたのだが、それが裏目に出た。ダルゼットは助けが来るどころか、誰にも気付かれずにひたすら攻撃をされる羽目になったのだ。

とうとう仰向けに倒れて気を失ったダルゼットに、覆い被さるよ

うにして押さえ込んだ白甲冑はラディナに向かって叫んだ。

「レフリー！ カウント！」

「な、何？ カウント？」

「ワン、ツー、スリーと、三つ数えるんだ！」

急に声をかけられた上に意味不明の事を言われて狼狽えるラディナだが、勢いに押されて三つ数えた。疑問系で。

「ワ、ワン？ ツー？ スリー？」

「おっしゃあ！ グランプリ優勝決定ー！」

ダルゼットを片足で踏みつけながら高々と拳を突き上げ、意気揚々と勝利宣言する白甲冑。

ゴングの音が鳴り響き、何処からともなくスポットライトが浴びせられる。無数の歓声と大量の紙吹雪や紙テープが舞い、彼の勝利を祝う。

感無量になった白甲冑は、そのまま動きを止めて勝利の余韻に浸っている。

「あ……あの……」

「はっ」

ラディナの遠慮がちな声で、ようやくそんな脳内幻想から目覚めた白甲冑だった。

「し、しまった。腹が立ちすぎてついプチ切れてしまった……」

「その……大丈夫か？」

「大丈夫です、落ち着きました。だからそんな目で見ないで下さい

……」

ラディナは心配して見つめたのだが、何だか『痛い奴』として見られているような気がして白甲冑は頭を抱える。

そんな彼を見て、落ち着いてきたラディナが質問した。

「……貴公は何者だ？ パルフストの者か？ 一体、どうやってこの部屋に……」

「いや、俺の名前は竜矢って……えーと、詳しい事は後で話すとして」

そう、白甲冑の中身は竜矢だったのだ。

彼はルーデンからダルゼットの居場所を聞くと一旦屋敷を抜ける事にした。念の為に地下牢の護衛騎士達には身を守る防御結界をこっさり張っておき、全速力で移動を開始した。

この世界の地理は知識として脳にインプットされているので、何ら問題なくダルゼットの領地へと到着し、その屋敷へと忍び込んだのである。

ルーデンとダルゼットの屋敷は共に国境近くに建っているが、早馬を飛ばしても二時間はかかる距離がある。

それをものの数分で移動した竜矢の速度は、亜音速に近い。

桁外れの魔力を持つ竜矢だからこそ出来る芸当であった。

「旅をしてただけど、その途中でたまたまミルファルナ姫を助けたんだ」

「なに！？ ミ、ミルは無事なのか！？」

「大丈夫、ピンピンしてるよ」

安堵のため息をつき、ラディナの身体から力が抜けた。

「そ、そうか……ミルは無事だったか……！」

「ああ。ミルファルナ姫だけじゃなく、ラディナ姫もさらわれたって情報を得てね。急遽駆けつけたって訳なんだ。とにかく脱出を……」

「ま、待ってくれ！　まだリーラが、私の侍女が一人捉えられているんだ！」

詰め寄ったラディナを落ち着かせるように、竜矢は彼女の肩に手を置いて静かに言った。

「分かっている、見捨てたりしねーよ。ダルゼットの記憶を読んで、居場所を突き止める」

「記憶を……？　貴公、魔術師だったのか？」

「ああ、まあね」

気を失ったままのダルゼットに近寄ると、竜矢はその額に手を当てた。その接触部から赤く、淡い光が放たれる。

「……『記憶探りし隠者の手』……！」
「！？」

竜矢の言葉にラディナは驚いた。

『記憶探りし隠者の手』は、他者の記憶を探る事に特化した強力な探査魔術だ。

かつてのソルガ帝国の時代に生み出され、捕虜から情報を得る際に使われた魔術とされている。しかし、戦乱の時代が終るとその習得の難しさから使われる事はほとんど無くなり、今では魔術大国ジ

ユマルの上位魔術師でも数えるほどしか使える者は居ないという。

それを習得しているこの竜矢という人物は一体何者なのか、ジュマルで修行を積んだ凄腕の魔術師なのか。

ラディナは内心で警戒心を抱いたが、今は彼に頼るしかないと思いい直してひとまず内心を悟られないように気を付ける事にした。

「……よし、分かったよ。ここの地下牢だ」

「そうか……。ならば何とかリーラを助けて王都へ連れて行ってやってくれ。私はここから動けないのでな」

「えっ？ あ、もしかしてその首輪の？」

ラディナは『強制のリング』の事を竜矢に説明した。どうやらこれを外す事が出来るのは、使用者であるダルゼットだけらしい。

説明を聞いた竜矢が試しにダルゼットの指輪を取って命令の取り消しを命じてみたが、受け付けなかった。

「じゃあ、しょうがないなあ」

「うむ、だから貴公はリー」

「ぶっ壊そう」

竜矢はそう言うと、首輪にそつと手を触れる。

パンツと軽い音がして、首輪が粉々にはじけ飛んだ。

「ラと一緒に……え？」

「壊したよ、もう大丈夫でしょ？」

呆気にとられたラディナが首に手をやると、確かに首輪が無い。床の上には首輪の残骸が散らばっている。

ロストパーツであるこの首輪はそう簡単に壊れる事はない。通常の剣などでは傷一つ付けられない、正体不明の素材で出来ている。それをダルゼットから自慢気に聞かされていたラディナは、呆然と呟いた。

「な……ど、どうやったのだ？　これはロストパーツだぞ？　それをいとも容易く……」

「ああ、そいつが押さえる事の出来る魔力の許容量を越える魔力を一気に注ぎ込んだだけだよ。万一姫様の身体が傷付かないようにちゃんと結界張つといたから、痛くなかったでしょ？」

あっさりという竜矢に、ラディナは哑然とする。

彼女も竜矢と同じように、自身の魔力で首輪の破壊を試みた事があったのだ。

ラディナは魔術の才に長けており、その魔力は並みの魔術師数千人分に相当する。魔術の師である宮廷魔術師に太鼓判を押されたほどの力の持ち主だ。

その彼女が限界まで魔力を注ぎ込んでも、首輪はびくともしなかったというのに。

（け、桁が違う……！）

自分を上回る魔術師など、師以外で会った事が無いラディナは、警戒心の他に少々の恐怖心も抱いた。

そして、それ以上に尊敬の念を抱いたのだった。

（声からすれば私とさほど歳は変わらないようだが、この若さでこの力……！　それに、さっきの技も見た事もないものばかりだった。魔術だけではなく、恐らくは格闘術も達人クラス……。もっと知り

たくなつたぞ、この男の事を……!」

「さてと、リーラさんを助けに行こうか。不可視結界を張って行くう」

「ああ、私もそれ位の魔術ならば使える。急ごう……つと、その前に……」

「？」

ラディナは倒れたままのダルゼットの方に行くと、ベッドのシーツやカーテンでグルグル巻いて彼をす巻き状にした。念の為に縛り上げておくのだ。

それが終わると、ラディナはいきなり渾身の正拳突きをダルゼットの顔面にめり込ませた。

「ぴぎゃっ!」

竜矢には彼女の拳が顔に完全に埋もれてしまったように見えた。

……というか、実際に顔面が少し陥没しているように見える。

鼻の骨が折れる激痛で目を覚ましたが、すぐに痛みで再び気絶したダルゼットだった。

自業自得だが、悲惨である。

「ふ、少しすっきりしたわ。よし、行こう!」

「はい、行きましょう。姫様」

「……ん? どうした? 何だか口調がさっきまでと違うぞ?」

「何でもあります、ささ、参りましょう」

思わず敬語になってしまう竜矢であった。

12話：双剣姫の初体験（前書き）

お姫様って、究極の箱入り娘ですよね。
知識とか免疫とか全然無いと思うw

12話：双剣姫の初体験

竜矢とラディナはそれぞれ自分に不可視結界を張った後、尖塔の独房を抜け出した。

ちなみに、竜矢は普通に歩くと鎧がこすれて金属音が出てしまうので、微妙に宙に浮いて移動している。音を遮断する遮音結界も張る事は出来るが、会話も出来なくなるので避けた。

互いの姿は見えないが、気配で位置は掴めるのでさほど問題にはならない。

途中にあった扉は全てダルゼットが開けたままにしていたらしく、何事も無く外に出る事が出来たが、流石に尖塔最下部の扉の前には見張りの兵士が二人立っていた。

二人は小声で話しあう。

『リュウヤ殿、貴公はどうやって入ったのだ？』

『あー、それは後で話すよ、きっと驚くだろうから。こいつらは…：面倒だ、眠らせよう』

ここで自分の身体の事を話したらショックが大きいと判断した竜矢は、見張りを眠らせてしまう事にした。

竜矢は静かに扉に近付いて、兵士達がいる位置に合わせて扉に両手を密着させた。

「ふっ！」

「がっ！」 「ばっ！」

竜矢が一瞬の呼吸を吐き、その体が僅かに沈み込んだように動い

た。

その途端、二人の兵士は見えない力に弾かれたように身を飛ばされ、反対側の壁に当たって気を失ってしまったのだ。

『おっし』

『え？ い、今なにを……？』

『発勁……っても通じないか、デイルワナ国の武僧が使っている古
武術の技だよ』

『デイルワナ……だと……』

ラディナはまたも驚く事になる。

デイルワナ国とはソルガルド帝国の北東に位置する、北国の事である。

この世界で武を司る神として崇拝されているデイルワルド神の神殿があり、この宗派の総本山となっている。人間が住むには少々過酷な環境なのだが、武を追い求めるストイックな者たちが集まって自然と形成された宗教国家だ。

規模としてはかなり小さい国だが国民の殆どが伝来の武術を学んでおり、一人一人の単純な強さは半端ではない。高位の武僧ともなれば、ソルガルドの騎士団とも素手で互角に渡り合うとさえいわれている猛者揃いだ。

神殿に仕え、心身と武を磨く武僧たちはデイルワルド神の『その力は弱者救済の為に振るわれるものである』という教えに忠実に従い、戦争などには直接的には介入しない事になっている。

表面上は中立国だが、いざ他国で戦争が起こって難民などが来た場合は武力をもってこれを保護する為、大国といえども容易には手

は出せない。更に国の回りには大きな森や険しい岩山があり、天然の要害となっている。

ソルガルド帝国にしてみれば目の上のこぶに近い、厄介な国なのだ。

竜矢が使ったのはディルワナの武僧が使う技法の一つであり、地球の拳法でいう発勁に相当するものだ。

しかし、この世界では魔術という強力な力がある関係上、徒手で戦う場面はあまり無い。武術といえば、戦争で使われる剣や槍などを使った武器術がメインである。

ラディナが驚いたのは、ディルワナの武術は門外不出とされたものだからだ。徒手でも騎士と互角の力を発揮するその技は、ディルワナ国によって嚴重に管理され、その技が国外で使われた事はあまり無い。

故に、ディルワナの武術は幻とまで呼ばれる事があるほど、滅多にお目にかかれるようなものではないのである。

（上位魔術を容易く使い、格闘術はディルワナの技を使うとは……！
だが、ディルワナの武術は打突系が中心で、先ほど彼が使ったのは投げ技だったな……。まさかこの男、他にも色々マスターしているのか？）

地球のエンターメント性に満ちたプロレス技とは露知らず、竜矢への感心をますます深めるラディナであった。

そんなラディナの横を通り、竜矢は扉を開けて外に出る。ラディナも慌てて後を追った。

二人は見張りを自分たちが来た通路に放り込むと、彼らが持っていた鍵で扉を施錠した。これで暫く時間が稼げるだろう。

『これでよしと、行こうか』

『うむ』

進んでいくと、屋敷内はルーデンの屋敷と同様に兵士たちで溢れていた。国の乗っ取り計画は着々と進んでいるようだ。

やはり、音と光を遮断する小さな魔術式があちこちに描かれている。外の人間たちには静寂に包まれた屋敷にしか見えないだろう。

(……これでは身動きが取れんな……)

ラディナは心の中で舌打ちした。

兵士たちが慌ただしく動き回っている為、姿を消しているとはいえ、うっかりぶつかりでもしたら脱走がばれてしまいかねないのだ。

『どうしたものかな』

『ん……グズグズしてらんないし、一気に抜けるか』

『……どうやってだ?』

ラディナは竜矢がまた何かやってくれるのかと期待した目で見つめる。

それに気付いたかは分からないが、竜矢は彼女の側に密着するよう近付いた。

『ちょっと失礼するよ』

『リュ、リュウヤ殿?』

いきなり竜矢の腕が触れた事に、ラディナの身体が緊張する。

構わずに、竜矢はラディナの身体を持ち上げた。いわゆるお姫様抱っこという奴だ。

軽々と自分を持ち上げられて、ラディナは自然と頬を染めてしまふ。

『な、な、何を……』

『しっかり捕まって』

そう言うのと、竜矢は宙に浮かび始めた。

天井近くに辿り着くと、身体を水平にして飛行を開始した。

『ヒッ……！』

『大丈夫、ジッとして』

間近でそっと囁かれ、言われるままに竜矢の首に回した両腕に力を込めるラディナ。

(ひ、飛行魔術まで……！ それもこんなに速く……信じられん……！)

竜矢は驚くラディナを抱きしめ、人が走るよりやや遅い程度の速度で天井スレスレを滑るように飛んでいく。無駄に金をかけたシャンデリアや装飾の施された柱をすり抜けて、あっという間に地下牢への入り口に辿り着いてしまった。

『着いたよ、ここだ』

『う、うむ……』

降ろされたラディナは俯き加減で返事をした。勿論姿は見えないのだが、見えたら竜矢は目を奪われていたかも知れない。

顔を真っ赤に染めて恥ずかしがっていたからだ。

（ち、父上以外の男に抱き上げられたなど、初めてだ……）

ラディナには兄妹などはおらず一人っ子である。まして一国の姫であるラディナにとって、身近な異性と言えば王である父親くらいなものだ。近衛の親衛隊や魔術の師は男性だが、当然のように身体に触れられた事など無い。

むしろ触れでもしたら無礼な事をした、という事で厳罰は免れないだろう。下手をすれば極刑すら有り得るのだから。

ラディナはどちらかというと、古い英雄物語や騎士と姫の悲恋物語などを聞いても、ヒロインよりも相手の男の方に感情移入してしまうタイプだ。それが男勝りの原因の一つとなったのだが、それでも年頃の娘である事に変わりはない。

まさか自分がその物語の中の、ヒロインのように抱き上げられてしまうなど夢にも思っていなかったのだ。

いわゆる初体験という奴に、自然と動揺してしまっていた。

（ど、どうしたのだ私は？ 妙に顔が熱いし、鼓動が早くなっているし、息も少し乱れている……。何か病にでもかかってしまったのか？）

予想外の事がもたらした自分自身の変化に、少々パニックっている。色々と免疫がない為か、自己分析がちょっとずれているのは致し方ない事だろう。

『見張りが二人居るなあ……また眠らせるか』

『そ、そうだな。一人は私がやろう』

ともあれ二人はこっそりと見張りに近付いて、竜矢の方は首筋に手刀を一閃させてその意識を刈り取った。だが、ラディナの方は軽く力を入れた“つもり”の拳をモロに鳩尾に叩き込んだ。

「げ……は……っ」

兵士は胃の中の物を全て吐き出した後、その上に顔面からくずおれた。床の上で涙と鼻水、更によだれと吐瀉物まみれで暫くピクピク悶絶して、その内に気を失って動かなくなった。

竜矢の背筋に冷や汗が流れる。

『ちょ、ちよつとやり過ぎじゃ……』

『そ、そんな事はないさ。腐ったりとはいえパルフストの兵だ、この位でどうにかなるほどヤワではない……筈だ。うん、大丈夫だ』
『そ、そっか……。まあ、とにかく行こう』

あまりの哀れさに、心の中で名も知らぬ兵士に合掌する竜矢だった。

兵士の腰に付いていた鍵を使って音のしないようにそっと扉を開けると、薄暗い空間が広がっていた。少し下った階段があり、そこを降りると鉄格子が嵌められた牢が並んでいた。

その内の一つに、女性が一人閉じ込められていた。

「リーラ！」

「えっ……ひ、姫様!？」

足に鉄球のついた鎖を嵌められた女性は、自分の名前を呼ばれて弾かれたようにその顔を上げた。

彼女はラディナと同年の十七才で、明るい茶色の髪を長めのセミロングに伸ばし、それを夜会巻きにしてまとめている。

一国の姫に付く侍女だけあって、整った顔立ちをした美しい美少女だ。

だが、誰かに殴られでもしたのか、その顔の左側は酷く腫れ上がっていた。内出血を起こして青くなった頬が痛々しい。

「リーラ……っ！ 待っている、今開け……」

「来ないで下さい、姫様」

リーラは鉄球を引きずりながら、牢の奥へと後ずさっていく。その目には、涙が浮かんでいた。

「リーラ？ どうしたのだ、助けに来たのだ。一緒に逃げるぞ」

「わ、私は……、我が身可愛さに姫様をこのような目に会わせてしまいました。仕える者として失格でございます。どうかお見捨て下さい、姫様は一刻も早くお逃げ下さい」

「何を言っているリーラ、私は気にしてなどおらん！ お前は何か悪くない、仕方がなかったのだ」

「いいえ、私はこの身を盾にしても、姫様をお守りしなければならなかったのです。それが出来なかった私には、もう生きている資格すらありません。それに私が一緒では足手纏いになるだけです。どうか、早く……」

「リーラっ……！」

彼女は普段から、もしもラディナの身に危険が迫れば身を挺してでもお守りしようと思っていた。だが実際に事件が起きて自分の背

中に刃物を押しつけられた時、そんな事を考える余裕は消え去っていた。

恐怖心から言われるままに悪漢たちの命令に従ってしまい、自分が人質に取られたが為にラディナを危険に晒してしまった。その事でずっと自分を責めていたのだろう。

その上こんな地下牢に閉じ込められ、彼女の精神はどんどんネガティブな方面に追い詰められてしまったのだ。

暫く押し問答をしていたが、彼女の意志は固く、聞き入れる様子はなかった。

そんな状況に痺れを切らした竜矢が口を開いた。

「えーと、リーラさん？ 君がここでワガママ言っていると、ラディナ姫は絶対に逃げないと思うよ？」

「えっ……。あ、あなたは……？」

リーラが驚いて身をすくませる。

今までラディナの影になっていた為に、竜矢の姿に気が付かなかったのだ。

「リーラ、彼は私を助けてくれたリュウヤ殿だ、私よりもずっと強い御仁だぞ？」

「姫様よりも……？」

リーラは驚いた。

双剣姫ラディナの強さはパルファスト王国最強と言っても良いほどのものだ。身近に仕えていた自分はそれをよく知っている。

そのラディナの口から自分よりも強いと言われた白甲冑を、リーラは涙を拭いながら見つめた。

「大丈夫だ、きっと逃げられる。お前の事は私が守る、だから何も心配するな。……全て終ったら、またテラスで一緒にお茶を飲み、私の話し相手になってくれ」

優しく諭すように言うラディナの言葉に、ようやくリーラは首を縦に振ったのだった。

後悔の涙を、自分を大切に思ってくれる姫への喜びの涙に変えながら。

13話：竜矢の悪巧み（前書き）

竜矢は悪党には遠慮をしないタイプですW

13話：竜矢の悪巧み

「じゃあ脱出……の前にリーラさん、顔の傷見せて」

「え……あの……」

牢からリーラを出した後、踵を返そうとした竜矢がまた振り返って言った。

まだ竜矢に対して警戒心を拭いきれないリーラは、困ったようにラディナを見る。

「リュウヤ殿？ 医術の心得がお有りなのか？」

「術は術でも魔術だけだね。うん、大丈夫。これ位なら……」

竜矢がリーラの腫れ上がった顔にそっと手を当て、治癒の魔術を使った。

白い光がその手から放たれると、見る見るうちに腫れが引いていく。僅か数秒で、彼女の顔からは腫れも傷も綺麗に消え失せてしまっていた。

（ち、治癒魔術まで！？ しかも呪文の詠唱だけならともかく、魔術式の体外展開も無しか……！）

ラディナはまたも驚く事になった。こうも何度も驚いていればいい加減慣れてきそうなものだが、今度のは驚きのレベルが違う。

呪文の詠唱は慣れてくれば心で唱えるだけで力を発揮する。魔術式の体外展開とは、体内で導いた魔力で構築した魔術式を、身体の外側に展開させる事だ。

魔術式を体内のみで発生させて使うよりも格段に安定性や威力が上がる為、ほとんどの魔術師は簡単な術以外は体外に展開して術を行使するのが当たり前になっている。

しかし、ラディナが驚いたのはその事だけではない。

この世界の魔術は、地・水・火・風・空の五大元素の魔力を使う元素魔術の他に、主に神官が扱う神聖魔術と、ルディヴァールを始めとする邪神を崇める者たちが使う邪神魔術に大別される。

元素魔術は一人で一〜二系統扱う者が主流で、三系統扱えばエリート、四系統扱えば国家にスカウトされるようなレベルだ。

五系統扱えた者は大陸の歴史上数えるほどしか存在しない。民衆を率いてソルガ帝国に反旗を翻し、ジュマル王国を建国した初代ジュマル王、シャルベルはその一人である。

神聖魔術は神の力を借りて行う魔術とされ、修行を積んだ神官が使える魔術だ。主に治癒や魔物に対する浄化・防御的なものをメイソンとする魔術である。

対する邪神魔術は邪神の力を借りて他者を傷付けたり、心を操って疑心暗鬼を誘ったり、呪いをかけた対象をゆっくりジワジワと死に至らしめたりするような、えげつない術得意としている。魔術というより、呪術といった方が近いかも知れない。

リュウヤが使った魔術のうち、不可視結界や飛行魔術は風に属する元素魔術だ。

本来、元素魔術の使い手は神聖、邪神、どちらの魔術も使えない。逆もまたそうであり、神聖魔術師は元素と邪神、邪神魔術師は元素と神聖魔術を使う事は出来ない。それぞれの力の源が違うからだ。

無理に使おうとすれば、身体に染み込んだ元々扱える魔術の力と反発を起こす。過去、それを試した魔術師たちも居たが、ある者は廃人となり、ある者は四肢が腐れ落ちるなどして例外なく心身共に多大なダメージを負った。

もしも使える魔術師が居たとなれば、あらゆる国から引っ張りだこにされる事だろう。多少手荒な手段を使っても、手に入れようとしてもおかしくはない。

竜矢はその貴重かつ、恐らくは世界で只一人の複数の魔術を扱える人間である事を知ったラディナは、何が何でも竜矢の事を知ろうと決意するのだった。

「よし、もう良いよ」

「あ……ありがとうございます……」

「っ……いい、いえ、どういたしまして」

顔を触って腫れが無くなった事を確認したリーラは、頬を染めて竜矢に礼を言った。気丈に見えても、顔に傷を付けられた事で気落ちしていたのだろう。

感謝と感動で潤んだ瞳を向けられて、竜矢は慌ててそっぽを向く。

彼はあまり感謝される事に慣れていない方だ。それがこんな美少女からとなれば照れてしまっしょうがないのだ。

ぶっちゃければ、ウブな男なのである。

「さ、さあて、逃げようか。ここまで来りゃ、後はどうとでもなる」「そうだな。出来れば謀反の証拠が少し欲しい所だが、私たちの証言だけでも十分だろう」

「気になるのは、ダルゼットとルーデンが手に入れたロストパーツ

何だけど……。結局どんなもんなのか、掴みきれなかったなあ」

「なに……。？ 何の事だ？」

竜矢の言葉にラディナが眉をひそめる。

「ああ、知らなかったんだ。あの二人ロストパーツを手に入れていて、それが切り札らしいよ」

「ロストパーツを？ そうか、奴めそんな切り札を持っていたか……」

ラディナは迷った。

ダルゼットが有している私軍は約千人ほどだ。王都に帰還してすぐに討伐軍を派遣すれば、体制が整っていない今ならば鎮圧する事は難しく無い。

しかし、既に有力貴族たちの半数はこの謀反に荷担している。誰が協力者なのか分からないのは大きな不安要素だ。おまけに謎のロストパーツの存在まで考えなければならなくなった。

協力の証となるような物的証拠……。例えば連盟の血判状などがあれば、謀反者たちが動く前に一気に押さえる事も出来るが、現状では難しいだろう。

「……リュウヤ殿、貴公を信じて我が国の現状をお話する。これから話す事は他言無用に願いたい。リーラもよいな？」

「あ、ああ」

「はっ、はい」

ラディナは自国の有力貴族たちの内、半数がダルゼットに与している事を竜矢に告げた。横で聞いていたリーラは顔面蒼白となって

いる。

「うーん、国内の反乱分子たちと連携されると厄介って事か。ロストパーツの事もあるしなあ」

「うむ。反乱分子の方はダルゼットさえ倒せば、一時的にだろうが大人しくなるだろう。今までジツと機を待っていた連中だ、ヤケを起こしていきなり反乱を起こすとも思えん。上手くダルゼットを押さえる事が出来れば後で対処する事も可能だと思うが、ロストパーツは危険すぎる。せめてどんな力を持ったロストパーツなのかが分かればいいのだが……」

「ふーむ……」

竜矢は腕を組んでじつと考え込む。

今ラディナに明かされた事は、そのままミルファルナのキドニア王国にも共通する事だ。

「出来る事なら双方の謀反の証拠を掴み、ロストパーツの正体を知る事が出来ればベスト、か……」

自分の力を使えば、ダルゼットにしてもルーデンにしても簡単に倒す事が出来る。だが、竜矢はなるべくならそうはしたくなかった。竜矢はこう考えているのだ。

『この力は努力で手に入れたものじゃ無い。これを自分の感情にまかせて使ってしまったら、俺は墮落しかねない』、と。

自分を召喚した魔術師との戦いで暴発した自身の強大な魔力。あの時は制御もろくに出来なかった為に周囲一体を粉々に吹き飛ばしてしまった。

そして、それから制御が出来るようになるにつれて分かった事があった。自分がフルパワーを出したらあの時の数倍、あるいは数十倍の力を発揮する事も可能なのだと。

制御できるという事は、魔力を効率よく扱える事を意味する。自然と魔術もパワーアップするのだ。

下手をすれば、自分の魔力で自分を滅ぼしかねない。今や大切な存在となった相棒のスーニアを巻き添えにしてしまう事もあるかも知れない。

そう思うと、不用意に自分の力を振るう事に躊躇ってしまうのだ。

「いつそダルゼットとルーデンとやらがやり合って、双方自滅でもしてくれば有り難いが……。いや、すまない、今こんな事を言ってもすぐに解決策など出る筈もないな。とにかく脱出し……」

「ん……？ それだ！」

ラディナの希望的観測な呟きに、竜矢が顔を上げた。

「な、何だ？」

「いゝいこと思いついたよ、ちよつと耳貸して……」

竜矢が二人を手招きして、顔を寄せ合ってボソボソと思いついたいい事を教える。

話し終わって顔が離れると、ラディナの顔には何やら悪い笑顔が浮かんでいた。

「それが上手くいけば、私たちにとってはこの上もない意趣返しだな。……ククッ、貴公、中々あくどい事を考えるな」

「あくどいはヒデーなあ、まあ、否定はしねーけど」

肩を小刻みに振るわせて笑うラディナと竜矢を見て、内心で冷や汗をかきながら身震いするリーラであった

「そ、それで、具体的にどうするんですか？」

リーラが話の先を促した。時間が無い事に変化はないのだから、急ぐに越した事はない。

「そうだな、紙とペンでもあれば……。お、あったあった」

牢の通路の手前、降りてきた階段の横に小さな机があった。

牢の番人が使う物なのだろう、机の上には日報用の書類と、ペンが何本か転がっている。竜矢はそれを使って、何やら文字を書き込み始めた。

「んーっと……。こんなもんで、どう？」

書き終わった書類を見せられて、ラディナとリーラは吹き出して大笑いしそうになるのを必死に堪える事になった。

「クッ、こ、これは……。け、傑作、だ、な……。！　ク、クククッ……！」

「こ、これなら……。ププッ、ぜ、絶対上手く、いきますよ……。！」
「おっしや、決まりだ」

竜矢はその紙を持って、リーラが入れられていた牢の中に戻っていった。

半地下になっているこの牢の上部には鉄格子の嵌った小さな窓があり、そこから月明かりが差し込んでいる。

竜矢はその窓のある壁際まで行くと、ラディナたちに振り返って言った。

「それじゃあ脱出だ。二人とも、耳を塞いでいて」

顔に疑問を浮かべながらも、言われるままに耳を両手で塞いだ二人を確認して竜矢は腰の横に右拳を構えた。

その拳から、赤い光が放たれる。

ラディナには、それが強力な破壊の力を込めた魔術である事が分かった。

「おおらあっ!!」

雄叫びと共に放たれた拳は、牢の壁に大穴を穿つのだった。

14話：悪巧み開始（前書き）

お気に入り登録をしてくれたり、評価を入れてくれる方が少しずつ増えてきており、この場でお礼を言わせて頂きます。

ありがとうございます！

さし当たっての目標は、目指せお気に入り登録100件越え！
て
ところで（^^）

14話：悪巧み開始

静寂を打ち壊した轟音と振動が屋敷を振るわせ、それによってダルゼットは目を覚ました。

「な、何が……、一体、何が起こったというのどあ？」

竜矢によってかけられたプロレス技の影響が少々残っているのか、多少呂律が回っていない。少しずつ覚醒していく意識と共に、自分の身動きが取れなくなっている事に気付く。

「こ、これは……。だ、誰か！ 誰かおらんのか！！」

何しろシートやらカーテンです巻きにされているので芋虫のようには動けない。それでも必死で大声を張り上げていると、部屋の外から大勢の人間が駆け上ってくる音が聞こえてきた。

「ダルゼット様！！ 大変でござっ……いま？」

やって来たのは兵士たちだった。芋虫状態のダルゼットを見て、思わず目が点になる。

「ええい！ 何をしておるか！ さっさと助けんか！！」

「は、ははっ！」

慌てて駆け寄った兵士たちによって助け出されたダルゼットは、鼻から下を乾いてこびりついた鼻血で赤黒く染めている。更に鼻も腫れ上がり、酷い有り様だ。

しかしラディナが居ない事が分かると、顔色を青くしながら兵士たちに詰め寄った。

「姫は！ ラディナ姫は何処に行った！？ それにこの騒ぎは何だ！？」

「わ、分かりません！ ですが、恐らく脱走したかと……。地下牢に閉じ込めていた侍女も姿が消えており、牢の壁には大穴が開いていてそこから逃げたと思われます」

「何だとおお！？」

ダルゼットの目が限界まで見開かれ、青かった顔が今度は赤く染まっていく。

「搜索隊は出したのか！ 何としても見つけるのだ！！」

「す、既に出しております！ ……それで、その、置き手紙が牢の中にありまして……」

「置き手紙だと？」

「こ、これです……」

兵士が懷からその手紙を取り出してダルゼットに渡す。竜矢の書いていたあの手紙だ。

それを受け取ったものの、顔が腫れている為に目が圧迫されてかなり読みにくい。

ダルゼットはそれを兵士に突き返して、読めと命じた。

「え……いや、しかし……」

「何だ！ 私の命令が聞けんのか！？」

「い、いえ！ 分かりました……」

兵士は覚悟を決めると大きく息を吸って、他の兵士達が向ける同

情の視線を感じつつ手紙を読み上げた。

「……『はーっはっはっは！』 まんまと騙されたな、猿顔ダルゼツト！！ お前のような醜い男が、本気でルーデン様と手を結べるなどと思っていたのか！？」

ラディナ姫はルディヴァール様への生け贄としてルーデン様に献上させて貰う！ ルーデン様は最初からお前を利用するおつもりだったのだ！ ルーデン様のロストパーツの力の前にはお前如き馬糞に埋もれて潰れる虫けら同然よ！

ルーデン様はまずお前を完膚無きまでに叩きのめしてお前のロストパーツを奪い、大陸統一に向かうのだ！ 哀れな肥満体型の***め！ ルーデン様はお前の尻を***で***してからロープで縛り上げて***の***で噴水の像にしてやると言っておられたわ！

どーだ悔しいか？ 悔しいだろう！ 我慢できないのならルーデン様は仕方なく、お前と戦ってやってもよいと仰せだ！ 二日後、国境で互いの私軍で大陸制覇への前哨戦を行ってやる！ 有り難く思うがいい！

ロストパーツを持ってくるのを忘れるなよ、多少はマシだろうか！ 以上、ルーデン様の忠実な部下、謎の白甲冑より』……フウ、い、以上です……」

一気に読み上げた兵士は、そーっと手紙から顔を上げてダルゼツトを見た。

彼は見なければ良かったと後悔した。

邪神ルディヴァールの化身かと思えるような、憤怒の形相をしていたからだ。

顔を真っ赤に染め、目は血走り、口からは歯が割れてしまうのではないかと思えるほどの歯軋りの音が聞こえてくる。鼻が潰れてい

る事でちょっとコミカルになっていたのだが、それを完全に消してしまう程の形相だった。

「お、おお、おおおおのれええええっ！！ ルーデーエエンっ！！」

こめかみの血管が切れそうな勢いで浮かび上がり、ダルゼットが絶叫した。

「すぐに全兵士を集めろ！！ ルーデンを叩き潰してくれるわ！！」
「よ、よろしいのですか！？ 本当にルーデン伯の仕業を決まった訳では……まず、確認の使者を送った方が……」
「そんな必要は無い！！」

この場合、この兵士の言う事が正論である。
しかし、怒りで我を忘れかけているダルゼットには通用しなかった。

「ロストパーツの事を知っておった！ この事は私とルーデンしか知らぬ事だ！ 疑う余地など無いわ！！」

「し、しかし、私軍を動かすには理由が必要です。王都には何と連絡するお積もりですか？」

これも兵士の方が正論である。

通常、貴族たちがそれぞれ保有している私軍を動かす為には、相応の理由を用意して王都にお伺いを立ててからでなければならぬ。大規模な軍事演習を行う時などがこれに当たる。

何の連絡も無しに勝手に動かせば、それだけで謀反を起こすのではないかと思われて討伐の対象となりかねないのだ。

しかし、やはりダルゼットは聞き入れない。

「そんなもの、ルーデンが攻めてきたとでも言えばよいわ！ さっさとせんかあっ！！」

「わ、分かりました！ ただちに！！」

兵士たちはダルゼットの勢いに押され、敬礼して部屋を出て行った。

手紙を読み上げた兵士は、内心で逃げた方が良いんじゃないだろうか、とか思いながら階段を駆け下りて行くのだった。

残されたダルゼットはまだ怒りが収まらずに、部屋の中で頭から湯気を上げている。

「ルーデンめええ……目に物見せてくれるわあっ！！」

部屋の中での絶叫は、窓から溢れて夜空に吸い込まれていった。

「おーおー、怒ってる怒ってる♪」

ダルゼットの屋敷の上空で、竜矢が叫び声を聞いて楽しそうに呟いた。

彼は牢の壁に大穴を開けた後、ラディナとリーラを両脇に抱いて、不可視結界を張ったまま夜空に浮かんでいたのだ。

眼下の屋敷は竜矢の破壊魔術の影響で音と光を遮断する結界が破

壊され、中での騒ぎが辺りに流れ出していた。

「ま、まあ、あの手紙を読めばな……」

「はうううう……」

一方、ラディナとリーラは高く空を飛ぶという初体験にさすがに恐怖を感じていた。ラディナは何とか表面上は取り繕っていたが、声に震えが混じっている。

リーラに至っては、小刻みに震えながら、全力で目を閉じて下を見ないようにしていた。

「二人とも怖いだろうけど、我慢してくれ。一旦、ミルファルナ姫と合流しよう」

「う、うむ、分かった」

「はうううう……」

震える二人に苦笑しつつ、竜矢はミルファルナたちが居る宿屋に向かって夜空を飛翔し始める。風を直接浴びないように防御結界も合わせて張っているので、風圧も寒さもまるで感じない。

リュウヤにしてみれば両手に花の夜間飛行だ。その花たちはリュウヤにしがみつくのに必死で、あまり浪漫を感じる余裕は無かったが。

その状態のまま、竜矢は心の中でスーニアに向けて話しかける。

（スーニア、聞こえるか？ スーニア……）

その声がスーニアに届くのに、一秒と掛からなかった。

「リュウヤ様は大丈夫でしょうか……」

「大丈夫じゃと言っておろうに。姫君は心配性じゃのう」

宿の一室で、ミルファルナの心配そうな呟きにスーニアが少々呆れたように答えた。

此処はシェリカの泊まっている宿、『妖精の一服亭』の一室だ。

閉店ギリギリに辿り着いた三人は部屋の中で一息ついていた。宿の主人がイヤな顔一つせず迎え入れてくれた事にシェリカは感謝する。

傭兵を生業とする者は、戦場の他にも危険な仕事を求めて色々な国に移動する為、拠点となる宿屋は言わば“家”である。仕事柄死亡率が高い為、気の合う主人が経営する宿屋は心安らぐ貴重な場所なのだ。

ミルファルナは念の為に顔と素性を隠していたが、主人は深く追求しなかった。その事も含めて、明日シェリカは主人に改めて礼を言おうと思っている。

なお、スーニアは不可視結界を張ったままでこっそりと入り込んでいた。

「でもスーニア様、いくら何でもお一人では……」

シェリカの服を借りたミルファルナが心配そうな声を上げる。

冒険者の服は実用一辺倒で作られている為に洒落っ気がほとんど無いのだが、ミルファルナの王族独特の雰囲気はいささかも薄れて

いない。

「安心せい、リュウヤの力はわしですら足元にも及ばん。本気を出せば国の一つや二つ、容易く落とすほどの力を持つておるのじゃから」

「そ、そんなに凄いんですか？ リュウヤさんって……」

竜矢の力は今日色々を見たが、国を容易く落とすほど等と聞いてシェリカは喉を鳴らす。

「うむ。仮にも神獣などと呼ばれておるわしが主と認めたのじゃぞ？ 恐らく、竜矢に勝てる者などこの大陸……いや、この世界を探しても何人居るか」

スーニアの真面目な声に、二人とも声を失う。

それが本当ならば、竜矢とスーニアが揃えばもはや天下無敵である。

「……お二人は、どうやってお知り合いになったのですか？ 差し支えなければ、教えていただけませんか？」

ミルファルナが少し自己嫌悪の気持ちを抱きながら、躊躇いがちに問うた。

プライベートに関わる事であり、彼女もその事を良く分かっている。誰であれ、他人の事情をあれこれ詮索するのはあまり誉められたものでは無い。

だが、王族という立場から、強力な力を持つ竜矢たちを味方に付ける為に知っておくに越した事はない。

ミルファルナがそんな気持ちを抱いたのは、命の恩人に対してそ

んな事を考える、後ろ暗さがあったからだ。

しかし、神獣と呼ばれるスーニアにはお見通しであった。
その金と銀の目を細め、口の端をわずかに釣り上げる。

「ふふ、キドニアの姫よ、わしらを利用しておるのか？」
「そ、そんなつもりは決して！ 失礼を致しました、どうかお許しを……！」

ミルフアルナが椅子から立って、深々と頭を下げた。よく見れば、その肩が微かに震えている。神獣の機嫌を損ねたりすれば、国が滅んでもおかしくない災厄が降りかかると言われているのだ。

シェリカは王女のそんな様子を見て、わたわたと狼狽えるだけだ。

「まあ、よかろう。害をなすような事をしなければ咎めはせぬ。…
…竜矢はわしの命の恩人じゃよ」

「スーニア様の命の恩人……」

それを聞いた二人が目丸くする。

マナウルフィであるスーニアが命の危機に陥るなど、相当な事だ。
それを救ったというのだから、竜矢がした事は並みの人間では決して出来ない事なのだろう。

「それだけでなく、色々と面倒も見てくれての。正直、わしは竜矢に頭が上がらん程の恩が……む」

「スーニア様？」

急に言葉を止めたスーニアが、身を起こして窓辺へと歩み寄る。
暫くそうしていたが、すぐに振り向いて二人に言った。

「我が主が戻ってくるぞ。今、思念で連絡が入った」

「えっ?」「思念?」

良く分かっていない二人を面白そうに見つめながら、スーニアが説明する。

「わしとリュウヤは心で会話する事が出来るのじゃよ。これはわしがリュウヤを主と認め、契約したから出来る事じゃがな。分かりやすく言えば、魔術師が使い魔と精神で繋がるのに近いかの」

「なるほど……」

ミルファルナも力は弱いが魔術を多少扱える。師の宮廷魔術師から聞いた話を思い出し、納得して頷いた。

優れた魔術師は、動物を魔術によって自分の使い魔とする事が出来る。それは精神的な繋がりを持たせて使役する事だ。

使い魔が見た物を同じ視点で見たり、自分の言葉を使い魔の口から離れた者へ伝えたりする事などが出来る。場合によっては、魔術師の受けたケガのダメージを代わりに受けさせたりする事も出来るのだ。

「客人を二人連れておるそうじゃ。窓の鍵を外しておけ」

「あ、はいっ」

シェリカが窓の鍵を外すと、軋んだ音を立てて窓が少し開いた。少し冷たい夜の風が流れ込んでくる。

それを眺めつつ、ミルファルナが疑問を口にした。

「客人とは……どなたなのでしょう?」

「お主がよく知っておる者だそうじゃぞ?」

「私が……？」

小首を傾げ、誰かしら？

と考え込むミルファルナであった。

15話：ルーデン屋敷の大騒動

「……来たようじゃ、窓を開けてやれ」

「はいっ」

竜矢達の気配を感じたスーニアがシェリカに言って、窓を開けさせた。

窓が開くと、それに合わせて竜矢は部屋の中へと入って行く。張っていた結界を解くと、白甲冑を着た竜矢とラディナ、リーラの姿が現れる。

そして、竜矢が脳天気な明るい声で言った。

「よっ、ただいま」

「リュ、リュウヤさん……ですか？」

その声を聞いて、シェリカが驚きながら聞く。いきなり見た事のない白い甲冑を着た人物がやって来たのだから驚くのも当然だろう。

「うん、んでもって……。ホラ二人とも、もう目を開けても大丈夫だよ」

竜矢が両脇に抱き締めていた……もとい、竜矢の両腕にしがみついていた二人に声をかける。少し青ざめていた二人はゆっくりと目を開け、宿屋の中だということを確認すると安堵の溜め息をついた。

そして、ラディナがミルファルナの姿を見ると満面の笑みを浮かべて抱き締めた。

「おお、ミル！」

「えっ！？ ふぎゅっ」

何故ラディナが竜矢に連れられてやって来たのか分からないミルファルナは、目を白黒させて頬ずりやら頭を撫でられるやら、されるがままだ。

「良かった、ああミル、本当に無事で良かった……」

「ど、どうしてラディナ様が……？」

説明を求めるように見てくるミルファルナに、竜矢は困ったように頭をかく仕草をする。甲冑を着たままなのでゴリゴリと金属音しかしないのが、ちょっと見にはマヌケな光景である。

「お疲れ様と言いたい所じゃが、またややこしい事になったようじやの」

「まあな……」

スーニアの言葉に、竜矢は苦笑混じりの声で答える。

まさか二国同時のクーデターなど想像もしていなかったのだ。

ちよっとだけ、疲れ気味の竜矢であった。

「……ひ、姫様……っ！ あの獣は……！」

「何だ？ 獣？ ……っ！！ マ、マナウルフィ！？」

スーニアの姿を見たリーラは、全身を振るわせながらラディナに縋り付いた。

ラディナも伝説の神獣を見て目を丸くすると、一足飛びに部屋の隅に飛び退いた。両腕にリーラとミルファルナをしっかりと抱いている所は、さすがパルファストの双剣姫である。

「あー、まあ、色々聞きたい事があるだろうけど……」

竜矢がそう言うと、部屋の全員の視線が集中する。

それには、疑問に対しての説明を求む！　との思いがぎっしり込められていた。

ちよつと引いた竜矢はおもむろにスーニアに向いて、シュタツと右手を上げる。

「スーニア、仕切り任せた」

「……説明が面倒だから、逃げる気かリュウヤよ」

しっかり見破られていた。

半分凶星ではあるが、竜矢はしらを切る事にした。

「俺はこれからルーデンの屋敷に戻って、ボアズさん達を助けてくるよ」

「彼らは無事だったのですか!？」

「シーツ、夜も遅いから静かに」

「す、すみません……」

思わず声を上げたミルファルナに注意して、竜矢は再び宙に浮かび上がり、その姿を不可視結界で消した。

「まあ、その間に情報交換をしてくれる。スーニアは護衛よろしくな」

「……仕方のない主じゃ。とつと行ってこい」

小さく溜め息をつきながら、スーニアがやれやれといった感じで答える。竜矢はあっぱはーと、笑って誤魔化しながら夜空へと飛

翔していった。

竜矢が去ったことを感覚で悟ると、スーニアは窓の鍵を閉めるようにシェリカに言ってから全員の顔を見回した。

「……さて、まずはミルファルナから事情説明といこうかの。長くなるかも知れん、シェリカよ、眠気覚ましに茶でも入れてやれ」
「はい、分かりました」

すっかりスーニアの小間使いのようになっていたシェリカであった。

竜矢はすんなりとルーデンの屋敷に入り込み、地下牢へとやって来た。

もっとも、彼の通ってきた後には破壊された屋敷と、倒れ伏す兵士達が転がっているのだが。

竜矢は姿を屋敷の前で現すと、そのまま堂々と屋敷へと入っていったのである。
力尽くで。

門番を蹴散らし、門を吹き飛ばし、入り口の扉を引きはがし、群がる兵士達を薙ぎ払いつつ、ここまで来たのだ。

既に音と光の遮断結界も壊れ、この騒ぎの音が外に流れ出てしまっていた。

「な、何をしておるか！　そ、そいつを早く捕らえろ！　いや、もう殺しても構わん！」

騒ぎを聞きつけて駆けつけたルーデンが、階段の上という安全圏

から兵士達に命令を飛ばしている。その声で何人かの兵士が飛びかかるのだが、竜矢は魔力を軽く放出してその圧力で兵士達を弾き飛ばしてしまふ。

「な、何だ……何なんだ、あの白甲冑は!？」

地下牢に通じる扉を蹴り飛ばし、竜矢はゆつくりとルーデンに振り返った。

「なっ、何だ!!」

そして、考えていた台詞を大声で言った。

ダルゼット様は最初から貴様と手を組むつもりなど無かったのだよ！ お前が捕らえた連中は、ダルゼット様がルディヴァール様への生け贄と奴隷にするそうだ！ よって貰い受けるぞ！

＊ ＊ な奴 という事だ！ ダルゼット様はお前を裸にひん剥いてから
＊ ＊ ＊ に ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ をして、更に全身に恥ずかしい落書きをしてか
ら ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ の ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ をする！ そのまま王宮の屋根の上に逆さ
吊りにし、晒し者にして酒を飲みながら嘲笑つてやると言っておら

れたわ！

んん？ どうしたあ？ そんなに顔を赤くしたら頭の中の血管が切れて倒れるぞ？ もっとも、そうして無様に倒れたらさぞかしお似合いだろうがな！ ダルゼット様はお前を苦もなく捻り潰してお前の持っているロストパーツを奪い、そのまま大陸の覇者となるべく行動を開始するそうだ！

だが喜べ、ダルゼット様は寛大なお方だ、お前が挑戦してくると言うなら嫌々ながら相手になってやるそうだぞ！ その積もりがあるなら二日後、国境で互いの私軍で勝負をしてやるそうだ！

ああ、お前は途轍もなく無能で弱いんだから、ロストパーツを持つてくるのだぞ？ でなければ相手にならんだろうからなあ！ 私は謎の白甲冑！ ダルゼット様の忠実な部下だ！」

一気に言い切った竜矢はルーデンの反応も見ずに、さっさと地下牢へと入っていった。残された兵士達は為す術もなくそれを見送り、そーっと階段上のルーデンを見る。

全員がすぐに目を背けた。

ルーデンはあまりの怒りに、顔があちこち歪んでしまっていたからだ。

顔の右半分は全体的に下に向かって、左半分は上に向かって引き攣ってしまっている。額や握りしめた拳に血管が浮き上がり、今にも切れて血が噴き出しそうだ。

只でさえ部下に対して厳しい彼の、そんな表情を再度見たいと思う兵士は一人もいなかった。

「……そうか……ダルゼットの仕業か……！」

地獄の底から響いてくるような怨念の籠もった声に、兵士達が総

毛立つ。

ダルゼットの様に怒鳴り散らさない分、その静かな声には聞いた者の精神を握り潰すような迫力が込められていた。

「……すぐに全軍を集めろ……！」

側にいた兵士に命令するルーデン。それに意見しようと口を開いた兵士をルーデンは手を挙げて遮った。

「……言いたい事は分かっている、確認の使者を送れというのだろうか？　だがその必要は無い、私はあの白甲冑をダルゼットの屋敷で見た事がある、間違いない……。それにロストパーツの事を知っていた……。あれの事は私と奴しか知らぬ事、それが何よりの証拠だ……」

ルーデンはどちらかと言えば、優秀な部類に入る貴族だ。

能力だけで見れば王都で重要なポストに就いていても不思議ではないのだが、傲慢な性格が災いして王都ではなく国境沿いのこの地を治める事になったのだ。

ぶっちゃけてしまえば、左遷に等しい。

国境沿いという事でここも重要な地に変わりは無いのだが、ルーデンはそれを不服としていた。

それが、彼を邪神崇拜に走らせた原因の一つであったのだ。

「……王都への通達は、ダルゼットが刺客を送り込んで宣戦布告をしてきたと伝えればいい……。事実である事に違いはない……。急げ、二日後をダルゼットの命日にしてやるのだ……！」

「は、ははっ！　……そ、それで、あの白甲冑はいかが致しましよ

う……？」

「……口惜しいが……これ以上手を出すな……。ここで奴を殺すには戦力不足だ……。二日後、奴もダルゼットと共に現れるだろう……その時、まとめて葬ってくれる……。私のロストパーツでな……！」

「しょ、承知いたしました……！」

命令を受けた兵士は屋敷内の全兵士に通達し、竜矢への攻撃は無くなった。

もつとも、それは竜矢にとって大して影響の無い事であったが。その竜矢の方かというと、既に牢の鍵を片手で握り潰して全員を牢から出していた。

そして簡単に事情を説明した後、自分と口裏を合わせてくれるように頼んで全員の動きを拘束結界で封じ込めていた。

「皆さんは俺にさらわれる立場なので、それっぽく振る舞って下さいね」

「う、うむ……やるだけやってみよう」

ミルファルナ姫の護衛隊長、ボアズが戸惑いながら頷いた。

騎士として武術の鍛錬は積んでいても、芝居の経験など有りはしないのだ。当然の反応だろう。

「んじゃ、ちょっと派手にいきますよ。皆さん、耳を塞いでいて下さい」

竜矢の右拳に赤い光が宿る。ラディナ達を助ける時に使ったのと同じ、破壊魔術を拳に乗せて発動させているのだ。

ただし、あの時よりも光はずっと強く輝いている。
何か凄い事をやりそうな気配を察し、一同は耳を手で塞いだ。

「良いですね？　では……おおおっらああ！！」

竜矢が拳を地下牢の天井に向けて突き上げると、拳から爆発的な赤い閃光が放たれた。

それは地下牢のある地下部分の天井をこっそりと吹き飛ばし、その上にある屋敷の一角を完全に破壊した。

破壊よって巻き上げられた砂煙が晴れると、大穴が頭上に開いていて夜空と月がその姿を見せていた。

竜矢は自分も含め、全員を飛行魔術で空に上昇させていく。
眼下にはこちらを憎々しげに睨み付けているルーデンがいた。

「ではな、ルーデン！　二日後を楽しみにしているぞ！　貴様も貴族の端くれ、勝負からは逃げないと少しだけ期待しておいてやる！
もっとも、ダルゼット様の勝利は揺るぎないがな！」

竜矢がルーデンに向けて駄目押しとばかりに叫ぶ。
その竜矢の声に合わせて、護衛団の面々も口々に叫んだ。

「お、おのれっつ、はなせっつ」

「くそっつ、我々をどっする気だっ」

「いやっ、おかっさっん」

が、あまり緊迫感がない。はっきり言って棒読みである。
だが、これも仕方がない事だった。彼らはラディナ達と同じく、空を飛ぶ事に恐怖を感じていたからだ。

雰囲気が悪れそうになったので、竜矢は急いで離れる事にする。

「さ、さらばだ！」

竜矢は不可視結界で一気に全員の姿を消した。下にいるルーデン達には転移魔術でも使ったように見えていた。

「……ダルゼットよ……お前は一つだけ計算違いをしている……。私はルディヴァール様の加護を受けている……。貴様には方に一つの勝ち目も無いのだよ……。！」

自分の前に永遠の闇の中から現れ、加護を与えると約束してくれた邪神の声を思い浮かべ、ルーデンは壮絶な笑みを浮かべた。

その声の正体を知ったなら、彼はどうなってしまうだろうか。

声の主は、割と本気で怖がっている護衛団を宥めつつ、宿屋へと飛んでいた。

15話：ルーデン屋敷の大騒動（後書き）

当面の目標だったお気に入り登録100件越えが達成出来ました。皆さんありがとうございます。

これからも、登録や評価が少しずつ増えていくように頑張ります。

そして、これが2009年最後の更新になります。

皆さん、良いお年を！

16話：竜矢の策（前書き）

新年あけまして、おめでとうございます！
何とか一日に更新できました。
今年もよろしくお願い申し上げます。

16話：竜矢の策

竜矢と共に妖精の一服亭に戻ってきた護衛団の面々は、ミルファルナの無事を確認して涙を流しながら喜び、自分たちの不甲斐なさを謝罪した。

ミルファルナもそれで咎める事などせず、一行の生還を喜び、竜矢に改めて礼を言うのだった。

ただ、この部屋はシェリカが一人で借りていたものなので、さほど広くはない。そこに二十人近く入っている為にかなり辛い事になっていたが。

ちなみに、竜矢はいまだに白甲冑を着けたままである。

余計に話が面倒になりそうだったので、ひとまず自分の正体を明かす事を先送りにしたのだった。

そして、竜矢が集めた全ての情報を公開すると、全員が眉を寄せ、難しい顔をしていた。

「……なるほど、ルーデン伯とダルゼットがな……。まさか二国同時の謀反とはやってくれる」

ラディナは腕組みをして唇を噛んだ。

彼女はパルフストとキドニアの内部がここまで危うい状態になっていた事に、王族として責任を感じていた。

彼女はまだ国政に直接関与はしていないのであまり自分を責める必要は無いのだが、責任感の強い彼女にはそれが出来なかった。

それはミルファルナも同様で、彼女もキドニア王家の至らなさを

嘆いている。

護衛団の面々も侍女たちも、それを察してはいるものの掛ける言葉が見つからず、彼女らをただ見つめるだけだった。

そんな重い空気を払うように、竜矢が明るめの声で言う。

「まあ、俺の煽りが上手くいけば連中は二日後にやりあうだろ。この間に、それぞれの国に姫さん達を送り届けて、王都の軍を動かしてもらうんだ。まず謀反に荷担している貴族達を押さえて国内の反乱勢力の動きを封じる。それからルーデン、ダルゼットの討伐軍を送り込む。で、あいつらがドンパチやらかしてる戦場を背後から挟み撃ちにして、片付ける。俺が考えたのはこんな感じの策なんだが、どうかな？」

竜矢の言葉に全員が目を向ける。

これが、竜矢がラディナの言葉から思いついた事だった。手を組んでいた筈のルーデンとダルゼットを仲違いさせて戦わせ、その隙に王都の体勢を整えて一気に謀反を潰してしまおうというのだ。

キドニアとパルフストを戦わせようとしていた、その二人の方を戦わせてしまおうという訳だ。ラディナが言っていた『意趣返し』の意味がこれであった。

その策を聞き、不安を口にしたのはボアズだった。

「そう上手くいくだろうか？ 幾つか不安な点があるのだが」

近衛騎士団の団長であるボアズは優秀な軍人でもある。

その視点から、四つの不安要素を指摘した。

一つ目に、連中が互いに確認を取って竜矢の策が見破られる事。

二つ目に、それぞれの国内の反乱勢力の詳細が分からない事。

三つ目に、王都の軍を動かしても、国境まで移動させるには様々な準備を必要とする。二日では時間が足りない事。

四つ目に、彼らが持っているロストパーツの事である。

それに対して、竜矢の答えは……。

「まず、連中が連絡を取ったとしてもそれで策がばれる可能性は低いと考えてる。実際に暴れた謎の白甲冑がどちらの陣営にも居ないんだから『そんな奴は居ない、知らん、お前達の仕業だろう』となるのが予想出来る。それにかなり頭に血が上ってたからねえ、判断力も鈍ってると思うよ？ ロストパーツの事もしっかり含ませたしね」

竜矢はダルゼット達の顔を思い出し、笑いを堪えながら言った。

事実、二人は互いへの連絡をしていない。ルーデンから聞き出した情報の中の、『ロストパーツの事は我々二人しか知らない』という情報を上手く生かしたのだった。

「二つ目は、ルーデンとダルゼットの事を全部、貴族達に暴露しまえばいい。謀反が実行前に全てばれてしまったとなれば、謀反を無理にでも実行に移すか、逃げるか、許しを請うかのいずれかでしょ？ そこで反乱勢力が連携を取りたくても、下手に動けば自分が謀反者だと目を付けられる状況を作り出すんだ。まあ余程のバカじゃない限り、この時点で王の命令に逆らう奴は出ないと思うよ？ むしろ、ルーデン達に罪を被せる為に協力的になるんじゃないかな」

「そうか……連携さえ出来なくすれば、それぞれの貴族私軍は孤立した少数の部隊に過ぎん。更に頭のルーデン達と連絡をする暇も与えなければ、動きたくても動けないという訳か……！ 確かにその

状態なら、王の命に逆らう奴は出まい。自分が怪しまれるだけだからな」

ボアズが軍隊に例えて言うのと、他の護衛隊メンバーも納得してしきりに頷いていた。

竜矢はそのまま説明を続ける。

「三つ目だけど、これは……俺が手を貸す」

「リュウヤ様が？」

ミルファルナが竜矢に聞いた。

竜矢はそれに頷いて答える。

「転移魔術を使って、両国の軍を一気に連中の背後に転移させる」

その言葉に、スーニアを除いた全員が驚いた。

転移魔術とは、魔術式を刻み込んだ離れた場所を瞬間的に行き来する事が出来る魔術だ。

神殿や王城などに魔術式を刻んだ一枚岩などが設置されており、その設備は国によって厳重に管理されている。地脈を通る大地の魔力を利用して、見習い魔術師でも使う事が出来るという便利な代物だ。

ただし、一度使う度に魔力を魔術式にチャージしなくてはならず、その時間も一ヶ月ほどもかかる為にそう気軽に使えるものではない。それに利用するには高額な料金を支払わなければならない為、主な利用者は王族や上級貴族、有力な豪商くらいで一般人が使う事は滅多にない。

この魔術は魔術式を省いて行おうとするとその難易度は一気に跳ね上がる。本来そう容易く使える魔術ではない。相当な実力を持った上位魔術師でも、実行するには念入りの準備と体調の管理を必要とする上級魔術である。

更に魔術式無しでこの魔術を行うには、術者本人が最低でも一度は行った事がある場所で行く事は出来ないという制約があるのだ。

一同が驚いたのは当然といえよう。

特に魔術に詳しいラディナや護衛団の魔術師たちの驚きはひとしおだった。

ラディナが驚いたまま、慌てて竜矢に言った。

「い、いくら貴公でもそれは無理だ。王都の軍は両国それぞれ三万はいるのだぞ？ それを……」

「俺なら出来る」

きっぱりと言い切った竜矢を、ラディナは信じられない思いで見つめた。

未だかつて、こんな無茶な魔術を出来ると断言した者も、実行した者もない。

いや、一人だけいた事をラディナは思い出した。

魔術の師から聞いた昔話に、魔術大国ジュマルの建国に多大な功績を残したという伝説的な軍師、ガヤスラムという人物がいた。

彼はある戦いにおいて転移魔術で一万の軍を転移させる事に成功し、主であるシャルベルの危機を救った。しかし、それによって彼は一年近く床に伏せる事になったという。

もしも竜矢がこの転移魔術を成功させたなら、ガヤスラムを遙かに上回る偉業を成し遂げる事になるのだ。

しかし、この策にはキドニアとパルフストの命運が掛かっていると言ってもいい。そう簡単に同意をするわけにはいかなかった。

「し、しかしだな、リュウヤ殿……」

「私は信じますよ」

そんなラディナの言葉を遮ったのは、部屋の隅で大人しくしていたシェリカだった。

彼女は全員にお茶を入れた後、両国の関係者という訳ではないので話に参加していなかったのだ。

そんなシェリカが、にっこりと笑って言った。

「だってリュウヤさんは勇者様ですもの」

「ぶっ!？」

竜矢は思わず吹き出した。

甲冑の中身が中身なので茶を飲んではいなかったが、飲んでいたら隣にいたボアズの顔がお茶まみれになっていた事だろう。

慌てて竜矢が否定しようとするが、それは間に合わなかった。

「いやいや、自分は勇……」

「私も信じますわ」

「ミル？」

続いて、ミルファルナも竜矢を信じるとはっきりと言い切った。

この二人は竜矢の正体を目の当たりにしている、だからこその言葉であった。

「マナルフィであるスーニア様を従えている……まさに勇者と呼ぶに相応しい、凄い事ですね。そうですね？ スーニア様」
「うむ、否定はせん」

スーニアは大仰に頷いて言った。
その目が笑っているように見えたのは、竜矢だけである。
この神獣は面白がっているのだ。

「良いではないか、勇者リュウヤ……中々良い響きじゃぞ？」
「スーニアさん、あなたはどちらの味方ですか？」

げんなりした竜矢の声に、スーニア、シェリカ、ミルファルナの
笑い声が静かに満ちる。

場の雰囲気が一変し、穏やかな空気に包まれていった。

「神獣を従えるか……。確かに、勇者と言って差し支え無しだな。
分かった、私も貴公を信じよう」

そんな緊張感の欠けたやり取りに肩の力が抜けたのか、ラディナ
も微笑みながら言った。

竜矢はがっくりと頭を垂れる。

「勘弁して下さい……。はあ、話し続けるよ。四つ目のロストパー
ツについては、ルーデンたちが戦闘を開始すれば間違いないく使うだ
ろう。先に使われたら自分たちが危うくなるからね。どんな能力を
持っているのかはその時に見極めて、対抗策を練る。手に負えない
代物だったら……その時は俺が出張る」

再び竜矢自身が動くとき、それまでむしろ大人しかったスーニ

アが少し焦りの混じった声を上げた。

「リュウヤ、大規模な転移魔術を使った後、二つのロストパーツを相手にしようというのか？」

「しゃーねーっしょ。結局正体が掴めなかったからな」

「……正直、わしは賛成しかねるぞ」

スーニアは心配しているのだ。

いくら竜矢自身がロストパーツと同レベルの強大な力を持っているとはいえ、前代未聞の転移魔術を、それも二国の軍を転移させるという事は最低二回行う事になる。その上で二つのロストパーツの力と戦おうというのだから。

そんなスーニアの心を悟り、竜矢は側に行くとその頭を優しく撫でた。

「ありがとよスーニア、心配してくれて。なあに、俺だって死ぬ積もりなんざこれぽっちもありやしねーよ」

「……やめろと言っても、やめる主ではないのう……分かった。ただし、ロストパーツを相手にする時はわしも行くぞ」

「いや、それは……」

「行くからの」

「あの……」

「行くと行ったら行く」

しばし見つめ合う竜矢とスーニア。

金と銀の瞳が、何かを語るように黒い瞳を見る。

今度は竜矢は折れる番だった。

「誰が何と言おうと、一緒に行くと言ったら行くのじゃ」

「分かった、分かったよ。その時は二人で行こうぜ、相棒」
「うむ、当然じゃ」

伝説の神獣が人間の子供のように駄々をこねる。

その場にいた者たちは、ただその光景を呆気に取られながら見つめていた。

そして竜矢が立ち上がり、全員の顔を見回した。

「他に質問はあるかな？ 無いならすぐに作戦実行だ。この策はスビードが命だからね。みんな、今夜は徹夜を覚悟しといてくれ。んじゃ、まずはミルファルナ姫さんたちをキドニアに送ろうか」

それを聞いたボアズが途端に顔を強張らせた。

「リュウヤ殿……もしや、また空を飛ぶのか？」

「その積もりだけど？ キドニアにもパルフトにも行った事ないから、転移魔術は使えないしね」

竜矢の頭の中には大陸の地理的な事や、どの地方にどんな特徴があるか等は脳に入っているが、それらは結局知識として『知っている』だけだ。

実際にその場に立ち、五感で感じ、体感する事が転移魔術には必要なのだ。

だが、その言葉を聞いた一同は一斉に顔を曇らせた。

というか、顔の上半分に縦線がびっしりと書き込まれたように暗い表情になっている。

「……他に方法はない……のだな……。やむを得ん、か……」

「はうううう……」

「ボアズ殿、自分は自身がありません……」「わ、私も……」

「天国のお祖母ちゃん、私もそっちに行くかも……」

「バルアハガンよ、どうか我らにご加護を……」

陰鬱な声と表情で、諦めやら覚悟やら祈りやらを口々に呟いている。

どうやら空を飛んだ事が余程恐ろしかったらしい、軽くトラウマになっているようだ。

竜矢は思わず苦笑しつつ聞いてみた。

「そんなに怖かったの？」

「何しろ、初めての経験だったので……だが、事態は一刻を争う。キドニアの諸君も、国を守る兵^{つわもの}として覚悟を決められよ」

「……は、はいっ！」

ラディナの言葉にボアズ達も顔を引き締め、背筋を伸ばして敬礼した。

半分くらいは自棄になっているようにも見えるが。

それを見て、シェリカが恐る恐るといった感じで発言した。

「あのー、スーニア様が乗せて送るのは駄目なんですか？」

「ああ、それならきつとみんな怖くなんてありませんわ。スーニア様の背はとても柔らかくて温かくて、森の上を飛ぶように走って……夢のような体験でしたもの」

シェリカもミルフアルナも、スーニアの背に乗って走った光景は一生忘れる事が出来ないであろう、素晴らしい体験だった。

それを聞いて、一同は顔にささやかな期待を浮かべてスーニアを見る。

何の支えも無しに空を高速で飛ぶよりは、そちらの方がまだ安心かつ魅力的に思えたからだ。乗馬などで動物の背に乗る事にも慣れている為、抵抗も少ない。

まして伝説の神獣に乗る事が出来るなど、一生に一度のチャンスと言える。期待が膨らむのを誰が止められよう。

しかし、現実には冷たかった。

「無理じゃな、わしが乗せられるのは二人が限度じゃ。それに竜矢が本気を出せば、わしの足でも追いつかる事すら出来んしの。諦めて竜矢と一緒に飛んでいくが良い。なに、失神するまでには国に帰れるじゃろ」

スーニアの冷たい言葉に、ボアズ達は目に見えて気落ちする。

頭の上にも縦線が書き込まれたかのようなのだ。

そんな彼らを見て、竜矢は思う。

（失神で……俺はジェットコースターかよ？ 途中で宙返りでもしてみたくなってきたな）

何やら悪い笑みを甲冑の中でこっそりと浮かべる竜矢であった。

16話：竜矢の策（後書き）

駄々っ子なスーニアちゃんは如何だったでしょうかW
いずれ、もっと可愛いらしい所を書いてあげたいです。

17話：それぞれの暗躍（前書き）

実験的に、行間を適度に空けてみました。

この方が読みやすいという方、前の方が良いという方、良かったら意見を聞かせて下さい。

17話：それぞれの暗躍

「なに！？ ルーデン伯とパルフストのダルゼット公が謀反だと！？」

キドニア王国国王、レグリオスは就寝中に起こされて受けた報告を聞き、声を荒げた。

報告をしたのは勿論、ミルファルナである。彼女は王族のみに伝えられている城内の抜け道を使い、レグリオスの寝室までこっそりやって来たのだ。

彼女の側には護衛団一同と、白甲胄姿の竜矢が立っている。竜矢は出せる最高に近い速度で一気に飛んだ為、ものの数分で王都に帰還を果たしたのだった。

幸いにして、飛行中に誰も失神などせずに辿り着くことが出来た。全員顔を真っ青にして、少々ふらついているが。

それが返って事態の深刻さを強調する演出的効果をレグリオスに与えていた。

「はい、私は危うい所をこちらのリュウヤ様と、マナウルフイのスイニア様に助けていただきました」

「マナウルフイ！？ ……冗談などではない、のだな」
「はい」

レグリオスは伝説の神獣の名を出され、目を丸くする

普段なら愛娘の冗談と受け取っていたかも知れないが、尋常ならざる事態にすぐにそれを信じた。

「それで、リュウヤ様が色々と策を考えて下さって、それを行って貰おうとこうして誰にも悟られぬように戻ったのです」

「策とな？」

「えっと、王様、それについてはボアズさんから説明を聞いて貰えますか？ 俺は急いでラディナ姫たちをパルフストに送り届けなきゃならないんで」

隣国のラディナ姫の名まで出てきた事に、レグリオスは目を丸くする。

ただ、あまり余裕が無さそうな雰囲気在即座に読み取っていた。

「……あまり時間的余裕がない、そういう事か？」

「ええ。ぶっちゃけると二日しか余裕が作れませんでした。連中の動きを考えると、その辺りが限界と判断しまして」

竜矢がルーデン達をぶつけ合う為に指定したのは二日間だったが、これにはちゃんとした理由があった。

あまり長い時間を挟んでは連中に冷静になる時間を与えてしまう、かといって短すぎても王都の側が対応しきれない。ルーデン達に、早く対処しなければ相手に出し抜かれるという不安を煽る必要もあった。

自分の力を使うことも考えて出した時間、それが二日間だったのだ。

「俺はラディナ姫たちを送った後、スーニアと二手に分かれて、ルーデンとダルゼットの屋敷の見張りをするよ。ボアズさん、あと頼

みます」

「ああ、任せておいてくれ。リュウヤ殿も気を付けてな。……もつとも、心配する必要はあまりないだろうが」
「えーちょこつと位は心配して下さいよー」

軽く笑いあった後、姿を消した竜矢は寝室の窓から再び夜空へと飛び上がって行った。

「ではボアズ、策の説明をしてくれ」
「はっ！　まず、陛下には軍を……」

王の寝室で小さな話し声が翌朝まで続いていたが、それに気付いた者は誰もいなかった。

竜矢は一旦妖精の一服亭に戻ると、ラディナとリーラを連れてパルフストへとやって来た。ミルフアルナ達と同じように王族しか知らぬ抜け道を使い、王の寝室へと忍び込むことに成功する。

しかし、寝室にいたパルフスト王国のクロフォード王はベッドの端に座り込んで眠ってはいなかった。隠し扉から入ってきたラディナたちにも気付かずに、項垂れて小声で何かを呟いている。

ラディナが静かに声を掛けると、信じられないというような顔をして立ち上がった。

「ラディナ！　よくぞ無事で戻ってくれた！」

クロフォードは寝室から忽然と姿を消した最愛の娘をきつく抱き締めた。その目には光る物が溢れ出している。早くに妻を亡くした彼はラディナを溺愛しており、行方不明になったと聞いて心労から酷く憔悴していた。

何日も眠れぬ夜を過ごしていたのだろう、その目の下にはくつきりとクマが出来てしまっている。顔も疲れ切ったように痩せてしまっていて、それを見たラディナもまた涙を抑えることが出来なかった。

「父上……ご心配をおかけして申し訳ありませんでした……。グスッ……ただ今、戻りました……！」

「よい、無事に戻ってくれただけで私は満足だ。お前が姿を消してから、どれだけ神に祈ったことか……。きっと祈りが通じたのだな、バルアハガンよ心から感謝致します……！」

親子の感動の再会に、竜矢も思わず目頭が熱くなる。

リーラに至っては、ハンカチが涙と鼻水で盛大に濡れてあまり役に立たなくなっていた。

「父上、心して聞いて下さい。此度の事件、ダルゼット公が謀反を企てた事に関わりがあります」

「な、何だと！？」

涙を拭いつつ、驚愕するクロフォード。

彼自身、ラディナが忽然と姿を消しても何の痕跡も残っていない等、王宮に満ちる異常な事態に不穏な空気を感じていた。愛娘が行

方不明になった事で冷静な判断力を欠いていたせいもあるが、それが何なのかまでは測りかねていたのだ。

ラディナの説明で有力貴族達の半数が謀反に荷担している可能性がある聞き、クロフォードは溜め息をつきながら天井を見上げた。

「何という事だ……！」

「父上、こちらが私たちを助けてくださったリユウヤ殿です。キドニアのミルファルナ姫を助けたのも彼です」

「そうか、君がな……。リユウヤ殿、国王として、そして何より父親として心から礼を言う。本当にありがとう」

深々と頭を下げるクロフォードに、竜矢は慌てたように手を振って頭を上げるようにお願いする。

「王様、礼は全部片付いた時で構いませんよ。今は謀反を潰す事だけ考えましょう」

「そうか……。それで、君が策を考えたそうだが？」

「父上、それについては私から。彼はこれからダルゼット公の屋敷を見張りに行って貰います」

策の説明をラディナに任せた竜矢は城を飛び立つと、スーニアと思念通話で連絡を取った。竜矢はダルゼットの屋敷を、スーニアはルーデンの屋敷を見張る事で、不測の事態に備える事になる。

（しかしリユウヤよ、お主も物好きじゃな。ここまで首を突っ込む必要があるのか？）

スーニアが少々呆れたような思念を送ってくる。

竜矢は性格的にのめり込むタチである。例えばゲームなどをして、一度クリアーしても隠し要素などを片っ端から探してしまう。

その延長線上なのか、実生活においても一度関わった事柄は最後までやり通さなければ気が済まない。自分でもそんな性格に時々呆れる事がある竜矢は、スーニアに苦笑しながら答えた。

（関わっちまったからなー、途中で放り出すのも寝覚めが悪いしさ。お前には悪いが、最後まで付き合わせてくれよ）

（わしは構わんがの。お前の居る所がわしの居場所じゃ）

スーニアは竜矢に依存する傾向が強い。

こういった言動も、命を救ってくれた彼に対するスーニアの決意の現れと言える。竜矢の為なら全てを敵に回してでも戦うという覚悟をしているのだ。

（……ん、ありがとよ）

（礼の必要など無いぞ、わしはお前の従者なのじゃからな）

スーニアはこう言うが、竜矢としても知り合いが誰一人としていないこの異世界で、家族と言っても良い程の存在となったのが彼女だ。竜矢の方も、彼女が危険な事になれば全力で守ると決めている。

お互いに、無くてはならない存在となっているのだ。

（ま、全部片付いたら少しのんびりしようぜ。王都で何か、美味しいもんでも食い歩くか）

（そうじゃの、それは楽しみじゃ）

二人は思念通話を切り上げると、それぞれの目的地へと移動していった。

その二日後、ルーデン率いる千人の私軍と、ダルゼット率いる千二百の私軍が国境に広がる平原で対峙した。

その光景を、離れた山の中腹で見つめている人物がいた。薄汚れた灰色のローブを纏ったその姿は、かなり歳を取った老人だ。顔や手の皺の数と深さは、一体どれだけの年月を掛けて刻まれたものか見当も付かないほど多い。

竜矢とスーニアが彼を見たら、即座に臨戦態勢に入っていただろう。彼は竜矢を召喚した謎の老魔術師であった。その顔は、何処か楽しそうに笑みを浮かべているようにも見える。

と、背後の茂みが音を鳴らして揺れると、そこから三人の人物が姿を現した。

「大教祖様、こちらでしたか」
「ゼウルか」

振り返った老人の前には、竜矢たちによって壊滅された邪教の教祖ゼウルと、彼と共に逃亡した二人の尼僧であった。

今は三人とも平民のような服を着ている。

どうやらこの老人はゼウルたち邪教徒の頂点に立つ人物だったよ

うだ。彼らは逃亡後、老人と合流して行動を共にしていた。

「ここから見物なさるお積もりで？」

「うむ、あの二人が戦う事になるとはのう……。予定とは少し違ってしもうたが、あやつらのロストパーツの力を見るには絶好の機会じゃて」

大教祖と呼ばれた老人は皺だらけの顔を綻ばせ、楽しそうに笑った。

それを見た三人も釣られて顔に笑みを浮かべる。ただし、それはこれから流されるであろう大量の血を期待しての歪んだ笑みだ。

「それはそうとゼウル、手の具合はどうじゃ？」

「はい、大教祖様の治癒魔術で、もうすっかり元通りです。ありがとうございました」

手を動かすゼウルを見て、うむうむ、と老人は満足そうに頷いた。しかし、ここに魔術に詳しい者が居たら首を捻っていた事だろう。

老人は竜矢との戦いで、彼の魂を破壊する為に『魂魄の咀嚼』という邪神魔術を使っている。そして治癒魔術は神聖魔術に属する魔術で、本来ならばこの老人が扱う事は出来ないはずだ。

彼は竜矢と同じく、別系統の魔術を扱う事が出来る希有な存在であつたらしい。そんな事は一切気に留めず、彼らは布陣している軍を眺める。

「それにしてもあの時の妖精さん、大教祖様が召喚した異世界人って聞いて、びっくりしましたわ」

「……あのマナウルフィも、大教祖様が捕らえていたとか……。流

石です」

不意に、尼僧の一人、ネデイスが老人を見ながら言った。ヴィーラもそれに続いて、老人を称えるように言葉を繋ぐ。

心なしが無表情なヴィーラの頬が赤く染まっており、ネデイスの瞳も熱を持ったように潤んでいた。

「苦勞したんじゃないのう、フラれてしもうたわい。なに、いずれまた捕まえるがの」

「あらゝ、それじゃ、私たちが傷心の大教祖様をお慰めいたしましたようか？」

「大教祖様がお望みならば、いつでもお相手いたしますわ」

「お前たち……自分が良い思いをしたいだけではないのか？ 大教祖様にご無理を言うな」

熱っぽい視線を老人に向ける二人に、ゼウルが呆れたような言葉を掛ける。

「ふおっふおっ、構わんよ。それでは今夜頼むとしようかのお……楽しみにしとるぞい」

「はいゝ♪」 「喜んでお相手させていただきます」

歓喜に濡れたような顔で喜ぶ二人に、小さく溜め息をつくゼウル。

（仕方のない二人だ……。しかし、衰えというものを知らんなこのお方は）

もっとも、だからこそ自分もこの老人を尊敬し、付き従っているのだが。

いつの日か彼を越える事、それがゼウルの野望の一つであつた。
戦場となる平原を見下ろして、彼はこれから見られるであろう惨
状を想像し、胸躍らせていた。

17話：それぞれの暗躍（後書き）

邪教トリオと謎の老人再登場。

そして老人がメツチャ元気という事が判明
W

18話：慌てふためく裏切り者たち

「ルーデン！！ よくも私を騙してくれたなあ！！ 今更許しを乞うても許しはせんぞお！！」

「ほごくな、この猿顔が！ 貴様こそ良くもやってくれたな！ 自分の馬鹿さ加減を後悔するがいい！」

太陽が昇り空気が暖まり始める頃、ルーデンとダルゼットが両軍から歩み出して舌戦を開始していた。この世界の戦では、開始前の舌戦というものはあまり行われる事はない。むしろその時間を使って味方を鼓舞する為の演説をするのが普通だ。

今回この二人がわざわざ舌戦をしたのは……ただ単に、あまりに頭に來たので一言言わなければ気が済まなかったからである。

「知っているぞルーデン！ 元々貴様は下流の貧乏貴族だったそうだなあ！ 血筋だけは良く、それを頼りにそれなりに出世したはいが、性格が悪くて王都から追い出されたとな！！ その事が良く分かったわ！！」

「ふん！ 私の才能と血筋を妬んだ者たちの仕業よ！ 私がキドニアの支配者となった暁には全て打ち首にしてくれる！ 貴様こそ先祖の財産だけを頼りに出世した成金貴族ではないか！ パルフストの貴族の間では無能と陰口を叩かれていたのを知っているぞ！」

しかし、舌戦というものは本来、相手の戦意を削ぎ、味方の士気を高揚させる為に行うものだ。彼らのそれは、もはやただの悪口の応酬になりつつあった。

「その性格の悪さでは友の一人もいまい！ この陰険根暗貴族が！」

「特技は賄賂か！？ 成金猿が！」

そして、そんな光景を少し離れた場所にある木の上から、呆れた目で見つめる者たちが居た。

「何というか……まるで子供のケンカじやの」

「あれで貴族っていうんですから……色々と問題がありますねー」

不可視結界で姿を消したスーニアと、その背に乗ったシェリカである。

彼女たちは戦場の監視と、ロストパーツが行われた時の確認をする為にここで見張っていたのだ。

シェリカが一緒にいるのは、彼女が最後まで手伝わせて欲しいとスーニアにお願いしたからだ。彼女の傭兵としての技能を考え、スーニアは何かの役に立つだろうと判断して連れてくる事にしたのだった。

「転移魔術はいつ頃行うんですか？」

「軍が集まり次第すぐ行こうじゃが、少し軍の集結に手間取っているようじゃ。二日しか猶予が無かったからのう。まずキドニアの軍を転移させた後、リュウヤは自分をパルフストに転移させる。そして、すぐにパルフストの軍を転移させる」

「強行軍ですね……リュウヤさん、大丈夫でしょうか」

「……転移魔術の方は問題あるまい。リュウヤが出来ると言ったのじゃ、必ずやってのける……問題はその後じゃ」

「ロストパーツですね」

シェリカの言葉にスーニアは頷いた。

ロストパーツの力は千差万別だ。数としては多く発見されているが、機能しなかったり、してもすぐに壊れてしまったりしてまともに使える物は少ない。更にその中で強大な力を発揮する物は極僅かだ。

ルーデンとダルゼットが手に入れたロストパーツは、その数少ない強力な力を持ったロストパーツである可能性が高い。そうでなければ二人の切り札になど成り得ないだろう。

（わしとリュウヤの二人がかりならば危険は大幅に減るが、確実とは言いい切れん。万一の時は、リュウヤだけはわしが守ってここから逃げる事を考えねばの……。その時は二国の兵たちを見殺しにする事になるが致し方ない）

スーニアにとって、もっとも優先すべき事は竜矢を守る事である。もしこんな行動を取れば彼は烈火のように怒るだろう。もしかしたら主従の縁を切られ、別れる事になるかも知れない。

それは覚悟の上だ。

分かってはいる、理解もしている。それでも彼女はその行動を止める事はないだろう。

スーニアの存在理由……。それは竜矢の側にいる事であり、その身を守る事なのだから。

一方、竜矢はキドニア王都から少し外れた広い平原にいた。

その前にはキドニア王国全軍の三分の一に相当する、約一万の王都の軍が集結しつつある。

竜矢は当初、キドニア、パルフストの全軍を転移させる位の気合を入れていたが、他国との国境に駐屯する兵力を呼び戻す事は出来ない。他国が付けいる格好の穴になってしまう。何より、そんな時間もなかった。

とはいえ、王都に駐屯する直轄軍約七千に、王都に近い領主たちの私軍約三千。

ルーデン、ダルゼットの私軍を相手にするには十分な戦力だ。

しかし、ここで少々問題が発生していた。

「リュウヤ殿、準備にはもう少し掛かるそうです」

「そうですか……予想より時間が掛かってますね……」

苦い顔で報告に来たボアズに、白甲冑姿のリュウヤは下唇を噛みながら言った。

今回の謀反、これは早急に叩き潰して沈静化を図る必要がある事を、リュウヤは理解していた。

簡単に言えば、国内の争乱を手早く解決できないという事は、国の弱さを他の国々に露呈してしまう事になるからだ。そうなればこの戦乱の時代、他国に狙い目の国だと攻め込まれ、あつという間に倒されてしまうだろう。

そんな事態になる前に、国内の強さを他国にアピールする意味でも急いだ方が良いのだ。

竜矢のこういった知識や策については、地球でプレイしていたRPGやシミュレーションゲーム、さらには三国志や日本の戦国時代を題材にした漫画や小説で得たものだ。

魔術の有る無しに関わらず、政治的な事に関しては地球もこちらもあり変わらないのが幸いした。

ただ、やはり二日という短い期間でこれだけの大軍を動かすのは、少し無理があったようだ。ボアズの苦い顔も、この辺の事情を理解しているからである。

（軍を動かす事には成功したが、謀反に荷担しているらしき貴族私軍の動きが鈍い。自分たちの取るべき行動を測りかねているのだろう……）

これからレグリオスがここにやって来て、転移魔術の説明も含めて兵士たちに檄を飛ばす事になっているが、このままでは彼が来るまでに集結が間に合わないかも知れない。

そう考えるボアズの拳に、自然と力が入る。

そんな彼の姿を見て、リュウヤはわざと明るめの声で言った。

「やーれやれ、しょうがないっすね。ちょっと脅かしますか」

「脅かす……？ リュウヤ殿、何を……？」

「焦らせてやるんですよ」

ボアズの問いにそう軽く答えると、竜矢は指揮を執っている将軍たちが集まっている天幕へと向かった。中に入ろうとすると、両脇に立っていた見張りの兵士が持っていた槍を交差させて行く手を阻む。

「入らせて欲しいんだけどな」

「ただ今、軍議の最中です。誰も入れるなどの命令です」

「ハア……悪いけど、入らせて貰うよ」

大きな溜め息をつき、竜矢は槍を押し退けてズカズカと天幕に入っていく。

全軍の兵士たちは王からの通達で、竜矢の事を今作戦における重要な魔術師との連絡を受けている。その為、慌てながらも止める事が出来ずに天幕への進入を許してしまった。

「お邪魔しますよー」

竜矢はひよい、と天幕に入っていくと、中で話し合っていた七人の将軍たちが一斉に振り返って竜矢を見た。その目つきは、お世辞にも良いものではない。

「リュウヤ殿……勝手に入って来られては困るな。今は軍議の最中……」

「この期に及んで軍議いゝ？ アンタら頭大丈夫か？」

将軍たちの顔に、サッと朱が入る。

何処の誰とも知らぬ、終始甲冑も取らずに接する謎の人物。王からの通達がなければ、何らかの理由を作ってとつくにこの場から追い出している所だ。

そんな胡散臭い人物が、貴族でも上位に位置する自分たちに無礼な態度を取ったのだ。怒りを感じるのも当然だろう。

「何という無礼な！」

「王から失礼の無いようにと聞いているからこそ、今まで不問にしていたが、一体君は何者だ！？ 答えられないのなら即刻出て行き

たまえ！」

「そうだ！ この度のルーデン伯とダルゼット公の謀反とやらも俄には信じられん！ まさか君の企みではないのかね！？」

將軍たちは口々に竜矢を非難する。

竜矢はそんな抗議を無視すると、將軍の一人に歩み寄ってその肩を叩いた。

「な、何の積もり……」

竜矢はそれも無視すると、その隣の將軍の肩を叩く。結局、そのまま全員の肩を叩いて回った。

「今、すぐ、何をすればいいのか、よく、考えなよ？」

竜矢はわざとゆっくりそう言った。叩かれた將軍たちは、誰も喋らなくなってしまった。

だが、よく見ると七人の内三人の將軍は目に見えて顔色が悪くなっている。

実は、竜矢はこっそりと『記憶探りし隠者の手』を発動させ、全員の記憶を読んでいたのだ。竜矢の力なら呪文の詠唱は心で唱えれば十分である。その上で魔術の処理速度を高速化させ、読み取る早さをアップして七人分の記憶を一瞬で読む事など雑作もない事だった。

そして、顔色の悪くなった將軍たちは、今回の謀反に荷担した王国の裏切り者たちであった。竜矢は『お前らの事は既にバレてんだよ、少しでも罪を軽くしたけりゃとっとと協力しやがれ』と、その三人の肩を叩いた時に思念を送り込み、その心に直接話したのだ。

荷担していない將軍たちには、『あなたは信頼できますね』と話していた。

「……ど、どうだろう、このまま軍議をしていても時間の無駄だと思われぬか？」

「そう、だな。早急に軍を集結させよう」としよう

「う、うむ、私も賛成だ。謀反者たちを許す訳には断じていかなからな」

場を支配した静寂に、裏切り者の將軍三人が口々に言い始める。軍議が滞っていたのは、この三人が事態把握の為に時間稼ぎとして色々と反論をしていた為だったのだが、その本人たちがいきなり態度を急変させた。

それを訝しむ他の四人が口を開く間もなく、彼らは兵を呼び、自分たちの軍を急いで集めるように命令を矢継ぎ早に飛ばす。

結果、予定よりも遅れたものの、ようやく軍の集結が完了する事となった。

「リュウヤ殿、急に軍の集結と整列が早まりましたが……一体何をしたのです？」

整列した軍の前に戻ってきた竜矢に、ボアズが聞いた。

「えーと……グズグズしてる將軍たちの喉元に剣を突きつけたというか、ケツに蹴りを入れてきたというか……」

「!？」

驚いて真っ青になったボアズの顔に、冷や汗がダラダラと流れ始

める。

「どうやら本気でそんな事をしてきたと思ったらしい。真面目なボアズは冗談が通じない性格をしていたようだ。」

「いや、冗談ですからね？ そんな事してませんから。ものの例え話ですよ？」

「そ、そうか。それなら……」

「まあ、あいづらにしてみたら、それ以上の恐怖だったかも知れないけど」

「!？」

「何とも形容しがたい表情になったボアズの顔が少し面白かったの
で、しばらく放置しておく事に決めた竜矢であった。」

18話：慌てふためく裏切り者たち（後書き）

おかしい、あまり話が進んでいない。何故だ（オイ
はい、自分のミジンコ並みの文才のせいですね、分かっております
ともorz

19話：転移魔術『抱擁されし久遠の来訪者』

「……始まったのう」

老人の呟きにゼウルが頷いた。

平原では舌戦が終り、両軍が互いに向けて突撃を開始している。戦の始まりだ。

「さっさとロストパーツを使ってくれろと嬉しいんじゃがのう」

「切り札として温存しているのでしょう」

ゼウルの返事に、少しガツカリしたように老人は肩を落とす。

「ルーデンにロストパーツを手に入れさせるのは、ちと苦勞したんじゃないがのう」

老人は事も無げに言う。

彼の言いようでは、ルーデンの持っているロストパーツの出所はこの老人という事になる。

「確か、ルーデンには遺跡の地図を渡したのでしたね？」

「そうじゃ、もう十年も前になるかのう……。あの男は妙に自分の力を過信している所があったでな、自力で探すようにちょっと焚き付けたんじゃないよ。そうしたら、あっさり自分から遺跡に向かいよった。その遺跡に予めロストパーツを置いておいたのは、わしだというのの」

ふおっふおっと、さも可笑しそうに老人は笑う。

ルーデンは自力で危険な遺跡を探索し、その結果ロストパーツを手に入れたと今でも思っている。だが、それはこの老人の計画に嵌められていただけのようだ。

「後は、それに対抗できるであろう力を持ったロストパーツをダルゼットに売りつけて、お前に二人を引き合わせさせた……。欲の強い二人が揃えば、いずれ何らかの行動を起こすじやろうと待った甲斐があったのう」

「しかし、十年というのは待ち過ぎでは？」

「なあに、わしには十年だろうが百年だろうが大して違いはないわい」

ゼウルは溜め息をつきつつ苦笑する。

一体この老人は何歳なのだろうか、ゼウルは考える。彼に出会って三年ほどになるが、一向に衰える気配がない。

魔力の強さも底が知れない。幾度か彼が魔術を使う所を見た事があるが、どれも凄まじいものだった。

小さな村の住人を邪神魔術で操って殺し合わせ、生け贄として一晩で全員をルディヴァールに捧げた事もあった。

城並みの大きさの山を、元素魔術を使って一瞬で吹き飛ばした事もあった。

そうかと思えば、神聖魔術でゼウルのケガを治したりもした。

膨大な魔力を持ち、あらゆる系統の魔術を自在に操る魔術師にして、様々な知識を蓄えた賢者。

ゼウルが彼に憧れ目標とするまで、さほど時間を必要としなかった。

「惜しみなく派手にやり合って欲しいんじゃがなあ」

「まあまあ、大教祖様〜。のんびりお茶でも飲んで待ちましよう〜

♪」

「お茶菓子もありますから、こちらへどうぞ」

ネデイスとヴィーラが地面に厚手の毛布を広げ、その上にお茶やら菓子やらを広げている。まるでピクニックでもしているような気軽さだ。

ヴィーラが示した先には、老人用にクッションが置いてあるという気の使いようである。

「そうじゃの〜……よっこいせ、と」

「はい、どうぞ〜♪」「この菓子、美味しいですよ。はい、あ〜ん」

老人がクッションに座ると両脇にネデイスとヴィーラが陣取り、ネデイスが入れたお茶をさつと差し出したり、菓子を食べさせたりと至れり尽くせりである。

「聞くだけ無駄だと思うが……私の分は無いのか？」

ゼウルが呆れ顔で聞いた。

二人とも、ゼウルの方を見ずに答えてきた。

「ゼウル様の分はそこにありますから〜、自分で入れて下さい〜♪」「カップはそのバッグの中にありますから」

この二人は老人の側にいる時はいつもこうだ。

ゼウルよりも前に彼と出会って行動を共にしているらしいが、詳しい事は聞いていない。ただ、その頃からずっとこの調子である。

最初はそのベタベタっぷりにかなり引いたが、いい加減慣れた。

遠く離れた戦場が奏でる剣戟と悲鳴と怒号を聞きながら、ゼウルは自分のお茶を入れるべくバッグの中を漁るのだった。

「キドニアの勇敢なる兵たちよ！^{つわもの} ある程度知っている者もいようが、皆を集結させたのはネクロイア地方の領主であるルーデン伯が、隣国パルファスト王国のダルゼット公と内通し、二国への同時謀反を企てている事が分かったからだ！！」

ミルファルナを連れて到着したレグリオスは、すぐに集結した軍の前で演説を開始した。

竜矢はミルファルナと一緒に来た事に少し驚いていた。計画では転移魔術を行う間は城で厳重な護衛付きで待っている事になっていた筈だったからだ。

これはレグリオスの判断であり、彼女の無事な姿を見せる事で反乱勢力に計画の失敗を暗に告げて駄目押しとする意図があった。同時に、自分と竜矢の側にいた方が返って安全ではないか？ と考えたからである。

その事をレグリオスから直接聞き、竜矢は彼がしっかり自分の力を利用しようとしている所に、為政者としての腹黒い面をちょっぴり見た気がした。

もっとも、そんな事で気分を悪くするような男ではない。逆に『しっかりしてんぜ、この王様』と感心していた。

兵士たちの大半は謀反については詳しく聞かされていなかったの
で、そこかしこでざわめき始めている。それを各部隊の隊長クラス
の者たちが静まらせると、レグリオスは再び口を開いた。

「そして、この二人は愚かにも邪神崇拜に手を染めていた事も判明
している！ しかもだ！ 事もあろうにルーデンは我が娘、ミルフ
アルナを邪神への生け贄に捧げようとしたのだ！」

静まった兵士たちが、さっきよりも大きくざわめき始めた。

ミルフアルナは心優しい可憐な姫君として国民の人気も高く、兵
士たちにとっては憧れの存在である。その姫を邪神への生け贄に捧
げようとしたなどと聞かされて、兵士たちは怒りの炎を滾らせつつ
あった。

そして、この事はルーデンに与^{くみ}していた者たちに衝撃を与えてい
た。

邪教徒になった者はどの国でも重い罪に問われる。邪教徒として
どんな事をしたかにもよるが、人間を邪神への生け贄に捧げようと
したとなれば死罪は間違いない。

貴族であるルーデン、ダルゼットは間違いなく全ての財産を没収
された上、お家の取り潰しとなってから死罪となるだろう。親類縁
者も深く関わっていた事が判明すれば、彼らにも同等の裁きが下さ
れる事になる。

それ以前に、王家の姫君を生け贄にしようとしたのだ。一族郎党
全て同罪として裁かれても何ら不思議ではない。

そして、これが裏切り者たちにとってルーデンを見限る決定打と

なった。彼らはルーデンが邪教徒に身を墜としていたとは知らなかったのだ。

「愚かなる邪教徒、我が国への謀反者を断じて許す訳にはいかぬ！兵たちよ、我が国に害悪をもたらそうとするルーデンを討ち滅ぼすのだ！」

兵士たちの雄叫びが響き渡り、大地と大気を震わせた。

『ルーデン打つべし！』『キドニア万歳！』等々、兵士たちの意気は最高潮となっていた。

その響きを聞いて満足そうに頷くと、レグリオスは後ろに控えていた竜矢を自分の横へ来るように合図した。竜矢はレグリオスの隣に歩み寄り、並んで軍勢の前に立つ。

「そして、この度ミルファルナの危うい所を救って下さったのが、こちらに居られるリュウヤ殿だ！彼は優れた魔術師であり、その力でミルファルナだけでなく、囚われの身となっていたパルフストのラディナ姫をも助け出した猛者^{もっさ}である！」

竜矢の着る白甲冑は、陽光を反射して目映く煌めいている。

元々この白甲冑はかなり古い時代に作られた観賞用の鎧であったらしく、美しい装飾がやや過剰なまでに施されている。ダルゼットが成金趣味丸出して購入した物だ。

だが、この場において王と並ぶその姿は、見る者に戸惑いと同時に何か不思議な、希望のようなものを抱かせていた。竜矢の方はこんな大人数の前で紹介された事など無い為、甲冑の中で緊張しきりであったが。

竜矢の緊張をよそに、レグリオスの演説は続く。

「今回、彼は諸君らルーデン討伐軍を、奴の所まで転移魔術で転移させる事を約束してくれた！」

兵士たちの間にどよめきが走る。

彼らは軍人である事で、多少なりとも魔術に関しての教育を受けている。転移魔術が本来、難易度の高い魔術である事を知っているのだ。まして一万もの軍を転移させると聞かされれば、戸惑うのも当たり前である。

その戸惑いを振り払うかのように、今度はミルファルナが歩み出て声を上げた。彼女の凜とした声に、兵士たちのざわめきが一瞬で消え去った。

「兵士の皆さん、心配するのも当然でしょう。けれど、彼の力は私が直接目の当たりにしております。彼の力は通常の魔術師を遙かに上回っており、それは山を穿ち、大海を切り裂く程のものでした。俄に信じるのは無理でしょう、ですが、すぐに分かります。私の言葉が真実である事が」

いささか誇張気味に語るミルファルナに、竜矢は甲冑の中で引き攣った笑みを浮かべていた。スーニアがこの場にいれば、『まだまだそんなものでは無いぞ？』とでも突っ込みを入れていたかも知れないが。

ともあれミルファルナの言葉が功を奏し、軍勢は落ち着きを取り戻した。その意気は高揚したままであり、戦の前としては理想の精神状態と言えるだろう。

「では、リュウヤ殿。転移を頼む」
「了解です」

レグリオスの言葉に軽く頷き、竜矢は精神を統一する。
ゆつくりと両腕を左右に開いて、転移魔術『抱擁されし久遠の来訪者』を発動させた。

白甲冑の隙間から、竜矢の赤い魔力の光が漏れて全身を赤く輝かせる。

その瞬間、一万の軍が整然と並ぶ地の上と空の上に、巨大な魔術式が出現した。

全軍をすっぽりと飲み込むほどに巨大な二つの魔術式に、全ての人間が声を失った。

（……ミルから異世界人だと聞いてはいたが、これほどの力を持つていようとは……！）

レグリオスも声を出せず、身を寄せてくるミルファルナの肩を抱き締めた。

愛娘に興奮気味に聞かされた、二国の存亡の危機に現れた妖精のような異世界人と、神獣マナウルフの事を考える。

（……世界の転換期ともいえるこの戦乱の時代に現れた、か。神が遣わした平和の使徒か、邪神が送り込んだ破滅の使者か……）

決して敵にだけは回すまい、そう心に誓うレグリオスだった。

その頃、王都の住人たちも魔術式を見て、何事かと町中が騒ぎに

なりつつあった。

王都に残る兵士たちは騒ぎが大きくならないように動いていたが、その本人たちが魔術式を見て狼狽える始末だ。

そんな彼らを叱責し、仕事に戻らせている者たちが居た。

「何をしているっ！　いつまでも惚けて魔術式を見ているんじゃない！　騒ぎを静めに行かんか！」

「は、はっ！　申し訳ありません！」

ボアズを除いた元ミルフアルナ護衛団の近衛騎士たちだ。ボアズは竜矢の補佐として共に行く事になっている。反乱勢力の詳細をまだ掴みきっていないので、彼らは信頼できる者たちとして、王都の治安を守る為の居残り組となっていた。

そんな彼らもこの魔術式には度肝を抜かれていたが、夜間の超高速飛行体験が落ち着かせる要因となっていた。

「リュウヤ殿……、あなたがキドニアとパルファストの救世主である事を祈っております……」

そう呟くと、彼も騒ぎを静める為に駆け出すのだった。

「魔術式、固定完了……！　魔力充填、完了……！　魔力力場、展開完了……っ！　よっしゃ行くぜえっ！！　『抱擁されし久遠の来訪者』っ！！」

竜矢が叫ぶと同時に、天と地の巨大な魔術式が赤く輝やいて強烈

な光を放つ。

突風が周囲を荒れ狂い、木々を激しく揺らしていく

この場に残るレグリオスやミルファルナは、その風を受けながら確かに見た。

一万の軍勢が、キドニア王国から姿を消していくその瞬間を。

19話：転移魔術『抱擁されし久遠の来訪者』（後書き）

謎の老人、羨ましすぎw

そしてゼウル、何か可哀相w

20話：老魔術師の狂笑

「消えた……」

ミルファルナが呟いた。

突風によって巻き上げられた砂塵が晴れた時、目の前にいた筈の一万の軍勢は跡形も無く消え失せていた。

「成功、したのか？」

「間違いなく、成功しております」

レグリオスの疑問に答えるように、その背後から声が掛かる。

そこにいたのは、キドニア王国宮廷魔術師、ザルフルド・グラウスマンであった。

彼はレグリオスよりも少し遅れてこの場に来ていた。

「ザルフルド、何故成功したと分かるのだ？」

「風です、それが転移魔術の特徴なのですよ」

転移魔術は対象が消える際、その開いた空間に周りの空気が流れ込む。

それが原因で一瞬の風が発生するのだ。

通常は多くても十数人位の移動が主なので、それほど強い風は発生しない。

しかし、今回は一人だ。移動した対象の体積が多い分、流れ込む空気の量も大量になる。

それが突風を生み出したのだ。

その説明を聞き、レグリオスは納得して頷いた。

「それにしても、本当に一万の人間を転移させるとは……。長生きはするものです」

先代国王の時代から王宮魔術師を務めるザルフルドは、蓄えた白い髭を撫でながら嬉しそうに言った。

ミルフアルナはそんな師に微笑みながら、心の中で竜矢たちの無事を祈るのだった。

そして、その一万の軍勢は国境近くの平原へと出現していた。

少し離れた所から戦いの音が聞こえてくる。ルーデンたちが戦っている場所のすぐ近くに出たようだ。

「本当に……。成功した……。！」

兵士の一人が、呻くように呟いた。

竜矢が強い力を持つ魔術師と聞いても、半信半疑だった者が大半である。

その彼が桁外れの偉業を成し遂げた瞬間に立ち会った興奮が、全軍にさざ波のように広がっていった。

「フウッ……成功、だな」

「リュウヤ！」

軽く溜め息をついた竜矢の側に、姿を現したスーニアとシェリカがやって来た。

突然現れた伝説の神獣とその背に乗る女に、兵士たちが驚いて後

ずさる。

「成功したのう……身体は大丈夫か？」

「あー、大丈夫だ。あと五回は行けんぜ？ 二人とも見張りご苦労さん、何か変わった事は？」

「既に戦闘は始まっていますが、まだロストパーツは使われていません」

それを聞き、竜矢は肩と首をコキコキ回して気合いを入れ直した。実際には鎧が擦れてガリゴリとしか音はしていないが、この辺は気分的なものである。

「そっか、じゃあ急いでパルファストの軍も移動させないとな。ボアズさん、後の事は……」

「承知している。リュウヤ殿、疲れているだろうが……」

「大丈夫ですって。んじゃ、行ってきますわ」

竜矢は自分だけを転移させる為、『抱擁されし久遠の来訪者』を発動させる。

再び現れた小さな二つの魔術式が輝くと、竜矢の姿はこの場から消え失せていた。

「報告します！ リュウヤと名乗る魔術師が来たそうです！」
「来たか！」

天幕の中で腕組みをしながらじっと目を閉じていたラディナが、兵士の報告を聞いて弾かれたように立ち上がり外へと飛び出していた。

眼前にはキドニアと同じく、パルファスト王都の郊外にある平原に整然と集結した、約一万のダルゼット討伐軍の姿がある。

そして、その前に竜矢の姿があった。

「リュウヤ殿！」

「よっ、姫さん。お待ちど〜」

竜矢の側にいた数人の將軍たちや兵士たちが、ムツとしたように険しい視線を竜矢に向ける。

ラディナもミルフアルナと同じく国民の人気が高い姫であり、双剣姫の名はパルファスト国民の自慢となっている。

強さと美しさを兼ね備えたこの美姫は、兵士たちにとっては命をかけて仕えるに値する存在だ。

彼らもクロフォードから竜矢について通達を受けてはいるものの、実際に会ったのがラディナ、リーラ、クロフォードしかないのだからどんな人物か測りかねていた。

それがいきなり姿を現すなり、ラディナ姫に無礼とも言える態度で馴れ馴れしく返事をしたのだ、剣呑な雰囲気になるのも当たり前であった。

当の竜矢はそんな視線を受けてもまったく気付いていないので、平然としていたが。

鈍感というのは、こういう時は便利である。

「リュウヤ殿、待っていたぞ！ キドニアの方はどうなった？」

「上手くいったよ。ただ、もう戦闘が始まっている。すぐにこっちの軍も転移させるよ」

「そうか……。こちらの準備は全て整っているが、少しくらい休ん

だ方が良いのではないか？」

ラディナが心配するのも当然だろう、歴史に残るであろう大魔術を成功させたのだから。

そんなラディナに竜矢は冗談交じりで答えた。

「大丈夫だよ。何なら姫さん抱えて空飛んで証明しようか？」

「そ、それは断固として遠慮する！」

慌てる彼女を見て、竜矢は可笑しそうに笑い声を上げる。

ラディナも自然と肩の力が抜け、微笑みを浮かべた。

「……フ、そんな冗談を吐けるようなら、確かに大丈夫だな」

そんな二人を見て、周囲の人間たちは竜矢に対する最悪だった第一印象を修正した。どうやらラディナとかなり懇意な間柄らしいと思っただろうだ

そして、微笑みを消したラディナが全軍の前に立ち声を張り上げた。

「兵士たちよ！ 彼がダルゼットに捕らえられていた私を、その凄まじいまでの魔術によって救い出してくれたリユウヤ殿だ！！ これより、彼の転移魔術によって我らダルゼット討伐軍は奴の背後へと転移し、奴を討つぞ！！」

双剣姫の美しくも力強く響く声に、兵士たちから鬨とけの声が上がる。それに合わせるように、竜矢の全身が赤く光り輝く。

ダルゼット討伐軍の足下と空の上に、再び巨大な魔術式が出現する。

兵士たちの上げる驚愕の声を聞き流し、竜矢は声を上げた。

「時間がねーんで、ちゃっちゃと行くぜえっ!! 発動……『抱擁されし久遠の来訪者』っ!」

赤い光に包まれて、パルフストから一万の軍勢が姿を消していた。

「予想以上の力だな……」

王宮のテラスからものはっきりと見えた巨大な魔術式を見つめ、クロフォードは呟いた。

彼はレグリオスと違い、軍の指揮をラディナと信頼できる將軍たちに任せ、自分は反乱勢力に対抗する為、色々と手回しをするべく王宮に残っていた。

「あれだけの力を持つ者は、魔術大国ジュマルにも居ないでしょう。我が師、ザルフルド様もきっと驚いたでしょうな」

その背後に控えていたパルフスト王国宮廷魔術師、イーヴェン・ロウラスが言葉を繋いだ。彼はザルフルドの弟子の一人であり、かつては彼の後継者とまで言われた天才魔術師である。

いずれは彼の後を継ぐと思われていたが、パルフストの生まれである彼はキドニアではなく故国でその力を役立てる事を望み、ザルフルドもそれを了承した経緯があった。

ザルフルドのお墨付きもある事で力を認められ、二十四歳の若さでパルフストの宮廷魔術師になった人物である。

「帰ってくるのが待ち遠しいですよ。ぜひ、色々と魔術について話を聞きたいものです」

イーヴェンがニツコリと笑いながら言った。

細目の彼は笑うと目が殆ど線になる。それが人懐っこい印象を与え、人付き合いにおいて大いにプラスになっていた。

「イーヴェン、彼をどう思う？」

「……さて、少なくとも敵では無いようですが……。現状では何とも」

ラディナは竜矢が異世界人である事をまだ知らない。

故に彼女から話を聞いたクロフォードは、凄まじい魔力を持った凄腕の魔術師にして、ディルワナの武術をも扱う武人と聞いていた。

最初はそんな人間がいるのかと思っていたが、あの巨大な魔術式を見て疑念は綺麗に消え去っていた。

「敵に回したくはない、な」

「それについては同感です。ですが姫様の話では少々変わってはいっても、善人である事に間違いはなさそうです。対応さえ間違わなければ、我が国の敵になる可能性は低いでしょう」

「そうだな。マナウルフイをも従えるという人物だ、機嫌を損ねるような事だけは避けなければならん」

だが、今は謀反を企てた王国の裏切り者たちと戦わなければならない。
ない。

そう心で呟いたクロフォードはイーヴェンに向き直った。

「大臣たちは集まっているか？」

「はい、既に玉座の間に集まっています。何人かは見るからに挙動不審になっておりますよ」

イーヴェンの含み笑いに、クロフォードは不敵な笑みを返す。

二人の笑みは、謀反に荷担した者たちの慌てる内心を想像してのものだ。

「では行くぞ。ダルゼットを倒すまでの間、奴に与する者たちを牽制しなくてはならん」

「御意」

クロフォードはイーヴェンと共に、王宮内の戦場へと歩を進めるのだった。

一瞬の浮遊感の後、ラディナは閉じていた目を開く。

そこに広がっていたのは、キドニアとの国境で繰り広げられる、ルーデンとダルゼットの私軍がぶつかりあう戦場だった。

既にキドニア軍は布陣を終えており、その姿が戦場を挟んで見える。

「成功した……！」

竜矢の力を疑っていた訳ではないが、ラディナも大規模転移魔術の成功率を気に掛けていた。

それが杞憂に終り、彼女は竜矢に顔を向ける。

「ね？ 平気だったっしょ？」

「フツ……ああ、そうだな」

竜矢の軽い返事に、良い感じに緊張の解れたラディナが全軍に傳達するように声を上げた。

「各隊は人員の確認と報告を急げ！ それが済み次第、我々は進軍を開始する！」

ラディナの声に、兵士たちが行動を開始して慌ただしく動き回り始める。

と、そこへスーニアとシェリカが再び現れた。

キドニアの兵たちと同じく、パルフストの兵たちもスーニアの姿に驚きながらも作業を進めていく。

「上手くいったようじゃの」

「おおスーニア殿、シェリカ殿も一緒か。此度のご助力、感謝する。父上もくれぐれもよろしくと言っておられた。王宮内の反乱勢力を押さえる為に残ったのでここには来ていないが、会えないのを残念がっていた」

「礼ならリュウヤに言うがよい、わしはリュウヤに従っているだけじゃからな」

スーニアが竜矢の方に目を向けると、両手を頭の上に組んで伸びをしながらこちらに歩いて来ていた。

「ふーい、ちっと疲れたかな。ようスーニア、どうだ？」

「キドニアの方は布陣を終えておる、いつでも行動を起こせるぞ。リュウヤは少し休んでおれ、何かあったらすぐに教えてやる」

「そうですよ、リュウヤさん。休んだ方が良いです」

「えー、本当に大丈夫だってー」

パルフストの兵士たちはこのやり取りを横目で見ながら、竜矢に對しての認識をまた新たにしていた。

マナウルフィであるスーニアが従っている、竜矢という謎の存在。良く分からないが、凄い力を持っている謎の人物というように、考えが変化していくのだった。

「だ、大教祖様……！ これは一体……！？」

茶を飲みながら戦場を眺めていたゼウルたちは、突然現れたキドニアの軍勢に驚きを隠せなかった。しかも、すぐにパルフストの軍まで現れたのだ。

転移魔術という事はすぐに分かったが、これほどの大規模な転移を行える魔術師がそうそういる訳がない。

この老人ならば出来るかも知れないが、と考えてゼウルは総毛立つ。

それはつまり、この老人と互角かそれ以上の力を持つ魔術師がいるという事に他ならないからだ。

ゼウルの驚愕をよそに、老人はその皺だらけの顔を歪めて声を上

げた。

笑っている。

嬉しそうに、楽しそうに、堪らないといったように大声で笑っていた。

「だ、大教祖様……？」

もはや狂笑といってもいい笑い方に、ゼウルは眉を顰める。まさか驚きのあまりに……？ と不穏な事を考えてしまう。

彼の心の内を悟ってか、老人は相好を崩さずに言った。

「笑わずにいられんよ！ これは奴じゃ！ 奴の仕業じゃ！」

「奴……？」

「わしが呼び出し、お前の手を碎いた異世界人じゃよ！ こんな事が出来るのは、わし以外では奴しかおらん！」

「何ですって!？」

その言葉に、ゼウルだけでなくネデイス、ヴィーラも驚きの表情を浮かべる。

まだ記憶に新しい赤い光の巨人を思い出し、三人は背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

三人の恐怖をよそに、老人の狂笑は続く。

「そうか、そうか！ あ奴が関わっておったとはな！ 面白い！ この上もなく面白くなったわい！」

両腕を広げ、天を望むように顔を上げた。

「神とやらが仕組んだ事ならば大いに感謝するぞ！ わしの力と異

世界の力を合わせ持ったあ奴の力、存分に見せて貰うとしようかのお！」

その瞳が、壮絶な狂気を込めて戦場を睨み付ける。

視線の先では、現れた合計二万の軍団がゆっくりと進軍を開始していた。

21話：“老い”と“腐”の暴走（前書き）

今回、ちょっとグロイシーンがあります。

21話：“老い”と“腐”の暴走

戦いに集中していたルーデンとダルゼットの両陣営が、突然背後に現れた母国の軍に気付くのにはさほど時間は掛からなかった。

魔術によって増幅された降伏勧告の声が戦場に響き渡り、戦っていた兵士たちの動きが止まっていく。

謀反が失敗したと、はつきり分かった瞬間だった。

「馬鹿な……。いくら何でも早過ぎる……。！」

ルーデンは自分の読みが外れた事に愕然としていた。

王都からここまで、軍を編制して到着するのに最低四日は掛かると踏んでいた。

それだけあればダルゼットを倒し、ロストパーツを奪うには十分。後はどうしてもなる筈だった。

そして、それはダルゼットにとっても全く同じ事だった。

「こんな……。！　こんな事が……。！」

自分の手から逃れたラディナ姫が、何故王都の軍の先頭に立っているのか。

これもルーデンの仕業なのか。だが、それなら奴の背後に見えるキドニアの軍は何なのか。

混乱に陥る頭の中で、分かった事は一つ。

自分たちの野望が、潰えたという事だけだった。

それが、二人の狂気に火を付けた。

「これまで、か……。だが……。！ ダルゼットだけは……。！」

「ルーデンだけは生かしておけぬわぁっ！」

二人は懷から取り出したロストパーツの腕輪を右腕に装着し、自身の魔力を注ぎ込んで発動させた。

ルーデンの物は、白と黒の剣が互いに蛇のように絡み合っている意匠で、剣先で挟むように灰色の水晶の様な宝石が詰め込まれている。

ダルゼットの物は、無骨な何の飾り気のない銀色の太い腕輪だ。一つだけ、大きな黒い宝石が詰め込まれていた。

二つの宝石が、同時に滑るような輝きを放つ。

動きを止めた戦場に、禍々しくも強大な力が解放された。

ルーデンの腕輪から、灰のような細かい何かが煙のように吹き出し、戦場を包み込んでいく。

「なっ、何だ！？ こ、れえはひゃぁ……。？」

灰に包まれた者たちの身体が見る見るうちに萎び、艶を失って皺だらけになっていくではないか。彼らはそのまま全身が皺だらけになり、痩せ衰え、立っている事も出来なくなって次々と倒れて息絶えていく。

死因は、“老衰”であった。

ルーデンのロストパーツの力とは、生物を強制的に老いさせ、死に追いやる物だったのだ。

対するダルゼットの腕輪からは、黒いタールのような液体が流れ出し、それは凄い早さで地に広がって戦場の地面を黒く染めていく。ビチャリ、とそれを兵士の一人が踏んだ。

「うわっ、何だこりゃ……!?!? よ、鎧が……腐って!?!?」

液体に触れた鎧が、急速に錆び、腐食していく。

だが、それで終わりではなかった。

鎧が腐り、開いた所から液体に触れた肉体までが“腐って”いったのだ。

しかし、不思議な事に痛みは感じない。

兵士たちがそれに気付いたのは幸運だったか、不幸であったか。足から少しずつ身体が腐り、ゆっくりと身動きが取れなくなっていくのだ。

彼らは腐り落ちていく自分の身体に悲鳴を上げ、為す術も無く見つめる。もがき、逃れようとするが既に遅かった。

液体から逃れても、一度付着した少量の液がそのまま身体を腐らせていくのだから。

ダルゼットのロストパーツの力は、生物だろうが無機物だろうが問答無用で腐らせて滅ぼすものだったのだ。

どちらも、凄まじくもおぞましい力を持つロストパーツである。

もはや敵も味方も関係なく、ルーデンとダルゼットは感情に任せて魔力を振り絞り、戦場を阿鼻叫喚の地獄絵図へと変えていった。

「あれが奴らのロストパーツの力か……！ 進軍停止！ これ以上近付くな！」

込み上げてくる吐き気を押さえ、ラディナは通達を叫ぶ。見れば、キドニア軍も進軍を止めていた。

もし何の情報もなく彼らと戦っていたらどれほどの被害が出ていたのかと考え、ラディナは背筋に冷たい物が流れるのを感じていた。

「ひどい……」

「何も考えず、ただ敵を葬る事のみを考えたロストパーツのようじゃ……。惨いものじゃの……」

彼女の側にいたシェリカ、スーニアも苦い声を上げている。

「あそこまで、えげつねーもんとは……。姫さん、対抗手段はあるか？」

「……我が王家に伝わるロストパーツを借り受けてきたが、あれに對抗できるとは思えん」

竜矢の問いに、ラディナは頭を横に振った。

クロフォードは彼女の出発前に、パルフスト王家に伝わるロストパーツを貸し与えていた。

それは魔力による強固な防御壁を作り出す物で、使用者の前面に幅約百メートル、高さ約十メートルの防御壁を出現させる。防御力に関しては城塞都市の城壁をも上回る力を発揮するが、側面や背後、上空からの攻撃には効力を発揮しないのだ。

あの灰や液体に回り込まれたりすれば、為す術もなくやられてしまうだろう。

説明を聞き、竜矢は唸って考え込んでしまう。

その時、兵士の一人が青色と赤色の二枚のカードを持って近付いてきた。

「ラディナ様！ キドニア王国軍、近衛騎士団団長のボアズ殿から連絡が入ってきております！」

「分かった、伝心カードを」

ラディナはカードを受け取ると、青い方を耳に、赤い方を口の前に持っていった。

このカードは言わば魔術版の携帯電話であり、離れた者と会話する事を可能とする。五十年ほど前、ジュマル王国でロストパーツを解析して作られた数少ない物だ。

青いカードは相手の声を伝え、赤いカードは自分の声を相手に伝える役割を果たす。

ただし、相手も同じ道具を持っている必要がある上、使う為には予めカードに使用者を登録する必要がある、登録した者同士でのみ会話が出来る。

使われている技術や材料が希少な為、一国の国家予算並みに高価なのが欠点といえるだろう。

これらの使用条件や価格の面から、使えるのは王家や貴族のごく一部の人間に限られている。しかし、この世界では画期的な発明で、今では世界中の国々で使われていた。

「ボアズ殿？ 私はパルフストのラディナだ。……そちらもか、こちらでも手が出せない状況だ。ただ、これは私の見解だが……奴らのロストパーツはそう長く使える代物とは思えん、使用者の魔力が尽きれば活動を停止すると思う。それまで手は出さない方が良好だろ

う」

ラディナの助言もあり、対抗する手段が無いキドニア軍の方も今は事態を静観する事に決まった。

戦場で動く者はもうほとんどおらず、持てる魔力をひたすら使い続けて互いを倒そうとするルーデンとダルゼットしか残っていなかった。

空中を進むルーデンの灰は、ダルゼットの周りをボールのように薄い皮膜で覆った黒い液体に阻まれている。

地を進むダルゼットの液体は、やはりルーデンの周りをボールのように包んで守っている灰に阻まれていた。

が、灰も液体も少しずつその動きが弱まり、体積が減りつつある。ラディナの読み通り、二人の魔力が減るのに比例してロストパーツの力が弱まっているようだ。

もはや、どちらの魔力が先に尽きるかの持久戦の様相を呈し始めていた。

「……ふーむ、あの二人の力では、ここまでのようじゃのう」

膠着状態に陥ったルーデンたちを眺め、老人が呟いた。

横に立ったゼウルが同意するように頷く。

「その様ですな……そろそろ戻りますか？」

「ここで終らせては面白くなかろう？ あの世界人の力も見ておらんしのう」

老人は不気味に笑うと、幾つもの指輪を嵌めている右手を持ち上げる。

指輪の一つが怪しく光ると、そこから小さな弾丸のような、白い光の玉が放たれた。

それは緩やかな弧を描き、ルーデンとダルゼットの持つロストパーツへと吸い込まれるように消えていった。

「さて、どう出るかのう？ 異世界人の小僧よ……」

「何だ……？」

竜矢は戦場から離れた山の中腹から飛来した、小さな何かに気が付いた。

それはルーデンとダルゼットのボール状の結界を難無くすり抜けると、それぞれのロストパーツに吸い込まれていった。

「どうかしたか？ リュウヤ殿」

「姫さん、今の気付いたか？」

「いや……、何の事だ？」

「わしにも見えたぞ、何かがあの山からロストパーツに向かって飛んで行ったな」

ラディナは不思議そうな顔をしたが、側にいたスーニアが竜矢に同意して山の方を睨み付けた。

そして、唸り声を上げて言った。

「リュウヤ！ 奴じゃ！ あの魔術師があそこにおるぞ……！」
「なに……！」

スーニアの目は、自分と竜矢を苦しめた憎むべき敵の姿を捕らえていた。

竜矢もスーニアのしている山の方を見たが、距離が離れているので人が居るのかどうか分からない。

竜矢は魔術で視力を強化してもう一度見ると、老魔術師と取り逃がした邪教徒の三人が居るのを確認した。

「あのジジイ……！ 何であんな所に居るんだ？ それにあの三人まで……」

「リュウヤ、そんな事はどうでも良からう。今なら奴らをまとめて捕らえられるぞ！」

「そうだな、行くか！ ……ん？」

飛行魔術で飛び出そうとした竜矢は、戦場に起こった異変に気が付いた。

弱くなっていた筈のルーデンたちのロストパーツの力が、再び強くなっていたのだ。

灰と液体の動きが激しくなり、戦場となっている平原を飲み込むようにする勢いでその量を増していく。

灰色と黒が大きな音を立てながら渦を巻き、もうルーデンたちの姿も見えなくなってしまっていた。

「これは一体……何が起きているんだ……？」

この光景を見て、ラディナが呟いた。

竜矢は脳内を検索し、この現象に該当する情報を調べてみる。

その結果は……。

「ヤバイぞ……！ ロストパーツの力が暴走してやがる……！」

竜矢の言葉に近くにいた全員が驚愕し、恐怖の表情を浮かべた。

ソルガ帝国の時代、使われたロストパーツが暴走して多大な犠牲者が出たという昔話は、教訓的な物として軍人ならば殆どの者が知っている。

近年でも発見されたロストパーツが暴走し、家を丸ごと吹き飛ばした等という事が時々起こる為、ロストパーツは国によって厳重に管理されているのが普通だ。

それが二つも、目の前で暴走を開始しているのだ。

「クッ……！ 全軍後退せよ！ 急いでこの場から出来るだけ離れるのだ！ 逃げ！ キドニア軍にも暴走の事を伝えねば……！」

ラディナの命令に従い、討伐軍が後退を開始する。だが、一万という人数の多さが災いしてゆっくりとしたものだ。

ラディナの連絡で暴走を把握したものの、キドニア軍も同じ状態のようでその動きは遅い。どちらの軍もその後方では状況を完全に把握しきれていないのが、遅くなっている理由の一つだ。

だが、暴走の範囲は広がる一方であり、既に平原は八割ほどが渦に飲み込まれている。その早さも勢いも、加速度的に上昇しつつあった。

このままでは、両軍の後退が間に合わずに飲み込まれてしまいかねない状態だ。

「あのジジイの仕業かっ！？ このままじゃマズイな……！」

竜矢は意を決してラディナたちの方を向いて言った。

「俺が暴走を食い止める！ その間に安全圏まで撤退してくれ！」

「リュウヤ殿！？ いくら貴公でも……！」

「大丈夫だよ、スーニアも一緒だ……だろ？」

「無論じゃ」

竜矢の言葉に、スーニアは即座に返事をして頷いた。

「パルファストの姫よ、迷っておる暇は無い筈じゃぞ。急ぐが良い」

「っ……！ 分かった、貴公らの力を信じるぞ……！ 全軍、全速
後退！」

「キドニア軍の方にも俺らの事を伝えといてくれ。行くぞ、スーニア！」

「うむ！」

飛行魔術で渦に向かって飛びだした竜矢の後を追ひ、スーニアも地を駆け出して行った。

「……二人が向かった事を、キドニア軍に伝えなくてはな……」

二人の姿を見送ったラディナは、心配しながらも奇妙な高揚感を
感じていた

彼らがまた、歴史に残る大きな事を成し遂げるのではないか……。
そう思ったからだった。

22話..『オリジナル』(前書き)

厨二病的な言葉を考えるのって、結構難しいですね W

22話..『オリジナル』

「な、んだ……？　せ、制御が効かない……！？」

「ど、どうなっておるのだ……！　ち、力が押さえられない！？」

ルーデンとダルゼットは、突然自分たちのロストパーツの制御が出来なくなったのを、必死に押さえ込もうとしている。

だが、その努力は全て徒労に終わろうとしていた。

ロストパーツからの力の噴出は激しくなる一方であり、もはや嵐といっているレベルの魔力の暴風に彼らの身体は蝕まれていく。

「お、おおお……！　ル、ルディヴァール様！　い、今こそ加護を！　我を守りたまええ！」

ルーデンの懇願は、誰の耳にも届かずに嵐に飲み込まれた。

「わ、私は……！　手に入れるのだ……！　パルファストを……ラディナ姫を……この大陸を……！　そして、私を嘲笑った者たちを地獄に、お、落としてやる……のだ……、あ、あああ、ああ……！」

ダルゼットの叫びもまた、虚しく嵐に掻き消された。

二人の身体は崩壊していき、肉も、骨も、消滅した。

残ったのは、二人の欲望と野心を飲み込み、煽り立てたロストパーツのみ。

それは、持ち主を滅ぼしてもなお、その力を止めようとはしなかった。

「スーニア！俺が渦の中心に穴を開ける！そこに飛び込むから、お前は結界を張って穴を維持してくれ！」

「承知じゃ！」

竜矢は両の拳を腰の位置で握りしめる。その拳の前に小さな魔術式が出現した。

呪文を唱えつつ、両拳を組み合わせると渦の中心に向けて突き出す。

重なった二つの魔術式が融合し、さらに複雑な一つの大きな魔術式となって竜矢の前面に展開した。

「焼き尽くせ、火神の咆哮！荒れ狂え、白銀の嵐！『銀炎の剛嵐』！！」

その瞬間、驚異的な熱量を持った銀色の炎が、竜巻のように拳から放たれた。

渦の中心に激突した炎は灰と液体を瞬時に焼き尽くし、そこに直径五メートルほどの空間を空間を作り出した。

「よっしゃ、今だ！」

「ルオオオオオオッ！」

渦に駆け寄るスーニアに近寄った竜矢の声に、スーニアが叫ぶ。スーニアと竜矢を包み込むようにして、黄金の結界が現れた。

金色に光り輝く薄いガラスのような結界に包まれ、二人は穴の中心に向けて飛び込んで行った。

「今のは……！ 火と風の魔術の、最高奥義の一つ……！」

後退する軍の殿を務めながら、空気を震わせた銀の炎を驚きと共に見つめ、ラディナは呟いた。

火の魔術によって生み出された炎の威力を極限まで高め、それに風の魔術で生み出した強力な風をぶつけ、その威力を何倍にも引き上げる。

火と風の複合魔術にして、最高奥義の一つだ。

彼女は以前、師であるイーヴェンが使うのを見た事があった。その時は魔術修行の一環で見せてくれたので、小さな子供サイズという小規模なものだった。

それでも、その術で重装甲歩兵の鎧が一瞬で焼き尽くされ、消滅したのだ。

竜矢の生み出した巨大な竜巻レベルのあれは、一体どれだけの熱量を持っていたのかと想像してラディナは身震いする思いだった。

「ラディナ様！ ここは危険です、早くお引き下さい！」

「……先に行け、私は最後に行く」

駆け寄ってきた兵士に、ラディナは振り向かずに応えた。

「ラディナ様！？ な、何を言っているのですか！」

「私の命の恩人があそこで、我らの為、我が国の為に奮闘しているのだ！ 王家の者として、それを見届けずに引く事など出来るか！
！」

そのままの姿勢で声を荒げたラディナに、兵士は二の句を告げる

事が出来ずに動きを止める。

その狼狽する気配を感じ、今度は落ち着いた声で言った。

「……安心しろ、私だけなら魔術で身体強化して素早く逃れる事が出来る。本当に危なくなる前にちゃんと逃げる」

「ならば、我らもお供いたしましょう」

いつの間にか、ラディナの背後に近衛騎士たちがやって来ていた。

「……ダルスたちか」

「はい。姫、私たちなら問題有りますまい？」

パルファスト近衛騎士団団長ダルスと、十人の近衛騎士たちが一斉にラディナに軍隊式の礼を執って並んだ。

近衛騎士団の大半は、王宮で王の護衛に付いている。彼らはその中からラディナの護衛として選ばれて来た騎士たちだ。

キドニアの近衛騎士たちもそうだが、彼らは家柄のみならず、武術や魔術の力が優れた者のみになれるエリート集団である。この場にいる全員、ラディナには及ばないが魔術師として身体強化の魔術をつかう事が出来る者たちだ。

身体強化の魔術自体はそれほど難しいものではない。ただ、魔術師としての実力が低い者が使うと持続時間が極端に短くなる。

加えて、使用後の反動で酷い筋肉痛に襲われる為、武術と魔術を同時に鍛錬している者が主に使用している魔術である。竜矢が使った視力強化もその一つだ。

近衛騎士のようなエリートともなれば、その程度は難無くこなす実力者たちだ。

「……そうだな、好きにしろ」

「はっ。……聞いたとおりだ、姫様は我らがお守りする。お前たちは急いで後退せよ」

「わ、分かりました!」

ダルスに言われ、兵士は後退する軍勢へと紛れていった。

ラディナの後ろから、力と力がぶつかり合い、渦を巻く平原を見つめてダルスが口を開く。

「……凄まじい光景ですな……」

「……ああ」

ラディナは険しい表情のまま短く返事をする。その視線は、渦の中心で金色に光り輝く一点を見つめていた。

黄金の結界の中で、リュウヤは二つのロストパーツの方向に向けて両腕を伸ばし、探査魔術でその位置を探っていた。

だが、不規則に吹き荒れる力の奔流に、伸ばした魔術の力を乱されて中々位置を掴む事が出来ずに苦戦していた。

「ぐっ……! こ、こりゃ結構キツイな……!」

「リュウヤ、急げ! わしの力も長くは持たんぞ……!」

竜矢と背中合わせて結界を張っているスーニアも、さすがに辛そうな声を上げる。

いくらマナウルフィといえど、この力の渦の中で長時間結界を張り続ける事は不可能だ。

「分ーかってるって……ん……？ よーし、見つけたぜえっ……！」

渦の中で、激しく噴火を続ける火山のように力を吐き出す、二つのロストパーツをようやく発見した竜矢が笑う。

「壊せそうか？」

「今、調べてみる……駄目でも何とか止められれば……」

そこまで言った竜矢の表情が厳しくなった。

「ロストパーツの核になってる宝石に、何かが取り付いてるみたいだ。こいつが暴走の原因らしい、けど……？ え……駄目だ！」

竜矢が急に大きな声を出した。その顔は苦々しく歪み、齒軋りの音が聞こえてきそうだった。

「どうした、リュウヤ！？」

「取り付いてるのは、ロストパーツだ！」

「なんじゃと！？」

竜矢が探索魔術で調べたそれは、小指の爪ほどの大きさしかない、小さな蜘蛛のようなロストパーツだった。

「あの蜘蛛みたいなロストパーツが、核の宝石から力の制御権を横取りしてるんだ。おまけに魔力の供給源になってやがる！ あれは……『ロストパーツを暴走させるロストパーツ』だ！」

「むう……。ならば、そいつを破壊すれば暴走は止まるのではないか！？」

「それは駄目だ！ 蜘蛛は破壊された瞬間に魔力を一気に注ぎ込んで、強制的に暴走を進ませる！ そうなればこの一帯は何もかも一瞬で吹っ飛ばされて、クレーターになっちまう！」

蜘蛛の持っている魔力の総量は相当な物だ。それが残らず使われれば、撤退を続けている両国軍の内、それぞれ半数は飲み込まれてしまうだろう。

約一万の人間が、一瞬でその生を終わらせてしまう事になるのだ。

「本体を破壊しようにも、蜘蛛が攻撃を察知する結界を張ってやがる。本体を破壊できるだけのエネルギーを持った攻撃が結界に接触した時に、同じように魔力を注ぎ込んで暴走させるようになってる！」

「それでは、手が出せんではないか！ どうするのじゃ、リュウヤ……！」

「方法はある……。超高速、高威力の攻撃を叩き込んで、本体か蜘蛛か、それか両方同時に破壊するんだ。魔力を注ぎ込む暇も与えずにな」

「……出来るのか？ 只でさえ今のお前は、大規模転移魔術を連続行使して弱っておるのじゃぞ。この力の渦を貫いて、そんな強力な攻撃を……しかもそれが二つじゃ。同時にやらなければ力のバランスが崩れ、片方のロストパーツの力がどちらかの軍勢を襲う事になるぞ」

スーニアの言うことは、正しくその通りだった。

二つの力が危うい拮抗を保っている事で、力の渦が発生しているのだ。

一瞬でもどちらかが先に破壊されてその力を失えば、残された方のロストパーツの力が一気に膨れあがる事になる。

そうなれば、それに近い位置にいる軍勢が危険なのは明白だ。

「魔術だとキツイな……。今の魔術じゃ威力がどうしても負けちまってる」

現在、世界中で使われている魔術は全て、ロストパーツが作られた時代よりも後に生み出されたものだ。

そして、その技術はかつての時代に追いついてはいない。

この世界で、強力なロストパーツの力に対抗しうる魔術は、ほぼ存在しないと断言していい。

先ほど竜矢が使った『銀炎の剛嵐』にしても、彼の魔力が強大だからこそあれだけの力を発揮したのだ。

仮にラディナが全魔力を使って同じ魔術を使ったとしても、せいぜい人間を百人ほど飲み込む規模の物を作るのが限界だ。

それでは、この力の渦の外側を、ほんの僅かに削る程度がやっとだろう。

スーニアの脳裏に、竜矢を連れてこの場を逃れる事がよぎる。だが、それを掻き消すような、壮絶な笑みを竜矢は浮かべた。

「けど、やるしか、ねーだろ……?」

それは自棄を起こしたような笑みではない、自信に満ち溢れた、見る者を安心させる頼もしき笑みだ。

「多分、あのジジイはまだあそこで高みの見物してやがるんだろうが……。度肝抜いてやるぜ……。使うぜ、『オリジナル』！」

「『オリジナル』か……。！ 確かにあの力ならば……。だが、問題はお前の体力じゃ……。持つのか？」

「正直、ちっとばかりキツイけどな。でも……。見せてやんぜ、地球人の力をよ！」

竜矢は伸ばしたままだった両腕に力を込める。

広げた両手の先に、直径三メートルは有ろうかという大きな魔術式が、連続して三つ、重なるように出現した。

ただ、それは通常の魔術式とは大きく異なっている点があった。

本来、魔術式には“力有る文字”である魔術文字が使われている。単語であったり、一文字だけだったり、あるいは文章として刻まれて魔術式を構成している。

竜矢が今、作り出した魔術式には別の物が使われていた。

ザルフルドやイーヴェンのような高い実力を持つ上位の魔術師が見ても、全く理解できないであろう不思議な文字。

それは日本語だった。

漢字、ひらがな、カタカナが入り交じった、全くの新種にして、別種の魔術式。

これは、竜矢オリジナルの魔術式であった。

そして、合わせて六つの魔術式の内、一番内側の魔術式が赤く光る。

竜矢は呪文を唱え始めた。

「『弾丸を形成、小さく、硬く、強い弾丸を』……!」

この言葉もまた、この世界の言葉ではなかった。

竜矢にとって、忘れようにも忘れられない故郷の言語。

それは、日本語で唱えられた呪文だ。

日本語で構成された魔術式と呪文、これが竜矢の『オリジナル』魔術だったのだ。

日本語には“言霊”ことだまという概念がある。

言葉には元々力があり、悪い言葉を使えば悪いことが起こり、良い言葉を使えば良いことが起こるという。

この知識そのものはゲームやコミックから得たものだが、それが『オリジナル』を生み出す切っ掛けとなった。

竜矢はスーニアとの生活の中で、試しに日本語で魔術を発動してみた事があった。

魔術式を解析し、魔術文字を日本語に置き換え、言霊を意識して新しく構築した。

例えば、単に『火』と刻まれている箇所を『紅蓮の炎』、『流れる』という箇所を『激流の如く』といった具合にだ。

他にも、電子回路やプログラミングの基礎的な知識を応用し、魔力の流れを一部だけ別方向の文字に流して効率化を図ったり、並行処理を行ったりした。

その結果は驚くべきものとなった。

竜矢の魂に染み込んでいる日本語だからなのか、効率化が大きな効果をもたらしたのか、あるいはその両方か。

小さなロウソク程度の炎を生み出す火の魔術で、大型バス二台分ほどの大きさの炎を作り出してしまったのだ。

あまりにも大きな効果を発揮した為、竜矢はこの『オリジナル』を使うのを余程の事が無い限り使わない、と決めていた。

その封を、今、解いた。

呪文と共に、魔術式の中心に力が集まっていく。

それは膨大な魔力を凝縮した、小さな白い、円錐形の物体となった。

地球人ならば大抵の人間が知っているであろう、弾丸のような形をしている。

「『螺旋を刻め』……！」

物体の表面に、溝が刻まれていく。

グルグルと、頂点から螺旋状に溝を刻まれた物体は……小さなドリルだ。

最初の魔術式は役目を終えたのか、光を失い消滅した。

ドリルと化したそれはゆっくりと前進し、二番目の魔術式の中心で停止する。

「『回れ、全てを穿^{うが}つ螺旋となれ』……！」

魔術式が赤く光り、物体が回転し始めた。

回転の速度は上がり続け、最終的に分速で約三千回転にまで達した。これはピークに達したライフル弾の回転速度に匹敵する。

この魔術式も、光を失って消滅した。

ドリルは甲高い音を上げて結界内の空気を震わせながら、またゆっくりと進むと、最後の魔術式の中心で止まった。

「『我は放つ、最硬にして最速の、最強の弾丸を』……!」

最後の魔術式が強い光を放つ。

超高速回転を続けるドリルに、魔術式から稲妻のような力が纏わり付いた。次第にドリルは白から赤へと染まっていく。

そして、竜矢は最後の呪文を唱えた。

「『神魔^{しんま}を貫く異界の銃弾』!」

その瞬間、二つの深紅の弾丸が放たれた。

弾丸の瞬間最大速度は、秒速約六キロメートルにもなった。これは地球で研究されている電磁^{レールガン}投射砲の、開発初期の物の速さとほぼ互角という驚異的なものだ。

稲妻を纏った二つの弾丸は、灰と黒の力の渦を穿ちながら難無く貫き、それぞれ標的となった二つのロストパーツを直撃した。

蜘蛛のようなロストパーツは、結界に弾丸が触れた瞬間に魔力を注ぎ込もうとしたが、弾丸の速度は到底間に合うものではなかった。

もし、この蜘蛛に意志があったとしたら、自分の身に何が起こったのか理解する事は出来なかっただろう。

結界に弾丸が触れたと察知した時には、自分もろとも取り付いていたロストパーツが破壊されていたのだから。

蜘蛛と腕輪は貫かれただけでは済まず、莫大な破壊エネルギーを持った衝撃波に襲われて跡形も無く粉々にされた。

瞬間、蜘蛛の中に貯蔵されていた魔力が周囲に撒き散らされる。

高い濃度の魔力は大気と反応し、粒子となって白や金銀の光を放

ちながら消えていく。

同時に、灰と黒い液体も溶け込むように消えていった。平原は力の影響で挟られて、少し窪地になってしまっている。その中心に竜矢たちの姿があった。

「はあっ……はあっ……。ふう、おっしや、成功だ……！」

「やったのう、リュウヤ。さすがは我が主、よ……っ？」

スーニアが振り返り、竜矢を見た。

その目が驚きで見開かれる。

「リュウヤ、鎧が……」

「ん？ 鎧がどうした？」

竜矢も振り返り、スーニアを見ようとした。

その時、鎧のあちこちから、ビキとかベキとかいう音が響いた。

「あら？」

竜矢がその音を不思議に思った瞬間、鎧の全身に亀裂が入り、碎け散ってしまった。

そこには、人間大の赤いオーラの中に入った竜矢がいた。

竜矢はオーラを鎧の大きさに合わせて展開し、鎧を着込むようにして動かしていたのである。

「ありゃ……」

「……どうやら、リュウヤの力に鎧が耐えきれなかったようじゃのう」

オーラを消し、スーニアの頭の上に移動してちょこんと座り込ん

だ竜矢は、周りを見て困った顔で言った。

「あゝ、ラディナ姫とかボアズさんとかこっちに来てるよ……。説明、面倒だなあ……」

「仕方あるまい、先延ばしにしていたのはリュウヤじゃろう」

「……………」

「……リュウヤ？」

「スーニア、仕切り任せた」

「なにっ!？」

そう言うと、竜矢はゴロンと大の字に身体を寝転ばせた。

やはり激しく疲労していたのだろう、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきた。

スーニアは長めの溜め息を一つつくと、伏せの姿勢で身体を休ませて呟いた。

「……まあ良からう、あの魔術師たちも退散したようじゃな」

横目で老魔術師たちが居た山の方を見る。そこに彼らの姿はもう無かった。

「今はゆっくり休むといい、異世界の小さな我が主よ」

駆け寄ってくる連中にどう説明を始めるかを考えつつ、スーニアは優しい声で静かに呟いた。

22話..『オリジナル』（後書き）

レールガンの速度とか弾丸の回転速度とか調べたり、呪文とか考えてたら時間掛かってしまいましたorz
作者は科学とか物理とか苦手です、というより無知ですw 間違いがあったら突っ込んで下さい。

23話：謀反未遂の後始末（前書き）

二国のクーデター編、これにて終わりです。
そして、次への繋ぎのお話。

23話：謀反未遂の後始末

「たまげたわい……」

老魔術師は静かに言った。

ゼウルたちが拠点としている古代遺跡に、老魔術師たち四人の姿があった。戦場から転移魔術で移動したのである。

竜矢が使った『オリジナル』魔術に、彼は大きなショックを受けていた。

彼は常人の何倍もの時間を生きてきた。

これまでの長い人生の中で、あのような内容が全く理解出来ない謎の魔術に出会ったことは無かったのだ。

「大教祖様……異世界人が使ったあの魔術は一体……」

ゼウルが掠れた声で問いかける。

彼もまた、『オリジナル』魔術に度肝を抜かれて半ば茫然自失としていた。

「あれは、あ奴の世界の言葉で作られた魔術じゃろうな」

「異世界の言葉……」

「じゃが、その言葉はわしらの使う魔術文字を遥かに凌ぐ力を持っておるようじゃのう。わしは生命力の強い世界の住人を選んで強制召喚したんじゃが、どうやら強いのは生命力だけでは無かったようじゃ。どれだけの歴史を持つ世界なのか分からんが、大したもんじやわい」

老魔術師は淡淡とした声で語る。

だが、その表情は嬉しくてしょうがないといった風に、皺だらけの顔に笑みを浮かべていた。

それを訝しげに見るゼウル。

「それに、単に言葉を置き換えるのではなく、魔術式その物を改良したようじゃな。その知識、発想力……この世界の住人には無いものじゃ。ロストパーツを生み出した超古代文明に通じるものを感じるわい。ゼウルよ、あの力を手に入れば、怖いものなど何も無くなるのう？」

「そ、それはそうですが……」

あれだけの力を持つ異世界人を相手に、どうすればそんな事が出来るというのか。

「楽しみじゃよ、その時がのう。ふおふおふお……」

ゼウルの疑念をよそに、老魔術師は笑みを崩さないままだった。

ルーデンとダルゼットの謀反が未遂に終り、一ヶ月ほどの時間が経った。

二人の屋敷から謀反に荷担していた者たちの名簿や血判状が見つかり、両国では貴族たちを中心に混乱が生じていた。

有力貴族の半数が関与していただだけ有り、捕らえられる者や他国に亡命しようとする者、自分から名乗り出て減刑を嘆願する者が続出したのだ。

中にはルーデンたちに弱みを握られて仕方なく仲間になっていた者もあり、それぞれに応じた刑罰を与える為に裁判所は連日フル稼働の状態だ。

しかし、亡命を望んだ者たちは近隣諸国のどの国からも、受け入れを拒否された。

この戦乱の時代、本当ならば他国の情報を持っている貴族の亡命者は、むしろ歓迎されてもおかしくない。

それが受け入れられなかった理由は、竜矢とスーニアだ。

戦場でキドニア、パルフストの両軍に姿を見られた二人は、ひとまずパルフストの城へと行くことになった。

勿論、ボアズも恩人である二人をキドニアに連れ帰る事を主張したのだが、単純に距離が少し近かった事を理由にスーニアがパルフスト行きを許可したのだ。

竜矢が疲労から目を覚まさなかったせいもある。

ラディナとボアズは竜矢たちの事を口外しないよう、兵士たちに厳重に禁じたが人の口に戸口は立てられない。

両軍が帰還してすぐに、キドニアとパルフスト両国の危機を救う為、妖精と神獣が現れた、という噂が国民の間に流れたのだ。

軍に紛れ込んでいた他国の間諜たちもその情報を持ち帰った為に、信憑性が高い噂として国内外に広く知れ渡ることになった。

その結果、キドニア、パルフストと敵対関係になる可能性を持つ国は一時、事態を静観する事に決めたのだ。

神々の子孫と言われる妖精と伝説の神獣マナウルフィ。

この二者を好きこのんで同時に敵にしたがる国は無かったという事だ。亡命者を受け入れなかったのはこれが理由である。

亡命を考えた貴族たちは残らず捕まることになり、財産と領地を没収されてお家お取り潰しとなった。

進んで協力した者たちは、極刑となって処刑台の露と消えていった。

そうでない者たちは財産の一部没収や、貴族としての身分を降格、または剥奪されて平民に落とされた。

これでも処分としては、破格の温情を込めた裁きといえるのだ。

何しろ一国の転覆を謀った大犯罪である。本来ならば、一族郎党同じ処分を受けてもおかしくはない。

一族の責任を問うて処分するのは、他に似たような犯罪を犯さないように見せしめ的な意味も有る。権力の維持としては、よく使われる方法だ。

そうならなかったのは、竜矢のこの一言が原因だった。

『いくら血族だからって、罪の無い者まで処分するのは俺は好きじゃないなあ……』

竜矢の地球人としての感覚では、それがどうしても納得できなかったのだ。

しかも、今の竜矢は神獣を従えて二国を救った英雄だ。

レグリオスとクロフォードは伝心カードで極秘会談を行い、竜矢の機嫌を損ねないようにする為、今回の温情判決となったのである。

そうとは知らぬ国民たちの間では、二国の王は情に厚い御方だと評価が高まり、支持率がアップしたのだが王たちにとっては嬉しい誤算だった。

ルーデンたちが使ったロストパーツの出所については調査中だが、あまり芳しくない。

本体が粉々になってしまった為、情報が無いに等しいのだ。

逃がした邪教徒三人と、老魔術師の事は竜矢の召喚の事も含め、全て伝えてある。何か分かればすぐに竜矢たちにも伝えて貰う事になっている。

そして、竜矢とスーニアはどうしているのかというところ……。

「そうか、人質になってた御者さんの家族は無事だったんだ」

「ええ、男の子と女の子の幼い兄弟でして、ルーデンの命令で殺すように言われていたのを密かに匿っていたそうです。そうしている内に情が移ったらしく、二人を引き取りたいと申し出てきました。元々その貴族は弱みを握られていて、やむなく命令に従ったのだという事と、二人を助けていた事を考慮して財産のごく一部を没収しただけで終わりました」

「弱みとは何だったのじゃ？」

「五年ほど前に、幼い我が子を病で失っているのです。奥様はその子を産む時にお亡くなり……。子供を救うのに高額な薬が必要だったのですが、流通している量も少なく、ルーデンに借金をして非合法の闇ルートから購入したのだとか……」

「なるほどねえ……辛かったろうな」

「でも、子供たちを引き取る事が出来てとても喜んでいましたよ。その兄弟もよく懐いていましたし」

「そっか……。良い家族になれそうだな。ウンウン、良かった良かった」

ここはパルフスト城のラディナの部屋である。

竜矢とスーニアは客室を一室与えられ、そこで生活していた。

何しろ二つの国を救った、伝説の神獣を従える異世界人の英雄である。クロフォードからは『良ければ一生ここで暮らしてはいいかか?』とまで言われているのだ。少なくともクロフォードはかなり本気で言っている。

ラディナも是非そうして欲しいと言っているのです、先の事はともかく、ひとまずの住処として厄介になる事に決めた二人であった。

しかし、キドニアとしても二人を放っておく手はない。

恐らく、大陸どころか世界規模で最強の力を持つ二人なのだ。

味方に付ける事が出来れば、ソルガルド帝国やジュマル王国のような大国に軍事力で大きく劣る二国にとってこの上もない福音となる。

そこで、二人との関係を強化する為に、ミルファルナと侍女のシーナがパルフスト城に暫く滞在する事になったのだ。

彼女はレグリオスから、『出来る事なら、二人を我が国に連れてきなさい』と言われている。

もっとも、竜矢もスーニアも自分たちの立場を理解しているので、簡単に利用される積もりなどさらさら無いのだが。

この事は王たちよりも、その力を間近で見た二人の姫の方が良く分かっており、竜矢たちに『いつでも好きなように行動してくれて構わない』と伝えている。

この二人を縛る事など、誰にも出来ないと分かっているのだ。

ちなみに、シーナとはミルファルナの護衛団に同行し、ボアズたちと一緒に捕まっていた侍女の一人である。

「皆様、シェリカ様がお見えになりました」

「こんにちわー、お菓子買ってきましたよー」

そして、シェリカはほぼ毎日、町でお菓子や名物料理などを買い込んで二人へ送り届ける事が日課になっていた。

竜矢たちは一段落したら美味しい物の食べ歩きでもしようかと計画していたが、二人の事は今は重要機密扱いになっていて自由に歩けないのだ。

これは、他国の間諜の目を眩ますのが目的だ。

信憑性が高いとはいえ、二人の事は今は噂のレベルに留まおおやけっている。その存在が公に知られる事になれば、熾烈な引き抜き合戦が行われるであろう事は想像に難くない。

他国の勢力が大量に国内に入り込めば、表面上は分からなくても裏側でどれだけの謀略が繰り広げられるか分かったものでは無い。

国内が安定するまで、存在を秘密にしたいという王二人の願いを竜矢が了承したのだった。

「ちよいど良い頃合いだな。リーラ、皆に茶を入れてくれ」

「はい、姫様」

「私も手伝いますわ」

「では、シーナさんは食器をお願いします」

テキパキと茶の準備をする二人を見て、竜矢はいつも感心する。
動きに無駄が無く、流れ作業のように滞る事がないのだ。

普段の仕事ぶりを見ても、ラディナが飲み物を欲しがりそうになる少し前に用意を済ませていたり、ミルファルナが捜し物をするとき、あっさりとそれを見つけ出したりする。

実に有能な侍女たちであった。

「うーん、プロだ」

「はい？」 「どうかしましたか？」

竜矢の呟きが聞こえたのか、侍女二人が彼を見る。

「いや、手際良いな〜と思ってね。うん、二人とも良い嫁さんになれるわ」

一瞬キョトンとした顔をした二人が、音が出そうな勢いで顔を赤くした。

「そ、そんな、私など……」

「い、いやですわ、リュウヤ様ったら、もう、ご冗談を……」

「いや、冗談じゃなくて本心なんだけど……」

「リュウヤ殿、二人をあまりからかわないでくれ。ほら、照れてティーカップに茶葉を直接入れている」

「はれっ!?!」 「ひゃっ!?!」

ラディナの言葉に正気に戻ったのか、慌てて茶葉を元に戻す侍女

たちだった。

「うーむ、からかった積もりは無かったんだが……」

「リュウヤ様に言われたから照れたのだと思いますよ？」

「ひ、姫様っ！」 「ミルファルナ様、そ、それは……！」

クスクスと笑いながら言うミルファルナに、二人は更に顔を赤くする。

「我が主には、そういう事は中々通じんぞ？ とにかく鈍いからの」

「その様ですわね……」

スーニアの半ば諦めたような声に、ちらりと竜矢を見て同意するミルファルナ。

訳が分からない竜矢は首を傾げるばかりである。

「今日はですねー、リンプルの実を生地に入れて焼いてあるクッキーですよー」

茶の並んだテーブルの上で、シェリカが持っていた袋から菓子を取り出した。

「リンプルの実を？ あれは酸味が強くて食用には適さないと思っていましたか」

リンプルとは地球のカリンに似た果物で、シーナの言うように酸味が強くてあまり食べられる事はなく、果実酒に使われる事が多い。

「何でも、時間を掛けてじっくりと特製スープに漬け込んだんだとか。それを更に天日^{てんび}で十日ほど干すと、熟成してほどよい酸味と甘

さが出るんだそうです。どちらかというと、大人向けのお菓子ですねー」

「へー、どれどれ……ング、ムグ……」

竜矢が一抱えもありそうなクッキーを両手で持って齧り付く。

何しろ身体のサイズがサイズなので、どんな食べ物でも抱きかかえる事になるのだ。

最初はラディナやミルファルナが適度なサイズに切ったりしていたのだが、竜矢が『面倒だからそのままで良いよー』と言って、そのまま齧り付くようにして食べるようになった。

その光景を見て女性陣が思ったのは、

（か、可愛い……！）

である。

例えるなら、ハムスターやリスが大きな餌を懸命に齧って食べているようなものか。

実に“ラブリー”な光景なのだ。

「あ、結構美味いわ、これ。スーニアも食ってみ？」

「うむ、シェリカ」

「はいどうぞ」

シェリカがスーニアの口に、半分に割ったクッキーを持っていく。それを口にくわえると、スーニアは味わうようにゆっくりと食べた。シェリカはすっかりスーニア付きの侍女のようになっていく。

本人も悪い気はしていないようなので、竜矢も特に何も言わないようにしていた。

「ふむ、悪くないの。動物の物は使っておらんし、わしにも食べられる」

「良かった」

スーニアの言葉に、シェリカは満面の笑みをこぼす。

「それにしても、まさかスーニア殿が動物の肉を食べられないとは……。神獣であるが故、といった所ですか」

「まあそうじゃな。わしが食べる事が出来るのは果物や野菜だけの、動物からとった油や骨を煮込んで作ったスープなども駄目じゃ」

ラディナの言葉に、スーニアは次のクッキーを頬張りながら答える。

マナウルフィは『大地の獣王』や『獣神の使い』等とも呼ばれる事があるが、肉食ではなく草食なのだ。

もつとも、何も食べなくても自然界の魔力を吸収して生きる事が出来るのだが。

他の魔獣でこのような力を持っているのは少なく、完全に魔力の吸収だけで生きる事が出来る魔獣はいない。マナウルフィが神獣と呼ばれる理由の一つである。

「そーいや、それで最初は苦労したっけな……」

カップ代りのミルクピッチャーに入った茶を飲み干して、竜矢が苦笑いしながら言った。

全員が一斉に竜矢を見る。

「リュウヤ様？ ご苦労なさったとは？」

「ん、ああ、スーニアにメシを作ってやった事があったんだけど、その度に吐いちゃってさー」

「あれはしょうがなからう、お前も知らなかったのじゃし、わしもあの状態だったしの」

「まあな……。大して時間は経ってねーけど、妙に昔の事のように感じるな」

「フ……。そうじゃの」

何やら自分たちの世界に入ってしまった二人を、ラディナたちが見つめる。

それに気付いた竜矢が頭を掻きながら微笑んだ。

「丁度良いから話しちまおうか、俺とスーニアの出会った時の事を。どうだ？ スーニア」

「……まあ良からう、わしとお前の繋がりを教える良い機会じゃ」

スーニアの同意を得て、竜矢は静かに語り始める。

それは約半年ほど前、竜矢と老魔術師の戦いが終わった直後の事からだった。

23話：謀反未遂の後始末（後書き）

という訳で、次回からは予定通り竜矢とスーニアの過去話編になります。

過去といっても、半年程度なんですけどねw

24話：竜矢とスーニア その1（前書き）

ほんのちよっぴりエッチイ表現があるんですが……十五禁にした方がいいのかなあ……。

基準がいまいち分からん……。

24話：竜矢とスーニア その1

「だああああああっっ!! 待てっ! 待てっば!! 俺は食
いもんじゃないから!! 落ち着いてください、お願い!! たっ
……食ーべーなーいーでええええっ!!」

「わう……?」

竜矢を丸かじりしようとした少女が、その叫びに小首を傾げて口
から取り出した。

そつと竜矢を地面に降ろす。

「はあはあはあ……し、死ぬかと思った……! 食い殺されるなん
て嫌すぎる……」

竜矢は精根尽き果てたように、両手両足を地に付いて項垂れた。
と、何やら頭の上で鼻を齧るような声が聞こえてくる。

「あん?」

顔を上げた竜矢が見たのは、今にも泣き出しそうな少女の顔だっ
た。

「ひっ……うぐ……えうう……ひぐっ……」

「ぬう!? ど、どうした!?」

「すいた……おなか……しゅいた……」

「……あゝ……」

竜矢の治癒魔術で回復したのは良いが、その分、一気に空腹感に襲われてしまったようだ。

とはいえ、周囲一体は竜矢が魔力で吹き飛ばしてしまった為か、草木一本生えていない。当然、動物の姿など全く見えない。

食べ物はおろか、飲み水も近くにはない状況だ。

「弱ったな……ん？」

竜矢は自分の下の地面が土の感触ではない事に気付く。それは木の板だった。

今まで居た研究室の床板かと思ったが、よく見てみると鉄製の取っ手があり、人が入れる大きさに四角く切り込みが入っている。今まで倒れていた少女の影になっていて気付かなかったのだ。

「これもしかして……地下室の入り口か？」

「ずっと……わう？」

「ちょっと待っててな、保存食でもあれば良いんだけど……」

竜矢は宙に浮かぶと、取っ手を両腕で抱えてゆっくりと持ち上げる。

まだ魔力のコントロールに慣れていない為、不安定にへろへろとした動きだ。

苦勞して持ち上げると、思ったより明るい空間にハシゴが降りている。

降りてみると、はたしてそこは地下の倉庫のような場所だった。壁には魔術で作られた光を放つ石、『光魔石』（こうませき）が取り付けられていて中を照らしている。

六畳間ほどの部屋の中は整然としていて、竜矢と老魔術師の真下

にあった為か、爆発の影響をあまり受けていないようだ。

並んだ戸棚には毛布や油、食器等の生活雑貨が並び、幾つか魔力を感じる品物もある。

その一角には、干し肉や乾燥させた果物、塩漬けの魚などが入っている壺が置いてあった。

一際大きな壺の中には、野菜や生肉が丸ごと保存されていた。中に入ってみると、凍えそうなほど冷えている。

魔力の流れを感じる事から、どうやら魔術を使った冷蔵庫のようだ。

「おお、ラッキー♪」

竜矢はそこから皿と乾燥品の肉、魚、果物に生野菜と一通り持ち出して、少女の前に運んでいった。

「どうだ？ 食べそうな物、あるか？」

「あうう♪」

少女が何となく嬉しそうな声を上げた。

伸び放題の髪で顔がよく見えないのだが、どうも笑っているようだ。

干し柿のように乾燥させた果物を手に取ると、ゆっくりと食べ始める。

乾燥しているので固いのか、噛むのに少々時間が掛かっている。それを見た竜矢は倉庫からナイフを持ってきて、食べやすいようにスライスしてやった。

「わうう♪ あうう♪」

食べやすくなったのが嬉しいのか、少女の声が明るくなった。
喜んでるのが分かり、竜矢も微笑む。

しかし、少女が食べるのは果物と生野菜ばかりだ。

「……肉と魚は嫌いなのかな？」

「あう？」

竜矢の呟きに小首を傾げる少女。

その可愛い仕草に、まあいいか、と考えてしまう竜矢だった。

「……しかし、これからどうすっかなあ……」

いつまでもこの場所に居るのは得策ではない。あの老魔術師が戻ってくるかも知れないし、仲間でも連れてこられたら厄介だ。

まだ魔力のコントロールがろくに出来ない状態であり、次も上手く撃退できるとは限らないのだから。

竜矢は脳内の情報を探り、現在地や身を潜められそうな場所を調べてみた。

（……ここは……ジュマルとかいう国の東の外れか。荒れた岩山が続いている不毛の土地
……。なるほど、隠れて怪しげな事をやるには打って付けの場所だな）

更に情報を探り、ここから東に行った所に森がある事が分かった。

「森の中に川も流れてる……取りあえずこの森に行くか。問題はこ
の子が歩けるか……」

少女を見ると、満腹になったのか満ち足りた感じで竜矢をジッと見つめている。

その体は痩せ衰えており、とても自力で歩く事など出来そうに見えない。

「んー、さっき俺は自分のオーラというか……“気”みたいなものを人間大に固定できた……。あれが出来れば……」

竜矢は意識を集中し、自分の中にあるエネルギーを探してみる。すると、大きな力が脈動しているのが感じられた。

あの老魔術師によって植え付けられた魔力だ。

しかし、魔力はその源といえる更に大きな力……生命エネルギーの一部に過ぎなかった。

気やオーラ等と表現されるその力は、竜矢の想像を遥かに超える強大なエネルギーを内包していたのだ。

（あのジジイのせいなのか、それとも地球人の力がこの世界では、とんでもない物になるのか分からないけど……。扱いに気を付けないと、俺自身も滅ぼしかねんなーこりゃ……）

慎重に力を引き出し、それを自分の周囲に広げて人型への固定化を試みる。

それは思った以上に上手くいき、赤いオーラが光の人型となって竜矢を包み込むように展開していた。竜矢の身体は人型の胸の辺りで浮いている。

「よし、これならこの子を運ぶ事も出来そうだな」

「ひう……」

「ん？」

少女を見ると、また泣きそうな声を上げて小さく震えていた。

「ど、どうした？」

「ひう、ひう」

竜矢が近付こうとすると、少女はジリジリと後ずさる。
どうやら、赤い人型を怖がっているようだ。

「あああ、だ、大丈夫だから、怖くないぞ？　ほくら、ヨシヨシ……」

「ひう、ひう……？」

優しく声を掛けながら、そーっと頭を人型で撫でる。

少女は最初こそ身を縮ませて震えていたが、次第に落ち着きを取り戻していった。

人型が危険なものでは無いことが分かったようだ。頭を撫でて貰うのが気持ち良いのか、再び嬉しそうな声を上げた。

「わうー♪」

「ヨシヨシ、怖くないだろう？　ふう、やれやれ……。それじゃあ、使えそうなもんを運び出すか」

竜矢は倉庫の中を物色し、記憶を検索しながら魔術の掛かった道具や食料を片っ端から運び出し始めた。

記憶の中に亜空間バッグのことがあったのが幸いし、それらを全てバッグに放り込んだのだ。

「よし、水も少しあったし、これだけあれば暫く困ることねーだろ。」

行くとするか」

竜矢は少女を毛布でくるむと、抱っこして持ち上げた。重さはまるで感じない。人型で持っているせいもあるが、少女の身体が異常に痩せてしまっているのだ。

「……あのクソジジイめ……」

「あう？」

「あー、何でもねー。ちよつと辛抱しててくれな」
「わうゝ♪」

竜矢の優しい声に、少女が嬉しそうな声を上げる。それに竜矢も微笑むと、異世界の旅へと足を踏み出した。

歩き続けること約半日。

疲れをほとんど感じないので急ぎ足で、かつノンストップで歩いた結果、常人なら丸一日はかかる距離をこの時間で踏破してしまった。

目の前には、目的地の森の入り口が見えている。

「思ったより早く着いたなー。我ながら便利な身体になっちゃったもんだ」

「んう……？」

「起きたか？ もうちよつとで着くからな」
「わうゝ……」

道中退屈だったのか、少女は眠ってしまっていた。まだウツラウツラとしている少女を見て微笑むと、竜矢は森の中

へと入っていく。一時間ほど歩くと、小川が流れている開けた場所に出た。

更に周囲を調べると、小さな洞窟がある場所を発見した。

中は動物が先客として利用中でも無いようだったので、ここを仮の住まいとして使うことにした。

亜空間バッグから毛布を何枚か出すと床に敷き、そこに荷物を置く。

「まずは……この子の身体を洗ってやるか」

少女はお世辞にも綺麗とは言えない状態だ。

荷物から石鹸とタオルを取り出すと、竜矢は小川で身体を洗ってやるべく洞窟を後にする。

その途中、少女が目を覚ました。

「う……」

「お、今度はちゃんと起きたみたいだな。川で身体を洗ってやるよ、気持ちいいぞー」

「あう〜？ ……んう〜……」

「ん？ どした？」

少女が腕の中でプルルツと身体を小さく震わせた。

寒いのかな？ そう思った時、何かが人型の腕を濡らしていった。

「え？ ……あ、お漏らし……」

「ふゆ……おしっこ……」

「……今度から、漏らす前に言ってくれると嬉しいな……」

「あう？ わう〜♪」

分かっているのかいないのか、少女は嬉しそうな声を上げて竜矢を見つめた。

竜矢は髪の間から覗いた少女の瞳が、右目が金色、左が銀色というオッドアイだという事に気が付いて少し驚く。

しかし、今は身体を洗ってやる事が先決と、慌てて小川に向かうのだった。

「わふう〜♪」

「こらこら、動くんじゃない。……いやあ、この世界に石鹸があつて良かったわ」

小川で石鹸を使って少女の身体を洗うと、それはもう汚れがドンドン落ちていく。

下流で利用するかも知れない動物たちに心の中で謝りながら、竜矢は洗い続ける。

少女は水を浴びるのが気持ちいいのか、そんな事は全く気にしていないようだ。

（しかし……ガリガリだな）

骨と皮だけという表現がピッタリの身体を洗いながら、竜矢は老魔術師への怒りを感じていた。

と、彼女の首に嵌ったままの首輪に目が行く。

黒い大理石のような素材で出来たそれは、少女の身体には痛々しく見える代物だ。

竜矢は脳の情報を調べ、これがロストパーツという物だという事を理解した。

(……こいつは嵌めた者の知性を低下させ、身体の自由を奪う。その上、対になって指輪を嵌めた者へ、強制的に魔力を吸い取って与えてしまう……。って、なんつーろくでもない代物だ)

老魔術師は両手に幾つもの指輪を嵌めていた。その内の一つがこの首輪の対になっていたのだろう。

外してやりたい所だが、今の自分では勢い余って少女の身体を傷付けてしまいかねない。

申し訳ないと思いつつ、魔力のコントロールを練習し、必ず外してやると誓う竜矢だった。

そうこうしている内に、上半身を洗い終わると緊張で手を止めていた。

「あう〜？」

「……むう……こ、ここも洗わないとマズイよなあ……さっきお漏らししたし……」

年端もいかぬとはいえ、少女は少女。

まだ上半身の前面は耐えられたが、健全にして彼女居ない歴すなわち年齢の竜矢にとって、ここから先はある意味試練である。

「な、なるべく見ないように……ブツ!？」

「わう〜♪」

少女が急に川の中に仰向けで寝転んだ……足を広げて。

見まいと思っていた所を水越しにとはいえ直視してしまい、頭に血が上り、心臓が一気に加速する。

ちなみにこの小川の水はとても澄んでいて美しい。水底が見えるくらいに。

「ももも、餅を付け、オレ、いや、落ち着きたまえキミ。キミは口リコンじゃないだろ、そうだ、こんなもん地球なら、ネットでチヨイチヨイと検索すりゃー幾らでも出てくるじゃねーか。深呼吸して……………よし、さっさと終らせよう」

目を閉じて、端から見たら危ない種類の人物に見られそうな感じで、自己暗示を掛けるようにブツブツと呟く。

何とか平静を取り戻して目を開いた。

「んわう」

「ブガッ!？」

身体を起こそうとした少女が、今度は四つん這いになっていた。

なお、下半身が竜矢の方向を向いている。まっすぐに。

色々と限界的なアングルに、竜矢は心の中で悲鳴を上げながら少女の身体を何とか洗い終わるのだった。

24話：竜矢とスーニア その1（後書き）

今回はちょっとコミカル色が強いですね。
ガンバレ、竜矢くんw

25話：竜矢とスーニア その2（前書き）

異世界キャンプの始まりです。

25話：竜矢とスーニア その2

「あうー♪ わうあうー♪」

「お、終わった……。あのジジイとやった時より……いや、ネバーエ
ンディング・テストを受けた時よりも疲れたぜ……」

タオルで濡れた身体を拭いてやりつつ、竜矢は溜め息をついた。
少女の方は汚れが落ちてスツキリしたのか、まるで鼻歌でも歌っ
ているようにご機嫌である。

「……まあ、これだけ喜んで貰えたんだから良しとするか。しっか
し、金髪だったとはなあ……」

汚れの落ちた少女の髪は、美しい金髪だった。

栄養状態が悪かったせいで艶を失っているが、それでいて本物の
黄金で出来ているかのようなストレートのブロンドヘアだ。

（綺麗だけど、いくら何でも伸びすぎだな。戻ったら少し切ってや
るか）

少女のお漏らしで汚れてしまった毛布は後で回収することにして、
汚れた箇所を洗って近くの木の子葉にかけておいた。

少女を抱き上げると、再び洞窟へと歩き出す。

川と洞窟の間は五分と掛からない距離なので、大して時間は掛か
らない

「おし、髪を切ってやるか」

洞窟に辿り着くと、バッグからハサミを取り出した。

ハサミを見て少女は少し怖がったが、宥めつつ切っていく、何とか肩口までのセミロングに整えた。

「……どっかの神様の、生まれ変わりの少女みたいになっちゃったな……。これではうとか言ったら外人のコスプレで通じるわ」

「あう？ にゃぱう？」

「い、いや、こっちの話だから。……にしても……」

顔がはつきり見えるようになった少女は、目の覚めるような美少女だった。

金糸のような髪、白磁の陶器のように透き通るかのような白い肌、金と銀の神秘的な瞳。

痩せていてもなお失われていないその美しさは、竜矢の目を一時釘付けにした。

健康を取り戻したら、本当に神の生まれ変わりとんでもなくても納得してしまうかも知れないほどだ。

「ツクシュ！」

と、少女が可愛らしいクシャミをした。

身体を洗った後、新しい毛布で身を包んだが少し冷えたのかも知れない。

「あゝ服が欲しいとこだよなあ……よし」

竜矢はバッグから洋服に使われる薄手の白い布とハサミを取り出した。

脳の情報を検索して服の作り方を調べてみると情報はあった。し

かし、自分の器用さと手間暇を考えて当座は簡単な物で十分だなと判断し、貫頭衣を作ることにした。

肩幅の長い布を二つ折りにし、折り目に当たる部分を半円形に切り取って頭を通す穴を開ける。

後は腰に当たる部分に幾つか切れ目を入れて、ベルト代りの紐を交互に通せば出来上がりだ。

「あう？」

「ほい、出来たつと。取りあえず、これを着てくれな」

貫頭衣を少女に着せる。特に嫌がったりもせず、素直に着てくれた。

「うん、即席で作ったにしちゃ出来だ」

「あう……わう……♪」

「お、気に入ったみたいだな」

少女は貫頭衣を触って嬉しそうに笑っている。

竜矢も自分の分も含めて予備に二、三着作り、身につけた。

（んー下着も作ってやりたいとこだけど、裁縫なんてやった事ねーからなあ……取りあえず後回しだ。お次はつと……）

次にバッグを漁って取り出したのは、桶やロープ、大きめのナイフだ。

「いい子で待っててくれな、水汲んで、毛布回収して、えーと薪拾いしてくるから」

「あう？」

「じゃー、行ってくる」

竜矢は軽く手を振って洞窟を後にした。

薪は乾いている枝を拾いたところだ、生木は水分を含んでいるので燃えにくい。

幸い、森の中だけあって薪になりそうな枝は豊富に落ちていた。それをロープで縛り、大分乾いていた毛布と一緒に人型の肩に担ぐ。更に水を汲んだ桶を持って洞窟へと向かった。

「……ん？ 何だこの声……」

小さな、啜り泣くような声が微かに聞こえてくる。

嫌な予感がして洞窟へと急ぐと、やはり声の主は少女だった。

壁を背に、体育座りで顔を足に埋め、小さな細い声で泣いているようだ。

「ひうう……ひうう……」

「ど、どうした！？ 何かあったのか！？」

「ひうっ！？」

慌てて駆け寄れば、少女は涙と鼻水でグシャグシャになった顔を上げた。竜矢の姿を認めると、痩せた手足を懸命に動かして竜矢に縋り付いてくる。

「ひうっ、ひうう、ひうあう」

「よしよし、大丈夫だから……って、何も異常ないけど……？」

小刻みに震える身体を抱き、優しく頭を撫でると少女はようやく落ち着きを取り戻した。

「もしかして……一人にされて怖かったのか？」

「あうう、わう、はうう」

離れたくないという意味表示のように、少女は細く、小さな指で人型の腕を握りしめてくる。

「……そっか、ゴメンな。大丈夫だよ、もう一人にしねーから」

「あうう……わう……♪」

人型の中で浮かぶ小さな竜矢の笑顔を見て、少女はやっと微笑んでくれた。

体験学習で行ったキャンプを思い出しながら、火打ち石で火を起こしてカマドを作ったりしている内に日も沈み始めた為、竜矢は夕食の支度に取りかかった。

だが、これまで料理などろくにやった事が無いため、全てが脳内の情報頼りだ。簡単な病人食を調べ、持ってきた食料から悪戦苦闘してスープを作った。

恐る恐る、味見を試みる。

「……おお、美味しい！ 我ながら良く出来たじゃねーか。ほーい、メシだぞ」

「あうう？」

「ふー、ふー……。ほい、口開けて、あうん」

「あうん？」

「いや、口の動きを真似しなくていいから、あうん」

スプーンで掬ったスープを少女の口元に持っていくが、中々口を開けてくれない。

匂いを嗅ぐと、何故かちょっと顔を顰めている。

「どうした？ 結構美味しく出来たんだぞ？ 一口で良いから食ってみ、あゝん」

「あうゝ……あゝ……」

怖々といった風に少女が口を開ける。

竜矢はそこにスプーンを運んでスープを飲ませてやった。

「どーだ？ 美味しいだろ？」

「あう……。っ、げ、うげうっ！」

「なっ!？」

スープを飲み込んだ少女がいきなり咳き込んだと思ったら、スープを吐き出してしまったのだ。

竜矢は慌てて少女の背中をさすって介抱する。

飲んだスープが少量だったのが幸いし、吐くのはすぐに収まったが竜矢は訳が分からない。

「げううつ、はぐう……あうう……」

「も、もう大丈夫か？ ほら、水……」

水を飲んで落ち着いた少女を見て、竜矢は胸を撫で下ろした。

「ふうゝ……。どうなってんだ？ 失敗はしてない筈だし、食材も間違えてない……。消化を助ける薬草だろ、滋養強壯の薬草だろ……干し肉は少しだけだけど、細かくして柔らかく煮込んだのに……」

首を傾げるが、まるで分からない。

はた、と思いついて脳内で少女について調べてみたが、情報はなかった。

どうやら、あの老魔術師のプライベート的な情報は脳に送られなかったようだ。

「あうう、お腹すいた……」

「……食欲はあるんだな。じゃあ……」

干した果物と生野菜をバッグから取り出して一口大に切ってやると、少女は嬉しそうにそれを食べ始めた。

「あう♪」

「うーむ……筋金入りのベジタリアン、か？ 何だそりゃ」

少女を見て口をついた言葉に自分で突っ込みを入れてしまう。

（そーいや、あのジジイ……この子の事を、人の姿をしているが、人ではないとか言ってやがったな……）

美味しそうに干し果実と野菜を食べている少女を見ても、人間の女の子とは思えない。

（……念の為に、肉は避けた方が良さそうだな。この子の分は、果物と野菜を調達するしかないか……この森にあれば良いけど。ぶっちゃけサラダになっちまうが、しょうがねーよなあ……）

自分用に小枝を切って作った爪楊枝のようなスプーンでスープを飲みながら、竜矢はこれからの事を考える。

ふと空を見ると、星が幾つか瞬き始めていた。またた

今まで居た所は昼と夜が分からなかったので、これが初めて見る異世界の夜空だ。

次第に数を増やしていく星を眺めながら、竜矢は想いを巡らせる。

（ま、成るように成るしかねーよなあ、取りあえずの生活は何とかなりそーだし……。この子も守ってやらにゃならん……。この歳で保護者になるとは思わなかったけど。何とかして地球に戻る方法を見つけ……。待てよ!?!）

竜矢は急いで脳の情報を調べてみた。元の世界、地球に戻るための方法をだ。

あの老魔術師の知識が全て詰め込まれているのなら、その方法も含まれていなければおかしいだろう。

ところが……。

（あのクソジジイ！ 異世界召喚に関しての知識は全て空白ブランクにしてやがる！ 万一を考えて、か……。だてに長生きしちゃいねえってか！ くそ！）

情報は無かった。

恐らく、不測の事態を考慮して意図的に消していたのだろう。

竜矢の表情が怒りによってわずかに歪む。

「……あう？」

「……ん？ どした？」

怒りの雰囲気を感じたのか、少女が不安そうな表情で竜矢を見た。それを理解した竜矢は怒りを消し、笑みを浮かべて少女の頭を撫

でる。

「あゝ、何でもねーよ。腹も一杯になったし、今日はもう寝るか」
「わうゝ♪」

カマドの火が消えたのを確認して、寢床の準備をする。

出来れば火は燃やし続けて番をしたい所だが、竜矢も慣れないことの連続で結構疲れていたのと、火事の可能性を考えて消す事にしたのだ。

幸い、季節的には地球でいう夏の終わりに当たる時期なので、まだそれほど寒くはない。

旅人が使う厚手のマントや毛布を使って少女をくるむと、竜矢は人型を消して毛布の端っこの方に潜り込む。

いずれはちゃんとした家を手に入れなきゃならんだろうな、等と考えていると、竜矢の身体を少女がそっと掴んだ。

「ん？ どーした？」

「わうう……」

「え、ちょ……」

少女は竜矢を両手で包むように抱くと、自分の胸に押し付けるようにした。

暫くそのまましていると、少女の規則正しい寝息が聞こえてきた。程よい強さで押し付けているので、苦しくはない。

が、竜矢は別の意味で苦しんでいた。

（……っ……む、胸が……柔らかい……！）

痩せ細ってはいても、胸にはわずかに膨らみが有るのだ。二つほど。

ほのかに石鹸の香りがする少女の体に、竜矢は中々寝付けずに夜中まで身悶えする羽目になるのだった。

25話：竜矢とスーニア その2（後書き）

まあ、何だ……。

ガンバレ、竜矢くんW（前回と同じW）

26話：竜矢とスーニア その3（前書き）

深い森って、何か居そうですね。

26話：竜矢とスーニア その3

洞窟でのキャンプ生活を初めて約一ヶ月。

少女に関してのトラブルは色々あった。

一度、肉を一切使っていない料理を食べて何故か吐いてしまった事があった。

不思議に思っただけ食材を調べたら、使っていた調味料の中に動物の内臓を乾燥させて粉末にした物が少量混じっていたのだ。

それ以来、料理には最新の注意を払って作るようになった。

後は、無邪気に裸で転げ回ったり、竜矢を服の中に放り込んで寝たり、寝ぼけて食べようとなったり、その他諸々である。

苦労しつつも、何とかここまでは無事に過ごす事が出来た二人だった。

しかし、ここにきて重大な問題が発生した。

「……食料はあと少しか……」

地下倉庫から持ってきた食料を、あらかじめ使ってしまったのだ。

少女を一人にする訳にはいかなかった為、新しい食材探しをする時間が中々取れなかったのが大きな理由だ。

それでも幾つか果実のなっている木を見つけたので少しは足しになっていたのだが、それも季節的に食べられる時期を過ぎようとしている。

川で魚を捕ろうとしても、魚の姿が見えなくなってしまっている。

どうやら竜矢の持つ力に怯えて別の場所に移動してしまったらしい。ならばと、動物を捕ろうと幾つか罾を張ってみたが、やり方が悪いのか一匹も捕らえられずにいた。

「何がマズイのかなあ、ちつとも獲物は掛からねーし。まあ、取り敢えず見てくるか……おい、スーニア」
「あー？」

少女を呼ぶと、洞窟の奥からトテテッと言って来た。

彼女の身体も大分良くなり、一人で歩けるようになったのだ。

まだ長い時間歩くには無理があるが、竜矢と一緒に薪拾いに行けるくらいには回復していた。

スーニアというのは、いつまでも名無しでは困ると竜矢が付けた名前だ。

名前の由来は、とあるコミックに出ていたインド神話の太陽神から来ている。

本来は“スーリヤ”という名前だが、この神は男性神だったので少しいじって“スーニア”にしたのだ。

まるで太陽のような輝きを持つ、彼女の黄金の髪から連想した名前だった。

「罾を見に行くから、一緒に行こうぜ」
「わう〜♪」

展開した人型で頭を撫でると、にこやかに返事をする。血色や肌の艶も良くなり、もう少しすれば健康を取り戻すだろう。

ともあれ二人で罾を見回っていくが、やはりどれにも掛かっていない。

だが、最後の罨にようやく待望の獲物が掛かっていた。

「おおおっ！　いたっ！　掛かってたあああ！」

「わわうっ？」

思わず上げた大声に、スーニアが驚いて飛び退いた。罨には地球のウサギに似たパロツという動物が掛かっていたのだ。

竜矢は慣れない手付きで暴れるパロツの足を縄で縛り、洞窟へと戻った。

スーニアは不安そうにパロツを見つめている。

「……よし、可哀相だけど……勘弁な」

ナイフを手に、そのパロツを絞める為に押さえつけた。

パロツは逃れようと、キュー、キューと鳴き声を上げて藻掻いている。

手の平に伝わるパロツの体温が、生きているという事を否応なしに実感させてくる。

地球で普通の高校生であった竜矢に、動物を締めて解体した経験など無い。可哀相だと思ふ気持ちもあるし、殺したくないという気持ちもある。

しかし、今の竜矢にはスーニアという守らなければならない存在がいる。

竜矢は覚悟を決めてナイフを振り下ろした。

「わううっ!!」

「んなっ!?!　な、何すんだ!?!」

ナイフがパロツに刺さろうとした瞬間、スーニアが竜矢の腕にし

がみついて止めに入った。

パロツを逸れて、ナイフが横の地面へと突き刺さる。

竜矢はスーニアを引き剥がそうとするが、中々離れようとしてくれない。

「わうっ！　だめえっ！　わううっ！」

「こ、こら、危ないって！　と、取りあえず落ち着け！」

「わううっ……！」

スーニアは竜矢からは離れてくれたが、今度はパロツに覆い被さるようにして離れようとしない。

まるでパロツを守ろうとしているかのようだ。

「えっと……殺しちゃ、駄目だったのか？」

「わうっ」

スーニアが力強く頷いた。

「い、いや、そこで思いつきり頷かれてもなあ……。ほら、もう食べ物が少ないだろ？　だから干し肉とか作って……」

「わうっ！　わうあうっ！」

今度は力強く頭を横に振る。

何が何でも、パロツを殺したくないようだ。

「……まいったな、こりゃ……」

「わううっ……！」

スーニアは竜矢を睨んでいたが、急に泣きそうな顔になった。竜矢の服を掴み、止めさせようと懸命に引っ張ってくる。

「わうーっ、だめっ、わう、わうーっ！」
「……ふう」

竜矢はスーニアを脇にどかせると、パロツの前にしゃがみ込んだ。身体にしがみ付いて揺らしてくるスーニアを無視して、パロツを縛っているロープに手をかける。

「……ほれ、これで良いんだろ？」
「わう？」

二人の脇を、パロツが走り抜けて洞窟から出て行った。
竜矢はパロツのロープを解き、逃がしてやったのだ。

「わはうーっ！♪」
「わっ、こ、こら」

スーニアは満面の笑顔で竜矢に抱き付いた。
竜矢の顔に自分の顔をスリスリと擦り付けてくる。
嬉しくてしょうがないようだ。

「たはは、やれやれ……。さて、どーしたもんかね……」

溜め息をつきつつ、解決しなかった事を含めて色々考える。

（干し肉にはこんな反応しなかったから、元から肉の状態なら良い訳か……。食料を手に入れるには、人の住んでいる場所に行くしかなさそうだな。そろそろ肌寒く感じる事も多くなってきたし、ここを出る良い機会かもな……）

そう判断したものの、さて何処に行ったものか。

脳の情報を調べてみたが、この森はかなり大きく、近場には村や町などは存在しないようだ。

「一番近い村まで、歩いて六日はかかるか……。まあ、俺がノンストップで行けば半分以上時間を短縮出来るだろ、食料もギリギリ持ちそうだ。問題は、着いた時に俺の事をどう誤魔化すかだけど……。全身を覆う鎧みたいなもんがあれば何とかなるか？」

「あう？」

「ん？ ……まあったく、お前にゃ負けるよ、ははは」

「わう♪」

スーニアは人型で頭を撫でられて、嬉しそうにしている。

いつまでもクサっけていても仕方がない。竜矢はそう考えて心を切り替え、洞窟を出る準備を始めるのだった。

翌日、竜矢たちは朝一番で洞窟を後にした。

スーニアの筋力回復を考えて、彼女が疲れるまでは一緒に歩き、疲れたら竜矢が抱き上げる。

さすがに睡眠は取らなければ竜矢も参ってしまうので、夜だけは野宿をして昼はノンストップで歩き続けた。

そうして二日が過ぎ、三日目の朝のこと。

このペースで行けば予定通りに村に着くなく、と考えながら出発しようとした竜矢は、いつの間にか周りに霧が立ち込めているのに気が付いた。

「……なんか……変な霧だな」

竜矢が感じたように、奇妙な霧だった。

まるで竜矢たちの身体に纏わり付くように流動しているのだ。

何者かの意志が介在している気配を感じ、竜矢は不安気な表情を見せるスーニアを人型で抱き上げた。

「スーニア、俺にしっかり掴まってるよ」

「わう……」

亜空間バッグを肩に掛けようとした時、不意にバッグがその手から消え失せた。

「えっ!？」

「あうっ、あそこっ」

スーニアが指さした方向を見ると、少し離れた場所でバッグを啜えてこちらを見ているパロツがいるではないか。

「キュー」

「こら、返せ!」

「キュキュッ」

パロツはバッグを啜えたまま、森の中へと走って行ってしまった。

「こ、この! 待て!」

あのバッグには荷物が全て詰め込んである、絶対に失う訳にはいかない。

急いで後を追いつける。

だが、木々の生い茂る森の中では小さなパロツの方が圧倒的に早い。パロツは地球のウサギ並みに俊敏なのだ。

どれくらい距離を追い掛けたのか分からないが、急にパロツの動きが止まった。

パロツは咥えていたバッグを離して地面に置くと、竜矢たちを待つようにジッと二人を見つめている。

「何だ、あいつ……？」

「あう？ ……わうっ」

スーニアがパロツのいる後ろの空間を指差した。

竜矢がそこを見ていると、波が引くように霧が晴れていく。

霧が晴れると、そこは森を切り開かれて作られた広場のような空間だった。

「い……家？」

直径二十メートルほどの広場の中心に、ログハウスのような小さな家がポツンと建っている。

と、その家のドアが二人のしている前で、軋む音を立てながらゆっくりと開いていく。

「……よう来たの、不思議なお客人」

出てきたのは、やたらに長い杖を持った、スーニアよりも背が低い老婆だった。

26話：竜矢とスーニア その3（後書き）

……むう、この竜矢とスーニアの章、当初の予定より長引くかも知れない……。

27話：竜矢とスーニア その4（前書き）

竜矢は良くも悪くも、一介の高校生です。
強くもあり、弱くもあるのです。

27話：竜矢とスーニア その4

小柄な老婆は白い髪を頭の後ろで束ね、深みのあるマリンブルーの瞳は生きてきた年月と経験を感じさせる。

ニコニコと微笑んでいるその姿は、子供好きの近所のお祖母ちゃんといった、優しい雰囲気だ。

「そんなに警戒しなくても良い。礼がしたくてね、ここまで来てもらったのだよ」

「礼だって？」

「このパロツを逃がしてくれただろ？ この子は私の使い魔なんだよ」

老婆が足下に駆け寄ってきたパロツを抱き上げ、その頭を撫でながら言った。

「使い魔？ って事は……婆さん魔術師か」

「私の名はステリ。ここで一人暮らしをしている、引退した魔術師さ。立ち話もなんだ、中に入りなさい。お茶の用意が出来ているよ」

そう言うと、ステリと名乗った老婆はさっさと家の中に入っているってしまった。

「……どうしたもんかな」

「フン、フン……わうつ、りゅーや、おいしそう、わうつ」

開いたままのドアから流れてくる、甘い焼き菓子の匂いを嗅いでスーニアが反応した。

行って欲しいように身体を揺らして、家の中を指差している。

「警戒心ねーなあ、お前は。……ここでもうこうしてても、しゃーねーか、取り敢えずは悪人じゃなさそうだし」

竜矢はバッグを拾うと、何が起ってもいいように警戒しつつ家の中に入っていった。

「えーと、お邪魔します……」

「どうぞ、椅子にかけなさい」

家の中は、綺麗にまとめられていた。

アンティークなテーブルと椅子に食器棚。家の壁際には煉瓦造りの暖炉があり、小さな火が燃えて部屋を暖めている。

一際目を引いたのが、壁を一面使った大きな棚だ。

そこには乾燥させた薬草らしき植物や粉末や、飴玉のような塊が詰まった物が、大きめのガラス瓶に収められてびっしりと並べられていた。

（まるで、童話に出てくる森の中の一軒家だな……って、そのままだな）

竜矢はスーニアを椅子に座らせると、自分は人型を消してテーブルの上に直接座った。

テーブルの上には人数分のお茶が並び、中央には焼き立てのクッキーが香ばしい匂いを漂わせて食欲を煽っている。

ちなみに、竜矢のカップはミルクピッチャーを代用して入れられていた。

スーニアは目を輝かせてクッキーを見つめている。口の箸からはヨダレが一筋。

「ふふふ、どうぞ召し上がれ」

「わうっ！」

ステリがそう言うと、スーニアはクッキーを驚掴みにして食べ始めた。

だが、竜矢はそれを見て慌てて止めようとする。

「ま、待てスーニア！ ステリさん、このクッキー卵を使ってるんじゃないか？ だったらこいつには……」

「大丈夫だよ。この子は肉類は食べられないが、完全な命になる前の卵なら食べられる筈だ」

「え……？」

ステリの言葉に、竜矢はスーニアを見守る。

今まで肉が少しでも入った料理は即座に吐き出していたが、確かにクッキーは口に詰め込むようにして勢いよく食べているのに吐き出す気配がまるで無い。

「わうっ♪ ハムハグ……わふうっ♪」

「ね？ 言った通りだろ？」

「た、卵は平気なのか……。って、ステリさん、何でそんな事知ってるんだ？ スーニアの事、何か知ってるのか？」

「まあね。ま、この子については後で教えてあげるよ」

ステリは茶を一口飲むと、竜矢に向き直った。

「この一月ほど、森の中から凄い力の波動を感じていたよ。あれはキミの力だったのだね」

「波動？ 自分じゃ意識してなかったけど……」

「今消した、赤い光の人型が原因だよ。あれを出してる間は抑えてるつもりでも、力の波動を周囲に撒き散らしていたのさ。それで森の動物たちがキミの波動に怯えて、あの辺から逃げてしまったのだよ」

「げ、魚だけじゃ無かったのか……。どーりで罠に何にも掛からない訳だ……」

竜矢は洞窟で生活をしている間、寝る時以外は殆ど人型を展開していた。

主にスーニアの面倒を見る為に、その方が便利だったからだ。

それが気付かぬ内に、自分の首を絞めてしまっていた訳だ。

「それで何が居るのかと思って使い魔をやったら、罠に掛かってしまった、という訳さ。この子は私の唯一の同居人でね、いや、逃がしてくれて嬉しかったよ。ありがとう、二人とも」

「わう〜♪」

「スーニアが止めなければ、俺は間違いなくそいつを干し肉にしていたよ。だから、礼はスーニアにだけ言ってくれ」

「ふふ……謙虚だね」

『日本人は謙虚である』というのは、諸外国からよく聞かれる言葉だ。

自分を下に置き、相手を上に置いて対するやり方がそう感じさせる要因の一つであり、日本人の特徴とも言えるものだ。

竜矢もやはり日本人であり、他人と接する時にこういうやり方を
するのは、自然と身に染み付いてしまっているのだ。

「それにしても長生きはするもんだね、妖精に会う事が出来るとは」
「いや、俺は妖精じゃないから。これでもれっきとした人間だよ」
「ほう……？ どういう事か、よければ話して貰えないかね？ こ
こは私が張った結界に守られている、誰かに聞かれる心配はいらな
いよ」

竜矢はステリの目をじっと見た。

果たしてこのステリという人物は信用出来るのか、どうか。

ステリも何も言わず、竜矢の目を見つめ返す。

竜矢が直感的に彼女に感じたのは――“慈愛”

長い年月を生きた者が自然と放つ、年若い者へと向ける慈しみだ
った。

「……分かった、アンタを信じるよ」

「信じてくれて、嬉しいよ」

ステリの笑顔は、花のような美しさを持っていた。

「……ふむ。その魔術師がキミを地球という異世界から召喚し、ス
ーニアちゃんを捕らえ、その魔力を利用していたのだね？」

「ああ。ステリさんも魔術師だろ？ 異世界召喚に関して何か知ら
ないかな？」

「残念だけど、私もそんな魔術は聞いた事がない。魔術師としての

腕は高い方だと自負してるんだけどね。……ふむ、もしかしたらロストパーツを使ったのかも知れないね」

「ロストパーツか……」

竜矢とステリは異世界召喚に関して、ロストパーツを使ったのではないかという結論に達した。現在の魔術では、世界の壁を破るほどの力は無いと判断したのだ。

という事は、竜矢が元の世界に戻る為にはどうしてもあの老魔術師を探し出し、その方法を聞き出さなければならぬという事だ。

ちなみに、スーニアはクッキーでお腹いっぱいになったのか、テーブルに突っ伏して寝てしまっている。

「……前途多難だなあ……」

「そうかね？」

「だって、このナリじゃまともに人前にも出られないじゃないか……」

「気にせず人前に姿を出しても良いと思うけどね。キミには途轍もない力がある、それを使えば幾らでもやりようはあるだろう」

「んー、何か、それってズルしてるような感じがしてさあ……」

「ズル？」

竜矢は自分の手を見つめながら言う。

「この力は俺が努力して手に入れたもんじゃ無いからさ。訳も分らず、いきなり植え付けられた力だ。力つてのは努力して手に入るもんだろ？　それが身体の強さでも、頭の良さでも。この力を自分の都合の良いように使ったら……俺は、俺じゃ無くなっちまうよな気がするんだ」

何の苦勞もせずに手に入れた、あまりにも強大な力。

欲望のままにそれを振るったら、自分はどうなってしまうのか。

竜矢は本能的に、自らの強すぎる力に対して危機感と恐怖心を持つていたのだ。

そんな竜矢の胸の内を悟り、ステリは口を開く。

「……ふむ、半分は間違っではないね」

「半分？」

「そう。誰がどう言おうが、君がどう思おうが、経緯はどうであろうが……その力は今、キミの中に確実に存在している、キミだけの力だ。確かに力というものは努力した先にある。けれど、努力の課程で心も鍛えなければならぬ、心の伴わない力はいずれ自分も滅ぼすだろう」

「……うん、俺もそう思うよ」

単に強いだけでは只の乱暴者だ。

スポーツの世界でも、どんなにずば抜けた成績を残しても、人格や品性に問題がある者は認められる事はない。それは学問の世界でも同じ事だ。

その行いはいずれ自分に返ってきて、身を滅ぼしかねないだろう。

「だが、強い力を持つ者が持っていなければならない強い心を、キミは既に持っているじゃないか。自制心、理性、スーニアちゃんを助けて面倒を見続けた優しい心……それらがある限り、キミは力に溺れる事は無いと思うよ？」

「……俺はそんな立派な人間じゃないよ。スーニアを助けたのは、成り行きって言うか……」

「でも、今まで見捨てなかった。その子の下の世話までしたんだろ
う？」

「……ああ」

スーニアは今でこそ回復しているが、最初の頃は何から何まで竜
矢の手を借りなければ何も出来なかった。

食事や、トイレに至るまで。

それは全て、竜矢の負担になっていた。

「迷惑だと思っても、放っておけなかった。スーニアちゃんの願い
を聞いて、自分の食べ物が減るのを承知で私の使い魔を助けた」

「……う、うん」

「立派だよ、キミは。私は結婚したが、子供は出来なかった。キミ
のような優しく、強い心を持った子供が欲しかったよ」

「そ、そんなに持ち上げないでくれよ、恥ずかしくてしょうがねえ
や」

竜矢の顔が赤くなっていた。面と向かってこれだけ誉められれば、
誰でも照れるというものだ。

と、竜矢の頭に何かが触れた。

ステリの手が、優しく撫でていた。

「よく頑張ったよ、キミは。だから、泣いたって良いんじゃないか
？」

「え？」

顔を上げた竜矢が見たのは、優しく微笑むステリの顔。
それを見た途端、竜矢の胸に溢れるものがあつた。

「一人で頑張ってきたんだ、たまには泣いて心を楽にしてやらないと、疲れて倒れてしまうよ。私の夫がそういう人でね、悩みも苦しみも一人で抱えて、心が疲れ果てて倒れてしまった事があったよ。だからキミの事も何となく分かるんだ、無理をしてきたってね。…人はね、時には気持ちを抑えずに泣き喚いたって良いんだよ」

突然、異世界へと拉致されて家族や友人たちと離れさせられた。何日も地獄のような苦しみを味あわされた。

やっと解放されたものの、頼る者も知り合いも居ない異世界に放り出され、スーニアという助けなければならぬ存在を抱え込んだ。

そして、スーニアの食事や排泄など、慣れない介護をしながらのサバイバル生活。

一介の高校生に過ぎなかった竜矢にとって、想像以上に苦しいものだった。

ともすれば挫けそうになる心を叱咤し、鼓舞し、時には誤魔化して何とかやってきた。

ギリギリの所で耐えられたのは、無理矢理植え付けられたこの世界の知識と魔力、そして何より、スーニアを守ろうとする意志があったからだ。

いつの間にか、竜矢の目から涙が溢れていた。

寂しさ、悲しさ、不安、苦しみ。

生きる事に必死で抑えていた感情が、堰を切って溢れ出した。

そんな竜矢をステリは優しく両手で掴み、自分の胸に抱き寄せる。

涙と鼻水で顔を濡らし、ステリの服を握りしめ、竜矢は声が枯れるかのように大声で泣き喚いた。

眠っていたスーニアが飛び起き、泣いている竜矢を見て心配そう

に側へと近寄った。

「あうう……？ りゅーや？」

「大丈夫だよ。ちよつとだけ、静かにしててあげなさい」

「わう……」

その言葉に、スーニアはステリの手の上から竜矢を労るようにそつと触れた。

「泣くといいさ、好きなだけ……。涙は痛みと苦しみを少しだけ洗い流してくれる、心の清流なのだから」

ステリの優しい声と温もりが、竜矢の疲れ果てていた心を少しずつ癒していくのだった。

28話：竜矢とスーニア その5（前書き）

ものすっごい久しぶりの更新です・・・orz
色々とすいません。

28話：竜矢とスーニア その5

どれだけの間、泣き喚いただろうか。

気がつけば、竜矢はテーブルの上に置かれた、大きな目の籠の中に居た。籠には小さなクッションが収まり、体の上にはハンカチが掛けられて即席のベッドになっている。

竜矢はいつの間にか眠ってしまい、ステリがここにそっと寝かせていたのだ。

そのステリはというと、暖かい日差しが入る窓際で、安楽椅子に揺られながら縫い物をしている。スーニアはその足元で、彼女の手元を不思議そうに見つめていた。

と、ステリが竜矢の視線に気付いて顔を向けた。

「おや、目が覚めたかい？」

「あ……うん、その、ありがとう、ステリさん」

「どういたしまして」

竜矢は照れ臭そうに言う。

あれだけ大泣きする所を見られたのだから、恥ずかしくないという方が無理だろう。

「わうつ、りゅーや、おきた。へーき？　へーき？」

スーニアが籠に駆け寄り、心配そうに眉を寄せて覗き込んでくる。竜矢はピョンと籠から飛び出すと、スーニアの鼻の頭を撫でた。

「あゝ、大丈夫だよ。心配してくれてありがとな、スーニア」
「わうゝ♪」

スーニアの笑顔で癒されていた竜矢は真剣な顔になると、ステリに向かって声を掛ける。

「ステリさん、迷惑じゃなかったらお願いがあるんだけど、聞いてもらえるかな」

「なんだい？」

「俺に、魔術を教えて欲しいんだ」

「魔術を？　けれど、君は……」

竜矢の頭の中には古今東西、この世界のありとあらゆる魔術の知識が詰め込まれている。

その事を既に聞いていたステリは訝しげな顔をした。

「確かに、俺は知識だけは持つてる。魔術師になるための修行法とかも知ってる。だけど、実践が伴っていない付け焼刃みたいなもんだよ。知識だけの頭でっかちな奴が一人で、しかもこんなバカでかい魔力を扱うなんて、危険すぎると思うんだ」

「ふむ……なるほどね」

「スーニアへの治癒魔術は上手くいったけど、次もそうだとはいえないし。スーニアの首に付けられてる厄介なロストパーツも外してやりたいけど、今の俺じゃ危なっかしすぎるんだ、だから……」

そこで一旦言葉を止めた竜矢は、姿勢を正して頭を下げた。

「俺を、ステリさんの弟子にしてください！」

ステリは椅子から立ち上がると、編み物を置いて竜矢の側に近づいた。

「頭を上げなさいな、リュウヤ。君の気持ちはよく分かったよ」

「じゃあ……」

「ふふ、もう弟子を取ることも無いだろうと、此処で余生を送るつもりだったけれどね。いいでしょう、リュウヤ。あなたをこのステリ・マグノワイヤーの最後の弟子に迎えましょう」

「ありがとうございます！」

「そんなに堅苦しくなくてもいいさ。修行は明日からにして、今夜は二人を歓迎して、ささやかながらパーティーといこうかね」

こうして、リュウヤはステリの弟子となったのだった。

翌日から魔術修行の開始となった。

まず、ステリは竜矢が神聖・元素のうち、どの系統の魔術に適正を持つかを魔術によって調べる事にした。

調べたい人物に検査する魔術をかけると、その体が光るのだ。

神聖魔術に適性しているのなら白く光る。

元素魔術なら元素の対応色である地の黄色・風の青色・火の赤色・水の銀色・空の黒色の光が入り混じったように光り、その中で最も強い適正を持つ元素の光が強く輝く。

邪神魔術は調べる必要は無い。魔力を持ってさえいれば、全ての人間が修得可能だ。

これは、邪神の教えが『欲したなら、奪え、騙せ、犯せ、殺せ』等という、人間の欲望を全肯定するものであるせいだとされている。

神聖・元素魔術に比べて強力な力を発揮する事は稀なものの、欲

望に直結しているせいか全般的に習得の容易な術が多いのだ。

その為、修行に行き詰まった魔術師が道を誤って邪神崇拝者となってしまうケースが少なからずあり、それが魔術師の世界では問題となってしまうている。

「まあ、リュウヤは一度治癒魔術を成功させているからね、白く光る……おや？」

術を竜矢に掛けたステリは首を傾げた。

彼の体が光らないのだ。

「どうかしたの？」

「おかしいね、君の体が光らない……。魔力は物凄いののに、適正が分らないなんて、こんな事は初めてだよ」

「光らないって……。もしかして俺、魔術への適正が無いのかな？ 異世界人だし……」

「けれど、『万象の癒し手』を使ってスーニアちゃんを治したのだろう？ ふむ……リュウヤ、君の知識の中にこんな事象について何かないかい？」

「ちよっと待って……」

脳内の情報を検索してみる。

すると、少ないが関連する情報があった。それによると、適性がないのではなく、全ての魔術に適正を持っているらしい。

本来は有り得ないとされているが、特異体質のように全ての魔術適正を持つ者が極まれに生まれることがある。

その体質を持った者は検査魔術を掛けても体が光らない。

だが、その体質を持って生まれる確立は数万人に一人と極めて低い。地球に比べて総人口も少なく、情報伝達手段が未発達なこの世

界ではその存在を知る者がほとんどいない。

熟練の魔術師であるステリといえど、知らないのは無理からぬ事だった。

地球人だからなのかは分からないが、どうやら竜矢はその特異体質だったようだ。

「……って事らしいよ」

「驚いたね……。魔術に関してはそれなりに極めたつもりだったけど、まだまだ奥が深いということだね」

ともあれ、竜矢の適正は判明した。

ここから修行を始めることになる訳だが、竜矢は知識だけはステリをも上回っている。その為、基本的な技術のみを教えることにした。

この世界の魔術は行使する際に幾つかの段階を踏む。

魔術式を術者の体内にて構築し、安定を図るため体外に展開。展開した魔術式へ魔力を充填し、魔力力場を展開させて発動させる。

呪文は唱えた方が良い段階や、省略できる段階があるが、術の難易度や術者の力量によって様々に変化するため、一概にこの方法が良い、というのは無い。

こういった一連の基本さえ抑えれば、あとは個人の才能や保有魔力量、魔術への理解やイメージする力が物を言う。

そして、一度だけとはいえ実際に魔術を使った経験と、地球に腐るほど有った『空想世界の産物』達によって無駄に鍛えられた竜矢の力は……。

「これは初日で卒業かね？ 正直、私が教えられることは何も無いように思えるよ」

「それはそれで、なーんか寂しいような、嬉しいような……」

とにかく実践とばかりに基本から初歩の魔術、応用などを一通りやってみたのだが、竜矢は難なく魔術の行使に成功した。

さらに、熟練の魔術師でも難しい複合魔術もあっさりクリアしてしまったのだ。

もちろん、神聖・元素両方の魔術で、だ。

「ふふ、喜んで良いと思うよ？　しかし複合魔術まで行使してしまうとはね。これまで魔術師として生きてきた中で一番の驚きだよ」

「うーん……まさにチート」

「ちーと？」

「あ、えーと、普通なら有り得ない行為とか力を使うこと……だったかな。『異常』とか、『卑怯技』とかそんなそんな感じの」

「卑怯とは思わないけれど、普通じゃない、という意味では合っているかもね」

「素直に喜べない……」

微妙に傷つく竜矢だった。

しかし、基本は大事だということで、ステリは毎日の基本修行を竜矢に課した。

竜矢も素直に従い、日々修行を行いつつ一ヶ月ほど過ぎた日のことである。

「ステリさん、ちょっと見てくれるかな？　魔術式を俺なりに改良してみたんだ」

「魔術式を……改良？」

ステリは目を丸くする。

魔術は、ある家系では秘伝として、またある魔術師から弟子へと何百年もの間受け継がれてきた。

簡単な魔術は公表されて世界中に広まり、日常生活の中で普通に使われている。

しかし、既にある魔術式を改良したなどという人物はステリの記憶には無い。

それは何故かと言えば、魔術式が電子回路の魔術版のような物であり、緻密に構成されている事にある。

『複雑すぎる』のだ。

魔術式は、例えるなら無数に繋がった天秤が揺れること無く、一本の針の上に立っているかのような絶妙なバランスの上に成り立っている存在だ。

改良をしようと考えた者はいる。が、その全員が魔術式を解析した段階でことごとく諦めてしまった。

魔術式の完成度の高さに、手を出したくても出せなかったのだ。下手をすれば魔術が全く発動しない無意味な物になるか、制御できずに暴走させてしまうか、あるいは意図していない別の魔術が発動してしまうか。

少しでもおかしな所があれば、何があるか分からないのだ。

が、竜矢はいつもと変わらぬ明るい口調で言う。

「改良っていうか、使われている魔術文字を俺の世界で使われてる文字に置き換えてみたんだ。他にもチョコチョコいじった箇所があってさ、どうなるのかステリさんにも見てもらいたいんだ」

「キミの世界の文字かい？ ふむ、それは興味深いね。ぜひ見させてもらおうかね」

家の前にある小さな広場に出た二人を見て、パロツと遊んでいたスーニアが駆け寄ってくる。

命の恩人だと分かるのか、ステリの使い魔のパロツはスーニアによく懐いて遊び相手になっていた。

反面、竜矢にはあまり懐いてくれない。キミの力に怯えているのだろう、とステリは言っているが、竜矢が自分を食べようとした事を覚えているのかもしれない。

けっこう動物好きな竜矢は何気に寂しかったりする。

「りゅーや、あそぶ！ わうっ！ あそぶ！」

「あー後でな、ちょっと待っててくれ。危ないかもしれないから、ステリさんの側にいてくれな」

「わう？」

竜矢はパロツを抱きかかえたスーニアとステリを背にする。ステリは念の為に彼女たちと家を丸ごと防御結界で包み込んだ。

結界の外で術を発動すべく、竜矢は精神を集中させる。

「元の魔術は『星屑の灯火』^{ともしび}なんだけど、やってみるよ」

『星屑の灯火』は指先に小さな火を生み出す魔術だ。一般市民でも使える簡単な魔術であり、主に台所での火付けや、懐中電灯代わりに使われている。

「ああ、見ているよ。けれど、少しでも異常を感じたらすぐに術を止めるんだよ」

ステリの言葉に頷き、竜矢は日本語版魔術式を体外展開した。

地面に広がったそれを、ステリは興味深く観察するが何を書いてあるのかさっぱり分からない。

「……『星屑の灯火』」

竜矢が右手の人差し指を空に向けて呪文を唱える。

その指先に、周囲に目も眩むような強烈な光と、空を焼き焦がさんとするような巨大な炎が指先から生み出された。

「うわっ!？」 「!?!？」

小さな家なら丸ごと飲み込んでしまいそうな赤い炎に、竜矢は一瞬我を忘れて見入ってしまった。

が、すぐに気を取り直し、慌てて魔術を止めて炎を消した。

「あ……えっ……?」

「こ……これは……」

「わ……う……う……」

三人とも驚きで声が出ない。

パロツに至っては、スーニアの腕の中でガタガタ震えてしまっている。

「……リュ、リュウヤ、今は本当に『星屑の灯火』かい……?」

「その筈……なんだけど……。どうなってんだこりゃ」

「ふむ……。リュウヤ、その魔術式をどう改良したのか、詳しく教えておくれ」

竜矢たちは家の中に戻り、日本語版魔術式を絵に描きながら詳しく説明する。

「……でもって、ここん所の魔力の流れを二分割して、炎の大きさと光の強さを同時に増幅・制御出来るようにしたんだ」

「……ふむ……。キミは力だけが『ちーと』じゃなかったようだね」「え？」

「キミの持つ異世界の知識や発想だよ。それはこの世界では恐ろしい力を発揮しかねない。それこそ君の持つ魔力以上に強く、危険な力だね」

文明の発達というものは、平和な時代には芸術や文化が、戦乱の時代には武器や破壊兵器が主に発展していく。

一つの発見がある度に、それを使って様々な実験や考察がなされ、基礎が作られ応用法が生まれていく。

だが、竜矢の知識や発想力は、数千年に及ぶ地球の歴史の中で育まれた物だ。

魔術という力が有るとはいえ、まだまだ発展途上のこの世界において、それは文明を一足飛びに発展させてしまいかねないのだ。

これは良い事ばかりではない。

竜矢の知識を元に、何処かの国が魔術や武器に限らず、道具、法律、制度、農耕など、様々な分野で画期的な発明をしたとしよう。

その国は経済的にも、文化的にも潤う事になるだろう。

だが、別の国がその技術や発明を欲しがらない訳がない。何らかの争いが起こることは想像に難くない。

平和的にそれが公開され、世界に広まり活用されれば良いとも思える。

本当にそうだろうか？

その技術・発明を元に、強力な武器や魔術が生み出されるかもしれない。

それが争いに使われないなど、誰が断言できるのか。

「恐らくは、キミの世界の文字に、この世界の魔術文字をも上回る力が長い歴史の中で宿ったのだらうね。けれどキミの世界には魔術がない。故に問題にはならなかったのだらうね。……リュウヤ、よくお聞き」

「はっ、はい？」

「キミの作り出したニホン語の魔術式は、もはやキミのオリジナル魔術式と言っているいい物だ。優れている……いや、優れ過ぎている。これは師としての命令です、このオリジナル魔術は、よほどの事がない限り、使用を厳に禁じます」

新しい魔術式を生み出すという事は、すなわち新しい魔術を生み出す事。

これまで柔和な顔しか見せなかったステリの、厳しく真剣な表情に、リュウヤは改めて自分の作り上げた『オリジナル魔術』の危険性を悟る。

「……分かりました、ステリさん」

「うむ、決して忘れてはなりませんよ……。ふう、それにしてもこの歳になってこうも驚く事ばかり続くとはね。リュウヤ、少しは手加減しておくれ」

「あ、あははは……」

笑って誤魔化すしかない竜矢だった。

28話：竜矢とスーニア その5（後書き）

色々と忙しく、不定期更新になります。

29話：竜矢とスーニア その6

竜矢がオリジナル魔術を作り出してから、更に約二ヶ月が過ぎた。地道な基本修行の積み重ねによって魔力のコントロールも完璧な物となり、ステリのお墨付きを貰うことが出来た。

それを機に、竜矢はスーニアの首に嵌められているロストパーツを外す事を決意した。

それに備え、竜矢はロストパーツについて脳内の情報を再び検索した。

これは他のロストパーツと同じく、正体不明の金属で出来ている。だが、嵌められた本人を縛る力は強いものの強度は鉄と同等レベルで、破壊しても暴走などはしないということが判明する。

ステリと相談し、魔術で破壊するよりは、単純に力で破壊した方がいいだろうという事になった。

しかし、念には念を入れて、スーニアの体に対物理、対魔力の強力な防御結界を三重に掛けた。ロストパーツは結界の外側になるように調節する。

正直、この結界は一つだけでも『銀炎の剛嵐』レベルの威力すら軽く防ぐほどの強力な物なので、念を入れ過ぎな気がしないでもないが。

予想外、あるいは万が一、という事態はいつ如何なる時にでも起こるものだ。

「よし、始めるぞ……。スーニア、ちょっとした痛みがあったりしたら、すぐに言うんだぞ」

「あう？ わう〜♪」

よく分かっているスーニアが、いつもの様に無邪気な微笑みを返す。

失敗できない魔術に緊張していた竜矢だったが、その笑顔にいい具合に緊張を解された。

空中に浮かび上がり、首輪に手を掛けて呪文を唱える。

「……我が腕かいなに宿れ、岩裂く力よ……『巨人の強力』」

ステリの見守る中、体外展開された腕力を強化する魔術式が輝く。竜矢の腕に、素手で岩をも砕くだろう強い力が生み出される。

ゆっくりと、慎重に力を込めていくと、首輪から亀裂の入る音が聞こえてきた。

そして、薄いガラスが割れるような音がすると同時に、ついにスーニアを縛っていた首輪は真っ二つに砕け散った。

「よっしゃあ！」

「あう……わうう？」

スーニアは喉に手をやり、何もない事を不思議そうにペタペタ触っている。

だが、急に体が崩れ落ちると、両手足を地に着けて苦しそうに呻きはじめたではないか。

「あう……ぐ、ぐうう……！」

「スーニア！？ どうした！？」

「リュウヤ、大丈夫だよ。よく見ておいで」

「だ、だって、何か苦しそうじゃないか！」

「久しぶりの変化に体が追いついてないのだろうね。なに、すぐに治まるよ」

「へ、変化……？」

慌てるリュウヤとは反対に、ステリは落ち着いている。

そういえば、彼女はスーニアについて何か知っている風だった事を、リュウヤは思い出す。

心配しつつもスーニアを見守っていると、その体が金色に光り始めたではないか。

「な、なん……？」

数秒ほどの間、光は大きく、強くなって周囲を照らし出す。その明るさに竜矢は目を閉じた。

と、不意に光が消えた。

目を細めていた竜矢は恐る恐る目を開けると、口を大きく開けて硬直した。

「久しぶりだね『金銀獣瞳の姫』きんぎんじゅうどういづ。私が分かるかい？」

「……ああ、分かるぞ。久しぶりじゃ、ステリ婆ばあ」

スーニアがいた場所には、一頭の獣がいた。

狼に似た姿で、全身を美しい金毛に包まれている。

大きさは子牛ほどもあり、その尻尾は三本に分かれている。

そして、何よりも全身から発せられている神々しいまでの威圧感
は、決してただの魔獣などではない事を嫌でも認識させられた。

「ようやく……、ようやく己を取り戻すことが出来た。リュウヤ、
礼を言う。ありがとう、本当にありがとう……！」

獣は聞き覚えのある声で竜矢に礼を言った。

そう、スーニアの声で。

「ス……スーニア、なのか？ マジで？」

竜矢が呆気にとられた顔のまま声を出す。

「うむ、これがわしの本当の姿じゃ。わしはマナウルフイ。人間たちには『神獣』などと呼ばれておる」

竜矢は脳内を検索し、マナウルフイのことを知る。

太古の言葉で『真なる獣』と呼ばれる、魔獣とは一線を画した強大な魔力と力を持つ種族だ。

「ステリ婆にも世話になったの、お主に巡り合えたのは僥倖じゃった」

「ふふ、礼には及ばないさ。私は大した事はしていない。姫を助けて面倒を見たのは、リュウヤだろう？」

「……うむ」

スーニアは金銀の目を細め、いまだに呆然としている竜矢に近づく、頬擦りをした。

「あ……マナウルフイが何なのかは調べて分かったけど、びっくりし過ぎて頭が働かねーわ……」

「ふむ、ではこれならどうじゃ？」

再びスーニアの体が金に光る。

それが消えると、そこには今まで見慣れた少女が立っていた。

マナウルフイはその強大な魔力によって、人間の姿に変化する事ができるのだ。

「この方が接しやすいかの？ リュウヤ。……どうした、何で後ろを向くのじゃ？」

人の姿になったスーニアを見た瞬間、竜矢は神速で後ろを向いていた。

「何でも何もねーだろ！ 何で素っ裸なんだよお前！！」
「む？」

そう、スーニアは一糸纏わぬ裸体であった。
よく見れば、彼女の足元にはさっきまで着ていた服が粉々になって散らばっているではないか。

獣に戻った時に、魔力の放出で千切れてしまったのだ。

それで人間に変化すれば裸なのは当たり前である。

が、顔を赤くして慌てている竜矢とは反対に、スーニアは落ち着き払っている。

「何を今さら照れておるのじゃ。わしの体でお前が見ていない所など無いし、触れていない所も無い。散々好きに弄くり回したであろうに」

「いじくりっ……！！？ ご、誤解を招くような発言すぶがっ！？」

思わず振り返って反論した竜矢は、至近距離&超ローアングルから直視してしまう。

スーニアは腰に手を当てて仁王立ちだった。
隠す気など、さらさら無いようである。

「あ、あうあうあう……」

火が出そうなほどに顔を赤くした竜矢は声も出ない。が、目も離せない。

もはや金縛り状態である。

「見たいのなら、じっくり見るが良い。遠慮はいらんぞ、我が主よ」
「あ、あ、主い？」

聞きなれない単語に、竜矢の意識が少し戻る。

「ほれ、最初にわしがお前を口にくわえてしまった事があったじやろう？ あの時、お前の体についていたかすり傷から、お前の血を飲んだのじゃ。あれが『主従の契約』になっていたのじゃよ」

主従の契約とは、魔術師が使い魔にする動物に自分の血を飲ませることを意味する。

血を飲ませる事で術師と使い魔との間に経絡（パスと呼ばれる）を繋げるのだ。

しかし、他にもその動物へ術を掛ける必要がある。その事を脳内検索で知った竜矢は疑問をスーニアに問う。

「えーっと、主従の契約には術も必要だろ？ 血だけじゃ駄目だろ」
「もはやその必要は無い。その術は対象の精神を術者に委ねる為のもの。もうわしはお前に全てを委ねておるからの。心も体も、魂すらも」

スーニアはほのかに頬を染め、ふわりと笑う。

一点の曇りも無い、信頼という蜜に蕩けきった微笑み。

それに見惚れる竜矢を、彼女はそっと両手に包みこみ、その頬に寄せる。

「お前はわしの命の恩人、魂の恩人じゃ。この場で誓おう、リュウヤ。今この時より、わしはお前の従者じゃ。お前の敵はわしがすべて取り除き、危険から守り抜こう」

それは決して誇張した表現ではなく、スーニアの本心からの言葉だ。

しかし、一介の高校生であつた竜矢には少々重過ぎるものでもある。

「い、いや、そんな事しなくても……。俺はそんな積もりでお前を助けた訳じゃ……」

「迷惑か？」

一転して、絶望に塗り固められたような悲しい表情をするスーニア。

その瞳に涙が溢れていく。

この顔を目の当たりにして断れる男がいたら、鉄どころかオリハルコン並みの強靱な精神が必要だ。

この可憐な少女相手では、世の九割の男たちの精神的強度は豆腐にも負けかねないだろう。

「ぐっ……、わ、分かった分かったから泣くな！」

「では、良いのじゃな？」

スーニアが再び笑う。

彼女は竜矢を胸に抱き、誓いの言葉を繋いだ。

「この命は元より、肉の一片から骨の一欠けらまで、すべてお前に捧げよう。命果ててもなお、わしの想いはお前と共に有ろうぞ……愛しき小さな我が主」

二人の動きが止まる。

優しい風にスーニアの黄金の髪が流れ、その白い肌が陽を反射して白さを際立たせる。

『妖精と少女の逢瀬』とでも名付けられた一枚の絵画のように、二人の周囲が世界から切り離されたかのように。

「あゝ、姫？　ちょっと良いかね？」

「……何じゃステリ婆、もう少し余韻に浸っていたいんじゃないの。それからわしの事はスーニアと呼べ」

暫くそうしていた二人にステリが遠慮がちに声を掛けた。
スーニアはちよつと不機嫌そうだ。

「ではスーニア、リュウヤだけだね」

「リュウヤがどうした？」

ステリは竜矢を指差し、気の毒そうに言った。

「魂が抜け出てるようだよ？」

言われて竜矢を見てみれば、鼻血まみれで気を失っていた。

「リュ、リュウヤっ？　しっかりせい！」

「胸に直接触れてたからねえ……」

竜矢をカクンカクン揺らしつつ、抜け出た何かを呼び戻そうとするスーニアだった。

30話：竜矢とスーニア その7（前書き）

長さにちよつと半端なのですが、投稿します。

竜矢とスーニアの過去話は今回で終わりです。

さて、連載を再開してから待っていたとの温かい言葉や、評価してくれたり、お気に入り登録してくれる方が少しずつ増えていくのを見て、本気で目頭が熱くなつてしまいました。

この場を借りてそのお礼と、連載を長期ストップしてしまったお詫びをさせて欲しいと思います。

応援、ありがとうございます。

ストップしてしまい、申し訳ありませんでした。

遅筆な所はまったく変わっていない私ですが、少しずつでも書き続けていこうと思っています。

30話：竜矢とスーニア その7

「つまり、ステリさんとスーニアは前から知り合いだった訳？」

「うむ」

「隠すつもりはなかったんだけどね。魔力の波動から間違いないなく姫、じゃなくてスーニアだとは思ってたけど、確証を得るまでは言うのを止めておいたのさ」

魂を戻すことに成功した竜矢は、家の中で一服しながら二人の關係を聞いていた。

スーニアは今も少女の姿で、お茶とクッキーを幸せそうに食べている。

その姿からは、本当の姿であるマナウルフイの事などとても連想できない。

「私がスーニアに出会ったのは、この森に来てすぐだったね。当時の私は夫に先立たれて、弟子たちも全員一人立ちしたのを機に、静かに余生を過ごす場所を探していたんだ。それで魔獣の少ないこの森を選んだのだけど、ここから一番近い村で、最近大きな金毛の魔獣が現れるからやめた方が良いと言われたよ。まさかそれがマナウルフイとは予想外だったけどね」

「わしは親離れしてすぐの頃での、自分の縄張りにする場所を探している所じゃった。この森でステリに会ったとき、微かに同族の匂いがしての。しばらく一緒に暮らしたのじゃよ」

「同族の匂い……？」

「私も初めて知ったのだけどね、どうやら私の先祖にマナウルフイがいたらしいのだよ」

「ぶへっ!？」

想定外の返事に、竜矢は飲んでいたお茶を噴出しかけた。

「せ、先祖って。ステリさんの先祖にマナウルフイがいたっての！？」

「どうやらそうらしいね。今となつては確認のしようも無いけれど、民話ではそういう話が幾つかあるんだよ」

「ほええ……」

「私の家系は自分で言うのも何だが、優秀な魔術師や武術家、軍人を多く輩出していてね。おそらくマナウルフイの『血』の力が大きく作用していたのだろうね」

人間と人間以外の生物が結ばれる話は異類婚姻譚と呼ばれ、地球でも世界中に存在している。

フランスの民話にある『美女と野獣』や、日本の『雪女』『蛇女房』などが有名だろう。

異類婚姻譚で結ばれた両親の子供が活躍したという話も、やはり地球にも多数存在する。

ギリシャ神話のヘラクレスは、主神ゼウスと人間のアルクメーネーの子で彼の活躍はあまりにも有名だ。

日本の昔話にある『金太郎』は、坂田金時さかたのきんときという実在の人物がモデルであるとされている。

金太郎の出生には諸説あるが、一説には八重桐やえぎりという女と、赤龍との間に生まれた子というものがある。

その後の酒吞童子退治もまた有名である。

「地球にもそういう昔話は沢山有るけど、その子孫本人に会ったまうとは」

今更ながらにファンタジーな世界に来てしまったんだあと、妙に達観してしまう竜矢だった。

「ほころでひゅうはよ、ほれからひょうするのぼ？」

スーニアがクッキーを頬張ったまま言った。

「ん？ これからどうするって？」

急に変わった話題を振られて、リュウヤが戸惑う。

今の言葉を理解できるのを見て、半ば呆れ、半ば微笑ましく思うステリだった。

「むぐっ、んむ。己を取り戻したとはいえ、わしの体はまだ完全には回復してはおらん。今しばらく療養の時間が必要じゃ。その後のわしらの取る行動を決めておかぬか？」

「んなもん、決まってるだろ」

竜矢は一口お茶を飲んでから、唇の端を上げて言った。

「あのクソジジイを探して、地球に帰る方法を聞きだしてやる」

「……そうか」

一瞬、スーニアの視線が竜矢から逸れる。
が、すぐに竜矢に戻した。

「まあ、その方法が分かったとしても、帰るかどうかはその時になつてみなきゃ分からねーけどな。地球とこっちとで時間の流れる速さが違ったりしたら、帰っても路頭に迷っちゃう事になりかねない

し。そういう時はこっちに残るかもな」

「ふむ、そうか。……ならば、わしも早く回復せねばな。あの魔術師は得体が知れぬ。わしでさえも奴には手も足も出ずに捕らえられてしまうた」

スーニアは少しだけ嬉しそうな顔をしたが、それをすぐに消すと自分を捕らえた老魔術師との戦いを語った。

気まぐれに森の中を人間の姿で散策していた時、不意に目前に現れた老人はその魔術とロストパーツの物と思われる力を振るい、マナウルフィである自分を難なく捕らえたのだと。

「わしはまだ成獣ではないが、それでも人間に遅れを取るとは思わなんだ。薄れていく自我の中で、己の未熟さが悔しくてしょうがなかったわ」

「……そうか。あのジジイ一体何者なんだろうな……」

竜矢も、自分を苦しめた憎むべき老人を思い出す。

世界の壁を越えて自分を召喚し、地獄の責め苦を与えた人物。

老人は竜矢の体を必ず手に入れる、と言いついて残して去って行った。

その魔力はこの世界の人間の常識を遥かに超えたものである事を、今の竜矢はその知識から知っている。

（そもそも、何で俺の体を欲しがってるんだ？ 『次のわしに打って付け』とか言ってたが……。待てよ、『次のわし』？）

そこで竜矢はある推理をした。

老人とやりあった際、彼はこうも言っていた。

『今のわしには勝てぬよ』と。

『今のわし』があの人であり、竜矢を召喚し、体を改造し、知識と魔力を与えた。

『次のわし』にする為に。

（俺の体に乗っ取って、次の『新しい自分』にする為、か！？）

そう考えれば、老人の言動にも、行動にも納得がいく。

より強く、若い体を手に入れ、それに今までの自分の記憶と力を植えつける。

そして、体に乗っ取る

いわば、生まれ変わる事になるのだ。

（クローンに記憶を移すことで、何度も復活する映画があったよな、あんな感じか？ もしそうなら、俺の体と力があのジジイの物になるって事だ……。あいつ、今までもずっとそうやって、他人の体と力を手に入れてきたのか？）

常人とは比べ物にならない老人の力。

それは一体どれだけの人間の体に乗っ取り、力と知識を上乗せし、蓄積してきた物なのか。

（冗談じゃねえぞ、あんな奴にこの力を渡したら、どんな事をしでかすか分かったもんじゃねえ！！）

竜矢はその推理を仮説と前置きして二人に説明した。

二人とも、その顔は蒼白となっている。

「もしや、わしの体も乗っ取るつもりだったのか、あの魔術師は…
…」

スーニアが自分を抱きしめるように腕を抱く。

自由を奪われていたのだから、その間に乗っ取られていてもおか

しかなかったのだ。

「スーニアの体に乗っ取らなかったのは、単純にその魔力を利用する為だったんじゃないかな。もしかしたら、異世界召喚に関係してるかも知れない」

「ふむ……。他人の体に乗っ取る、邪神魔術の禁呪法があったと古文書で読んだことがあるよ。成功率がとても低い上に、失敗すると術者も犠牲者も魂が消滅してしまうそうだ。けれど成功すれば、術者はこれまでの記憶を維持したまま、犠牲者の魔力を、自身の魔力に上乗せして得ることが出来るらしい。既に失われた魔術だから、まさかとは思うけれど……」

竜矢は脳内検索でその魔術を調べる。

判明したその名は、『彷徨いし虚ろなる邪神の祝福』。
ステリが言った内容そのままの禁呪であった。

「……なんと。その魔術師はこの禁呪を行使し、成功したと……」
「多分ね。そして、より強い力と体を求めて異世界の人間を召喚した。……はた迷惑なジジイだよ、まったく」

竜矢はお茶を一口飲み、一息ついてから口を開く。

「放っておく訳にはいかなかったな……。あのジジイは俺の体を諦めても、また別の異世界人を召喚するかもしれない。俺は運良く逃げられたけど、次に召喚された奴が逃げられるとは思えない。俺の一件で、対策をしておくだろうからな。……つつても、ジジイは俺にご執心みたいだから当面その可能性は低そうだけど」

「……戦う気かい？ 確かに、スーニアでさえ敵わなかった相手だ。

一国の軍隊を総動員しても、勝てる可能性は無いだろう。あるのはリュウヤくらいなものだろうが……」

「ステリ婆、心配はいらぬよ。おそらくリュウヤの力は奴よりも上じゃ。魔力とは生命力の一部に過ぎぬ。リュウヤの魔力はあの魔術師が植えつけた物じゃが、それは生命力を魔力に変換して取り出す為の“窓”のような物。リュウヤはその生命力で、この世界では不死身の超人……いや、神々の子孫といわれる妖精にも匹敵する存在となっているのじゃから」

心配に顔を曇らせるステリに、スーニアは平然とした顔で言う。
さっきまで変わっていた顔色は元に戻っていた。

「それに、リュウヤだけではない。次はわしも戦うぞ、散々に道具にしてくれた札をしてやらねばな」

スーニアは目を細め、その瞳孔が獣時のように縦に細くなる。怒りで魔力が無意識に溢れ出した。

床にいたパロツが慌ててステリの足の上に飛び乗り、ガタガタ震えている。

「スーニア、落ち着いとくれ、この子が怯えてしまっているよ」

「……む、すまん」

スーニアは魔力を収め、お茶を啜る。

「今後の方針は決まりだ。スーニアの完全回復を待つて、あのジジイを探しに行こう。……多分、殺し合いになると思う。俺は人を殺したことなくない。地球じゃ人殺しはどんな理由があろうと、やっちゃいけない事だったからさ……。でも、あいつは絶対に止めな

きやならない奴だから」

話が一段落したと判断し、竜矢がそう締めくくった。

竜矢の中で、老人に対しての恨みや怒りと、地球人としての常識がせめぎ合う。

いざ老人と対峙した時にどうするのかは、その時になってみなければ自分でもよく分からない。

一つだけはっきりしてるのは、あの老人は決して野放しにして良い存在では無いという事だ。

ステリの心配は消えていなかったが、竜矢たちの決意を悟り、それ以上は何も言わなかった。

この日から半月ほど後、竜矢とスーニアはステリの家から旅立つ事になる。

そして老人の情報を得るべく、正体を隠してあちらこちらの村や街を巡っていた。

傭兵シェリカに会ったのは、そんな最中の事であった。

「……とまあ、こんな所さ」

スーニアとの出会いからシェリカに会うまでの事を話し終えた竜矢は、ミルクピッチャーに入った茶を飲み、長く喋った為に渴いた喉を潤した。

「色々あったんですね。あ、その魔術師、ギルドで調べてもらえ

ば何か分かるかも知れませんか？」

シェリカの言うギルドとは、傭兵や冒険者への仕事を仲介を主に
行っている組織のことだ。

仕事の内容は犯罪行為を除き、近所のお使いから戦争の兵士募集
まで実に幅広い。

シェリカは自分を傭兵と言っているが、戦場で戦った事はほとん
ど無い。それよりも遺跡の探索や、犯罪に対しての調査などを主に
行っていた。

この世界では、傭兵と冒険者は明確に区別されてはいない。シェ
リカのように自らを傭兵と呼ぶ者もいれば、冒険者だという者もい
る。

故に組織も『冒険者ギルド』『傭兵ギルド』等のように分かれて
はおらず、単に『ギルド』と呼ばれている。

ギルドは各国の管理の枠外にある独立組織であり、ほぼ人類の生
活圏すべてにネットワークを広げている。

人探しの依頼なども勿論できるし、発見率も高いのだが……。

「あー、俺もスーニアも素性を誤魔化してギルドに登録してるんだ
よね。んで、依頼は出してるんだけど、今のところ情報ナシ。ここ
んどこバタバタしてたからギルドに顔出してないけど、多分状況は
変わってないんじゃないかな」

「ギルドの情報網でも簡単に見つからない、と……厄介な相手です
ね。本当に早く見つかるといいですね」

ミルファルナの言葉に頷く竜矢。

と、その横にいるラディナが呆けたような、奇妙な顔をしていた。

「ラディナ姫、どしたん？　なんか顔が面白くなってるよ？」

「あ、い、いや……。リュウヤ殿？　その、ステリ・マグノワイヤ
ーという御仁がどんな方なのかご存知なのか……？」

「え？　いや、ステリさんの事は引退した腕の良い魔術師としか知
らないな。」

詳しく聞いたこと無いからなあ。あれ、もしかして有名人だったの
？」

「ゆ、有名などというものではない！」

急に立ち上がったラディナは興奮気味を通り越し、興奮しながら
喋りだした。

「魔術大国ジュマルの宮廷魔術師に、是非にと求められたほどの凄
腕の術者だ！　魔術だけでなく双剣使いとしても知られた魔術剣士
で、若い頃は冒険者として悪竜退治をはじめ、数々の武勇伝を残し
ている！　特に小さな村を襲った二匹の魔獣を、友の赤子を抱きな
がら一人で打ち倒したという話は、吟遊詩人にとっては必修の話と
聞いている！　私の憧れであり、目標ともいえる御方なのだ！」

「そ、そんな凄い人だったんか……。気の良い、優しいお婆ちゃん
にしか見えなかったよ」

「そういえば、私も名前だけならチラッと聞いたことあるかも……。
何十年も昔に活躍した、すっごく強い双剣の魔術剣士がいたって。
付いた二つ名が確か……。『風雷双剣の魔剣士』」

「そう！　まさにそれだ！」

「ヒイツ！？　すいません！」

惚れ惚れするような力強さで、ラディナはビシッとシェリカを
指差した。

あまりの迫力にシェリカは思わず謝ってしまう。
そんな事は気にせずに、ラディナは熱く語り続ける。

「風の魔剣と雷の魔剣を己が手のごとく自在に振るい！ その魔術は悪竜の炎の吐息ブレスに勝るとも劣らない！ 何度この話を吟遊詩人を呼ぶたびに歌ってもらった事か……！」

普段のラディナからはまったく想像できない興奮ぶりに、全員口が半開きである。

そんな事はお構い無しに、ラディナは竜矢に詰め寄った。

「リュウヤ殿！ 頼む！ マグノワイヤー殿の居られる所を教えてください！ ぜひ城に招待を……いや、ここはまず書状を送ってから、こちらから出向くのが礼儀というものだろうな！ ああ、幼い頃から憧れた方に会える機会が来ようとは……！」

ラディナの周りに無数の花や、美しい蝶やら鳥やらが現れたかのような錯覚に陥る一同。

が、次の竜矢の言葉にその幻覚はポシュン、と擬音を残して消えた。

「あゝその、ゴメン、それ無理」

「な、なに！？ 何故だ！？」

「ステリさんとの約束なんだよ、自分の居場所あてずかいは誰にも教えないでくれて。のんびりと余生を過ごしたいんだってさ」

「そ、そんなっ……？」

二、三步後ろによろける様に後退あとずかいったラディナは、両の手足を地に付いてガックリとうな垂れた。

お姫様のリアル、オー・アール・ゼットな姿に、竜矢の心がチク

チク痛む。

あまりのガックリぶりに、ミルファルナが彼女の側に寄ってその背中をさすって慰めつつ、縋るような視線を竜矢に向ける。

チクチクがいつそう強くなった。

「あ、え、ええと、まだ先の話だけど、ステリさんにはそのうち顔見せに行く積もりだからさ、手紙を預かるくらいなら……」

「本当か!？」

体の上に押し掛かっていた大量の縦線を掻き消して、ラディナが顔を上げた。

希望に満ち溢れた笑顔、とは正に今の彼女の顔だ。

「ぜひ頼む!! よし、そうと決まれば早速書状をしたためよう! リーラ!」

「はい、すでに用意しておりますよ」

リーラの方を見てみれば、いつの間にやら部屋の片隅にある机の上に、新品の紙と羽ペン、封筒、封印用の蠟ろうとシーリングスタンプがすぐ使えるようにきっちり準備されていた。

「だから、まだいつ行くか決めてない……って、い、いつの間に用意を……」

「わしでも気付かなかったぞ……」

竜矢とスーニアが驚きに目を見張る。

そんな二人に、彼女はにっこりと微笑んだ。

「シーナさんが手伝ってくれたので、すぐに用意できましたわ」
「私が手伝ったのは、少しだけですよ」

笑みを交し合う侍女二人。
本当に有能な侍女たちであった。

31話：ギルドにて（前書き）

ちよつとシェリカのターン。
短いです、すいませんorz

31話：ギルドにて

春先のうららかな日差しの中、パルファスト王都の街を鼻歌交じりで歩いて行くシェリカの姿があった。

今、彼女はギルドへと向かっている所である。

先日、王城へと差し入れを持って行った時に聞かされた、竜矢とスーニアの出会いの話について色々考える。

（あの二人を捕まえちゃうなんて、どんな魔術師なんだろうな）。そんな凄腕なら噂くらい聞きそうなものだけど、聞いた事ないなあ。あ、でもリュウヤさんは強くなる前か。はあ、それにしてもスーニア様の人間の姿……可愛かったなあ！）

話を聞いた後、スーニアが人間になった時の姿を見たいと、ミルフアルナが懇願したのだ。

最初スーニアは渋っていたのだが、竜矢が『まあいいじゃんか、お前の人間の姿を見たら皆驚くぜ？ 可愛いから』と言った途端、あっさり了承した。

無意識だったのだろう、三本の尻尾をそれはもうブンブンと勢いよく振っていた。

実に分かりやすい伝説の神獣である。

そして、人間になった姿を見て、竜矢を除いた全員がその美しさと愛らしさに魅了してしまった。

とある民話では、マナウルフィが美女になった姿を見て、三つの国の王が一目惚れをした。

彼女を妻にしようとして互いに争い、ついには戦争に発展してそれぞれ疲弊しきったところを大国に攻め込まれ、三国ことごとく滅ぼされてしまったという。

正に傾国の美女だ。

スーニアはまだ子供の姿だが、それでも全員、この民話を無条件で信じてしまえる程だろう。

特にミルファルナは、彼女をお持ち帰りしたくて挙動不審に陥っていた。シェリカは彼女の口から、涎が落ちかかっていたのを目撃している。

もちろん持ち帰りなど無理なので、急いでスーニア用の子供服をシーナに命じて用意させていた。

二、三日中には、特別注文の子供服が王城にどっさり届く事だろう。

王の隠し子が現れたのか等と、噂が立ったりしなければ良いのだが。

そんな事をつらつら考えているうちに、ギルドのパルフスト支部へと辿り着いていた。

質実剛健を地で行くような、飾り気の無い木造三階建ての建物だ。外にも中にも、人目でそれと分かる連中がたむろしている。

よく見れば、冒険者の仕事を主に行う者と、傭兵業を主に行う者との格好が少し違うのが分かる。

前者は荷物が自然と多くなる。任務が長期になる場合もあるので、野宿の為の道具一式などが必要だからだ。

対して後者は、武器、防具、その他最低限の必需品のみの物が多い。戦う事に専念できる為だろう。

無論、あくまでも傾向的なものではあるが。

彼らのような者たちは、かつて『自由人』と呼ばれていた。

生きるも死ぬも、すべて自己責任で自由気ままに生きていた事からそう呼ばれていたのだ。

それから百年以上の時がたち、少しずつ傭兵、冒険者と分けて呼ばれるようになってきた。

あと数十年もすれば、傭兵と冒険者は完全に区別して扱われることになるだろう。

そんな連中の間をシェリカは器用にすり抜けると、受付へと辿り着いた。

もう顔馴染みになっている受付の女性に声を掛ける。

「メリアさん、こんにちわー」

「あら、シェリカちゃん、いらっしやい」

二十台半ばと思われる、長い銀髪を背中であとめた垂れ目気味の美人さんである。ちなみに言い寄ってくる男も多いのだが、恋人がいるので例外無く撃沈している。

「今日は新しい依頼探し？」

「ううん、頼まれて来たの。はい、これ委任状」

「じゃあ、拝見するわね」

委任状はギルドに何らかの事情で来られない人物が代理人に渡す物で、『この人は自分の代理人です』と証明する為に必要な書類だ。書いた人物の魔力の波動を記録できる、特殊な魔術紙を使っている、ギルドでのみ製造、販売を行っている代物だ。

これはギルドに登録した人間にだけ売り出されている。

メリアは机の引き出しから確認用の魔術式が刻まれた金属板を取り出すと、委任状をその上に乗せる。

すると、その上に登録された人物の名前がホログラムのように浮かび上がった。

「えっ？」

「えっ？」

それを見るなり、メリアが驚きの声を上げた。

つられてシェリカも声を上げてしまった。

小首を傾げてメリアを見る。

「どうかしました？」

「シェ、シェリカちゃん、この委任状って……」

「リュウ・サカザインさんと、スーニア・マナウルさんとの連名委任状ですけど

……？」

竜矢とスーニアがギルド登録の際に使った偽名を言う。

「『はげき破撃こくていの黒帝』と『こんじき金色まじんきの魔神姫』！！ この二人と知り合いだったの！？」

「……へ？」

素っ頓狂な声を上げたメルルに、間の抜けた声を出すシェリカ。反応が出来ずにいるうちに、声を聞いた連中が回りに集まって来ていた。

「おい姉ちゃん、あの二人のこと知ってんのか？」

筋肉が身に着けている鎧を弾け飛ばしそうな、スキンヘッドの大男がシェリカの頭上から声を掛ける。

「ふえ、あの……え？」

「知ってんなら、居場所を教えてくださいよ！ あいつらは俺の命の恩

人なんだ、礼の一言も言わせずに消えちまってよ、ずっと探してたんだ」

「俺らもだ、知ってるなら教えてくれ！」

「私たちのパーティーに何度も勧誘したのだが、聞く耳持ってくれなかった。彼らの知り合いなら口添えしてくれないか？」

「リュウ様がこの国に来てるの！？ 何処！？ 早くお言いなさい！！」

「サカザインさんの恋人になりたいッス！ 男ですけど愛に性別は関係無いッス！」

「ス、スーニアさんに、こ、このラブレターを渡して欲しいお！」

命に関わる仕事を生業にしている屈強な連中が、男女問わずにシエリカに詰め寄ってくる。

暑苦しいを通り越して、シエリカは本気で命の危険を感じる。一部の別な意味で危ない連中のお陰で感じる危険度も倍増だ。

（二人とも一体何やってたんですかーっ！！ 聞いてませんよこんなのにっ！？）

心の中で竜矢たちへの文句を叫ぶシエリカだった。

32話：ギルド職員 メリアの報告書（前書き）

なんつーか、番外編？
w

32話：ギルド職員 メリアの報告書

皆さんの証言を纏めましたので報告します。
＊印のコメントは対処結果の個別報告です。

傭兵…リドラス・ウェイバーグさんの証言

「ああ、黒帝と魔神姫は俺の命の恩人だよ。ガインベルク王国とパウラ公国が小競り合いしてるのは知ってるだろ？　そこで一稼ぎしてたんだが、ドジ踏んで部隊とはぐれちゃってな。結構やばい傷を負ってた上に、血の匂いで魔獣の群れが寄って来ちゃって、さすがに終わりかと思った時にあいつらが助けてくれたんだ。最初は死神がお迎えに来たかと思っただけ、黒帝の格好は全身黒ずくめで顔には黒い包帯巻いてるし、魔神姫は子供なのに信じらんねー別嬪だし…：魔性の美しさでも言うんかね？」

「どうやって助けたかって？　へっ、驚いたぜ。魔神姫が一睨みして『失せろ』って一言言っただけで魔獣どもが怯えて逃げちゃった。それで黒帝が治癒魔術で俺の傷を治してくれたんだが、ありゃあ相당한術者だな、治るスピードがとんでなく早かった。で、部隊の所まで一緒に来てくれてよ、お陰で無事に助かったって訳だ。ところが礼を言おうと思ったら、いつの間にか姿が消えちゃってたんだよ」

「なあ、あの姉ちゃんに居場所を覚えてくれるように頼んじゃくれねえか？　借りを作ったままじゃ、寝覚めが悪くてしょうがねえんだよ」

＊ひとまず今回のところはお引取り下さいました。見た目は怖いですが、物分りの良い方で助かりました。

冒険者パーティ…『穏やかなる鉄槌』リーダー、グラッド・ガグさんの証言

「ある廃墟を根城にした盗賊団の殲滅を請け負ったんだが、連中、腕の良い魔獣使いを仲間にしていて迂闊に手が出せなかった。そこで臨時に増援を依頼してやって来たのがあの二人だったんだ。……いやまあ、正直、こりゃ駄目かと思った。何しろギルドに登録して初仕事だって言ってたからな。黒帝は胡散臭さが爆発してるし、魔神姫は子供だし、最初はハズレを引いたかと思ったよ」

「とにかく件の廃墟に行ったが、廃墟の入り口の周りには魔獣使いが使役してるブラックビーストが三十匹もいやがった。こいつらをどうにかしなきゃならんと話したら、黒帝が『分かった、任せてくれ』って言って、目の前に小さな魔術式を出した。そいつをどうしたと思う？ ハンマーで皿を割るように、握りこぶしで魔術式を上から叩いたんだ。その途端、ブラックビーストが上からとんでもなく重い岩でも落ちてきたような感じで、残らず潰されて地面に埋もれちゃったんだよ」

「いやはや、驚いたね。俺たちが馬鹿みたいに大口開けて呆然としてると、中からビーストの悲鳴を聞いて盗賊団が出てきた。気を取り直していざ戦おうとすると、今度は魔神姫が『無垢な獣を利用しておって』とか言って一人で連中の前に行っちゃった。止めようとしたが、出来なかったよ……怖かったのさ、あの子が。怒っているのが分かった。全身から魔力が噴き出して周りの空気が、と言う

より、空間が歪んでいるようにすら思えたね」

「盗賊たちは金縛りにあった様に、動けなくなってた。分かったんだろうな、彼女が自分たちよりも遥かに強いって事が。魔神姫が右手を軽く振った、それで終わってた。盗賊たちは体に三本の傷を負って痛みのにた打ち回っていたよ。廃墟の中にいた連中も一人残らずだ。その傷は獣の爪に切り裂かれたような感じで、淡く金色に光っていたよ。不思議な魔術だった」

「後は簡単だった、動けない盗賊どもを始末するだけだったからな。ただ、黒帝と魔神姫は手を出さなかったな。人を殺したことが無いって聞いて、また驚いた。これだけの実力者がまだ未経験だったとはってね。その後パーティーに勧誘したが、あっさり断られたよ。だが、まだ諦められなくてね。……今日のところは引き上げる。彼らに伝言を頼めるかな？俺たち『穏やかなる鉄槌』は、君たちの初仕事を一緒にした縁を喜び、二人を歓迎するってね」

＊実力派として知られているパーティーのリーダーだけあって、終始穏やかに話しに応じてくれました。

冒険者パーティー…『優雅に華麗なアルサオナと下僕たち』リーダー、アルサオナ・リクス・クアントウスさんの証言

「私と両親は、全身に激しい痛みが襲う邪神魔術の呪い『妖夢の茨』ようむ いばらを掛けられていたのです、本当に苦しかった……。どんな術者も匙^{さじ}を投げたその呪いを解呪して下さったリュウ様は、クアントウス家にとって大恩あるお方ですわ。見た目に反して、あの優しいお声にどれだけ支えられ、励まされた事か。謝礼としてクアントウス家に

伝わるロストパーツについて調べておられました。残念ながら目的の物とは違っていたらしく、少々落胆しておられました……」

「ロストパーツの力？ 何でも、対象物の時間を少しだけ戻せるのだとか。もつとも、壊れた小さな……例えば、壊れた指輪などの時間を戻して、壊れる前に戻したりは出来るそうですけど、大きさはその位が限界で、戻せる時間も一時間にも満たない。さらに一回使うために魔術師のええと、確か百人分の魔力が必要だとかで、おおよそ実用的な物ではありませんわね」

「それはともかく、さっきの女性に会わせなさい！ え？ ギルドで一時保護？ でしたら、リュウ様の居られる場所を聞き出して来なさい！ 今すぐ！ 私はあらためてリュウ様にお礼が言いたいのです！ そして家に招待してそのまま監禁……コホン、もとい、我がクアントウス家の素晴らしさを知ってもらい、我が婿に……！ え？ 魔神姫はどうするのか？ ふっ！ 笑止ですわ。確かに美少女ではありますが、あんなペツタンコと、私の体と美貌とでは比べることも出来ませんでしょう？ オーツホッホッホ！」

＊ギルド登録者のプライベートな事に関しては、口外できないというのがギルドのルールですので、それを説明してお引取り願いました。ただ、あの高笑いには耳にやたらに響いて耳鳴りが暫く消えませんでした……。

冒険者…フィリスト・キング（自称・武と愛の探求者）さんの証言

「あれは、とある依頼をこなした帰り道の事ッス。あの二人が五十人くらいの盗賊団と戦っている所に出くわしたんッス。すぐに加勢

しようとしたんですが、そんな必要はまるで無かったツス。戦っているのはサカザインさんだけで、マナウルさんは見てるだけでしたけど、そりゃもう強いなの！ 何の武器も無しに、盗賊たちの攻撃を流れるような体捌きで易々と潜り抜け、次々と連中の意識を刈り取っていったツス」

「殺すよりも、生かして倒す方が何倍も難しいもんツスが、あの人はそれを五十人相手に難なくやってのけたんツス。自分はデイルワナで少し修行した事があるんで分かったんすが、サカザインさんの動きはデイルワナの武術に色んなもんをミックスしたもんツスね、見た事も無い投げ技とか蹴り技とか使ってましたし。何処で習ったのかぜひ教えて貰いたいツス！」

「彼の動きは流水に流れる木の葉、あるいは風に吹かれる綿毛。そうかと思えば大地をも割るような、雷の如き激しい一撃……！ 美しく、恐ろしくて、何より懂れて……！ 自分はあれ以来、サカザインさんの虜ツス！ 弟子入りして昼夜問わず！ 男同士の裸の付き合いを！ それこそ汗まみれでくんずほぐれつ！ 寝技とか寝技とか寝技とかご指導をっ！ そして互いの熱いパトスを粘着的に絡めあっていずれば恋人にっっ！！！」

＊だんだん目付きと言動が危なくなってきたので、ギルドガーディアンにお願いして強制退去して頂きました。出来ればあまり会いたくない方ですね……。

商人…バンバス・バンバーさんの証言

「僕がスーニアさんに会ったのは、仕入れた荷物を運ぶために護衛

として雇った時だったお。一目見たその瞬間、僕は運命を感じた！
僕のお嫁さんは彼女しかないって！ だけど彼女はあの不気味な黒帝にべったりで、何度プロポーズしても冷たい目で見られて振られてしまったん……。でもクーデレなスーニアさんに、僕の心臓は鷲掴みだお」

「だからラブレターを書いた！ 僕のお嫁さんになってくれれば、バンバー商会のすべてはキミの物とか、僕の『古今東西美少女コレクション』を捨てても良いとか、僕がデザインした特製下着を毎日プレゼントするとか、僕の思いを注ぎ込んだ会心の一筆なのだけ！」

「だからこのラブレターをマイ・スウィート・ハニー、スーニアさんに渡して欲しいお！ 御礼はするお！ 僕とスーニアさんの結婚式にも招待するお！ 彼女の花嫁姿はきっと天使のように素敵だお……ハアハア……！ そ、そして初夜はうへ、うへへへへ」

＊汗を大量にかきながら詰め寄ってくる彼に、思わず悲鳴を上げそうになってしまいました。バンバー商会といえ काफी 有名なお店ですが、この先大丈夫なんでしょうか……。あ、彼はギルドガーデイアンに摘み出してもらいました。やっぱり私の恋人は頼りになります。

以上、報告を終わります。

32話：ギルド職員　メリアの報告書（後書き）

ちなみに、バンバスのモデルはシュタインズ・ゲートのダルですW
まゆりエンドせつねええええええ！

33話：嘘を見抜く目（前書き）

32話が大分短いので、早めに投稿します。
嵐の前の静けさ、でしょうか。

33話：嘘を見抜く目

「落ち着きましたか？」

「はうう、怖かったです……お嫁にいけなくなるかと思いました……」

詰め寄る暑苦しい連中から逃れ、ギルドの三階にある応接室に保護されたシェリカは涙目で安堵の溜め息をついていた。

「はは、何と言うか……災難でしたね」

目の前には、このギルド支部長である男性、バート・グランデイが気の毒そうな笑みを浮かべてシェリカを見つめている。

バートは三十代前半の、温厚そうな紳士だ。金髪をオールバックに固め、ギルドの制服に身を固めた姿はとても似合っている。きつと女性職員たちに狙われているんだろうなー、とシェリカは思う。

「それで、委任状を確認させてもらいましたが、あなたが今日こちらに来たのは、サカザインさんとマナウルさんが出している搜索依頼の、調査状況の確認ですね？」

「はい」

ゴタゴタで忘れそうになっていたが、そもそもシェリカがギルドに来たのは、竜矢たちがギルドに依頼している例の老魔術師の搜索状況がどうなっているかを聞きに来たのだ。

この世界にも郵便システムは存在する。依頼したのが普通の人間なら、その住居に書状を送ればいいだけだ。重要なものなら、魔術を使った伝達方法が幾つかある、それを使えばいい。

だが、当然だが今の竜矢たちは存在を公には出来ない。故にシリカに頼んだのだ。

バートは書類をめくりながらそれに答える。

「残念ながら、調査はまるで進んでいないのが現状です。何しろ分かってるのが人相、風体、老人で魔術師、あとは邪教徒の可能性があるという事だけで、手掛かりが少なく……」

「そうですか……。追加情報として送られた筈ですが、仲間と思われる三人の邪教徒についてはどうですか？」

竜矢はラディナに頼み、ゼウルたちの情報をギルドに送ってもらっていた。

こちらの返事も芳しくない。

「中年の男一人、若い女二人でしたね、そちらも情報は皆無です。正直、我がギルドの情報網にここまで引っ掛からないとなると、他国に逃れて潜伏しているかも知れませんね」

バートの言葉にはある含みがある。

ギルドは国の管理を外れた独立組織だが、何処の国にも味方をしない、中立の組織でもある。

戦乱の時代でもあり、各国の情報を無闇に広げることは国に目を付けられ、その国の支部を潰されてしまう事にもなりかねない。

ギルドはあくまでも民間の組織であり、何処の国であれギルドそのものが敵対するような行動は慎んでいる。

つまり、各国の深部や暗部に潜ひそまれてしまつては、ギルドに打つ手はないという事。

バートの言葉には、探している老魔術師たちが、何処かの国の重要な位置にいる人物だという可能性を仄ほめかしているのだ。

もっとも、傭兵や冒険者たちが自己責任で、他国へのスパイ活動や戦争に参加するのは話が別である。ギルドは仕事の仲介だけで、依頼内容が殺人などの犯罪行為でない限り関与はしないのだ。

シェリカも自らを傭兵と名乗る者たちの端くれだ。彼の含みを読み取り、眉を顰めた。

「そうなる、これ以上捜査の手を伸ばすという事は……」

「何処かの国を相手にする危険性が出てきますね」

こうなると、ギルドとしては表立って動くことは出来ない。

手が無い訳ではない。

ギルドに登録している者たちの中には、情報収集活動を主に引き受けている者もいる。シェリカもそういった調査的な仕事が得意な方だ。

そんな者たちに、老魔術師たちが潜んでいそうな国へ、片っ端から内部調査を依頼するのだ。

しかし、これは凶暴な魔獣を相手にするより、ある意味難しいだろう。

敵地のご真ん中に忍び込んで調査をするのだ、周りはすべて敵だらけである。

それに、依頼料もその危険度に応じた高額なものに跳ね上がってしまう。一介の冒険者がそう簡単に出せる依頼ではないだろう。

もっとも、この依頼を出している二人は色んな意味で規格外なので、一般常識は当てはまらないのだが。

「なるほど……。分かりました、その事をリュウ、さん達に伝えます」

一瞬、リュウヤと呼ぼうとしてしまった。

誤魔化すように、シェリカは席を立とうとする。

それを止めるように、バートが声を掛けた。

「あ、少しよろしいですか？」

「はい？」

「もし不都合であれば答えなくてもよろしいのですが……。もしや黒帝と魔神姫のお二人は、今は王城に滞在していらっしゃるのでしょうか？」

「え？ えと……」

シェリカの心臓が高鳴る。

いきなり何を言い出すのだこの人は、教える訳にはいかないというのに。

「ああ、いえね、あの二人は経歴・素性が一切不明の上に超が付くほどの実力者。ギルドにも毎日のように、問い合わせが多く届いてまして……。ここ最近、活動している様子が無かった事。そこへ追加情報の邪教徒三人について、書状を持って来たのが近衛騎士の方だったもので」

「近衛騎士が……。あ、あはは……」

それでは、あの二人が城にしていると教えている様なものである。

もう少しどうにかならなかったのだろうか。

「これは私の推測ですが、二人はあの謀反事件に関わっていたのではないですか？ そして、事態の解決に一役買った……。そのまま何らかの理由で王城に滞在している……」

「え、ええっと……」（す、鋭い……）

ギルドの支部長を務めるだけあり、洞察力はかなり高いようだ。シェリカはクロフォード王から直々に、レグリオス王からは書状でリュウヤたちについて口外しないよう命令されている。

同時にリュウヤたちを二国に繋ぎ止める役を、正式な依頼として引き受けていた。必要経費込みで、一般人の月収約三ヶ月分という高額な報酬が毎月支払われる事になっている。

といっても、やってる事は名物料理や新作お菓子を二人に持参する事ぐらいなのだが。

そう、城への訪問は、王たちからの依頼の一環でもあったのだ。シェリカは謀反事件解決後、竜矢たちは英雄として扱われるだろうと予想していた。

そうなれば協力したとはいえ、自分は一傭兵に過ぎない。二人と分かれる事を覚悟していた。

だが、出来ることなら交友を続けて行きたいと望んでいた彼女は、この依頼を渡りに船とばかりに引き受けたのだ。

バートの言葉に、シェリカはクロフォードから発行された、直筆の特別入城許可証を入れた上着の内ポケットを思わず上から押さえってしまう。

それを見透かすような瞳で、バートは彼女を見つめ続ける。

その目からは、感情が読み取れない。

彼の顔から、いつの間にか笑みが消えていた。

「あの二人は、ギルドに登録してから二つ名を得るまで、わずか一ヶ月という超最短記録を打ち立てました。通常では考えられない事です。二つ名とは冒険者や傭兵、あるいは武術家や軍略家として活躍していくうちに、自然と呼ばれるようになるものです。どんなに早くても、数年は掛かるのが普通、それを……」

「す、凄いですねー」

「受ける依頼も、一日に数件は当たり前、多い時には十件の依頼を一日で完遂。そんなハイペースで依頼をこなしているのに、依頼達成率は何と百パーセント」

「す、凄い、ですねー」

「それだけの実力があれば、あの謀反事件でも相当な活躍ができたでしょう。ちょうどその頃から、二人の消息がぷつぷつりと途絶えてしまっています。そして、あの噂……」

バートはそこで言葉を一旦区切る。

まるで、剣で切りかかる直前の溜めをするかのように。

「う……噂？」

「妖精と神獣」

棒読みの返事しか出来なかったシェリカは、引き攣った笑みしか返せなくなった。

竜矢たちの噂は、今でも収束することなく広く流れている。まだ当分の間は街の住人たちの口に上り続けるだろう。

「黒帝は素顔はおろか、肌を見た者すらいない。あの包帯の下がどうなっているのか、誰も知らない。魔神姫は……神獣が人間の姿をとる民話があるんです、ご存知ですか？ ……色々な事が、あまりにもタイミングよく重なっていますので……。もしかしたらあの二人が……と想像してしまいました」

背中に冷や汗をダラダラ流しながら、どうやって言い逃れようかと必死で考える。

が、急にバートの顔に笑みが戻り、明るい口調になった。

「はっはっは！ いやいや、下らない妄想を語ってしまいましたね。お引止めして申し訳ありませんでした」

「え、……え？」

「私は支部長という仕事をしていますが、趣味であちこちの伝説や民話を集めてまして。もしも妖精や神獣が今のこの世界に現れるとしたら、どうするだろう？ とか考えている所にあの噂を耳にして妄想が膨らんでしまってますね。どうでしょう、私、実は作家の才能があったりしませんかね？」

「は……え、ええ！ あ、あると思いますよお！ 面白かったです！
！ そ、それじゃあ、私はこれで！」

「はい、サカザインさんとマナウルさんによろしくお伝えください。ああ、出るなら裏口からの方がいいですよ、あなたの事を待ち構えている人たちがいるみたいですから、ホラ……」

バートはシェリカを促して窓からギルド前の道を見せる。そこには金髪美女のパーティや、横方向に巨体の商人がギルド入り口前でウロウロしているではないか。

泣きそうな顔で愛想笑いを浮かべつつ、逃げるように退出したシェリカだった。

「……まあ、彼女なら大丈夫かな。潜入調査が得意のようだし、逃げ足も速いだろう」

苦笑しつつ、バートはシェリカの身を少しだけ案じた。

その顔からまた笑みが消え、誰に聞こえるともなく呟きがもれる。

「……しかし、嘘をつくのは下手だな。顔に出過ぎで丸分かりだ。」

……さて、どうするか……」

その仮面を被ったような表情からは、内心を読み取ることは出来なかった。

33話：嘘を見抜く目（後書き）

評価等していただけると、ありがたいです。
読んでくれたんだなあと実感が湧いてきて、嬉しくて励みになります。

34話：迷い星（前書き）

何だかお気に入り登録してくれる人が多いな〜とか思ってたら、まさか日間ランキングに食い込んでいようとは。

これも応援して下さいっている皆さんのお陰です、本当にありがとうございます。

思わずモニターの前で手を合わせて拝んでしまいました（お

34話：迷い星

翌日。

ギルドから聞いた情報を伝える為に王城へとやって来たシェリカは、例によってお茶を飲んでいる竜矢たちの前で荒い息をついた。

「はぁ……はぁ……はぁ……こ、こんなにちわ……」

「……どしたの？ シェリカさん」

「妙にボロボロになつとるのう」

髪はボサボサな上、あちこち擦り傷だらけのシェリカは、リーラから渡された水を飲んでようやく落ち着くと、恨めしい目で二人を見る。

「どしたの？ じゃないですよ……黒帝さんと、魔神姫さんのせいですう」

「……誰じゃそれは」

「なんか嫌な予感がするな」

シェリカが二つ名の事を説明すると、竜矢もスーニアもげんなりした様な顔で溜め息をついた。

「なんという厨二ネーム……」

「魔神姫、のう……。どうせなら、もう少し愛らしい方がいいのう。センスとしてはイマイチじゃな」

「なに他人事みたいに言ってるんですか、お陰で私がどんな目にあつたと！ あなた達を探してる色んな人に追い掛け回されて……。うう、下手な魔獣に追いかけられるより怖かった……」

昨日は無事に逃げる事に成功し、宿に辿り着く事ができた。
しかし、安心できたのはその夜で終わりだった。

“ 黒帝と魔神姫の居場所を知っている奴がいる ”

先日のギルドの騒ぎから、そんな噂が街中に流れていたのだ。

宿を出た途端、礼を言おうとする者、勝負を挑もうとする者、仲間にしようとする者、黒帝を（何が何でも）婿にしようとする者、魔神姫を（年齢差を完全に無視して）お嫁さんにしようとする者、（性別をすっ飛ばして）恋人になろうとする者、その他諸々の連中がシェリカから情報を得ようと追い掛けて来たのだ。

シェリカは街中を逃げ回りつつ、何とか竜矢たちへのお菓子を購入し、必死の思いで城に飛び込んだのだ。

「わずか一ヶ月で二つ名を得るとは……。リュウヤ殿、何故そんなハイペースで依頼をこなしたのだ？ 急いで二つ名を得る必要でもあったのか？」

ラディナが呆れ顔で問う。

竜矢は頭をかきながら苦笑しつつ答える。

「いや、別に二つ名が欲しかった訳じゃないんだよね。まず金を稼ぎたかったんだよ。生活の基盤作りのためと、あのジジイ探しの依頼をするにもまとまった金が必要だったからさ」

老魔術師探しの依頼料は、結構な金額が必要だった。

狭いエリアでの搜索、例えばパルファスト王都内レベルの広さなら、人探し専門に請け負う冒険者などに依頼する方法もあった。これな

ら必要経費込みでも、下位から中位の魔獣討伐依頼と同等か、少々お高いレベルで収まっただろう。

しかし、竜矢のした依頼はそうはいかない。

標的が何処にいるかまったく分からない為に、搜索範囲の限定も不可能。

範囲が広過ぎて、誰も専属で引き受けられなかったのだ。

そうになると、あちこちで活動している冒険者や傭兵達が、それらしい人物を何処其処で見かけた等、偶然の情報をかき集める方法しか残されていなかった。

故に、定期的に依頼料をギルドに支払い、情報収集を継続し続けるしかない。

その金額は、上位の魔獣討伐の依頼料とさほど変わらぬ物となってしまう。搜索が長引けば、当然掛かる金額も膨れ上がっていく訳だ。

「なるほど、そういう事か……」

「シェリカさんやミルファルナ姫に正体をぶっちゃけたのは、会った時に変装してなかったから。あそこでその黒帝の……自分で言うとかかやだな……、その格好すると俺たちが当人だとばれちゃうからさ。俺たちの本当の姿と結び付けさえしなければ、幾らでもごまかしようがあるからね」

「じゃが、いきなり異世界人だとばらした時は少々焦ったぞ。まあ、魔術で記憶を消すなりして口封じする事も出来たがの」

あつさりと物騒な事を言うスーニアに、少し顔が引き攣るシェリカとミルファルナであった。

「けど、その結び付けをする人が出てくるとはなあ。そのギルドの

支部長さん鋭いねえ」

「かなりの切れ者らしくて結構有名ですよ。二人の事を聞かれた時は、本当に焦りましたよ」

「しかし、やっぱり情報は無しか。まだまだ先は見えないな」

「そうじゃの……」

スーニアの声にはわずかに安堵の響きが混じっている。

が、超が付くほど鈍感な竜矢は気付いていない。

竜矢以外の女性陣はすべて感じていたが、それを口にするほど空気が読めないわけではなかった。

「まあ、焦ってもしゃーねえわな。腹も膨れたし、一眠りするか」

あくびをしつつ、竜矢は宙を舞ってスーニアの首の辺りの毛に潜り込んだ。

「リュウヤ殿……また寝るのか？」

竜矢はシェリカが来る少し前まで眠りこけていたのだ。やっぱりスーニアの毛の中で。

外出も出来ないため、やる事が無くて暇でしようがないのだ。

これが地球ならゲームをするなり、ネットサーフィンをするなり、友人と駄弁るなり出来るのだが。

こういった時、竜矢はまだ自分がこの世界に馴染めていないと思いい、一抹の寂しさを感じてしまう。

そんな自分を誤魔化すように、ニヤリと笑いながら言った。

「ぬふふふ。スーニアの毛の中で寝ると、熟睡どころか超・爆睡できるんだよね。そりゃーもう、モフモフのヌクヌクのフカフカで」

「モフモフ……」

「ヌクヌク……」

「フカフカ……」

ラディナ、ミルファルナ、シェリカがスーニアを見る。

リーラとシーナも無言で見る。

物欲しそうに、ジーツと。

「……何じゃお主ら、その『触りたいな』とでも言いたげな顔は。言っておくが、わしの体を自由にしているのはリュウヤだけじゃぞ」
「そーいう誤解を招くような発言はやめんかああああ！」

今日も今日とて、賑々しくも明るい声が王城の一室に響いていた。

竜矢たちがそんな毎日を過ごしている頃。

問題の老魔術師たちは、とある場所で、ある作業に没頭していた。そこは窓が一切無い、教室並みの大きさがある地下室のような場所だ。

壁には大量の光魔石が備え付けられていて、真昼のように周囲を照らしているので作業には何の支障も無い。

「これでよし、と。そっちはどうじゃ？」

「終わりましたよ大教祖様」

「もう終わりますわ……っと。はい、出来ましたあ」

「こちらも完了です」

教室並みの広さを持つその床に、複雑な魔術式が隙間無く書き込まれている。老人たちが何日もかけて描いた物だ。

謀反事件が終わった後、四人は拠点としている古代遺跡から、この地下室がある屋敷に身を移していた。

そして、ずっとこの作業に没頭していたのだ。

食料などは十分に蓄えてあるので、何もせずとも後二ヶ月はここで潜伏する事ができるだろう。調達手段も別に用意しており、なんの不安も無い。

作業を終えたゼウル、ネデイス、ヴィーラの三人が老人の側へとやって来る。

「準備完了じゃの。後はこのロストパーツに魔力が溜まるのを待つだけじゃ」

老人は右手に持ったロストパーツを魔術式の中央に置いた。

それは歪な形をした、コブシ大の紫水晶のような物だ。

しかし不思議なことに、角度によっては赤や黄色に見え、その形まで変形しているように見える。

じっと見ていると、頭痛がしてきそうだ。

「ゼウルよ、あまり見ん方が良いぞ。飲み込まれるでな」

「っ……！ は、はい……。大教祖様、そろそろ教えて下さい。この大きな魔術式と、このロストパーツを使って、これから何をしようというのですか？」

ゼウルの問いに、老人はその皺だらけの顔を歪ませるように微笑んだ。

「のう、ゼウル。お主、人の手で星を作る事ができると思うかの？」

「星を……人の手で？ いや、幾らなんでも、そんな事は……」

「では、星を人の手で落とす事ができると思うか？」

「そ、それも無理では……」

太陽、月、星。

この世界でも、天空に位置するそれらは人の手の届かぬ不変の存在だ。

質問の意図を掴めず、ゼウルは困惑した目を老人に向ける。

そんなゼウルの表情を面白そうに見ていた老人は、視線をロストパーツへと向けた。

「わしでも作るのは流石に無理じゃ。じゃが……」

「まさか、星を落とそうというのですか！？」

宇宙空間から飛来する物体、いわゆる隕石はこちらの世界にも存在し、『迷い星』と呼ばれている。

遙か空の彼方から落ちてくる迷い星は、創造神バルアハガンの怒りによって落とされるとされていて、伝説では悪徳の栄えた街が迷い星で滅ぼされた事もあるという。

つまり、星を落とすという行為は神の御業なのだ。

この老人は、人の身でそれを成そうというのか。

ゼウルの顔から血の気が引いていき、心臓に氷のナイフを押し付けられたように体が震える。

「恐ろしいか？ ゼウル。正に神をも恐れぬ所業じゃと」

邪神信仰に手を染め以来、様々な悪行を行ってきた。

その自分が、今更神を恐れるというのか。

ゼウルはそう自分に言い聞かせ、冷静さを取り戻した。

「……いえ、そのような事は」
「ふおふお、それでよい。わしらが歩むは神に仇^{あだ}なす、血塗られた破壊と怨嗟の道よ」

老人はロストパーツを見つめる。
その瞳は新しいオモチャを手に入れた子供のように、無邪気な光に満ちていた。

34話：迷い星（後書き）

久しぶりな登場、邪教徒カルテットでした。

35話：切れ者の悩みと決意

明るく輝く月が、雲一つ無い夜空と地上を照らす夜。

パルファスト王都から遠く離れた森の中を、誰かが一人で歩いている。

その姿は灰色のローブに包まれていて、顔もフードを目深に被っているのでよく分からない。

この森は中位から上位の魔獣が出ることで知られており、間違っても人間が一人でうろついて良いところではない。

が、獣道を進むその姿からは、周りを警戒する様子は伺えても怯えているような気配は感じられなかった。

体型的に男と思われるその人物が、不意に足を止めた。

その前に、木々の暗がりからゆっくりと大きな何かが現れる。

「……ザイファングか」

低いが良く通る声で男が呟く。

それは体長五メートル以上はあろう、茶色の体毛に覆われた魔獣だ。

かつて地球に生息していたという、サーベルタイガーを連想させる大きな剣歯が月光に照らされて白く浮き上がる。

肉食の魔獣で、そのテリトリーに入り込んだものが自分よりも巨大な魔獣であっても容赦なく攻撃を加える凶暴さを持つ。

その剣歯は魔獣の中でもトップクラスの貫通力を誇り、城壁に使われる頑丈な石材にも容易く突き刺さるという。

時折ギルドにも討伐依頼が出され、最低でも中々上位の実力を持った冒険者達が複数で相手をする必要がある、かなり手強い魔獣として知られている。

が、そんな魔獣を前にしても男はまるで動ぜずに平然としている。

「確か、中級の魔獣だったな。今日はこいつにしておくか」

男はローブの下から、直径十センチほどの水晶玉のような物を取り出した。

それが赤や黄色、紫や白の光を放ち、明滅し始める。

今にも襲い掛からんとしていた魔獣の動きが止まった。

ザイファングの目がその光に釘付けになり、明滅の速度が早まっていく。

と、高速で移り変わる光が唐突に消えた。

「伏せろ」

「グルル……」

凶暴なはずのザイファングが、よく躡けられた飼い犬のように男の言うことを聞いて地に伏せた。

どんなに優秀な魔獣使いでも、ここまで簡単に魔獣を手懐けるなど不可能なことだ。

「……大した物だな、このロストパーツは。マナウルフィすら逆らえなかったそうだが、頷ける力だ」

男は魔獣に近づく。

水晶玉を懐にしまうと、今度は複雑な魔術式が刻まれた、直径五センチほどの小さな五枚の円盤を取り出した。

魔獣と自分を囲むように地面に置くと、口の中で何かの呪文を呟く。

と、円盤が輝いてそれぞれを繋ぐ魔力の光線が大きな魔術式を構成した。

見る者が見れば、それは転移の魔術式である事が分かっただろう。その魔術式が強く輝くと、その場には男と魔獣の姿は見えなくなっていた。

魔獣とローブの男が転移した先には、四人の人物が待ち構えていた。

「ほう、今日はザイファングか。中々じゃの」

「本当なら人間……、魔力の強い魔術師なら申し分無いのですがね」

「しょ〜がないですよ、今は目立つ訳にはいきませんし〜」

「そうね、地道に魔力を溜めるしかないわ」

あの老魔術師と、三人の邪教徒たちだ。

ここはこの四人が潜伏している、地下室のような場所だ。

彼らの背後には床一面に描かれた魔術式と、その中心でぼんやりと光るロストパーツが見える。

「……今日はいいで終わりだ」

「良からう、焦っても仕方ないしの」

ローブの男は魔獣に命令し、ロストパーツの方へと歩ませる。

ザイファングの目の前にロストパーツが来たとき、それは唐突に起きた。

ロストパーツから霧状の何かが噴出したのだ。それが何本もの触手のようになり、蠢き始める。

その触手はロストパーツ本体と同じ光を放ちながら、ザイファングへと伸びていく。

と、触手の動きが急に速まり、一気にザイファングを絡め取ってロストパーツの真上へと持ち上げた。

ロストパーツの光が強まり、触手が広がってザイファングを完全に包み込んでしまう。

繭状になってしまった魔獣が、中でもがいているのが分かる。

繭の大きさが、急速に小さくなっていく。

魔獣の動きが止まり、更に繭が小さくなる。ついに繭が無くなって触手がロストパーツの中に吸い込まれるように戻っていくと、ザイファングの巨体は完全に消滅してしまっていた。

心なしか、ロストパーツの光がわずかに強くなったように感じる。

「……分かってはおったが、溜りが遅いのう」

「地脈からの魔力の吸い上げが、思ったより少なかったのが残念でしたね」

「この分だと、溜まりきるまでにかなり時間がかかっちゃいそうですね」

彼らがこの屋敷を選んだ理由の一つがこれである。

大地を流れる魔力の流れ、『地脈』の上に建っており、ロストパーツが魔力を吸い上げるのに都合が良かったからだ。

しかし、地脈の流れが予想よりも細いのか、魔力の吸い上げに時間が掛かっていた。

そこでローブの男に命じて魔獣を狩らせ、ロストパーツに“食わ

せる”事で足りない魔力を吸収させているのだ。

「では、今日はこれで失礼させてもらう」

「うむ。ああ、例の妖精と神獣の噂はどうなってる？」

「さほど変わらないが、沈静化しつつはあるな」

「ふむ、表立っては動いとらんか……分かった。また頼むぞい」

一瞬、ローブの男がフードの下から老魔術師を睨んだ。

が、すぐに視線を逸らして背を向け、出入り口のドアへと歩を進める。

ヴィーラがその背中に声を掛けた。

「頑張ってくださいね、バート兄さん」

ドアの閉まる音を背後に聞きながら、男はフードを取る。

そこにはパルフストのギルド支部長、バート・グランディの顔があった。

その表情は、仮面を被ったように感情が読み取れない。
だが……。

「ヴィーラ……」

拳を握り締め、ヴィーラの名を呼ぶその声は苦渋に満ちていた。

十五年近くも前の事になる。

パルフスト領内に在る小さな街、セルオノ。そこがバートの故郷だ。

バートと妹のヴィーラは両親と共に平穏に暮らしていた。

両親は役場に勤める職員で、一般人に比べれば給金もそこそ良く、家族は幸せに暮らしていた。

ただ、ヴィーラは生まれた時から体が弱く、一日の大半をベッドの上で過ごしているような娘だった。

バートはそんな妹のために、旅の吟遊詩人から聞いた冒険譚や、おとぎ話をその枕元でよく聞かせてやっていた。

ヴィーラもそんな優しい兄が大好きであり、ずっとこんな穏やかな時間が続くものと思っていた。

だが、彼女が七歳になった時に不幸は訪れた。

セルオノの街に、謎の疫病が蔓延したのだ。

どんな医術も治癒魔術も効かないその病の前に、住人達が次々と倒れていく。そして、バートの両親も帰らぬ人となってしまふ。

ヴィーラも疫病に罹ってしまい、高熱で苦しむ姿を見る事しかできないバートに出来ることは、ひたすらに神に救いを求める事だけだった。

その祈りが届いたかのように、セルオノの街に一人の老人が現れた。

老人はあるロストパーツを使い、病人を治療していったのだ。

しかし、その老人は治療する代償として、高額な治療費を要求していた。

そんな物を持っていない貧しい者たちは、冷たく見捨てられた。バートも両親が残してくれた全財産を差し出して、老人にヴィーラを助けてくれるようお願いした。だが、老人は別の物を要求してきた。

『お前の妹は特別に治してやろう。その代わり、お前が一番大切な

ものを貰おうかの、よいか？』

バートは即座に頷いた。“大切なもの”、その言葉の意味を考えずに。

老人の力で、ヴィーラはあつという間に全快した。それどころか、病弱だった筈の体まで完全な健康体になってしまった。

喜んだのも束の間、老人は言った。

『では、お前の一番大切な貰っていくぞい。行くぞヴィーラ』

疑問に思う間もなく、街を出て行く老人の後をヴィーラが付き従っていく。

バートは追い縋り、その腕を掴んだ。

だが、彼女は兄の手を振り払い、冷たい眼差しを向けた。

『バイバイ、お兄ちゃん』

呆然と立ちすくむバートを振り返りもせず、ヴィーラは老人と共に街を出て行ってしまった。すぐに追いかけたが、二人の姿は霞のように消え去ってしまっていた。

バートは老人の言葉の意味を、ようやく悟ったのだった。

その後、バートはパルフト王都に住んでいた叔父夫婦に引き取られた。

家族を失った事で酷い虚無感に囚われていたが、子供のいなかった夫妻は実の子供同様に育ててくれた。そのお陰で少しずつ生きる気力を取り戻していった。

元々頭の良かったバートは王立の魔術学院に入学し、優秀な成績を収めて卒業した。

魔術師として将来有望だった彼は、魔術学院の教師や魔術兵団への勧誘を受けるもそれらをすべて断り、ギルドに就職して職員となった。

様々な情報が集まるギルドならば、妹とあの老人の行方について、なにか掴めるかも知れないと思ったからだ。

しかし、それらしい情報が得られないまま気が付けば、支部長にまで上り詰めてしまっていた。

最近ではもう諦めかけていた。

しかし、二国を騒がせたあの謀反事件の後、突然あの老人とヴィーラが二人の間を連れて自分の家へやって来たのだ。

老人はバートへ、自分たちに協力することを要求した。その見返りにヴィーラを返してやろう、と取引を持ちかけたのだ。

当然、悩みはした。

彼らは何をしようとしているのか教える気は無いようで、無理に聞こうとすれば剣呑な雰囲気になるので分からない。何故言わないのか、何か後ろ暗いことをしているからではないのか。

だが、あの疫病の際、老人は法外な要求はするものの、報酬を支払った者にはちゃんと治療を施していた。

多くの人間の命を救った事に変わりは無く、ヴィーラを救ったのもまた事実。

胡散臭くもあり、妹を連れ去られた恨みもあるものの、この時には老人たちが悪人とは思えなかったのだ。

それに、両親が病の床で最後まで気にしていたのは、病弱なヴィーラの事だった。

亡き両親の願いを思い、失った妹を取り戻すため、取引を承諾し

た。そのまま彼らを自宅の地下室へと匿ったのだ。

少しして、老人たちが地下室で地脈の魔力を利用して何かをする事を聞いた。

詳しくはやはり教えてくれなかったが、不足分の魔力を補うために魔獣を狩り集めることを要求してきた。

神獣・マナウルフィすらも捕らえたというロストパーツと、転移魔術が付与された魔道具を借り受け、その力で夜ごとに魔獣を狩る事になった。

最初にロストパーツが魔獣を“食う”のを見た時、それを見ていた老人たちの笑顔に背筋が凍ったのを覚えている。

ヴィーラも薄く笑っていたのを見て、何としても彼らから引き離さなければと、バートは強く思った。

既にこの頃、黒帝と魔神姫が探しているのはこの老人ではないかと考えていた。

妖精と神獣の噂、その事を気にしている老人、『神獣をも捕らえた』というロストパーツの存在、同時期に消息の掴めなくなった謎の冒険者、黒帝と魔神姫。

様々な要素から推測し、黒帝と魔神姫は、妖精と神獣の事ではないかと思うようになった。

ギルド側の情報と、老人側の情報を同時に手に入れる事ができたからこそその推測といえるだろう。

この二人にコンタクトを取れば、老人たちについて何か分かるのではないか。そう考えている所に近衛騎士が持ってきた、三人の邪教徒の情報。

その中にヴィーラの事と思しき記述がある事に驚愕した。彼女は邪教徒に身を落としてしまっているらしい。

邪教徒は発見しだい街の警備隊や国の軍に連絡し、捕まえてもらうのが法律で定められている。これはこのバルアーレン大陸にある、あらゆる国々に共通したことだ。

何とか妹を救う手段は無いものか。

そう悩んでいる中、シェリカ・ウォーレンと名乗る傭兵が黒帝の使いでギルドにやって来た。

カマをかけて質問した結果、確信を持った。

黒帝と魔神姫は、妖精と神獣の仮の姿であり、今は王城にいるのだという事を。

何とか二人と連絡を取り、助力を頼めないものか。

その為には、もう一度シェリカと会わなくてはならないだろう。

そしてその機会は、思ったよりも早く訪れようとしていた。

35話：切れ者の悩みと決意（後書き）

ギルド支部長の事情でした。

彼は竜矢たちの敵となるか味方となるか？

36話：疫病の疑惑

「フンフンフン♪ フンフフフンフン♪」

パルファスト王都の街道を、鼻歌交じりのご機嫌な様子で歩く一人の女傭兵。

もはやスーニアの侍女と化しているシェリカである。

だが、今の彼女を見てシェリカと分かる者はあまり居ないだろう。眼鏡を掛けている上に、髪が元の茶髪のセミロングから、赤いロングヘアーに変わっているからだ。髪には小さな紅玉が三つ嵌め込まれた、髪飾りが光っている。

この眼鏡と髪飾りは、黒帝&魔神姫騒動に巻き込んだお詫びとして竜矢からプレゼントされた物だ。

水晶塊から削り出され、更に魔術で透明度を上げて作られたレンズの眼鏡は、高級品である事が伺える。

竜矢が亜空間バッグを発見した地下室にあった物だ。普通の眼鏡だったが、竜矢がオリジナル魔術を付与して魔道具となっている。

その能力は『生命体の体温』を『見る』事ができるというもの。

しかも家一件分くらいの障害物ならそれを透過して、向こう側に居る者も察知できてしまうという優れ物である。

（『さーもぐらふ眼鏡』かぁ、いゝ物貰っちゃったな！ こんな魔道具持ってるの、世界で私だけだよね、うん！ お陰で人を避けながら街を歩けるし！ それにこの髪飾りの能力で見つかっても大丈夫だし！）

髪が赤に染まっているのも、竜矢のオリジナル魔術を付与された髪飾りの力だ。元々はシェリカの私物である。

髪に着けるだけでその色と長さを変化させる事ができる、変装用の魔道具だ。

髪飾りには三つの宝石を嵌め込む穴が開いていて、宝石を一つ嵌めて使うとショート、二つ使うとセミロング、三つ使うとロングヘアーに変化する。

更に、宝石の色を変える事によって、その色に髪の色を変える事ができるのだ。

おまけに、色違いの宝石を組み合わせればそれらが混じった色になる。例えば紅玉と白い宝石を使えば、ピンク色になるわけだ。

今は紅玉を三つ使っているので、赤のロングヘアーになっている。これだけ至れり尽くせりの能力を持った髪飾りなど、大国の王族でさえ持っていないだろう。

二つとも、もはや魔道具というよりロストパーツに近い代物である。

（こんな良い物貰えるんだったら、あんな騒動の一つや二つ、どーって事ないよね！ ミルファルナ様たちが羨ましそうにしたのが申し訳なかったけど……。ラディナ様はあんまり関心無かったみたいだなあ、美人なのにもったいない）

そんな訳で、シェリカは欲望と捻じ曲がった愛情に満ちた連中に追い掛けられることなく、街中を出歩いているのだった。

「さってと、今日は何を買って行っこうかな」

菓子屋や料理店の店先を冷やかしながら品定めをしていく。

と、彼女の後ろに立った人物が声を掛けた。

「あの……もしかして、シェリカ・ウォーレンさんではありませんか？」

「にえひえいっ!？」

まさかばれるとは思っていなかったシェリカは、飛び上がらんばかりに驚いた。

飛び上がる代わりに奇妙な声を出してしまったが。

そーっと背後を見れば、見覚えのある紳士。

「し、支部長……さん？」

「ああ、やっぱりウォーレンさんでしたか。急に声を掛けて脅かせてすみません」

申し訳なさそうに微笑むバート・グランディがそこに居た。周囲を警戒しつつ、シェリカが口を開く。

「そ、それは良いんですけど……。あの、何で私だって分かったんですか？」

「ええと、後ろ姿が似ていたのと、雰囲気ですね」

「……それだけですか？」

「それだけですよ？」

（鋭いにも程がありますよ支部長さん……）

たったそれだけで見破ってしまう眼力に、舌を巻くシェリカだった。

普通なら髪形や色がまったく違う時点で、その人物だとは思わないだろう。

「それにしても見事な変装ですね、カツラには見えませんし……。
もしや、魔道具で？」

「え、ええ……」

ほうほうほう、と感心しつつシェリカの髪を色んな角度から眺めるバート。

だが、すぐにハツとしたようになって頭を下げた。

「申し訳ない、あまりに見事なので、無遠慮に見てしまいました。
ご気分を悪くされましたか？」

「い、いえ、構いませんよ。減るもんじゃないですし」

事実、シェリカはさほど気にしていなかった。顔や体なら問題だが、見られていたのは変化させた髪なのだし。

それよりも、此処から早く離脱したくてしうがなかった。

バートの後方から、自分を探しているであろう金髪美女の冒険者パーティがゾロゾロと向かって来るのが見えたからだ。

そう簡単に見破られたりはしない……と思いたいのだが、あっさり見破られた直後なので不安でしょうがない。

その視線に気付いたバートはチラリと後ろを見る。

納得したような笑みを浮かべ、こう切り出した。

「驚かせてしまったお詫びに、お茶でもいかがでしょう？ 近くに最近オープンした評判の喫茶店があるんです。あ、時間に余裕があれば、ですが」

「い、いーですねっ、行きましょう、すぐ行きましょうっ」
「ありがとうございます。あ、こちらですよ」

路地へと入っていくバートの後ろを、シェリカは慌てて追いかけて行った。

「あ、これ美味しい！」

「気に入って頂けて良かった」

件の喫茶店は若い女性に人気の出そうな、可愛いらしい内装のシヤレた店だった。外から見えにくいように店の奥の席に着き、本日のお勧めセットを注文する。

最近様々な料理や菓子を差し入れしつつ一緒に食べていたので、シェリカの舌も肥えていた。

が、出てきたお茶も菓子も、そんな彼女を満足させるに十分な物ばかりだった。

「むむ、今日の差し入れはこのお菓子で決定かな」

「差し入れ？ ……サカザインさんとマナウルさんにですか？」

「ええ、いつもお菓子や料理を届けて一緒にお茶を」

「……ほう」

「……あ」

シェリカの動きが止まった。

『しまったー』といった顔をして冷や汗を流している。

「……ぷっ、く、くくく……。い、いや、失礼……」

「……あううう……。支部長さん、カマかけましたねー!？」

「そんなつもりは無かったのですが……。ふう、素直な方なのですね」

そこでバートは姿勢を正した。
真っ直ぐにシェリカを見据え、真剣な表情で口を開いた。

「ウォーレンさん、あなたにお願いがあります。この手紙をお二人に渡して下さいませんか？ 正式にあなたへの依頼として受け取ってもらっても構いません。報酬を支払う用意もあります」

「え、ええつと……はあ、もう誤魔化せそうにありませんね……。分かりました、お預かりします。あ、報酬なんて要りませんよ？ その代わり、この事は他言無用ということで」

竜矢とスーニアに関しては話すことは出来ないが、黒帝と魔神姫としてならば話は別である。表向きは別人なのだから。

「勿論です、ありがとうございますウォーレンさん」
「念のために聞きますけど、あの二人に仕事の依頼か何かですか？」
「そんな所です。引き受けて下さると良いのですが、ね」

この後は他愛も無い雑談をし、穏やかな時間を過ごした。
意外にも気の合うことが判明し、思ったよりも長居してしまったくらいだ。

驚いたのが、二人の故郷が同じセルオノの街だったという事だ。

「でも、私はあの疫病の時にはまだ赤ちゃんで、何にも知らないんですよ」

「……そうでしたか。それはある意味運が良かったかもしれません、酷いものでしたから……」

今でも鮮明に思い出せる、あの時の惨状。
疫病を恐れて街からは次々と人が逃げ出し、罹った者はあつとい

う間に倒れて命を落としていく。

ちよつと路地に入れば、疫病で動けなくなった浮浪者が屍を晒していた。

あの老人が現れなければ、セルオノの街は完全に滅びていたかも知れない。

「そんなに酷かったんですか……。私は両親がその時に死んで、親戚に引き取られたんです。何でも、全財産と引き換えに私だけは何とか助けてくれたとか。自分たちの分までお金が足りなかったらしくて」

「立派なご両親だったのですね」

「ええ、私もそう思います。ただ……その時助けてくれた人って魔術師みたいなお爺さんで、ロストパーツの力で治したんでしょう？」

「はい、私もその治療するところを見ましたよ。幾つも宝石が嵌まった小さな杖の様なロストパーツでした」

「それですよ！」

「え？」

急にシェリカが身を乗り出した。いきなり顔を近付けられたバートは思わず仰け反る。

「治癒魔術で治したならまだ分かるですよ、魔術は使い過ぎると術者の命に関わりますからね。でも、ロストパーツを使ったんでしょう？　気前良くババーツと安く沢山の人を治しても良いじゃないですか、人助けなんだし。そう思いませんか？」

「……あ、ああ、なるほど、確かにそうですが……。お金が必要な事情があったのかも知れませんか？」

「そうかも知れないけど……。命の恩人を悪く言いたくは無いですけど、ちょっとがめついと言うか、守銭奴みたいで好きになれないんですよ。この人の話を聞いた時、チャンス到来とばかりにお金を稼いでるみたいで……。まるで病気が流行るのを待っていた様にさえ思っちゃいますよ」

「……！」

バートの心中に、小さな衝撃が走った。

（待っていた……。病が流行るのを？　もしそうなら……。病が流行ることを知っていた？）

今まで考えもしなかった可能性。

それが頭の中を駆け巡り、一つの推論を導き出す。

（疫病そのものを、あの老人が発生させた……。！？）

そんな事がありえるのか。

一つの街を滅ぼしかける程の疫病を、一人の人間が操るなど。

思い返してみれば、老人は治療して涙ながらに感謝する住人に対し、笑みを返した事は無かったように思う。

ただ無愛想に、金を受け取ってさっさと立ち去っていた。

だが、地下室で老人が見せた、ロストパーツに魔獣を食わせた時の不気味な笑み。あれは、命が失われる場面を喜んでいるようにも見えた。

バートの全身に、冷たい物が流れていく。

「あの……支部長さん？」

「えっ……？ あ、は、はい何ですか？」

「大丈夫ですか？ 何か顔色悪いですけど……」

「そ、そうですか？ はは、ここ最近忙しかったからでしょうかね。私はそろそろギルドに戻ります。手紙の件、よろしくお願いします」

「え、ええ、今日中に渡せると思いますよ」

「それはありがたいです。では、失礼しますね」

バートは二人分の料金を払うと、ギルドへと足を向ける。
その足取りは、微妙に頼りなく感じられた。

37話：黒帝と魔神姫のお仕置き

「その場に居る全員が動くことが出来なかった。何故なら、弁慶は主である義経を打ち据えながら……泣いていたからだ」

「くううつ！ 分かる！ 分かりますぞベンケイ殿の苦しみがつ！」

「主を守るためとはいえ、その主を自らの手で傷つけなければならぬ……正に地獄の苦しみ！」

「弁慶の涙に心打たれた関所の者たちは、彼らの正体を悟りつつも、関所を通してやった。それに感謝し、弁慶は一指し舞いながら関所を通っていくんだ。その後、弁慶は義経を傷つけた事を地に伏して謝罪したが、義経は『お前は私を助けたのだ、何を謝る必要があるというのだ』と弁慶に感謝をし、旅を続けるんだ」

「おお……この忠臣にしてこの主あり！」

「何という見事な主従！」

「ボアズ殿、我らも見習わなくてはなりません！」

「まったく同感ですダルス殿！」

シェリカがバートからの手紙を渡すべく城へとやってくると、いつもの客間には居なかった。

広間の一つに案内されて入って見れば、パルフトとキドニアの近衛騎士団の面々が、ボロボロと涙を流しながら壇上の竜矢の話を聞いているではないか。

いい歳をした男たちが涙と鼻水で顔をクシャクシャにしている光景は、色々と『来る』ものがある。

「何の騒ぎですか……？ これ」

「遅かったの、シェリカ。キドニアの近衛騎士団が訪問して来ての、お前が来るまでの暇潰しで、リュウヤが自分の世界の事を色々話しておったらこうなった」

騎士団の後ろの方で聞いていたスーニアが答えた。

スーニアも話を聞いて感動してはいたのだが、騎士団の感動っぷりに逆に冷静になってしまっていた。

竜矢が話しているのは、有名な源義経と弁慶たちの平泉への逃避行を描いた歌舞伎、『勧進帳』だ。たまたまネットであらすじを読んだ事があるだけでうろ覚えもいい所だが、アドリブと少々の演出を加えて語っている。

若き主と忠臣の悲しい物語は、騎士という立場の彼らの心の琴線に触れまくりであった。

いつ戦争が起きてもおかしくない戦乱の時代。一つ間違えれば、彼らも義経と弁慶たちと同様の逃避行をする事になるかもしれないのだから。

なお、パルファスト近衛騎士団は謀反事件の際に竜矢の正体を見ていたが、キドニア近衛騎士団で竜矢の正体を知っていたのはボアズだけである。

竜矢がいい加減面倒臭くなったのと、近衛騎士団なら大丈夫だろうと判断してこの機会にぶっちゃける事にしたのだった。

この辺のアバウトさは、竜矢の現代高校生らしさと言えるかもしれない。

もっとも、『正体を外に漏らせばどうなるか、分かっているであろうな?』とスーニアがしっかりと釘を刺し、一同顔面蒼白でカクカク頷いていたので余計な心配はいらないであろうが。

「……次回、『平泉、炎の中に』。義経一行の旅の終着点、そこで待つものは……こう御期待!」

「こ、ここで切りますか!」

「ぐうう、続きが気になって気になって……」

「まあまあ。ちょうどシェリカさんも来た事だし、皆でお茶にしましょうや」

全員の目が一斉にシェリカに向く。涙と鼻水まみれで。

思わず壁際まで後ずさる彼女だった。

騎士団は軽く一服した後、興奮冷めやらぬ様子で『ダルス殿、一つ共同訓練などどうでしょう?』『それは良いですな!』と全員訓練場へと向かって行った。

よほど勸進帳に刺激されたようで、忠臣たらんとする心意気が漲みなぎっていた。

なお、共同訓練は近衛だけでは収まらず、パルフスト騎士団から一般の兵士達にまで及んだ。ダルス達に扱しじかれた彼らは、数日ベツドの上で筋肉痛に悩まされる事になるのは別のことである。

「そうそう、リュウヤさん達に手紙を預かってきました。ギルドの支部長さんからです」

「ギルドの支部長? ああ切れ者とかって言ってた?」

「ええ、黒帝さんと魔神姫さん宛てですけどね。何か、仕事を依頼したいみたいでしたよ?」

テーブルに置かれた手紙を、竜矢はオーラで腕だけを作って取ると封を切った。

中の手紙をスーニアと二人で読み始める。

「……何じゃ、頼みたい仕事があるから、一度ギルドに来てくれとしか書いておらんではないか」

「……それだけですか？」

「うん、それだけだねー。どうだスーニア、久しぶりに出歩くか？」

「良いのう！ さすがに城でジツとしてるのも飽きてきた所じゃ。」

「姫たちよ、よかろう？」

「無論だ。前にも言ったが、私たちはあなた達を拘束するつもりなど無い。国内の情勢も大分落ち着いてきた事だしな。父上は少々渋るかもしれないが、なに、私が上手く言っておこう」

「私もラディナ様と同じ考えです。お父様には私から伝えておきますわ」

二人の姫が頷いた。

明日、ギルドへと向かうことにした二人だった。

翌日の午前中、ギルドの中ではちょっとした騒動が持ち上がった。いた。

ギルドの玄関ホールで、上も下も黒の服で固めた上、顔を黒い包帯で完全に隠した黒ずくめの男が居たからだ。

「お、おい、あいつもしかして、破撃の黒帝じゃねーのか!？」

「マジかよ！ 一ヶ月で二つ名手に入れたっていう……!」

「この国に来てるって噂は本当だったのか……!」

周囲からの声と視線を浴び、男は得意気に胸を反らす。

その視線の先では、受付の中でメリアが少し怯えたように身を縮こまらせていた。

「なあ、いいだろう？ 仕事が終わったらちよつと飲みにつき合ってくれっただけ何だからよ」

「こ、困ります……」

どうやら朝からナンパに勤しんでいる様で、ターゲットはメリアである。

メリアは断り続けているのだが、男は一向に引き下がらない。それどころか、だんだん語気が荒くなる始末だ。

「いいじゃねーかよ！ この俺がデートに誘ってんだぜ、何の不满があるってんだよ！」

「申し訳ないが、その辺にして頂けませんか」

「あん？」

「ミュード！」

メリアの背後から現れたのはギルドの警備員的な存在、ギルドガーディアンだ。

時には乱闘騒ぎを起こすような屈強な連中を相手にするだけあり、並みの傭兵では歯が立たないような猛者が揃っている。

ちなみに、メリアがミュードと呼んだ彼は彼女の恋人でもある。公私混同を恐れて暫く静観していたが、男のしつこいナンパに我慢が出来なくなったようだ。

しかし、男の態度は変わらない。むしろ邪魔をされた事で不機嫌になったようだ。

「ああ……？ テメエ、俺が誰だか分かって言ってるのか？」

「リュウ・サカザインさんとお見受けするが……」

「おおよ、知ってんじゃないか。だったら俺の二つ名の事も知ってるよなあ？ この破撃の黒帝様をよお！」

「……っ……」

ミュードの顔に緊張が走る。

この二つ名は、今や傭兵や冒険者たちの尊敬と畏怖を集めつつある。大陸中に広まるのも時間の問題と思われる程だ。

ギルドガーディアンにとってもそれは同じだ。黒帝が相手では、到底自分の敵^{かな}う相手ではない。

破撃の黒帝と自らを呼んだ男が、包帯の下で笑うのが分かった。

「おいおい……あれが黒帝かよ？ ただのチンピラじゃねーか……」

「いや、黒帝なら魔神姫とコンビ組んでなかったか？」

野次馬の声が聞こえたのか、その方向に向かって男が声を放つ。

「ああ、魔神姫の事かあ？ アイツならコンビ解消したよ。ちったあ役に立ったけどよ、俺はガキに興味ねーんだ。やっぱ女は出るとこ出てねーとな！ そう思うだろ？」

「ほおう……つまり、わしでは女とは見られんという事か」

下卑た笑い声を上げる男の下方から、地の底から響くような少女の声が聞こえた。

「あん？ ……え」

黒を基調とした服に、フリルやレースが随所にあしらわれた、いわゆる『ゴシック・ロリータ』な格好をしている少女がいつの間にかそこにいた。

パニエで膨らませた丈の短い黒のスカートや、髪を飾る黒い鳥の羽に白いリボンを組み合わせた髪飾りが、その容姿の美しさと相まって神々しくも退廃的な雰囲気醸し出している。

その顔は笑っているが、怒りのあまりに溢れ出している魔力が男を金縛りにする。

「え……あの、あれ？　もしかして……」

「我が主の姿を真似、あまつさえ品性下劣な行いで貶めようとは……。これはお仕置きせねばならんのだ」

少女が軽く床を蹴る。

すると、無重力で浮かぶ宇宙飛行士のように少女の体が宙に浮かんだ。

男の目の前に、少女の顔が近づいて妖しげに笑った。淫靡ささえ感じさせるそれに、男は視線を逸らすことが出来ない。

優しく、少女の右手が男の包帯で覆われた顔を撫ぜる。

そして急に男の喉笛を驚掴みにすると、片手で軽々と持ち上げてしまった。

「お主、命の予備は持っているのでしょうか……？」

少女とは思えぬ力で首を掴まれ、男は外そうともがくがビクともしない。

涙混じりの目を開けて少女を見た時、男は声に出ない悲鳴を上げた。

金と銀に淡く輝く、怒りに燃える獣の瞳が自分を睨み付けていた

からだ。

「これはお主に貶されたわしの分」

「へべべべっ!？」

男の全身に、電撃が走った。

死なない程度に弱いものの、全身が痙攣して激痛が走る。
それが止まって安心したのも束の間。

「そして、これは我が主の分じゃ!」

「ほべがげががぎごはぎゃーっ!」

今度は全身に純粹な痛みが襲った。

まるで、獯猛な獣に寄ってたかって噛み付かれているようだ。

だが、体には傷一つ付いていない。痛覚神経を直接切り刻まれているような、筆舌につくし難い強烈な痛みだ。

「スーニア、次は俺だ、こっちに寄越せ」

ギルドの入り口に立った人物が少女に声を掛けた。

その姿は、全身に黒の服装を纏い、顔にも黒い包帯を巻いて素顔を隠している。

「は、破撃の黒帝!？」

「こっちが本物かよ!？」

「じゃあ、あのお嬢ちゃんが……金色の魔神姫か!」

野次馬たちの視線が、本物の黒帝と魔神姫に注がれた。

「ふむ、まだ痛めつけ足りないが……それ」

「ぼへーっ！」

「どれ、おまけじゃ」

外に出てそれを眺めていた魔神姫が軽く手を振るう。

男の服が金色の小さな無数の刃に切り刻まれ、すべて千切れ飛んだ。

もちろん、下着でもある。

全裸の男が爽やかな青空の下、泣きながら空を飛んで行く。

太陽光が逆光となり、危ない部分が見えにくくなっていたのが不幸中の幸いであろう。

若い女性の通行人が悲鳴を上げて手で赤くなった顔を覆う。

もつとも、指の隙間からしっかり見ていたりするのだが。

空飛ぶ変態と化した男は噴水へと突っ込み、気絶して水面に浮かび上がった。

「あ、すいませーん、ギルドガーディアンの方ー」

黒帝がギルドの中へと声を掛ける。

メリアと一緒に呆然としていたミュードが我に返って駆け寄った。

「はっはい！ 何でしょう！」

「あの偽者の処分、任せても良いかな？」

「はい！ ギルド登録者の身分詐称は立派な犯罪です。当分の間、あの男は牢に放り込まれる事になるでしょう。ご協力、感謝します！」

ミュードと数人のガーディアンが噴水へと向かって行く。

それを見届けると、黒帝こと竜矢と、魔神姫ことスーニアは改め

てギルドの中へと入って行った。

余談だが、偽者は街の子供たちに色んな所に落書きされたり、棒で突っつかれたり突っ込まれたりしていた。ミュードたちはほんの少しだけ、偽者に同情したとかしないとか。

37話：黒帝と魔神姫のお仕置き（後書き）

黒斗閃掌覇は、某拳の王の剛掌波みたいなものとイメージしてくださいw

38話：虜となった者たち（前書き）

ちよつと短いですorz

書く時間が平日だと一時間くらいしか取れないのが辛いところです。

38話：虜となった者たち

「サカザインさん、マナウルさん、ありがとうございました！」

ギルドへ戻った二人に、メリアが礼を言ってくる。

それを手で制しつつ、竜矢は懷から支部長からの手紙取り出し、手渡した。

「あー、礼なんかいいですよ、図々しい偽者をぶちのめしたただけなんですから。それより、支部長さんから呼ばれましてね。自分らが来たって伝えてもらえませんか？」

「はい！ 少々お待ち下さい」

メリアがギルドの奥へと消えていく。

そのまま受付前で待つ二人を、傭兵たちが遠巻きに眺めては色々と話している。

「二人ともすげえ強さだな」

「一ヶ月で二つ名を手に入れるなんて眉唾だったけどよ、噂は本当だったみたいだな……」

「黒帝は何で顔を隠してるんだろうな？ 傷があるとかか？」

「そんなところじゃねーか。あれだけの強さを手に入れるにゃ、相当な修羅場を潜り抜けたんだらうよ」

ほとんどが褒め言葉的なもので腹が立ったりはしないが、竜矢は背中がむず痒くてしょうがない。

おまけに、その周囲に見せ付けるような事をスーニアがやっているの、それに拍車が掛かっていた。

竜矢の左手にスーニアがしがみ付き、嬉しそうに顔を摺り寄せているのだ。

「……あのう、スーニアさん？ 左手に顔をスリスリするのをやめて頂きたいのですが……」

「嫌じゃ」

「即答かよ」

溜め息をつきながらスーニアを見た竜矢が固まった。

「聞こえておったぞ？ 『だが許さん。俺の事はともかく、スーニアの事をグチャグチャ抜かしたのが運の尽きだ』。……わしの事で怒ってくれたな、嬉しいぞ、我が主よ」

「そーいう恥ずかしい事を堂々と……」

ただでさえ超が付くほどの美少女がほんのりと頬を赤く染め、潤んだ瞳で竜矢を見上げ、見詰めている。

竜矢とて悪い気はしない、しないのだが人前では勘弁してもらいたい。

周りの男たちが、その神秘的にすら思える愛らしさに軒並み見惚れてしまっているではないか。

「やべえ、魔神姫可愛い過ぎるだろ……」

「守る必要なんて無いんだろうけど……、守ってあげたくなるな……！」

「彼女は子供、彼女は子供、彼女は子供、彼女は子供……お、俺はロリコンじゃない……しっかりしろ、俺！」

そんな声にスーニアは後ろを振り返り、小悪魔じみた微笑とともにウインクした。

魅惑的なゴスロリ衣装の力と相まって、犠牲者は多数。

「ぐはっ！　こ、これが噂に聞いた、“萌え”というもののなのか！？」

「ふ、踏まれたいっ……！　あの小さな足に踏まれて罵られたいっ……！」

「お、俺、熟女が好みだった筈なのに……！　このトキメキは何？　恋？　これが恋？」

「もういい、ロリコンと呼ばれても……！」

後に、この事が切っ掛けとなってパルファストに『金色の魔神姫・スーニア様ファンクラブ』総本部が設立されるのだが、当の本人には知る由も無かったりする。

ギルドの中が異様なピンク空間に包まれる中、メリアが困惑した表情で受付に戻ってきた。

ホールの雰囲気にも首を傾げるも、竜矢たちに向かって口を開く。

「すみません、支部長はまだ出勤して来ていないようで……」

「来ていない……？　休みですか？」

「いえ、今日は支部長の休日ではありません。普段なら誰よりも早く来ていますし、支部長に就任して以来、無遅刻無欠勤な方なんですよ。連絡ありませんし……初めてですよこんな事は」

メリアは少し心配しているようだ。

竜矢とスーニアが顔を見合わせる。

二人の胸中に、何とも言えぬモヤモヤした物が絡みついた。

「どう思う？　スーニア」

「……あの手紙を届けてくれと頼んだ翌日に休むというのは、少々タイミングが良すぎやしないかのう？」

「……だよなあ」

「あ、もしかしたら、もうすぐ来るかも知れませんよ？ 良ければ応接室でお待ちになりますか？」

「ん〜どうすっかな……」

メリアの言葉に、頭を掻きながら竜矢は考え込んだ。

「んふ〜♪ ここのお菓子本当においし〜♪ 支部長さんに感謝しなくちゃ」

竜矢とスーニアがギルドで少女趣味な男たちを量産していた頃。バートに教えてもらった店で、お茶とお菓子を堪能するシェリカの姿があった。

サーモグラフ眼鏡と髪飾りを装備して、赤いロングヘアーに髪型を変化させて変装も万全である。

今日は竜矢たちがギルドに行く事になったので、城への差し入れはお休みである。

久し振りに休日を堪能している沢だ。

まだ午前中だというのに、店の中は客席の七割が埋まっている。順調に繁盛しているようだ。

今頃リュウヤさんたちは支部長さんとお話中かなー、等と考えながらお茶を飲んでいる彼女に、近づく者たちがいた。

「失礼、相席よろしいですか？」
「はい？」

横に立った人物を見つめれば、バートと同年齢くらいと思われる男が立っていた。

その後ろに、若い肉感的な女性を伴っている。

「ああ、良いですよ。私はもうすぐ食べ終わりますので」「すみませんね。でも、急がなくて良いですよ」

向かいに座った二人を見て、シェリカは何処かで見たとような気がした。

「ええ、急がなくて良いですよ。……私たちは貴女に用があるのでね」

「え？」

二人の放つ雰囲気、急に変化した。

肉食獣が獲物を前にして舌なめずりする様な、おぞましさを感じる寒気がシェリカを襲う。

しかし、シェリカとてそれなりの修羅場を潜り抜けて来た傭兵だ。咄嗟に椅子を飛ばしつつ背後に飛び下がり、距離をとった。

「誰ですか貴方たち……！」

この二人はマズイ。

傭兵としての経験が最大音量で警告を発している。

見た目は普通の一般人。だが、それが返って不気味さと危うさを際立たせていた。

だが、まさかこんな人の多い所で何かを仕掛けてくるとは思えない。ならば、自身の警告に従って逃げるのが最善。

シェリカはそう判断し、逃走経路を探るため、素早く周りに目をやった。

その顔が驚きに染まる。

「なっ……！」

店の中にいた客たちが全員立ち上がり、虚ろな目でシェリカを見つめていたのだ。

客だけではなく、店の店員までも同じ状況になっている。

次の瞬間、彼らが一斉にシェリカに襲い掛かり、体を抑え、口を塞いだ。

「逃がしませんよう？ 貴女には、あの御方の所に来てもらうんですから。では、しばしお休みなさい♪」

「ムウツ！ ムグウツ……！」

女の手がシェリカの目を隠すように触れる。

その暗闇に吞まれるように、彼女の意識も遠のいていった。

39話：ヴィーラ・グランディの真実（前書き）

前半ちょっとコミカル。
後半シリアス。

39話：ヴィーラ・グランディの真実

「ん〜と、この曲がり角を右か……」

竜矢はメリアに書いてもらった地図を見ながら、スーニアと共に道を進む。

結局ギルドで待つことはせず、直接バートの家へと向かうことにしたのだ。

バートは一人暮らしらしく、病気で倒れてたりでもしたら大変だという事で安否確認の意味もあったりする。

当然のことだが、周囲からは好奇と畏怖と憧れを秘めた幾つもの視線が二人に絡み付いている。

全身黒ずくめの男に、神の生まれ変わりのような美少女が並んで歩いているだけで目立つのに、それが噂の黒帝と魔神姫なのだから人々の目を引かぬ訳がない。

もっとも、今までの冒険者稼業の中でも同じ事が何度かあったので二人とも特に気にしてはいない。

そんな訳で、街の中をのんびり散策気味に歩いている。

「……む？ リュウ、ちよつと止まれ」

「どした？」

不意に、スーニアが立ち止まった。目を瞑って周囲の匂いを嗅ぐように鼻を鳴らしている。

と、道の先を睨むように目を細めた。

「……微かにじゃが……。そこの店の中からあの邪教の教主と、一

緒にいた尼僧の一人の匂いがするぞ」

「なに!？」

スーニアの視線の先は、可愛いらしい内装で女性客が多く入っている喫茶店だ。

賑わっているように見えるが、店の中にいる客や店員までもが立ち上がったままふらついている。まるで夢遊病患者のようだ。

「様子が変だな……? これは……精神操作系の邪神魔術か」

竜矢は店内に残った魔力の残滓から、使われたであろう魔術を推定する。

「術を掛けた奴は、もうこの場には居ないみたいだな。……『清らかなれ、神聖なりし天宮の風』」

竜矢は穢れた場所を浄化する神聖魔術を使った。光の粒子を含んだ柔らかなそよ風が店を丸ごと包み込み、魔術の効果を消去する。

途端に、客たちは意識を取り戻して不思議そうに周りをキョロキョロ見渡している。

竜矢はまだちょっと呆けている店員に事情を聞いた。

「あー、店員さんすいません。何があったか覚えてます?」

「え? あ、いらっしゃいませ、ご注文をどうぞ」

「あ、今日のお勧めセットを」

「……何をしておる」

「……すまん、つい言ってみたくなった。ええとですね……」

プチ漫才を広げつつ、話を聞いてみる。

しかし、気が付いたらこの状況になっていたという。要するに何

も覚えていないようだ。

「手掛かりは無しか。まあ安心せい、わしが魔力を嗅いで追跡してやる」

「そうだな、頼むスー……」

「あれ？ あの赤い髪眼鏡のお客さんが居ない……」

「……なんですよ？」

気になる台詞を店員が言った。

まさかと思い、竜矢はシェリカの背の高さを手で示す。

「店員さん、その人の身長はこの位で、髪はロングで赤い石の嵌まった髪飾りしてたりしました？」

「え、ええ、その位ですね。髪も背中までありましたし、髪飾りもしてました」

竜矢とスーニアが顔を見合わせる。

この世界の眼鏡は魔術を使用して作られている為、高級品である。それを身に着けているだけで、貴族だと思われるしまうような代物だ。

当然、所有者も一国の王都と言えどその数は極端に少なく、目立つ存在となる。

「……ちいっとばかり、嫌な予感がするな」

「わしもじゃ、急いだ方が良さそうじゃな」

スーニアを先頭に、竜矢は店を飛び出して行った。
後に残された店員がポツリと呟く。

「……食い逃げされちゃったのかしら……」

パルファスト王都は平和であった。

今のところは。

「ん……。あれ、私……」

「ウォーレンさん、気が付きましたか」

「え？」

シェリカが目覚めると、そこは広い場所だった。

大量の光魔石が照らすその場所は床一面に魔術式が描かれており、その中心に様々な色に怪しく光る水晶のような物が置いてある。

シェリカには分からない事だったが、その光は最初の頃よりも大分強く輝くようになっていた。

そして、彼女の側にはギルド支部長、バート・グランディの姿があった。

「し、支部長さん？　ここは……」

「私の家の地下室です。……申し訳ない、あなたを巻き込んでしまいました……」

うな垂れるバート。

シェリカは体を動かそうとしたが、身動きが出来ない。両手を後ろで縛られていて、足も同様だ。

見れば、バートも同様に縛られている。

「バート兄さんが悪いわけじゃ有りませんよ」

部屋の反対側にあるドアから、先ほどシェリカを襲った二人と、やはり見覚えのある女、そして老いた魔術師が入ってくる。

ここで漸く、彼らのことを思い出した。

「貴方たちは……、まさか、ミルファルナ様を生贄にしようとした邪教徒!？」

「やつと思いい出しましたか。まあ幻影魔術で顔を少し変えていたから無理ありませんがね」

彼らが顔を一撫ですると、その顔が変化した。それは紛れもなくあの邪教徒たちだった。

「ふおっふおっ、驚いとるのう。この男には監視のロストパーツを仕込んでおったのよ。ほれ」

老魔術師が何かを招くように、指をクイ、と曲げた。

すると、バートの首筋から小さな羽虫のような物が飛び出し、彼の指輪の一つに吸い込まれていった。

あれが監視能力を持ったロストパーツだったのだろう、バートが苦々しげに老人を睨みつけている。

「最初から、私を監視していたのか……」

「お主がわしらを信用していなかったのと同じに、の。ところで……傭兵の小娘」

「誰が小娘よ!」

「これを何処で手に入れたのかの?」

老魔術師が懷から何かを取り出す。

その手には、シェリカの眼鏡と髪飾りが握られていた。

「あっ！ それ私のですよ！ ドロボー！」

「何を言うとする、泥棒と言うならこの眼鏡は元々わしの物じゃ」

「え？」

「質問に答えんかい。この魔道具に使われている魔術式には、わたしの理解できぬ文字が使われておる。……小娘、お主、妖精と神獣のことを知っておるな？」

「な……何の事でしょう？ 妖精と神獣？ それは噂でしょう？ なーに言っちゃってるんですかお爺さん、耄碌しちゃいました？」

しらを切ろうとするシェリカだが、明後日の方向を見たりモゾモゾしたりと挙動不審もいい所である。

これで誤魔化せる訳がない。

「ふおふお、いい度胸しとるのう。という事は、あの二人はこの国に……城に居るのか。むしろ好都合じやの」

「う……」

楽しそうに笑う老魔術師。

苦虫を噛み潰したような顔をするしかないシェリカだった。

そんな老魔術師を睨み、バートが声を荒げた。

「協力すれば、ヴィーラを私に返すと言うのも嘘か！」

「それは嘘ではないぞ？ ヴィーラの意味次第じゃがな」

「……兄さん、悪いけど、私は兄さんの所へ行くつもりはないわ。だって、私の居場所はこの御方の……大教祖様の側だもの」

ヴィーラが老魔術師の頬に、愛おしげに口付けをした。

恋をしている乙女のようにその瞳は潤み、頬は上気して赤く染まっている。

「ヴィーラ！ お前はいい様に利用されているだけだ！」

「そうかも知れない。けれど、それでも構わないわ」

「何だと……！」

ヴィーラが視線をバートに向ける。

先程とは打って変わり、感情を感じさせない冷徹な瞳だ。

「私、知っているのよ兄さん。父さん母さんが、私を捨てて兄さんだけ連れてセルオノの街を出ようとしてた事」

「な……んだと……？ 馬鹿な、そんな事を二人が……」

「バート兄さんは知らなかったでしょうね。夜中、偶然二人が話しているのを聞いたのよ。だから私は……両親を捨てた」

「捨てた……？ どういう、意味だ……」

「そのままよ。こっそり家を抜け出して、大教祖様をお願いして、両親を疫病に罹らせてもらったの。ふふ、二人とも苦しんで死んでいった、胸がスツとしたわ」

「……………な……………」

バートの顔が驚愕に歪む。

両親が疫病に罹って死んだのは、ヴィーラが罹る前だった。

その時には既に、ヴィーラと老魔術師との間に面識があったという事だ。

両親を、殺すために。

「ヴィーラ……お前、なんて事を……！」

「バート兄さんは私を助けようとしてくれた、だから助けたの。大教祖様に私を捧げること、疫病を親に雇らせて、兄さんには雇らないようにしてもらったのよ」

バートは全てを理解した。

疫病に雇らぬよう、細心の注意を払っていた両親が真っ先に倒れた理由。

家族の中で自分だけが疫病に雇らなかった理由。

妹が自分を捨てて老魔術師と共に消えた理由。

何より、セルオノの街に疫病が蔓延した理由を。

「やはりそうか……！ 疫病を街に広めたのも貴様だったのだな！？」

「ふおっふおっ、ご名答じゃ。あの時は稼がせてもらったわい」

バートの瞳が老魔術師を射抜いた。

苦しんで死んだ両親、知り合いや幼い友人たち。彼らを想い、悔しさに知らず涙が零れていく。

その顔を、この上もなく楽しそうに老魔術師たちは見つめている。彼らを見ていたシェリカは、妙に冷めた声で言った。

「……ヴィーラっていったわね、あなた。……最低に可愛そうな人ね」

「何ですって……？」

ヴィーラの氷のような瞳がシェリカを射抜く。

だが、シェリカは怯むそぶりすら見せない。それどころか、負けじとその視線を撥ね返すように彼女を見据える。

その瞳の奥には、静かに怒りという炎が燃えていた。

「可哀そうって言ったのよ。聞いてれば何？ 病気で弱い自分じゃなくて、元気なお兄さんのバートさんを両親が選んだ？ ええ、ええ、そりゃ悔しいでしょうよ、悲しいでしょうよ。それで、ああ、私って可哀そうだわーとか自分に浸ってる訳？」

「……何が言いたいのか」

「あなたの両親が、それをどんな思いで選んだと思ってるのよ！！ 私はあなたの親を知らない、だからその本心は分からない。けど！ 私は親ってものを、父と母を信じたい！ 自分たちの命を捨てて、私を助けてくれた家族ってものを信じたい！ 私はね、あなたと同じ、疫病を生き延びたセルオノの街の出身よ！」

「……そうだったわね。けれど、あなたは親に助けて貰ったのでしよう？ 私の気持ちは分からないわ、捨てられた私の……」

「分かるわよ！！」

シェリカが叫んだ。

その瞳には、いつしか涙が溢れ、流れ落ちていた。

「私だって……、私だってね……！ 一度は親に捨てられたんだから！」

「っ……！！？」

「私には姉がいた……病気がちで、成人まで生きられないだろうっていう、病弱な姉さんがいた。両親は赤ん坊だった私を捨てて、その姉さんを選んだのよ！」

シェリカ・ウォーレンには姉がいた。

妹のために自ら命を絶った、姉が。

39話：ヴィーラ・グランディの真実（後書き）

次回はシェリカの過去話の予定。

40話：家族の想い

私が家族のことを知ったのは、十四歳の頃。傭兵として一人立ちする少し前のこと。

私を引き取り育ててくれた伯母夫婦から、二通の手紙を渡された。一つは両親から、もう一つは姉からの物。

私はこの時まで、家族のことは詳しく聞かされていなかった。ただ疫病に罹り、命を落としたとだけ聞いていた。

両親からの手紙には、疫病の詳しい経緯と共に、一度は私を捨てようとした事に対する謝罪が綴られていた。

正直、ショックではあった。

疫病はとても恐ろしいものであったらしいし、仕方がなかったのだらうと納得しつつも、心のどこかにしこりの様に引っかかる物があったのだ。

それは、助けようとした姉がとても病弱で、成人までは生きられないと思われていた事。

姉は生まれてからずっとベッドの上で生活し、自分一人では歩くことすらままならなかったほど弱かったそうだ。

そんな娘が哀れで、そんな身体に生んでしまった事への申し訳なさから彼女を選んだと書いてあった。

そして、姉からの手紙。

これには、こんな自分を今まで育ててくれた両親への感謝が。元気に生まれて来てくれた、妹への感謝が。

自分をこの世界に生まれさせてくれた神への感謝が。ただ、感謝する事ばかりが書かれていた。

そして、最後に綴られていたのは。

自ら命を絶つと決意した事と、妹に幸せな人生を送って欲しいという願い。

これを読んだとき、私の心の中のしこりはいつの間にか消え失せてしまっていた。

涙が止まらなかった。

私の姉は、自分の不幸を嘆かず受け入れ、両親を恨まず感謝し、妹の成長と幸せを願うことの出来る人だったのだ。

こんなにも優しく、強い人だったのだ。

泣き続ける私に、伯母が姉の最後を覚えてくれた。

セルオノの街の近くにあった、小さな古い祠。

いつから其処にあったのかも、何が祀られていたのかも分からな
いその祠の中で、姉は毒を飲み、眠るように亡くなっていた。その
顔は微笑みすら浮かべていたという。

この手紙は、その姉の手の中にあったそうだと。

両親と姉のことを、私はほとんど知らない。

けれど、手紙を読んで分かった。

私はこんな暖かな家族に生まれた、幸せな娘だったのだという事
が。

「親だって人間なのよ、苦しい事があれば弱音を吐くし、辛い事が
あれば泣くこともあるわよ。身を裂かれるような決断をしなくちゃ
ならない時だってあるでしょうよ。あなたの両親がどんなに苦しん
でその選択をしたのか、少しでも考えた事があるの!？」 両親があ
なたにしてくれた事すべてが、偽りの愛情から来たものだったと思
ってるの!？」 思い出してみなさいよ、その頃のことを! 楽しい
事も嬉しい事も何も無かったの!？」 辛かったのは、悲しかったの

は、あなたの両親もきつと同じだった筈よ!!」

涙を流し、叫ぶように言うシェリカ。

その言葉を、ヴィーラは感情の感じられない顔でただ黙って聞いていた。

「ウォーレンさん……」

バートもシェリカを見つめている。

彼は嬉しかった。

シェリカの言葉は、家族という存在は互いが互いを想いあい、愛するものだという事を改めて認識させてくれたのだ。

父と母は確かにヴィーラを捨てようとしたのだろう。

だが、それは苦渋の選択だったのだと、他ならぬ自分自身がよく分かっている筈ではないか。

「ヴィーラ、彼女の言うとおりだ。父さんも母さんもお前を愛していた。嘘だと思うなら、私の書斎に行って机の一番下の引き出しを調べてみるんだ、そこにネックレスがある。それは二人がお前が成人した時に渡そうと、特別に作った物だよ。証拠に、お前のイヤルが彫ってある」

「……ネックレス……」

「……何よ、ちゃんと愛されてたんじゃない。大体、こんな事になったのは疫病のせいじゃない。その原因はあなたの大事なそのお爺さんでしょ!」

ヴィーラは無言で老魔術師を見る。

その氷のような瞳に映るのは、後悔か罪の意識か。

そして、わずかな沈黙の後――

彼女は薄く笑った。

「……そうだとしても、私が捨てられたことは事実よ」

「ヴィーラ！」

「すべては過去よ、取り返せない終わったこと。何より私は生きたかった、だからこの力も受け入れた。私は後悔していないわ」

そう言ったヴィーラの両手の平と額に、一筋の亀裂が入った。

それが開くと、血走った大きな眼球が現れる。狂気を孕むかのようなその視線に、シェリカもバートも背筋に冷たいものが走って総毛立つ。

「そ、それは……、まさか寄生型の……？」

「そう、寄生型魔獣パラシク・メア。大教祖様が魔術で改良したこれのお陰で、私は生き長らえることが出来たのよ」

「それがパラシク・メアですって……？ 一体、どんな改良したつてのよ……！」

パラシク・メアは他の魔獣の体内に寄生する寄生型の魔獣だ。魔獣と呼ばれているが、本体は五センチにも満たない小さな虫である。

宿主の身体能力を上昇させて強化し、宿主と共に過酷な自然を生き抜く確率を上げる力を持っている。

だがその反面、寄生された宿主は無理に能力を引き上げられる為、寿命が半分以上削られてしまうのだ。

シェリカたちが驚いたのは、この魔獣は人間には寄生しないことで知られているからだ。互いの体質的に合わないらしい。

それに、寄生された宿主の額にはパラシク・メアの眼が露出するのだが、直径一センチ程の小さな物が一つだけだ。

ヴィーラに現れた眼は直径五センチはある上、額と両手の平で合わせて三つ。こんな例は聞いた事がない。

「ふおっふお、驚いたかの？ こいつは人間にも寄生できる様にした特別製じゃ。宿主の寿命も削るどころか伸ばすし、他にも色々な力を持たせておる」

シェリカはあの地下神殿で見た、ヴィーラが放った青い閃光を思い出す。あのような力を他にも隠し持っているのだろう。

「さて、鍵水晶の発動に魔力もあと少しで溜まる事じゃし……。そろそろ“星落とし”の準備を始めるぞい」

「“星落とし”だと……？ 貴様、何をするつもりだ」

「ふおふおふお、わしにもよく分からん」

「な、なに？」

肩透かしのような答えに、バートの眉間に皺が寄る。

どこか此処ではない遠い場所を見ているような眼で、老魔術師が言う。

「……わしは見た……巨大な塔を。その底から猛烈な炎が噴き出し、塔を天空高く飛ばした。それは幾つかに分かれてはまた炎を噴き出して、遙か星の彼方まで昇った。その先端から不思議な“星”が吐き出され、形を変えて天の星の一員となった」

彼が何を言っているのか、分かる者は居なかった。
ただ一人を除いて。

「そーか、あれを落とすつもりかよ」

ドアに幾筋もの赤い線が走る。

その線にそってドアがバラバラに切り刻まれて地に落ちた。

そこに立っていたのは、破撃の黒帝こと竜矢と、金色の魔神姫ことスーニアであった。

「させるかよ！ このクソジジイが！」

竜矢は喫茶店を出た後、スーニアの先導でシェリカと思しき人物を連れ去ったと思われる者を追った。

仮にシェリカではなかったとしても、王都のど真ん中で邪神魔術を使うような人物を放っておく訳にもいかない。

既に途中で会った巡回の兵士に事の詳細を伝達済みなので、いずれ城へも連絡が行くだろう。あの双剣姫の事だ、直々に出張ってくるかも知れない。

そうして二人が辿り着いた所は、元々向かっていたバートの自宅であった。

「ここって……支部長さんの自宅じゃねーか？」

「そのようじゃのう」

様子を伺うも、家の中からは物音一つせず、人の気配も感じられない。一般人なら誰もが留守だと思うだろう。

だが、この静けさは家の周囲に結界が張られているからだ、二人は即座に見破っていた。

「並みの魔術師じゃ察知できないほど完成度の高い結界だな……」。

支部長さんは魔術師でもあるらしいから、自分で張ったのかな」

「そうかも知れんが、この結界……かなり特殊な構成をしておる。攻撃性は無いようじゃが……」

竜矢は結界の魔術式を解析してみた。

奇妙な事に、この結界には弱い防音能力の他は警報を出すような力も無く、攻撃性も防御性も皆無という何の役に立つのか分からない代物であった。

が、竜矢はこれが特定の人物が触れた時にのみ発動する結界である事を見破った。

「こいつは……例えるなら伝言結界ってところか」

「伝言結界？ なんじゃそれは」

聞き慣れない言葉にスーニアが小首を傾げる。

「設定してある人物が接触した時にだけ発動し、記録してあるメッセージをそいつに届ける機能があるみたいだ。人物の特定には、委任状に使われてる魔力の波動を記録する魔術を応用してるな。んで、こいつに設定してあるのは……俺たちだ」

「わしらじゃと？ わしらに伝えたい事が有るという事か」

「そういう事だな。とにかくこうしててもしよーがねえ、行くぞ」

頷いたスーニアと門を開いて敷地内に入り、同時に結界に手を触れる。

その瞬間、二人の耳に声が届いた。

『来て頂けましたね、リュウ・サカザインさん、スーニア・マナウルさん。私はギルドのパルフスト支部長、バート・グランディです。このような回りくどい方法を取ってお二人に接触を図った理由を説

明いたします……』

耳の側で囁かれるような声に、二人はちよつと鳥肌が立ってしまう。バートのやたらに渋い中年ボイスは中々の攻撃力であった。

その説明に耳を傾け、バートが関わった三人の邪教徒と老魔術師との事、彼が自分たちの正体を見破っている事を知った。

『……出来ることなら妹を助けたかったのですが……。可能性は低いと言わざるを得ません。私は妹が改心するのを試みます。無理だと判断したら、私の手で妹を両親の所に送るつもりです。そして、これは私から貴方たちへの依頼です、もしも私が失敗したなら、妹を、ヴィーラを……死なせてやって下さい。報酬はギルドの、私の机の……』

感情を押し殺したその声が、竜矢の胸に深く沈み込んでいく。生き別れた妹を助けんと孤軍奮闘した兄のその言葉には、血を吐くような思いが込められていた。

竜矢も助けてやりたいとは思いますが、以前見た彼女の冷たい瞳を思い出して気分が暗くなった。

スーニアが竜矢の胸の内を悟り、優しい声で言う。

「あの女の眼は、普通の生活をしていたら絶対に出来るものではない。沢山の命が失われるところを自分の意思で見続けたであろう、壊れた眼じゃ。……救うことは無理じゃろう。リュウヤ、お前がその手を血で染める必要は無い、わしがやる」

「……ありがとよ、スーニア。だけど、もしかしたら支部長さんが上手くやってるかも知れない。とにかく、中に入ってみよう」

竜矢の返事は、何処となく弱々しかった。人の命を奪った事は、彼はまだ無いのだ。

そんな竜矢を見て、スーニアは彼を守る決意を新たにする。

強大な力を持つが、心は優し過ぎるといってもいい異界の小さな主を、苦しめるような事は決してさせまいと。

結界を張りつつ屋敷に潜入した二人は地下室の入り口前で、バートたちのやり取りを聞きつつ、機を伺っていたのだった。

40話：家族の想い（後書き）

生を諦め妹の幸せを望んだシェリカの姉。

生に執着し自らの幸せを望んだヴィーラ。

あなたが同じ立場なら、どうするでしょう？

私ですか？ 正直、書いた自分でも分かりません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8670i/>

異世界の手乗り勇者さま

2011年10月2日17時37分発行